

茨城県教育財団文化財調査報告第202集

羽 黒 遺 跡

一級河川女沼川河川改修工事事業地内
埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書 1

平成 15 年 3 月

茨 城 県 境 土 木 事 務 所
財 団 法 人 茨 城 県 教 育 財 団

茨城県教育財団文化財調査報告第202集

羽^は黒^{くろ}遺跡

一級河川女沼川河川改修工事事業地内
埋蔵文化財調査報告書 1

平成15年3月

茨城県境土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、21世紀の社会を展望し、福祉・医療・健康増進・生きがいづくり等の機能を備えた、県民の誰もが安心でき、充実した生活をおくることのできる「人にやさしいまちづくり」を計画しております。

一級河川女沼川河川改修工事業は、総和町积迦地区、前林地区、水海地区にかけての水害被害の緩和を目的として計画されたものであり、その予定地内には埋蔵文化財包蔵地である羽黒遺跡をはじめとして、数多くの遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県境土木事務所と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を交わし、平成12年11月～平成13年2月、平成13年10月～12月にかけて羽黒遺跡の発掘調査を実施してまいりました。

この調査によって県下でも類例の少ない木簡が発見されるなど、総和町ならびに本県の歴史を解明していく上で、誠に貴重な資料を得ることができました。

本書は、羽黒遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県境土木事務所から賜りました多大なる御協力に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

また、茨城県教育委員会、総和町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成15年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県境土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成12・13年度に発掘調査を実施した、茨城県猿島郡総和町大字前林字道場1392番地ほかに所在する羽黒遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間および整理期間は、以下の通りである。
調 査 第1次調査 平成12年11月1日～平成13年2月28日
第2次調査 平成13年10月1日～同年12月28日
整 理 平成14年7月1日～平成15年3月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久の指揮のもと、第1次調査を調査第1班長矢ノ倉正男（11月～1月）、調査第1班長仙波亨（2月）、主任調査員平石尚和、調査員駒澤悦郎、第2次調査を調査第1班長矢ノ倉正男、主任調査員島田和宏、主任調査員近藤恒重が担当した。
- 4 当遺跡の整理および本書の執筆・編集は、整理第一課長川井正一の指揮のもと、副主任調査員駒澤悦郎が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、墨書・刻書及び木簡の判読について、国立歴史民俗博物館教授の平川南氏に御指導いただいた。
- 6 発掘調査及び整理に際し、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、X軸 = +15,880m、Y軸 = -8,040mの交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は日本測地系による基準点である。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、その組み合わせで「A 1区」「B 2区」のように呼称した。さらに、小調査区も同様に北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠し、「A 1 a1区」「B 2 b2区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を () を付して併記した。

3 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社) を使用した。

4 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

【遺構】 住居跡 - S I 土坑 - S K 溝 - S D 柱穴・貯蔵穴 - P その他 - S X

【遺物】 土器 - P 土製品 - D P 石器・石製品 - Q 金属製品 - M 拓本土器 - T P

【土層】 攪乱 - K

5 遺構及び遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

焼土・火床面・赤彩・施釉		炉・竈・炭化材		竈材・粘土・黒色処理	
繊維土器・油煙・煤・墨痕		柱痕			
土器	●	土製品	○	石器・石製品	□
				金属製品	△
				硬化面	-----

6 遺構・遺物実測図の掲載方法については、以下のとおりである。

(1) 遺跡全体図は縮尺600分の1とし、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

7 「主軸方向」は、炉・竈を通る軸線あるいは長軸(径)を通る軸線とし、その主軸が座標北からみてどの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例：N-10°-E)。なお、推定値は [] を付して示した。

8 遺物観察表における土器の計測値の単位はcmである。現存値は () で、推定値は [] を付して示した。備考の欄は、遺物の残存率、実測番号等、その他必要と思われる事項を記した。

抄 録

ふりがな	はぐろいせき								
書名	羽黒遺跡								
副書名	一級河川女沼川河川改修工事事業地内埋蔵文化財調査報告書								
巻次	1								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告								
シリーズ番号	第202集								
編著者名	駒澤 悦郎								
編集機関	財団法人 茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029 (225) 6587								
発行機関	財団法人 茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029 (225) 6587								
発行年月日	2003 (平成15年) 年3月26日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
はぐろいせき 羽黒遺跡	いばけんさしまぐんそうわまちおおあざ 茨城県猿島郡総和町大字 まえばやしあざどうぼほんち 前林字道場1392番地他	8541 - 38	36度 8分 25秒 〔36度〕 8分 36秒	139度 44分 45秒 〔139度〕 44分 33秒	12m ~ 14m	20001101 ~ 20010228 20011001 ~ 20011228	3,908㎡	一級河川女沼川河川改修工事事業に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
羽黒遺跡	包蔵地	旧石器		石器 (細石刃核)		旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。特に、古墳時代 (前期) と平安時代に大規模な集落が形成され、当地域における中心的な役割を担った集落であったと考えられる。			
		弥生		弥生土器 (壺・甕), 土製品 (紡錘車)					
	集落跡	縄文	竪穴住居跡	2軒	縄文土器 (深鉢), 石器 (尖頭器・搔器・削器・石鏃・石皿・磨石・石斧・剥片)		特筆されることは、中世以降の第1号方形竪穴建物跡から木簡が出土していることである。		
			炉穴	1基					
			土坑	2基					
奈良・平安	古墳	竪穴住居跡	22軒	土師器 (壺・甕・台付甕・椀・高坏・器台・罎・甌), 石製品 (紡錘車・砥石), 土製品 (土錘・支脚), 金属製品					
		掘立柱建物跡	2棟						
中世以降	奈良・平安	竪穴住居跡	25軒	土師器 (坏・高台付・甕・甌), 須恵器 (坏・高台付坏・壺・甕・蓋・盤・高盤・甌・円面硯), 石製品 (砥石), 金属製品 (門・鉸具・刀子・紡錘車)					
		掘立柱建物跡	10棟						
		井戸跡	1基						
		土坑	2基						
中世以降	中世以降	方形竪穴建物跡	1基	陶磁器 (播り鉢・甕・天目茶碗・縁釉皿・香炉・灯明皿・蓋・仏飯器), 土製品 (泥面子), 石製品 (板碑・砥石・石盤), 土師質土器 (鍋), 木製品 (木簡)					
		井戸跡	12基						
		土坑	175基						
			溝	14条					

目次

序	
例言	
凡例	
抄録	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 縄文時代の遺構と遺物	12
(1) 竪穴住居跡	12
(2) 炉穴	15
(3) 土坑	15
(4) 石器集中地点	18
2 古墳時代の遺構と遺物	19
(1) 竪穴住居跡	19
(2) 掘立柱建物跡	62
3 奈良・平安時代の遺構と遺物	65
(1) 竪穴住居跡	65
(2) 掘立柱建物跡	119
(3) 井戸跡	133
(4) 土坑	134
(5) 方形周溝	136
(6) 溝	138
4 中世以降の遺構と遺物	138
(1) 方形竪穴建物跡	138
(2) 井戸跡	140
(3) 土坑	147
(4) 溝	164
5 遺構外出土遺物	171
第4節 まとめ	192
1 旧石器時代	193
2 縄文時代	193
3 弥生時代	193
4 古墳時代	195
5 奈良・平安時代	198
6 中世以降	199
7 小結	201

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

総和町は、新4号国道をはじめとする道路網の整備が進む一方、首都圏や栃木・埼玉両県に隣接するという恵まれた立地条件のもと、工業団地の進出や住宅地の開発が著しく、めざましい発展を遂げている。また、この地域の地勢は平坦で、南部は利根川に接し、概して湿地の様相を呈しており、従来から排水状態が悪く、河川の破堤や豪雨にともなう浸水の被害が跡を絶つことはなかった。こうした状況を打開するために、この地域では干拓・耕地整備事業と共に、洪水対策や河川改修工事業に力を注いできている。そうした中、茨城県は茨城県境土木事務所を事業主体として、「一級河川女沼川河川改修工事業」を計画した。

工事に先立ち、平成11年9月2日、茨城県から事業地内における埋蔵文化財の有無とその取り扱いについての照会を受けた茨城県教育委員会は、現地踏査及び試掘調査を実施し、事業地内に羽黒遺跡など数遺跡の所在を確認した。その結果をもとに、茨城県と茨城県教育委員会は、遺跡の取り扱いについて協議を重ね、工事により埋蔵文化財に影響が及ぶことから、羽黒遺跡について記録保存の措置を講ずることとし、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

紹介された財団法人茨城県教育財団は、茨城県境土木事務所と業務の委託契約を結んだ。第1次調査は平成12年11月から翌年平成13年2月まで、第2次調査は平成13年10月から同年12月まで、渇水期を選んで遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

羽黒遺跡の第1次調査は平成12年11月1日から平成13年2月28日までの4か月間、第2次調査は平成13年10月1日から同年12月28日までの3か月間にわたって実施した。以下、調査の経過について、概要を工程表で記載する。

年月 工程	平成12年		平成13年												
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
発掘諸準備	＝												＝		
試掘	＝												＝		
表土除去	＝												＝		
遺構確認	＝												＝		
遺構調査		＝	＝	＝										＝	＝
洗浄・注記		＝	＝	＝										＝	＝
写真整理			＝	＝										＝	＝
補足調査					＝										＝
撤収準備					＝										＝

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

羽黒遺跡は猿島郡総和町大字前林字道場1392番地ほかに所在している。当遺跡の所在する総和町は、茨城県の南西部に位置しており、面積は53.34km²である。

町の地形形成に深く関与した河川としては常陸川がある。この常陸川は江戸時代の「利根川東遷」と呼ばれる大規模な河川改修工事により、群馬県水上町大水上山を水源とする関東平野を貫流する利根川と名をかえて、町の南部を西から東へ流れ、本県と埼玉・千葉両県との県境を形成している。

総和町の地形的特徴は、町域の大部分を占める栃木県から連続するなだらかな猿島台地と、南部の利根川に沿った低地である。思川、利根川、鬼怒川に画される猿島台地は標高12~25mで、北西から南東方向に延び、数多くの小河川により開析され、樹枝状の入り組んだ複雑な地形を形づくっている。台地の地質は、下部から成田層、竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層を基盤層とし、その上部に関東ローム層が堆積している。主に台地上は畑や平地林、特に茶の栽培に利用されている。河川に沿って広がる低地は北部で標高15~20m、南部で標高10~12mである。かつて利根川の氾濫や流路変更によって形成された大山沼、釈迦沼、水海沼、長戸沼、一ノ谷沼、鶴戸沼といった沼沢と共に、近世以降の干拓・耕地整備事業によって大きくその姿を変え、現在は水田として利用されている¹⁾。

当遺跡は総和町の南東部、女沼川と向堀川に挟まれた猿島台地に位置している。大規模な圃場整備などによって周辺地形は平坦に整地されているが、水田面に見られる高低差は、かつての地形の起伏を物語っている。さらに当遺跡が立地する女沼川右岸一体の標高が約12~12.5mであるのに対し、女沼川左岸は約12.5~14mであることから、当遺跡が標高約12~14mの台地平坦部と釈迦沼低地へと緩やかに移行する台地縁辺部に立地していることがわかる。

第2節 歴史的環境

羽黒遺跡は旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。当遺跡の周辺の地形は変化に富み、常陸川や渡瀬川などの水運にも恵まれていたため、遠古の時代から人々の生活の舞台となってきた。それを裏付けるように、当遺跡の周辺には、旧石器時代から江戸時代にかけての遺跡が数多く確認されている。ここでは、当遺跡に関連する主な遺跡について、時代別に述べることにする²⁾。

旧石器時代の遺跡は現在22か所が確認されている³⁾。他の時代に比べて遺跡数は少ない。遺跡の立地から、①女沼川（支流の東磯川・积水川を含む）流域の微高地、②大川・宮戸川流域の台地縁辺部や中央部、③向堀川流域の台地縁辺部の3つに大別することができる。①に立地する遺跡は、前林地区の当遺跡<1>、^{くさかべ}日下部遺跡<11>、磯部地区の香取東遺跡<12>、^{かとりひがし}天神北遺跡<29>、^{てんじんきた}砂井新田地区の東原遺跡<26>、^{ひがしはら}釈迦地区の釈迦才仏遺跡<14>、^{しやかさいぶつ}上辺見地区の鹿養大道遺跡<25>、②に立地する遺跡は、小堤地区の北山遺跡<30>、^{きたやま}上大野地区の古内遺跡<7>、^{ふるうち}本田山遺跡<8>、^{ほんだやま}稲宮地区の行屋西遺跡<9>、^{こうやにし}柳橋地区の弁財天遺跡<19>、^{べんさいてん}葛生地区の萩山B遺跡<20>、^{はぎやま}鍋隠遺跡<21>、^{なべかくし}磯ノ木遺跡<22>、^{いそぎ}原遺跡<23>、^{はら}下大野地区の権現久保遺跡<31>、^{ごんげんくぼ}鍛冶内遺跡<32>、^{かじうち}久能地区の香取西遺跡<16>、^{かとりにし}高野地区の榎戸遺跡<35>、^{えのきど}③に立地する遺跡は、西牛谷地区の新田遺跡<2>な

どである。これらの遺跡からはナイフ形石器、尖頭器、角錐状石器、細石刃核、細石刃、石核、剥片が採集されている⁴⁾。また、香取西遺跡<16>からは2か所の礫群と1か所の礫散布範囲が発見されている⁵⁾。

縄文時代の遺跡は現在74か所が確認されている⁶⁾。時期別には早期が19遺跡、前期が37遺跡、中期が19遺跡、後期が36遺跡、晩期が14遺跡と、圧倒的に前期と後期の遺跡が多い。遺跡は町域全体に分布し、女沼川（支流の東磯川・积水川を含む）、大川・宮戸川、向堀川流域の微高地、台地縁辺部や中央部に立地する傾向がある。近在の遺跡では、駒羽根遺跡<28>・久能西原遺跡<17>、大橋B遺跡<13>などから前期の竪穴住居跡が発見されている⁷⁾。釈迦才仏遺跡<14>からは中期の竪穴住居跡や、後・晩期にかけての大規模な集落跡が発見され、土面や石棒・石剣などが出土している⁸⁾。また、向堀川流域の思案橋遺跡<3>からも後・晩期の集落跡が発見され、ミミズク土偶など出土している⁹⁾。

弥生時代の遺跡は現在16か所が確認されている¹⁰⁾。旧石器時代と同様、遺跡数は少ない。それらの多くは台地の平坦部から縁辺部にかけて立地し、特に宮戸川流域に分布している。低地部に発達した自然堤防上や微高地での遺跡の確認はまだされていない。久能西原遺跡<17>からは後期に位置づけられる2軒の竪穴住居跡が発見されている¹¹⁾。町域から出土する弥生時代後期～古墳時代初頭の土器は、北関東に分布の中心をもつ二軒屋式土器や赤井戸式土器をはじめ、南関東に分布の中心をもつ弥生町式土器や吉ヶ谷式土器などが見られ、北関東と南関東の弥生文化の交錯を予想させる。

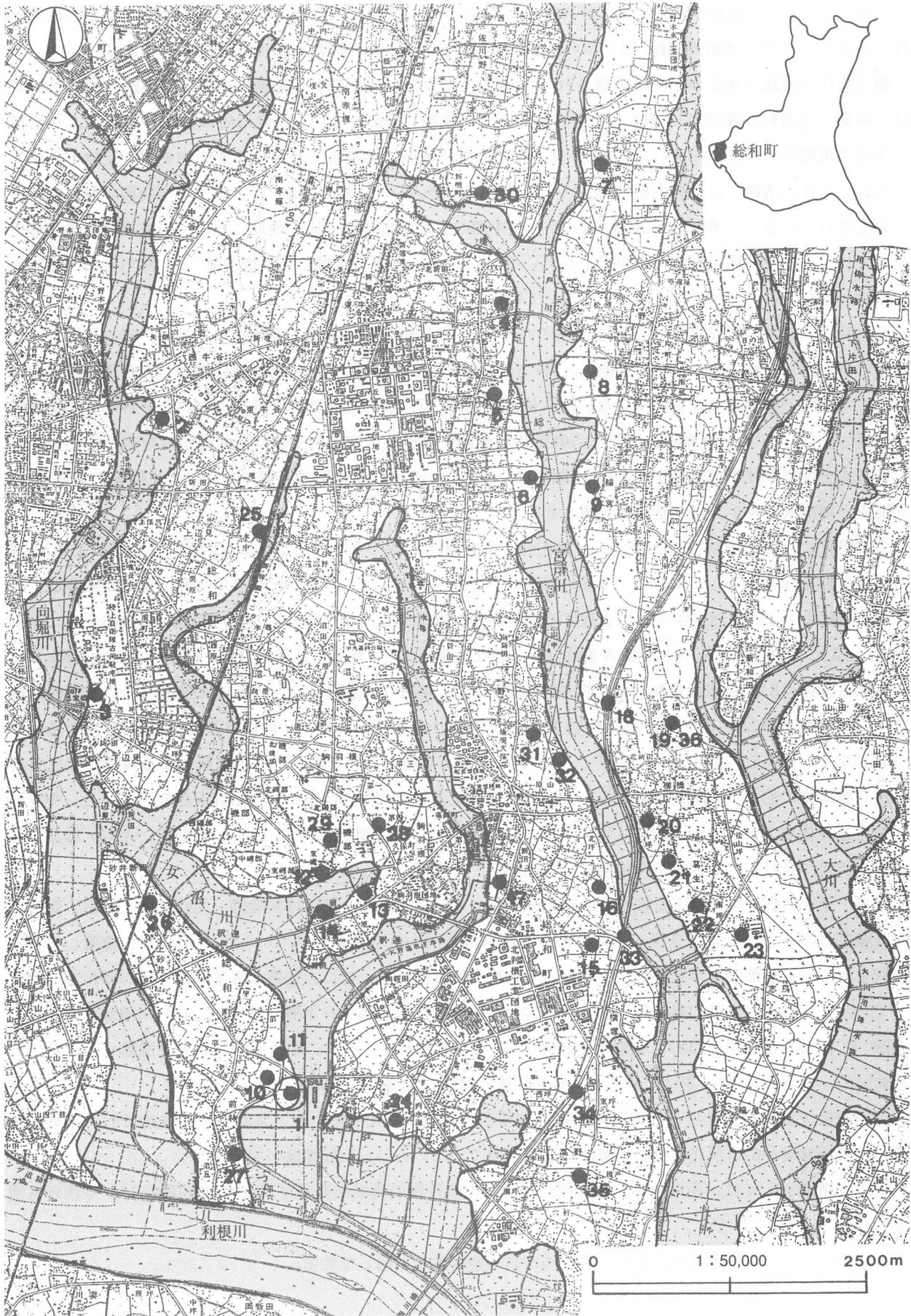
古墳時代になると遺跡数が急増する。現在98か所が確認され、その内9か所が古墳及び古墳群である¹²⁾。遺跡は町域全体に分布し、女沼川（支流の東磯川・积水川を含む）、大川・宮戸川、向堀川流域の微高地、台地縁辺部はもとより、台地中央部に立地する遺跡がやや増加する。集落跡としては、前期の当遺跡<1>、本田山遺跡<8>、蔵王遺跡<6>、北新田A遺跡<18>、香取西遺跡<16>、釈迦才仏遺跡<14>、中期の本田山遺跡<8>、北新田A遺跡<18>、香取西遺跡<16>、向坪B遺跡<33>、後期の当遺跡<1>、北新田A遺跡<18>、香取西遺跡<15>、駒羽根遺跡<27>などがあり、釈迦才仏遺跡<13>からは方形周溝墓、向坪B遺跡<32>からは大量の滑石製品などが出土し注目されている¹³⁾。いずれの遺跡も前期から平安時代まで居住域や集落規模を変化させながら断続的に営まれた集落跡である。大川・宮戸川を望む台地上には多くの古墳群が存在している。中でも円墳3基で構成される向原古墳群<15>からは直刀1振り、台古墳群<27>からは、須恵器、大刀、馬具などが大正時代に発見され、古墳時代後期（7世紀前半）に位置づけられている¹⁴⁾。

奈良・平安時代の町域は下総国の北西端に位置し、北には下野国、東には常陸国、北西には上野国、南西には武蔵国が存在していた。奈良・平安時代の遺跡は現在78か所が確認されている¹⁵⁾。前代から連続して集落が営まれている遺跡が大半である。立地も古墳時代とほぼ同様で、特に大規模な集落跡は台地の平坦部に立地している。女沼川（支流の東磯川・积水川を含む）流域では当遺跡や日下部遺跡<11>、宮戸川流域では本田山遺跡<8>、北新田A遺跡<18>、香取西遺跡<16>などが知られている。この時期に、金糞B遺跡<5>、萩山B遺跡<20>、水海城跡<24>をはじめとする製鉄関連の遺跡が急増する傾向がうかがわれる¹⁶⁾。

平安時代末期から中世にかけての遺跡は、古河公方重臣梁田氏が築いたとされる水海城跡<24>、小堤城跡<4>、柳橋城跡<36>（現在は弁財天遺跡に統合されている）といった城館跡が主である¹⁷⁾。

近世の遺跡としては、中世後半から近世にかけての庶民層の墓域が発見された香取東遺跡<12>や西坪A遺跡<34>が知られている¹⁸⁾。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図の該当遺跡番号と同じである。



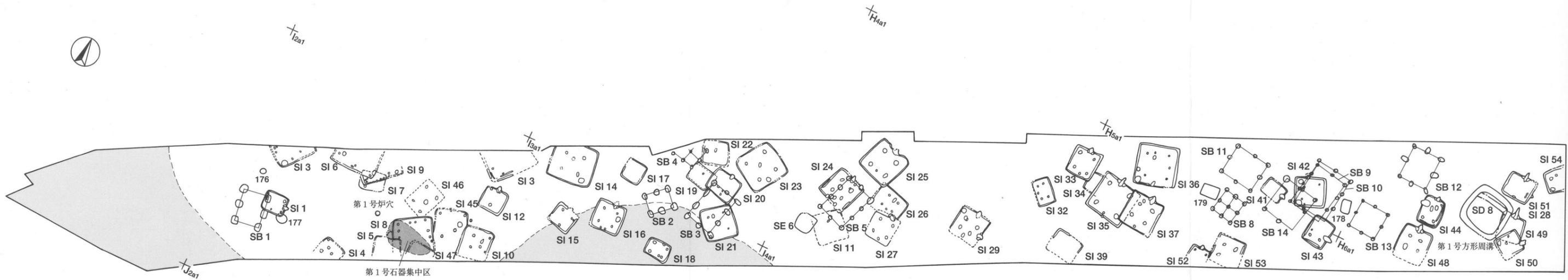
第1図 周辺遺跡分布図 (国土地理院「古河」・「栗橋」・「諸川」・「下総境」)

表1 羽黒遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代					番号	遺跡名	県遺跡番号	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平				中近	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中近
1	羽黒遺跡	38	○	○	○	○	○	○	19	弁財天遺跡	62	○			○	○	○
2	新田遺跡	2		○		○	○		20	萩山B遺跡	65	○	○		○	○	○
3	思案橋遺跡	7		○		○			21	鍋隠遺跡	66	○	○		○	○	○
4	小堤城跡	18		○				○	22	磯ノ木遺跡	67	○	○		○	○	
5	金糞B遺跡	20		○			○		23	原遺跡	68	○	○		○	○	○
6	蔵王遺跡	22		○		○			24	水海城跡	73					○	○
7	古内遺跡	23	○	○			○		25	鹿養大道遺跡	79	○	○		○		
8	本田山遺跡	26	○	○	○	○			26	東原遺跡	89	○					
9	行屋西遺跡	31	○	○	○	○	○	○	27	台古墳群	92				○		
10	笹山遺跡	37		○	○	○	○		28	駒羽根遺跡	99		○		○	○	○
11	日下部遺跡	39	○	○	○	○	○	○	29	天神北遺跡	102	○	○				○
12	香取東遺跡	46	○	○		○		○	30	北山遺跡	111				○	○	
13	大橋B遺跡	49		○		○	○	○	31	権現久保遺跡	120	○	○		○		
14	釈迦才仏遺跡	51	○	○		○		○	32	鍛冶内遺跡	121	○					
15	向原古墳群	57				○			33	向坪B遺跡	125				○		○
16	香取西遺跡	58	○	○	○	○	○		34	西坪A遺跡	133		○				○
17	久能西原遺跡	60		○	○	○			35	榎戸遺跡	138	○					
18	北田新田A遺跡	61				○	○		36	柳橋城跡	62						○

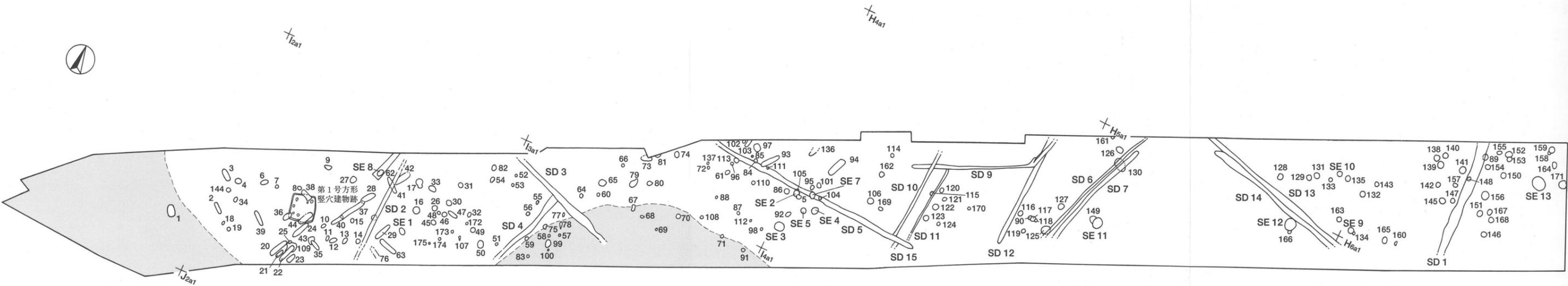
註

- 1) 村上慈朗 「総和町および周辺地域における河川の変遷について」『そうわ町史研究』 第5号 1999年
- 2) 茨城県教育庁文化課 『茨城県遺跡地図』 茨城県教育委員会 2001年
- 3) 総和町市編さん委員会 『総和町史 資料編 原始・古代・中世』 総和町 2002年
- 4) 諸星良一 「茨城県総和町採集の石器」『法政考古学』 第25号 1999年
註3)に同じ
- 5) 総和町教育委員会 『香取西遺跡発掘調査報告書』 1998年
- 6) 註3)に同じ
- 7-a) 総和町教育委員会 『茨城県総和町駒羽根遺跡・大橋A遺跡』 1991年
- 7-b) 山武考古学研究所 『茨城県総和町久能西原遺跡発掘調査報告書』 1994年
- 7-c) 川津法伸 「主要地方道つくば古河線緊急地方道路事業地内埋蔵文化財調査報告書 大橋B遺跡 釈迦才仏遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第131集 茨城県教育財団 1998年
- 8) 註7-c)に同じ
- 9) 総和町教育委員会 『茨城県総和町思案橋遺跡』 1987年
- 10) 註3)に同じ
- 11) 註7-b)に同じ
- 12) 註3)に同じ
- 13-a) 中沢時宗ほか 「一般国道4号線改築工事地内埋蔵文化財調査報告書1(総和地区) 南坪A・B・C遺跡 高野遺跡 西坪A・B遺跡 向坪A・B遺跡 北新田A・B・C遺跡 溜原B遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第38集 茨城県教育財団 1986年
- 13-b) 註7-c)に同じ
- 14) 註3)に同じ
- 15) 註3)に同じ
- 16) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書Ⅶ』 1993年
- 17) 註3)に同じ
- 18) 武蔵文化財研究所 『茨城県猿島郡総和町都市計画道路東牛谷・釈迦線道路(町道9号線)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 香取東遺跡 釈迦才仏遺跡』 総和町 2001年
註13-a)に同じ



原始・古代

黑色土壤域



中世以降

黑色土壤域



第2図 羽黒遺跡遺構全体図

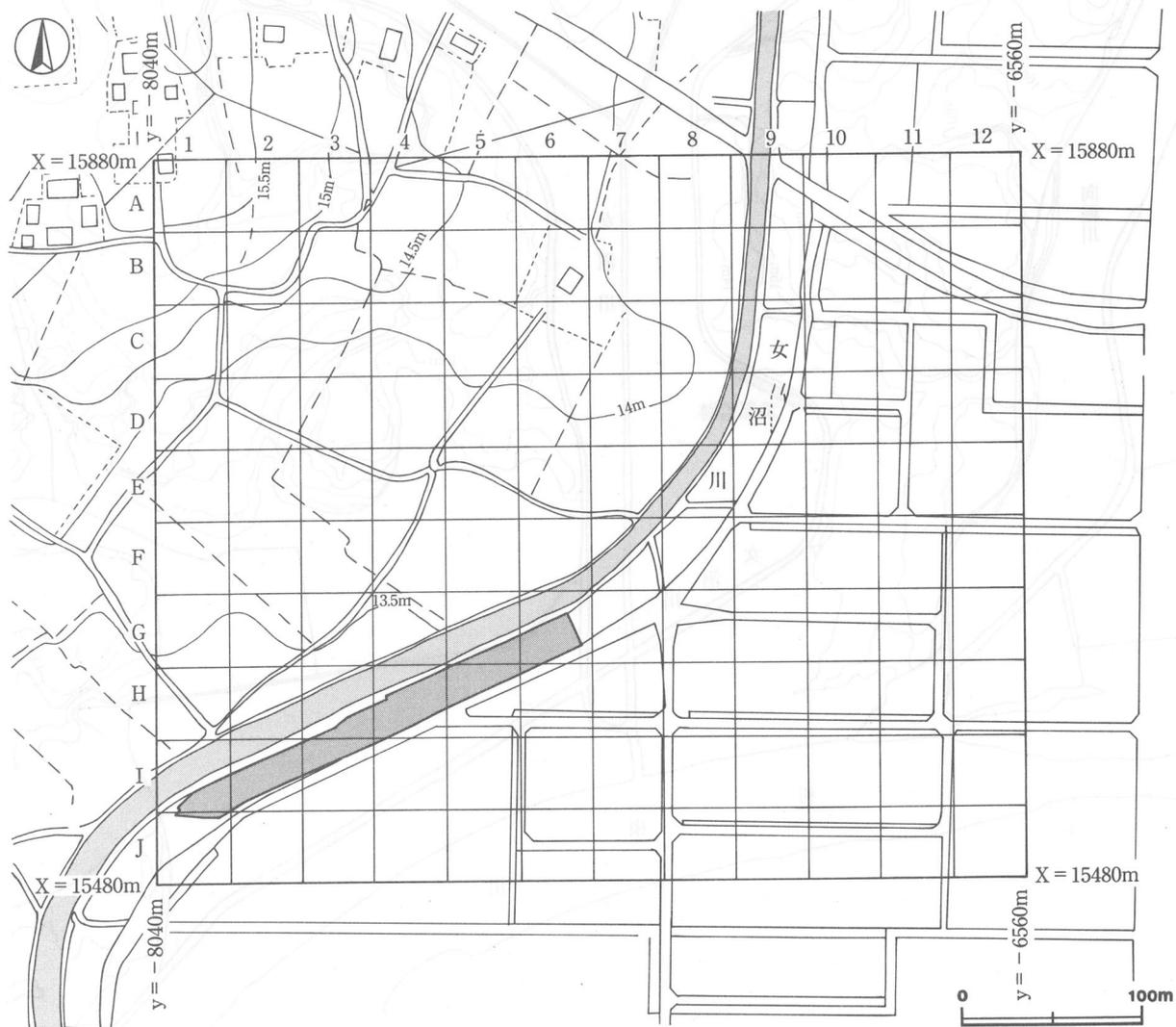
第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

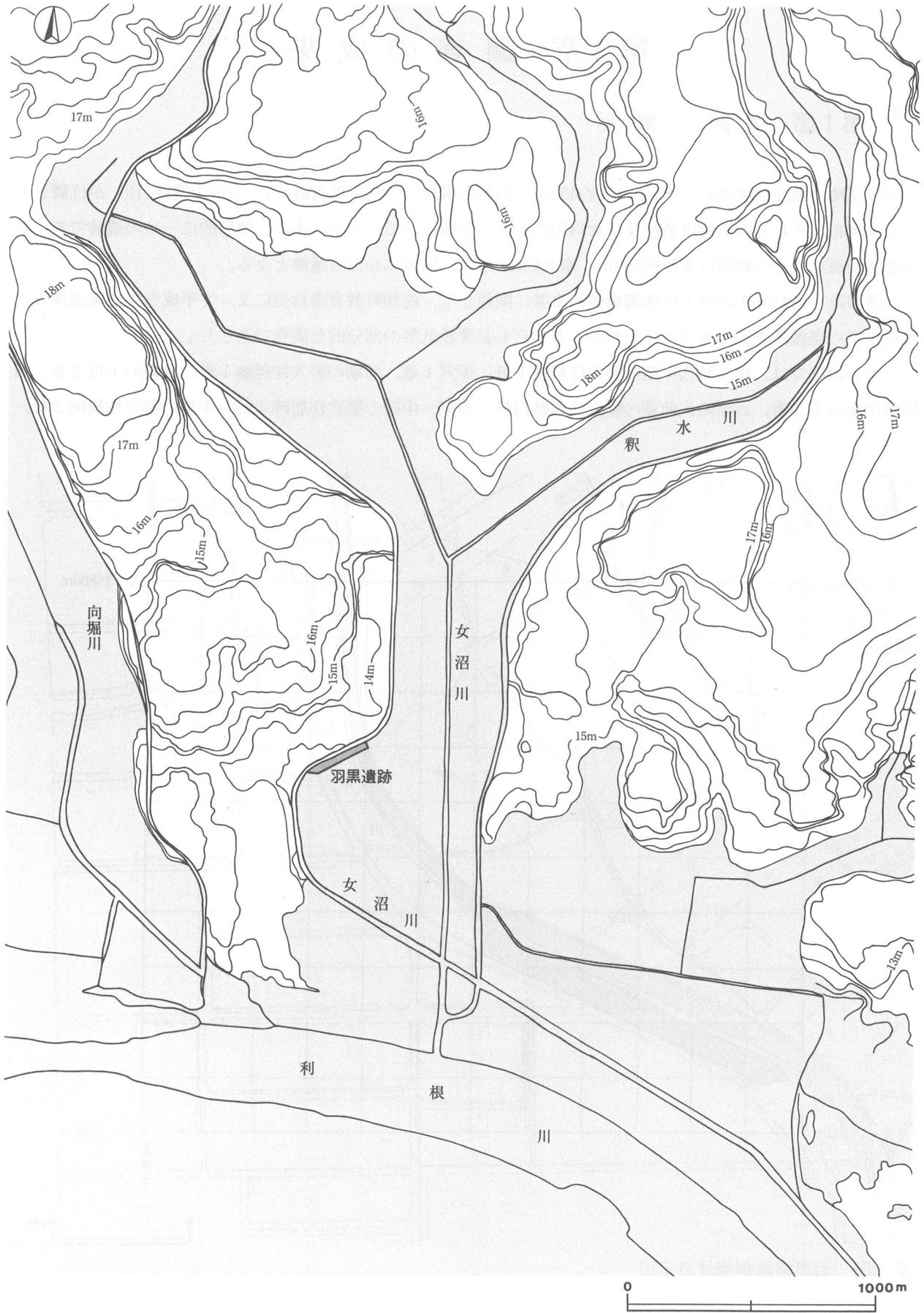
羽黒遺跡の範囲は東西約250m、南北約450mである。隣接して日下部遺跡<11>と笹山遺跡<10>が位置している。現在、それらの遺跡は道路及び女沼川によって分断されているが、本来、地形的に一つの遺跡であった可能性が高い。その範囲は東西約450m、南北約850mで、広域にわたる遺跡となる。

当遺跡は、県営高生産性大区画圃場整備事業に関連して、総和町教育委員会によって平成9年に確認調査、平成11年に発掘調査が実施されているが、どちらも必要最低限の部分的な調査である¹⁾。

今回の調査では、縄文時代早期の竪穴住居跡1軒、炉穴1基、前期の竪穴住居跡1軒、後期の土坑2基、石器集中地点1か所、古墳時代前期の竪穴住居跡14軒、前期～中期の竪穴住居跡4軒、中期の竪穴住居跡2軒、



第3図 羽黒遺跡調査区設定図



第4図 羽黒遺跡周辺地形図

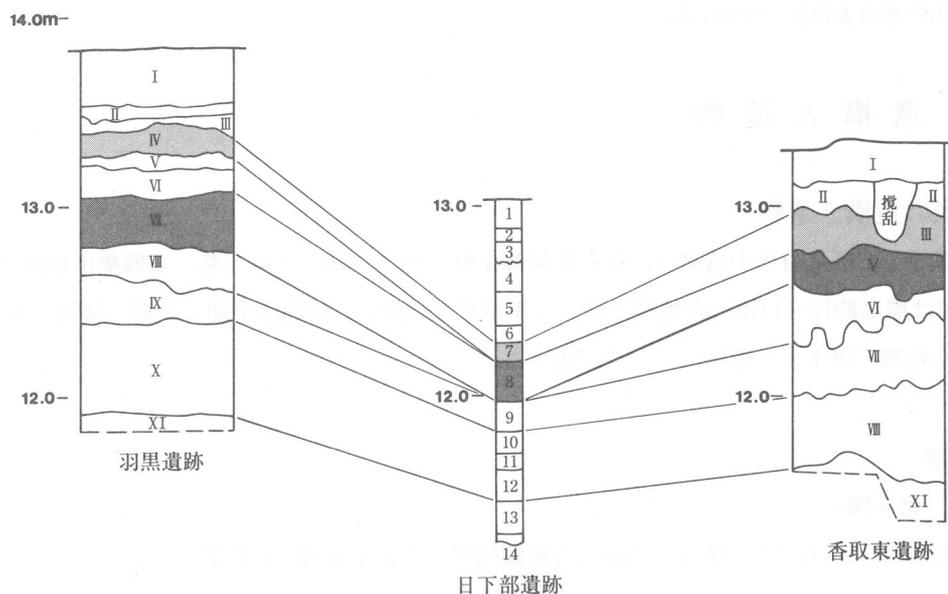
後期の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡2棟、奈良・平安時代の竪穴住居跡25軒、掘立柱建物跡10棟、井戸跡1基、土坑2基、方形周溝1基、溝1条、中世以降の方形竪穴建物跡1基、井戸跡12基、土坑175基、溝14条が発見されている。

調査の結果、当遺跡は旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡で、中心となる時期は古墳時代（前期）と奈良・平安時代であることが明らかにされた。遺跡規模などから、この地域の中心的な集落跡と考えられる。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に60箱出土している。旧石器時代の遺物は石器（細石刃核）である。縄文時代の遺物は縄文土器（深鉢）、石器（尖頭器・搔器・削器・石鏃・石皿・磨石・石斧・剥片）などである。弥生時代の遺物は弥生土器（壺・甕）、土製品（紡錘車）などである。古墳時代の遺物は土師器（壺・甕・台付甕・椀・高坏・器台・埴・甑）、土製品（土錘、支脚）、石製品（紡錘車、砥石）、金属製品などである。奈良・平安時代の遺物は土師器（坏・高台付坏・甕・甑）、須恵器（坏・高台付坏・壺・甕・蓋・盤・高盤・甑・円面硯）、土製品（匂玉）、石製品（砥石）、金属製品（門・鉸具・刀子・紡錘車）などである。中世以降の遺物は陶磁器（挿り鉢・甕・天目茶碗・縁釉皿・香炉・灯明皿・蓋・仏飯器）、土師質土器（鍋）、土製品（泥面子）、石製品（板碑・砥石・石盤）、木製品（木簡）などである。

第2節 基本層序

第1次調査区北側の台地平坦部（H5b8区）に深さ1.5mのテストピットを設定して、基本土層の観察を行った。ローム層の層序区分については、ローム層の火山ガラス比分析及び重鉍物分析の行われた隣接する日下部遺跡（表1・第1図〈10〉）と、当遺跡の北東約2kmに位置する磯部地区の香取東遺跡（表1・第1図〈12〉）の層序区分を参考にした²⁾。また、その対応関係を模式図的に示した。なお、香取東遺跡は当遺跡及び日下部遺跡と釈迦沼低地を挟んで対峙する標高約12~14mの台地平坦部と釈迦沼低地へと緩やかに移行する台地縁辺部に立地する遺跡で、同様な地形的特徴を有する遺跡である。



第5図 基本土層及び対応関係模式図

第Ⅰ層は、層厚25～30cm、ローム粒子及びローム小ブロックを微量含む黒褐色土で、現耕作土である。

第Ⅱ層は、層厚5～10cm、ローム粒子及びローム小ブロックを少量含む暗褐色土で、旧耕作土である。

第Ⅲ層は、層厚5～15cm、ローム粒子及びローム小ブロックを中量含む褐色土で、ローム漸移層である。

第Ⅳ層は、層厚12～20cm、灰褐色のローム層で、ガラス質粒子及びスコリア粒子を微量含み、締まりが強い。始良Tn火山灰(AT)を含む層に対比される。日下部遺跡の第7層、香取東遺跡の第Ⅲ層下部に対応する。

第Ⅴ層は、層厚5～10cm、褐色のローム層で、スコリア粒子を微量含む。

第Ⅵ層は、層厚10～20cm、黄褐色のローム層で、スコリア粒子を微量含む。香取東遺跡の第Ⅳ層に対応する。

第Ⅶ層は、層厚20～30cm、暗褐色のローム層で、スコリア粒子を微量含む。やや締まりが強い。第2黒色帯(BBⅡ)に対比される。日下部遺跡の第8層、香取東遺跡の第Ⅴ層に対応する。

第Ⅷ層は、層厚10～25cm、明褐色のローム層で、粘性が強い。香取東遺跡の第Ⅵ層に対応する。

第Ⅸ層は、層厚10～25cm、明褐色のローム層で、締まりが強い。日下部遺跡の第9層、香取東遺跡の第Ⅶ層に対応する。

第Ⅹ層は、層厚45～50cm、暗褐色のローム層で、粘性及び締まりが強い。日下部遺跡の第10～12層、香取東遺跡の第Ⅷ層に対応する。

第Ⅺ層は、灰褐色を呈する粘土質のローム層で、鉄分の黒色粒子を多量含み、粘性が極めて強い。日下部遺跡の第13層に対応する。下層は常総粘土層となる。

なお、遺構の多くは、第Ⅲ層下部及び第Ⅳ層上面で確認され、第Ⅲ～Ⅵ層にかけて掘り込まれている。

註

- 1) 総和町教育委員会 『羽黒遺跡確認調査報告』 1997年
 総和町教育委員会 『羽黒・日下部遺跡発掘調査報告書』 1999年
- 2) 武蔵文化財研究所 『茨城県猿島郡総和町都市計画道路東牛谷・釈迦線道路(町道9号線)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 香取東遺跡 釈迦才仏遺跡』 総和町 2001年
 註1), 総和町教育委員会・1999年に同じ

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した縄文時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、炉穴1基、土坑2基、石器集中地区1か所である。これらの遺構は標高約12～14mの台地縁辺部から平坦部に位置し、時期は早期・前期・後期である。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第18号住居跡(第6図)

位置 調査区の南西部、I3c6区。標高12.5mの台地縁辺部(黒色土壌域)に位置している。

確認状況 重複や攪乱もなく、良好な遺存状況である。

規模と形状 長軸3.85m、短軸2.72mの長方形である。主軸方向はN-85°-Wで、壁は高さ14～23cmで、外傾して立ち上がっている。

床 中央部は皿状にくぼみ，壁際はほぼ平坦である。

ピット 6か所。P1～4はその配置から支柱穴と考えられ，深さは36～59cmである。P5・6は性格不明である。

炉 確認されなかった。

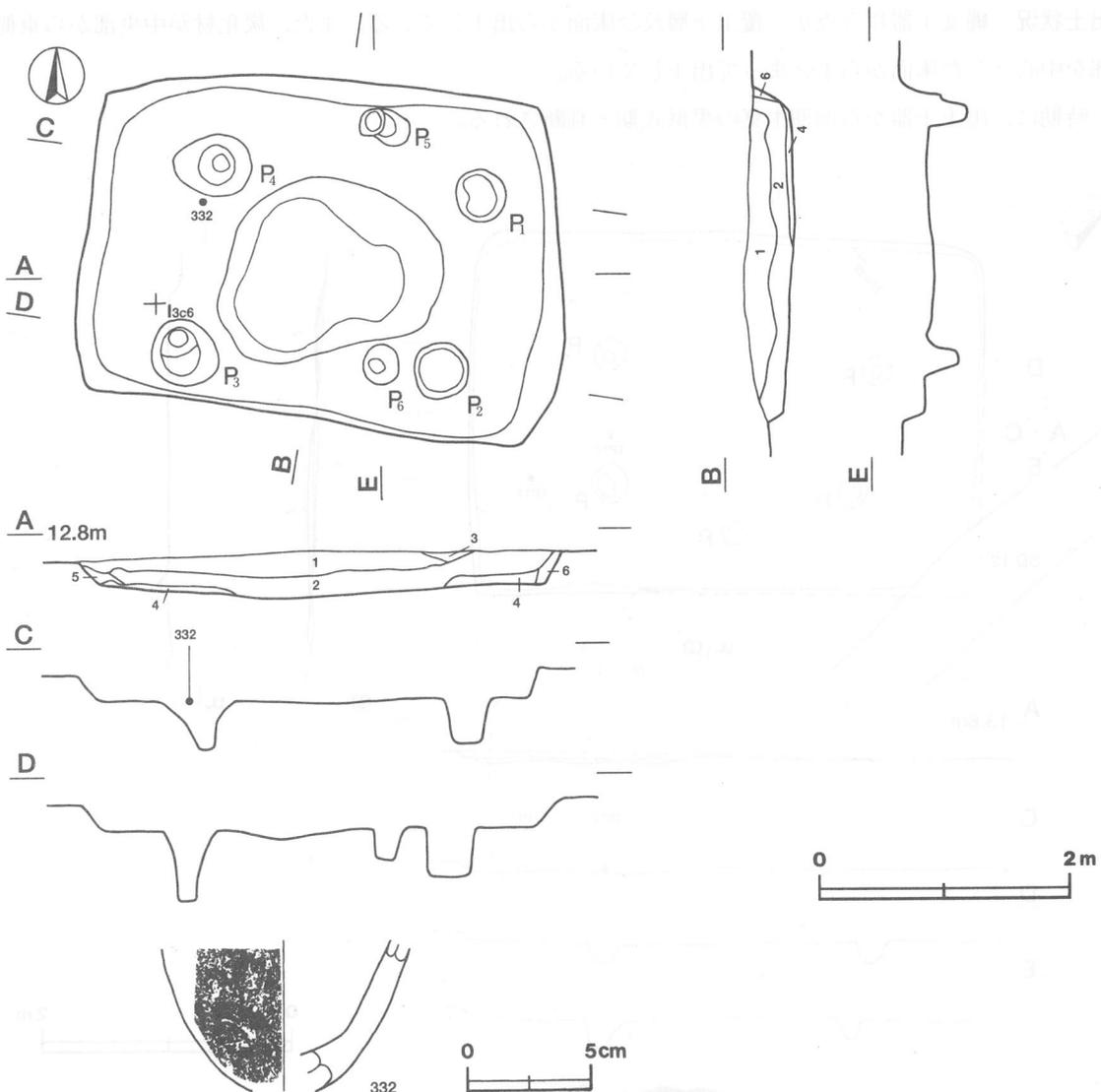
覆土 6層からなる。土質や堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 黒色 黒色土粒子多量 | 4 灰褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 黒色土粒子多量，ロームブロック微量 | 5 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量 | 6 極暗褐色 黒色土粒子多量，ロームブロック微量 |

遺物出土状況 縄文土器片1点が，覆土下層から出土している。

所見 中央部に見られる皿状のくぼみは，火床部や焼土の堆積が認められないため，炉の可能性は極めて低いと考えられる。時期は尖底の縄文土器片が覆土下層から出土していることから，早期と推定される。



第6図 第18号住居跡・出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表 (第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
332	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	尖底，内・外面ナデ	床面	5%

第32号住居跡 (第7図)

位置 調査区の北東部, H 4 d9区。標高13.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 西コーナー部を第12号溝に掘り込まれている。北西壁・南西壁の過半を削平されている。

規模と形状 長軸4.17m, 短軸2.92mの長方形である。主軸方向はN-41°-Wである。壁は高さ4~8cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。炉や焼土範囲は確認されていない。

ピット 5か所。P1~4はその配置から支柱穴と考えられ, 深さは16~22cmである。P5は性格不明である。

炉 確認されなかった。

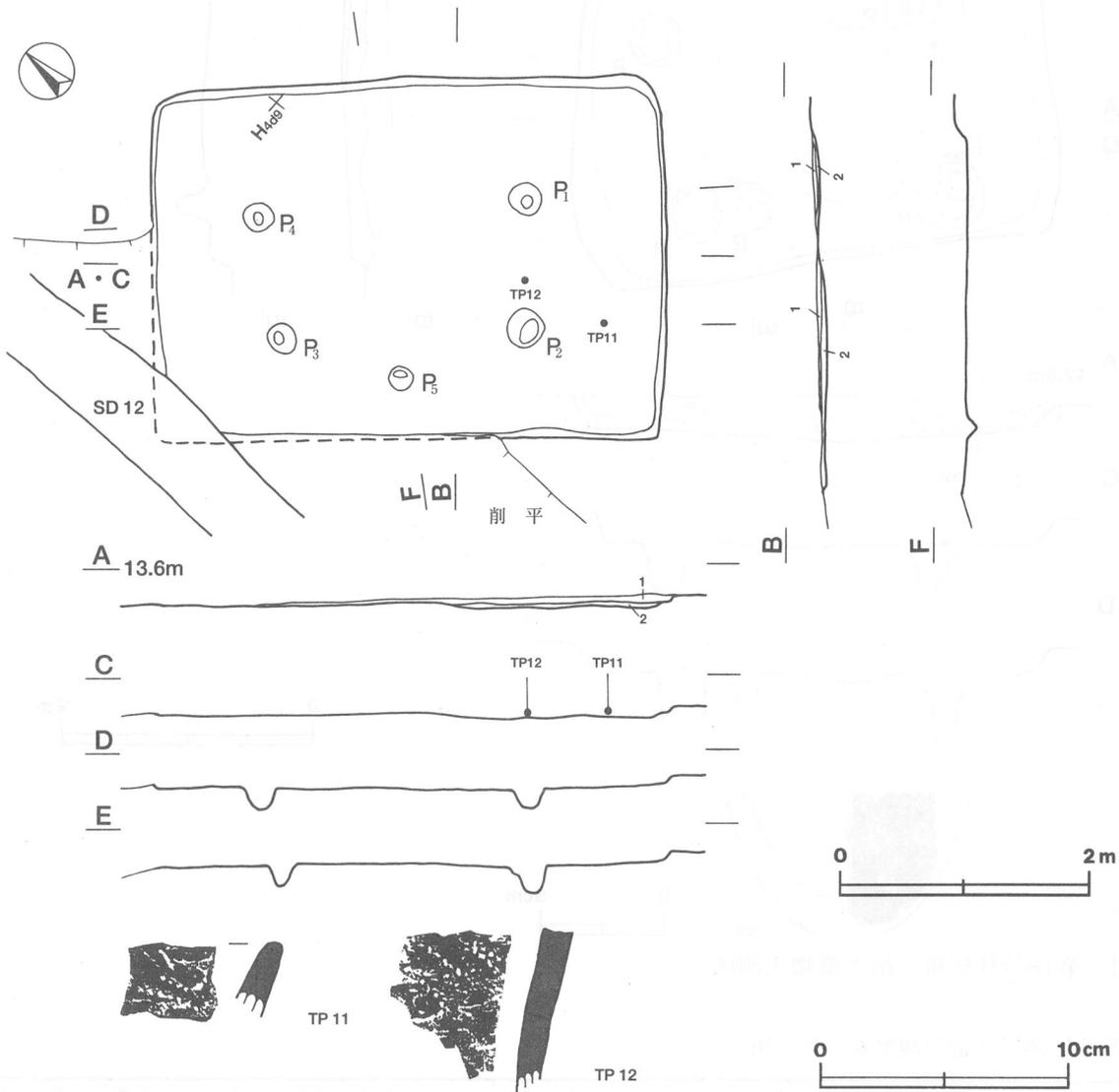
覆土 単一層である。層厚が8cmと薄いため, 堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片5点が, 覆土下層及び床面から出土している。また, 炭化材が中央部から東側コーナー部を中心とした床面からまとまって出土している。

所見 時期は, 出土土器から前期中葉の黒浜式期と判断される。



第7図 第32号住居跡・出土遺物実測図

第 32 号住居跡出土遺物観察表 (第 7 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP11	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	石英・長石・繊維	灰褐	普通	外面縄文原体圧痕, 内面ナデ	下層	TP12同一體 5% PL41
TP12	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	石英・長石・繊維	明赤褐	普通	外面縄文原体圧痕, 内面ナデ	床面	TP11同一體 5% PL41

(2) 炉穴

第 1 号炉穴 (第 8 図)

位置 調査区の南西部, I 2 f6区。標高12.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 東部を第 2 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 推定される長径0.83m, 短径0.72mの楕円形と考えられる。底面はやや凹凸のある皿状を呈している。壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN-15°-Eである。炉は底面の中央部に設けられている。炉の平面形は長径38cm, 短径32cmの不整楕円形で, 確認面から炉床までの深さは35cmである。炉床は凹凸が見られ, 火熱を受けて赤変硬化している。

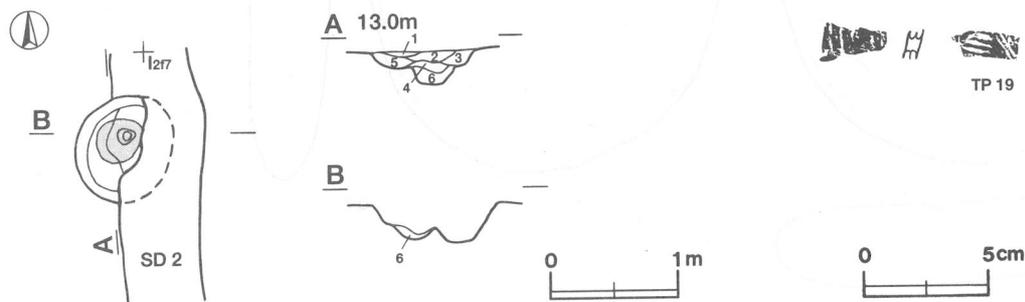
覆土 6層からなる。全体的に焼土粒子を含んでいる。第1~3層は乱れのないレンズ状堆積から自然堆積と考えられる。第4・5層は焼土粒子・焼土ブロック・ロームブロックを多く含むことから, 人為堆積と考えられる。第6層は赤変硬化した地山のローム層である。

土層解説

- | | | | |
|----------|------------------|----------|----------------|
| 1 灰黄褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 | 4 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土ブロック微量 |
| 2 にぶい赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 5 にぶい赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック中量 | 6 赤褐色 | 焼土 |

遺物出土状況 縄文土器片 1 点が, 覆土下層から出土している。

所見 時期は遺構の形態及び出土土器から, 早期後葉, 広義の茅山式期と判断される。



第 8 図 第 1 号炉穴・出土遺物実測図

第 1 号炉穴出土遺物観察表 (第 8 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP19	縄文土器	深鉢	-	(1.4)	-	石英・長石・繊維	黒褐	普通	外面縦方向, 内面多方向の貝殻条痕文	下層	5%

(3) 土坑

第 176 号土坑 (第 9 図)

位置 調査区の南西部, I 2 f2区。標高13mの台地平坦部に位置している。

確認状況 重複や攪乱もなく, 遺存状況は良好である。

規模と形状 長径0.82m, 短径0.76mの円形である。底面は皿状にくぼみ, 壁はなだらかに立ち上がっている。

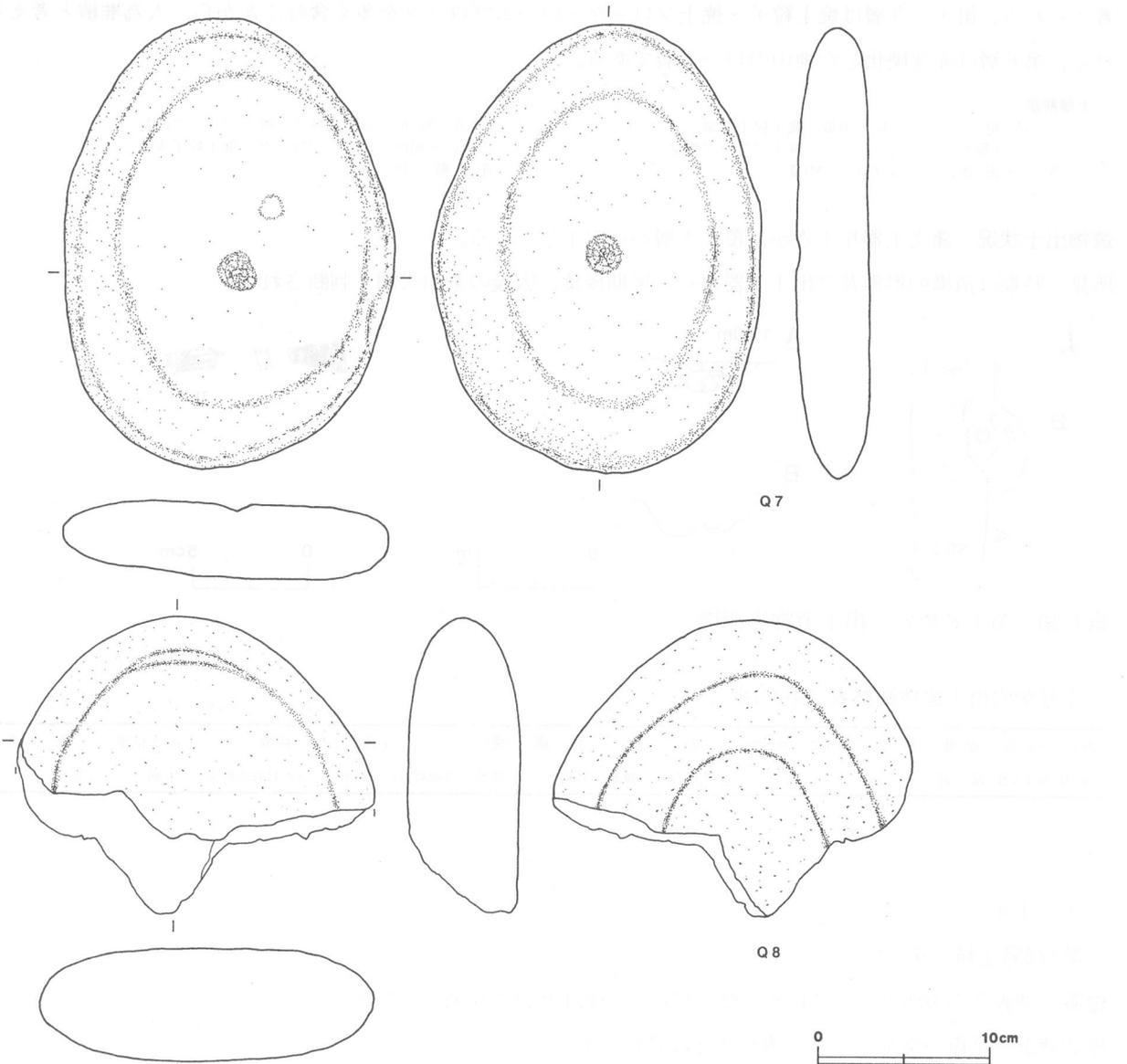
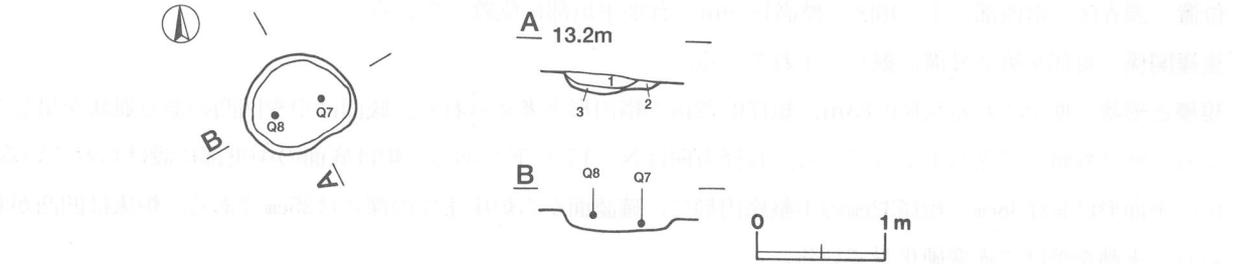
覆土 3層からなる。乱れのないレンズ状堆積から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 焼土ブロック中量，ロームブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック微量

遺物出土状況 石皿片2点が、底面に置かれたような状態で出土している。

所見 時期は、土器が出土していないため不明である。周辺のグリッドから出土している土器の様相から、後期の可能性が高いと考えられる。



第9図 第176号土坑・出土遺物実測図

第 176 号土坑出土遺物観察表 (第 9 図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	石皿	26.2	19.0	4.5	2567.7	安山岩	両面使用, 両面中央部くぼみ	下層	P L 46
Q8	石皿	(17.3)	20.8	6.5	(2679.0)	安山岩	両面使用, 欠損	上層	P L 46

第177号土坑 (第10図)

位置 調査区の南西部, I 2g3区。標高12.9mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 北西部を第1号住居に掘り込まれている。縄文時代の第38号土坑に隣接している。

規模と形状 長径1.72m, 短径1.4mの楕円形である。底面はほぼ平坦で, 壁はなだらかに立ち上がっている。長径方向はN-68°-Eである。ピットが2か所あり, 特に底面の中央部のP1は, 長径62cm, 短径50cm, 深さ18cmの楕円形を呈している。

覆土 2層からなる。乱れのないレンズ状堆積から自然堆積と考えられる。

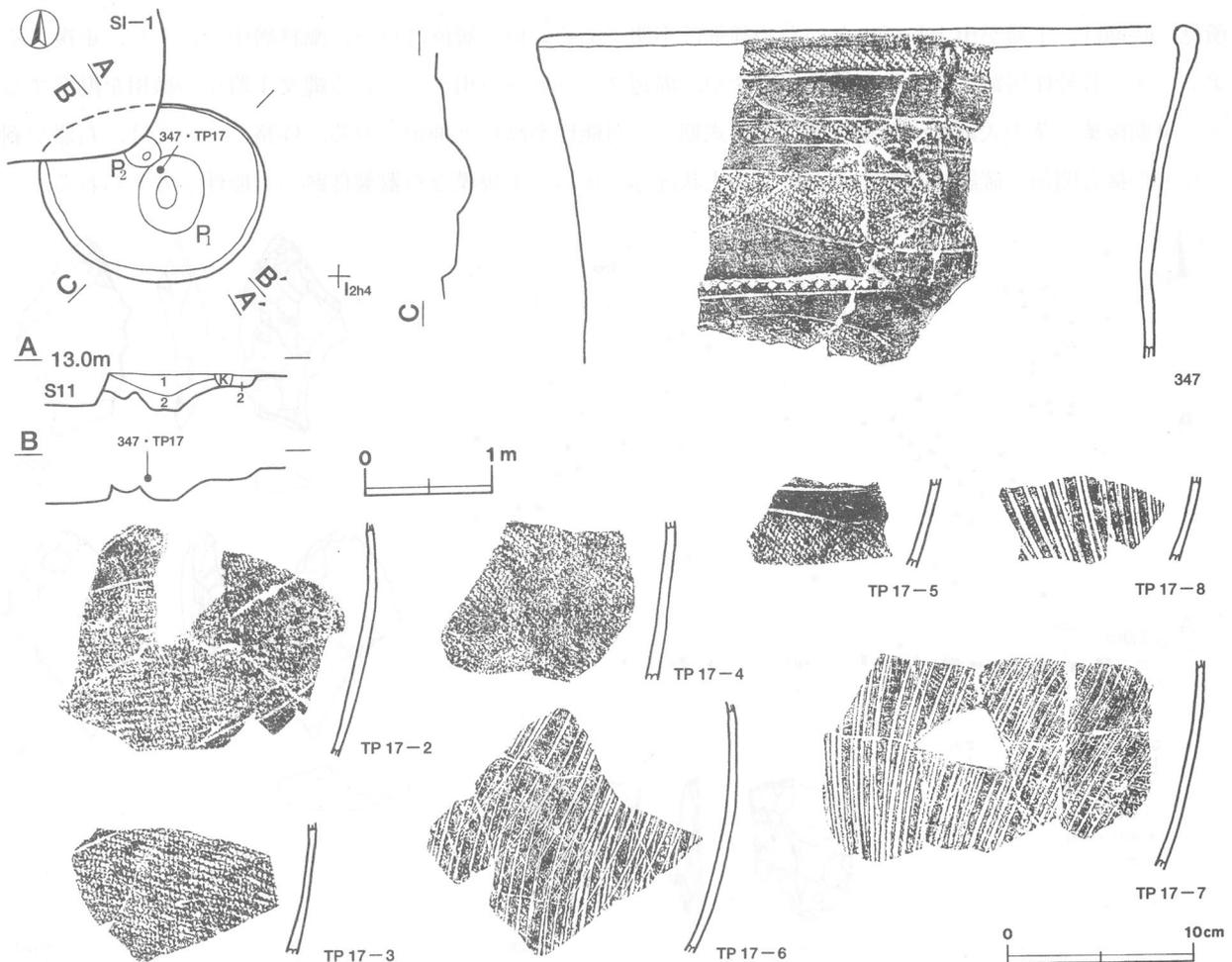
土層解説

1 黒色 ロームブロック・焼土ブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 同一個体の縄文土器片35点が, 覆土下層及びP1からまとまって出土している。

所見 時期は, 出土土器から後期後葉の安行I式期と判断される。



第10図 第177号土坑・出土遺物実測図

第 177 号土坑出土遺物観察表 (第 10 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
347	縄文土器	深鉢	[35.6]	(17.5)	-	長石・雲母	明黄褐	普通	口縁部帯縄文、貼り瘤、胴部沈線区画の縄文充填弧状文、くびれ部1列の刺突文、内面ナデ	下層・P1	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP17	縄文土器	深鉢	-	(1.3)	-	石英・長石・雲母	黄褐	普通	外面条線文、内面ナデ	下層・P1	5%

(4) 石器集中地点

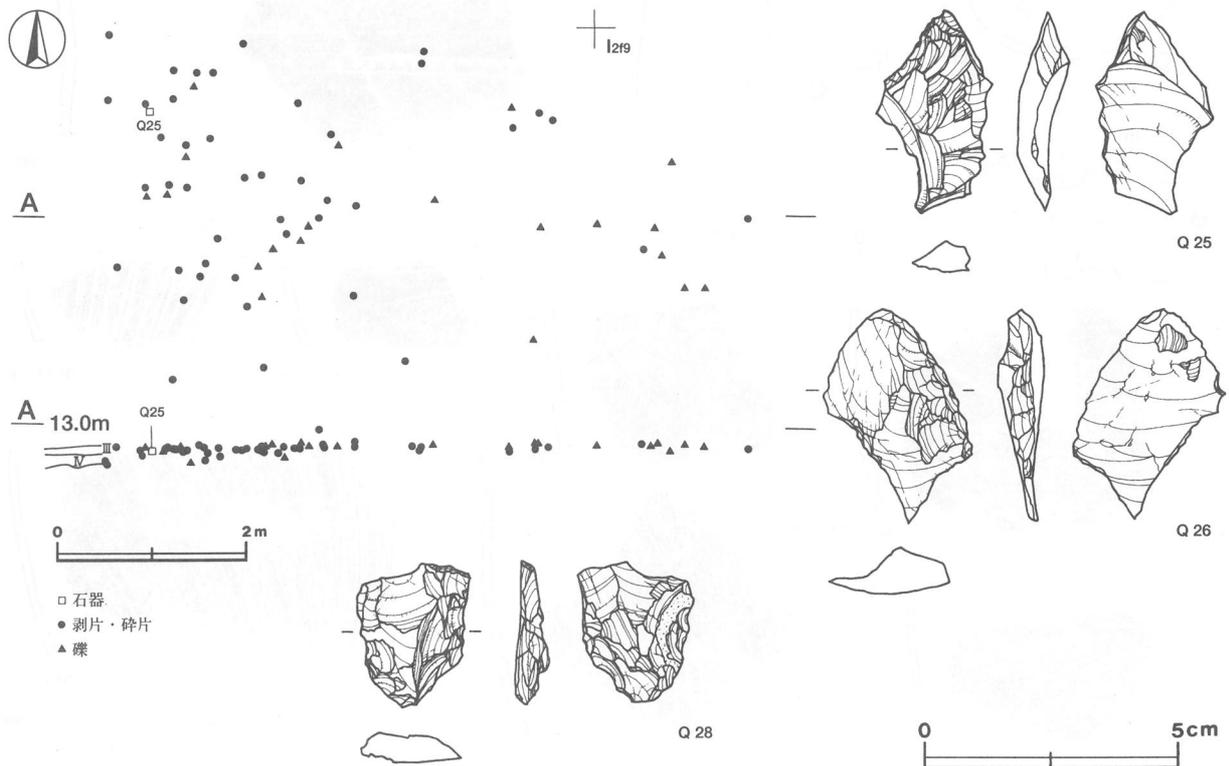
第 1 号石器集中地点 (第 11・12 図)

位置 調査区の南西部, I 2 f7~ I 2 f9区。標高12.6~12.8mの台地縁辺部に位置している。

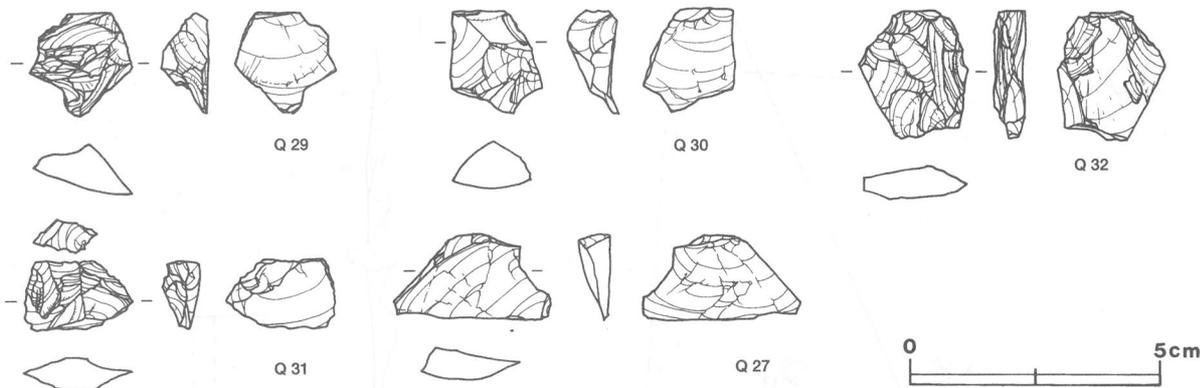
確認状況 第 5・8・47号住居跡の床面を精査中, 微細なチャート製剥片の出土が目立ったため, 調査区を設定して遺物出土状況や土層の観察を行った結果, 掘り込みを伴わない石器集中地点を確認した。

遺物出土状況 石器49点 (2次加工を有する剥片 5, 剥片44), 小礫24点, 炭化物13点が, 長径約 7 m, 短径約 4 mの楕円形の範囲からまとまって出土している。出土した石器はすべてチャート製である。礫の大きさは 0.5~4 cm程度である。層位的には基本土層の第 3 層のローム漸移層中から出土し, 標高12.7mを中心としている。垂直分布幅は約20cmである。2次加工を有する剥片や比較的大形の剥片は西部に集中し, 小形の剥片や小礫, 炭化物は全域にわたってまばらに分布している。

所見 時期は, 土器が出土していないため詳細は不明である。出土層位はローム漸移層中で, また, 重複する第 5・8・47号住居跡に混入した縄文土器片や, 周辺グリッドから出土している縄文土器片の様相を勘案すると, 早期後葉 (茅山式期) ~前期後葉 (黒浜式期) の可能性が高いと推定される。性格については, 石器や剥片などの接合関係を確認できなかったが, 出土状況などから, 小規模な石器製作跡の可能性が考えられる。



第 11 図 第 1 号石器集中地点・出土遺物実測図



第12図 第1号石器集中地点出土遺物実測図

第1号石器集中地点出土遺物観察表 (第11・12図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q25	剥片	4.0	2.3	1.0	5.3	チャート	2次加工剥片, 片面階段状剥離調整	Ⅲ層下部	P L 45
Q26	剥片	4.2	3.0	0.9	6.5	チャート	2次加工剥片, 背面右側縁に腹面側から階段状剥離調整	Ⅲ層下部	P L 45
Q27	剥片	1.7	3.2	0.7	2.7	チャート	横長剥片, 単剥離面打面	Ⅲ層下部	P L 45
Q28	剥片	2.8	2.2	0.7	3.8	チャート	2次加工剥片, 両面階段状剥離調整	Ⅲ層下部	P L 45
Q29	剥片	2.0	2.1	1.0	2.8	チャート	縦長剥片, 左側縁に微細剥離痕, 背面稜上調整	Ⅲ層下部	
Q30	剥片	2.1	1.8	1.0	2.9	チャート	縦長剥片, 右側縁に腹面側から階段状剥離調整	Ⅲ層下部	
Q31	剥片	1.4	2.2	0.8	1.8	チャート	横長剥片, 背面に打面の周辺剥離調整痕, 下端折損	Ⅲ層下部	P L 45
Q32	剥片	2.5	2.2	0.7	4.3	チャート	2次加工剥片, 両面階段状剥離調整	Ⅲ層下部	P L 45

2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した古墳時代の遺構は、竪穴住居跡22軒である。これらの遺構は主に台地縁辺部から平坦部にかけて位置し、時期は前期を中心として後期までと考えられる。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第3号住居跡 (第13図)

位置 調査区の南西部, I 2 e2区。標高12.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況 北西部は調査区域外に位置し、確認した南東部の大半も調査区際の排水溝によって削平されている。

規模と形状 確認した長軸3.78m, 短軸2.9mで長方形と推定される。壁は高さ13cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-34°-Eである。

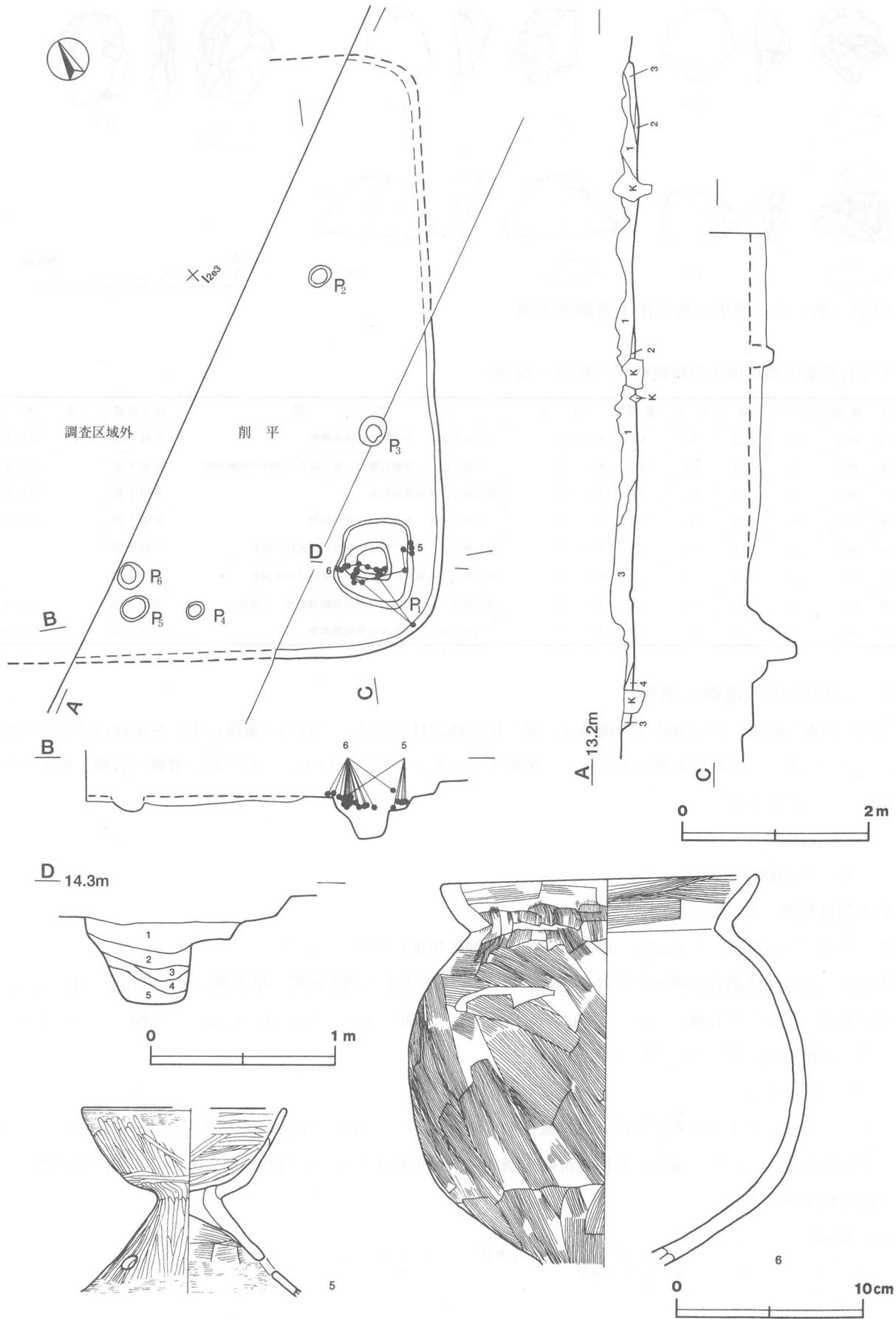
床 ほぼ平坦である。

ピット 6か所。P1は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。床面からの深さは51cm, 途中でテラス状の平坦部を有している。覆土の堆積状況は北側から土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。その他のピットは性格不明である。

P1土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒色 | ロームブロック微量 | | |

炉 調査区域外に位置すると推定される。



第13図 第3号住居跡・出土遺物実測図

覆土 5層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 炭化粒子少量, ロームブロック・炭化物微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片36点(高坏23, 甕13)が、貯蔵穴と考えられるP1の覆土上層から中層にかけて、廃棄されたような状態で出土している。

所見 時期は、極めて遺存状況が悪く出土遺物も少ないが、前期(4世紀後半)と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表(第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	土師器	高坏	[11.0]	(9.9)	-	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	坏部ヘラ磨き, 脚部外面ヘラ磨き, 内面ハケ目調整, 有孔	P1	30% PL 30
6	土師器	甕	16.7	(21.2)	-	石英・長石・赤色粒	橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナア, 体部外面ハケ目調整	P1	60% PL 34

第4号住居跡(第14・15図)

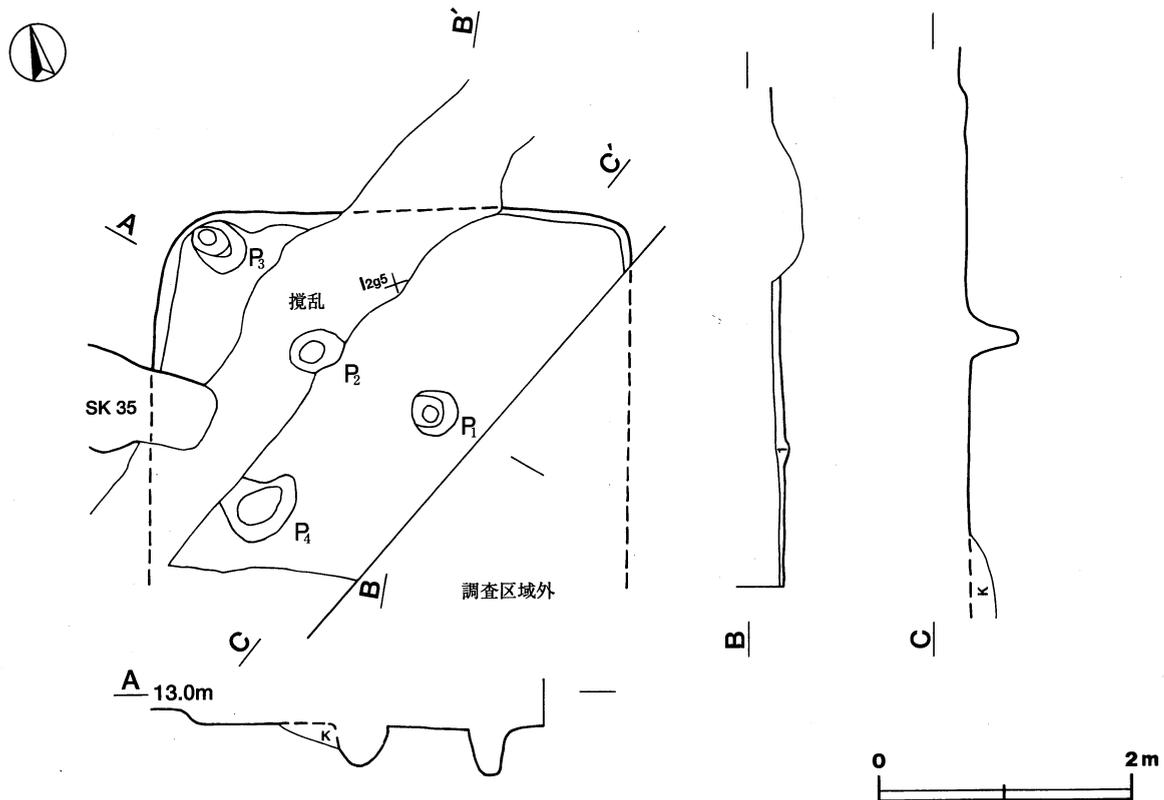
位置 調査区の南西部, I 2 h5区。標高12.8mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 西側を第35号土坑に掘り込まれている。南東部は調査区域外に位置し、北壁の中央部から西壁の中央部にかけて溝状に攪乱されている。

規模と形状 確認した長軸3.15m, 短軸2.87mで長方形ないし方形と推定される。壁は高さ7~17cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-21°-Eである。

床 ほぼ平坦である。

ピット 4か所。いずれも性格は不明である。P3はコーナー部に位置していることから貯蔵穴の可能性が考



第14図 第4号住居跡実測図

えられる。

炉・竈 調査区域外に位置すると推定される。

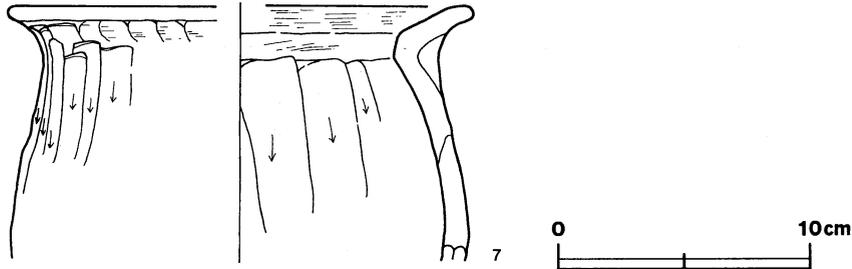
覆土 単一層である。重複や削平により覆土の詳細は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片13点（高坏1，甕12）が，主に覆土下層からまばらに出土している。

所見 時期は，出土土器などから後期（7世紀後葉）と考えられる。



第15図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
7	土師器	甕	[18.6]	(10.0)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	床面	10%

第6号住居跡（第16図）

位置 調査区の南西部，I 2 d5区。標高12.8mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 南東コーナー部付近を第7号住居，第27号土坑に掘り込まれている。北部は調査区域外に位置し，調査区際の排水溝により，南部の大半が削平されている。

規模と形状 確認した長軸7.02m，短軸4.34mで長方形ないし方形と推定される。壁は高さ15~19cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-20°-Wである。

床 ほぼ平坦である。

ピット 5か所。いずれも性格は不明である。形態及び位置からP1は貯蔵穴，P2・3は出入り口施設，P4は深さが32cmであることから，支柱穴の可能性などが考えられる。

炉 調査区域外に位置すると推定される。

覆土 3層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。

土層解説

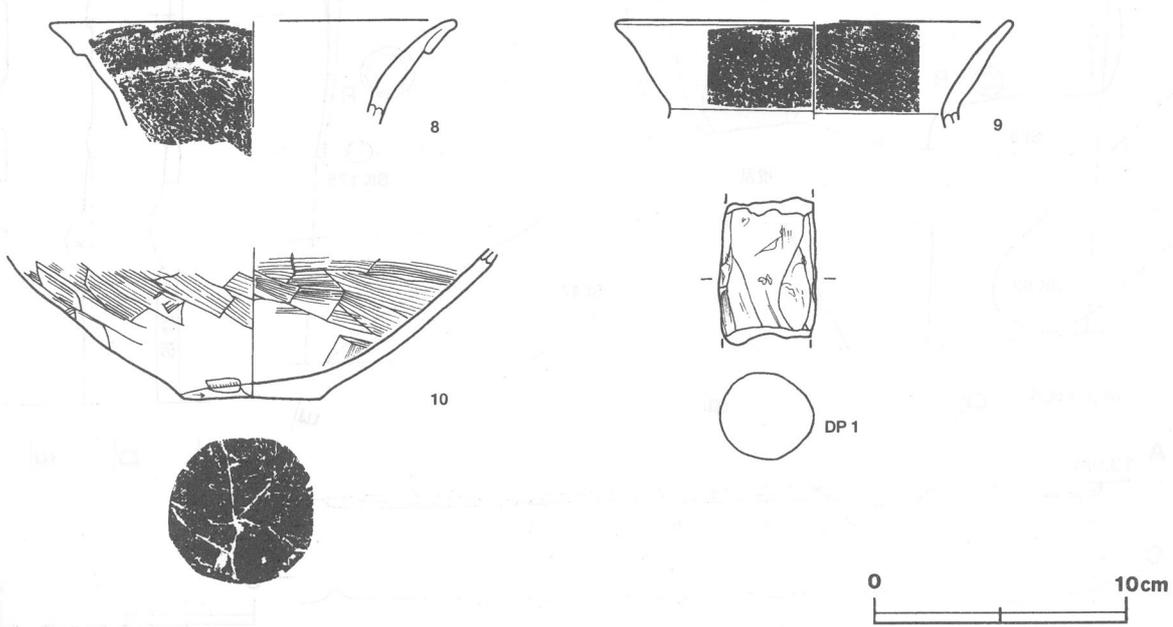
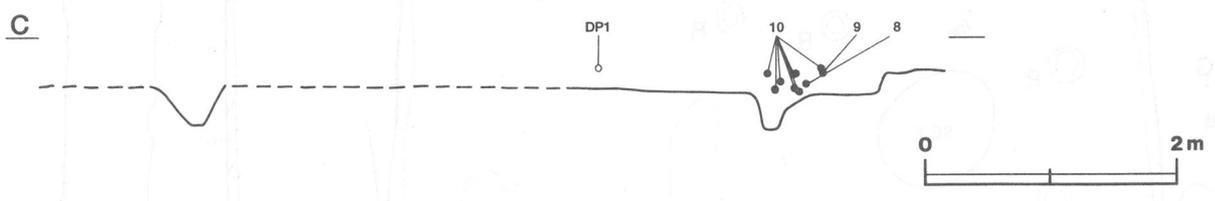
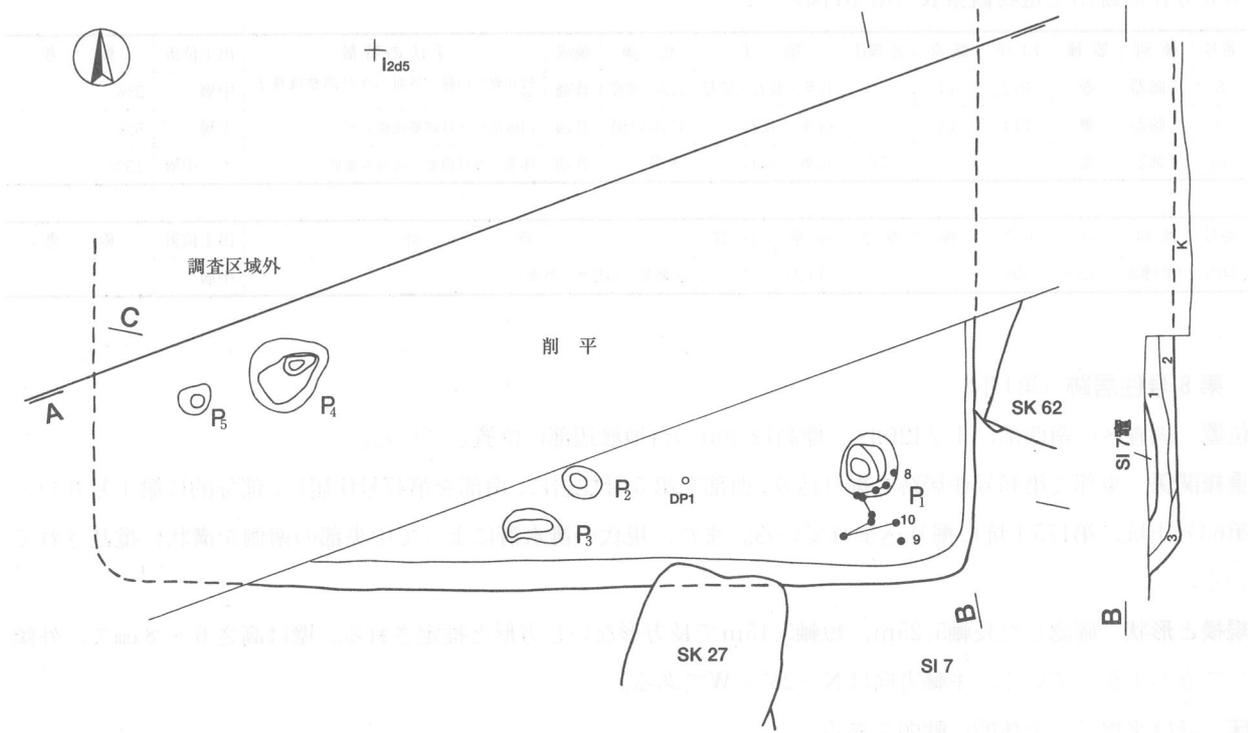
1 黒色 ローム粒子・炭化物少量，焼土粒子微量

2 極暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量

3 暗褐色 炭化粒子少量，ロームブロック・焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片40点（器台2，埴3，高坏1，埴2，壺1，甕31），不明土製品1点，南東コーナー部付近の覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。また，混入した縄文土器片6点が出土している。

所見 時期は，出土土器などから前期（4世紀後半）と考えられる。



第16図 第6号住居跡・出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表 (第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	土師器	壺	[16.2]	(4.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	折り返し口縁, 外面ハケ目調整後横ナデ	中層	5%
9	土師器	甕	[15.4]	(4.1)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ	上層	5%
10	土師器	甕	-	(5.9)	5.6	石英・長石	灰褐	普通	体部ハケ目調整, 底部木葉痕	上~中層	15%

番号	種別	径	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	不明土製品	3.8	2.6	-	-	(71.3)	-	土師質, 円柱形, 外面ナデ	中層	

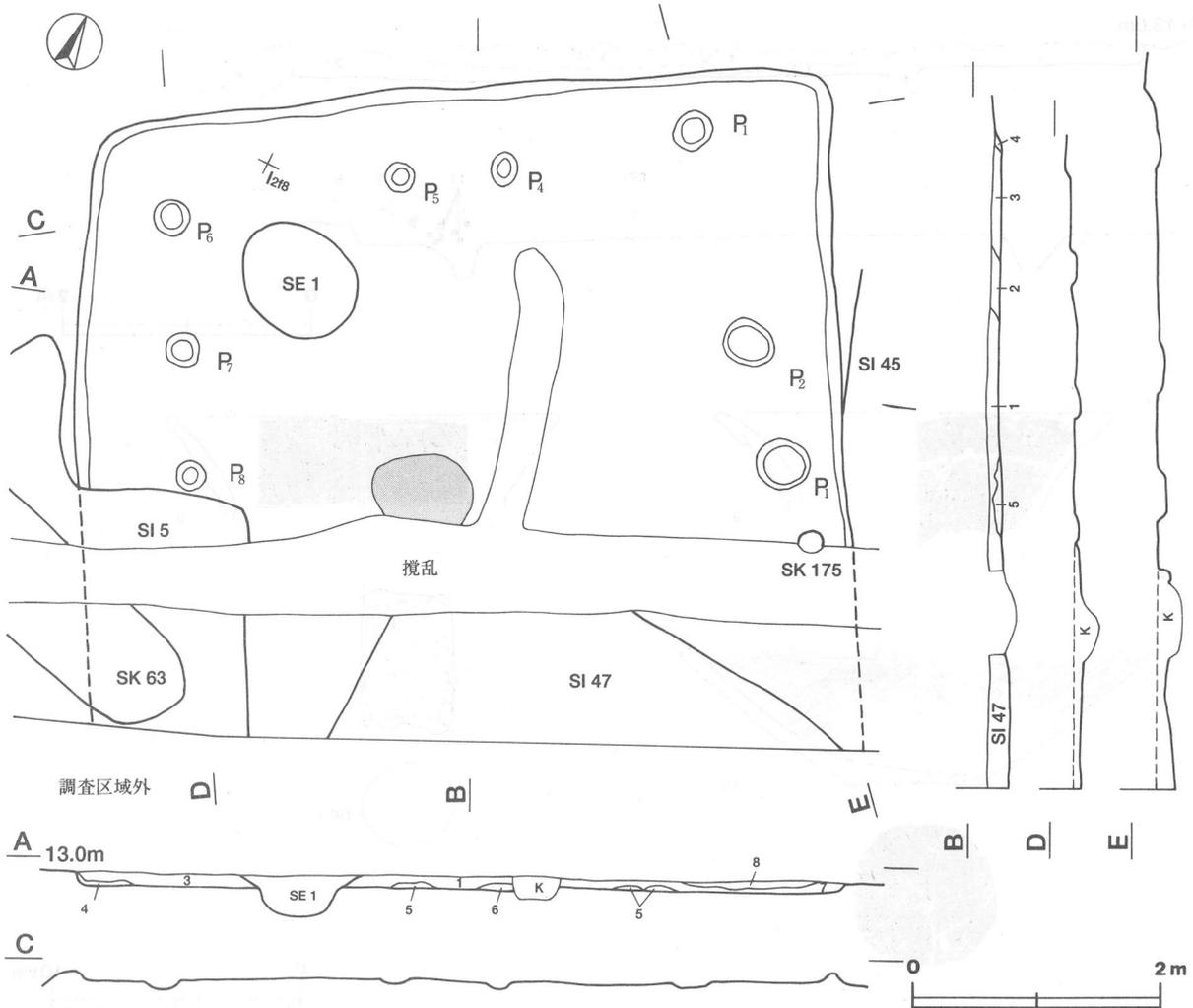
第8号住居跡 (第17図)

位置 調査区の南西部, I 2 I2f8区。標高12.9mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 東部で第45号住居跡を掘り込み, 西部を第5号住居に, 南部を第47号住居に, 部分的に第1号井戸・第63号土坑, 第175土坑に掘り込まれている。また, 現代の排水溝によって中央部の南側を溝状に攪乱されている。

規模と形状 確認した長軸5.25m, 短軸5.15mで長方形ないし方形と推定される。壁は高さ6~8cmで, 外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-26°-Wである。

床 ほぼ平坦で, 全体的に軟弱である。



第17図 第8号住居跡実測図

ピット 9か所。いずれも性格は不明である。

炉 中央部やや西側に焼土が堆積している。掘り込みや火床面は確認できず、床面上に焼土が堆積している状況であり、掘り込みを持たない地床炉と考えられる。

覆土 8層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------|----------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片26点（壺7，甕19）が、主に覆土下層からまばらに出土している。また、混入した縄文土器片3点が出土している。

所見 中央部やや西側に位置する焼土範囲は、位置及び規模から掘り込みを持たない地床炉と考えられる。床面は全体的に軟弱で、炉の周囲も特に硬化していない。時期は、出土した土器が小破片のため図示できないが、前期（4世紀後半）と考えられる。

第9号住居跡（第18・19図）

位置 調査区の南東部，I 2 d6区。標高12.9mの台地平坦部に位置している。

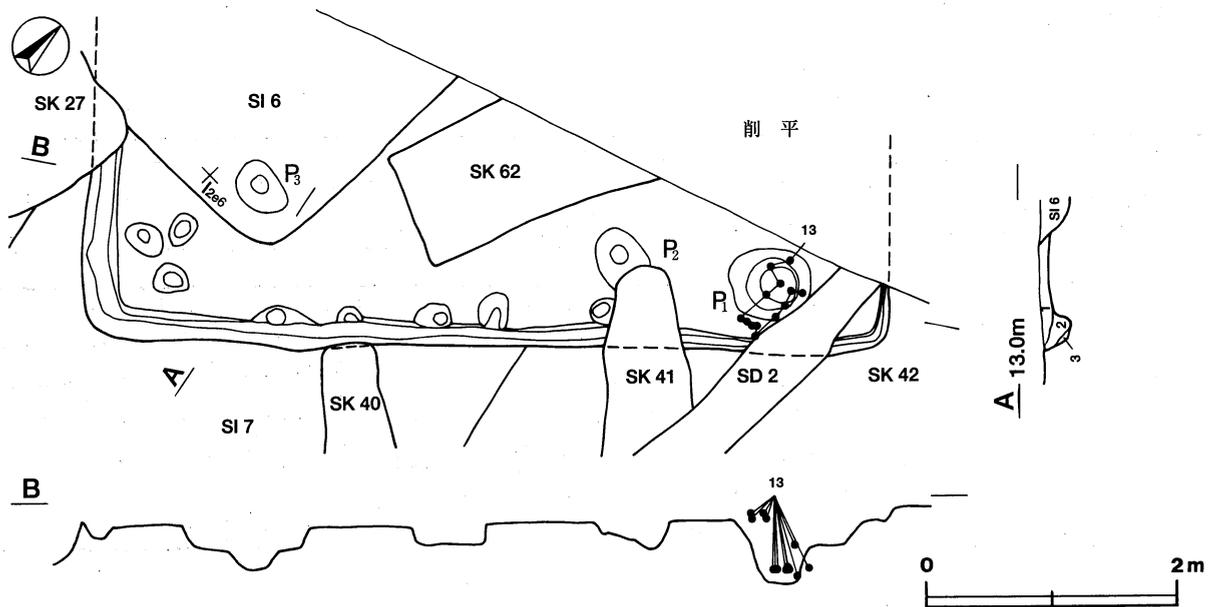
重複関係 第6・7号住居，第41・62号土坑，第8号井戸，第2号溝に掘り込まれている。北部は調査区域外に位置し，南部の大半は，調査区際の排水溝によって削平されている。

規模と形状 長軸6.43m，確認した短軸1.2mで長方形ないし方形と推定される。壁は高さ10cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-48°-Wである。

床 はほぼ平坦で，全体的に軟弱である。壁溝は確認した範囲で全周し，深さは4~10cmで，断面形はU・V字状を呈している。また，壁溝に沿って深さ5~10cmの小穴が連続している。

ピット 3か所。P1は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられ，深さ49cm，覆土は暗褐色土を主体としている。P2・3は性格不明である。

炉 調査区域外に位置しているか，あるいは調査区際の排水溝によって削平された可能性が考えられる。



第18図 第9号住居跡実測図

覆土 2層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。

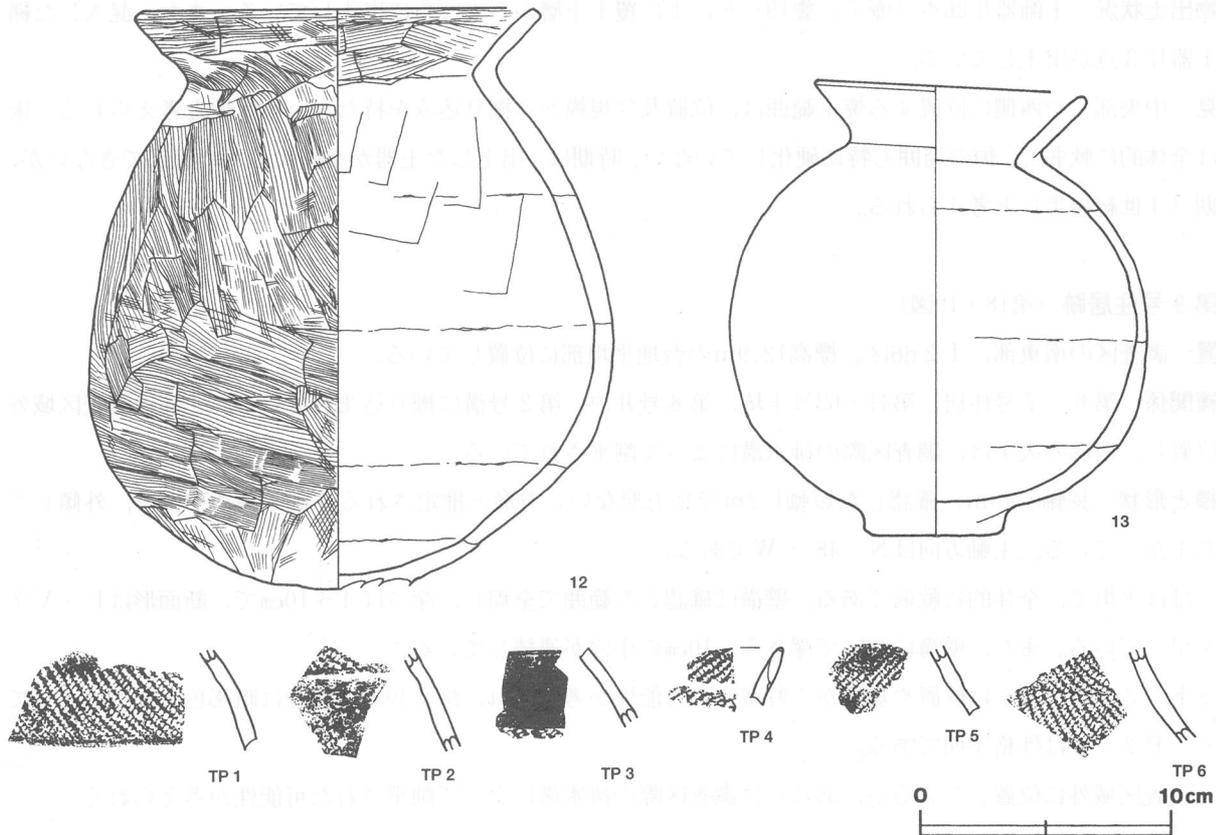
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量

2 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片34点(壺4, 甕30)が, 主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。特に, 貯蔵穴と考えられるP1の周辺や覆土中からまとまって出土している。また, 混入した縄文土器片4点が出土している。

所見 時期は, 極めて遺存状況が悪く出土土器も少ないが, 前期(4世紀後半)と考えられる。



第19図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表(第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
12	土師器	台付甕	16.1	(22.9)	-	石英・長石	にぶい黄褐	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ	P1	85% P L 34
13	土師器	壺	10.7	18.0	5.5	長石・白色粒	橙	不良	内・外面ナデ, 摩滅	P1	55% P L 34

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP1	弥生土器	壺	-	(3.6)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	外面横位RL単節縄文, 赤彩, 内面摩滅	下層	TP2・3同一個体 5% PL43
TP2	弥生土器	壺	-	(3.7)	-	石英・長石	明赤褐	普通	外面沈線区画内横位RL単節縄文, 赤彩, 内面摩滅	下層	TP1・3同一個体 5% PL43
TP3	弥生土器	壺	-	(3.4)	-	石英・長石	赤褐	普通	外面横位RL単節縄文, 赤彩, 内面摩滅	下層	TP1・2同一個体 5%
TP4	弥生土器	壺	-	(3.2)	-	長石	黒褐	普通	口縁部外面横位LR単節縄文, 口唇部縄文原体押圧による刻み, 内面摩滅	下層	5%
TP5	弥生土器	壺	-	(2.3)	-	石英・長石	褐	普通	頸部外面横位LR単節縄文, 内面ナデ	下層	5%
TP6	弥生土器	壺	-	(4.0)	-	石英・長石・赤色粒	橙	普通	頸部外面横位RL単節縄文, 内面ナデ	下層	5%

第10号住居跡 (第20・21図)

位置 調査区の中央部, I 2 e0区。標高12.9mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第45号住居跡, 第107号土坑を掘り込み, 第49・50号土坑に掘り込まれている。南東部は調査区域外に位置している。

規模と形状 推定される長軸4.8m, 短軸4.65mの方形と考えられる。壁は高さ24~32cmで直立している。主軸方向はN-3°-Wである。

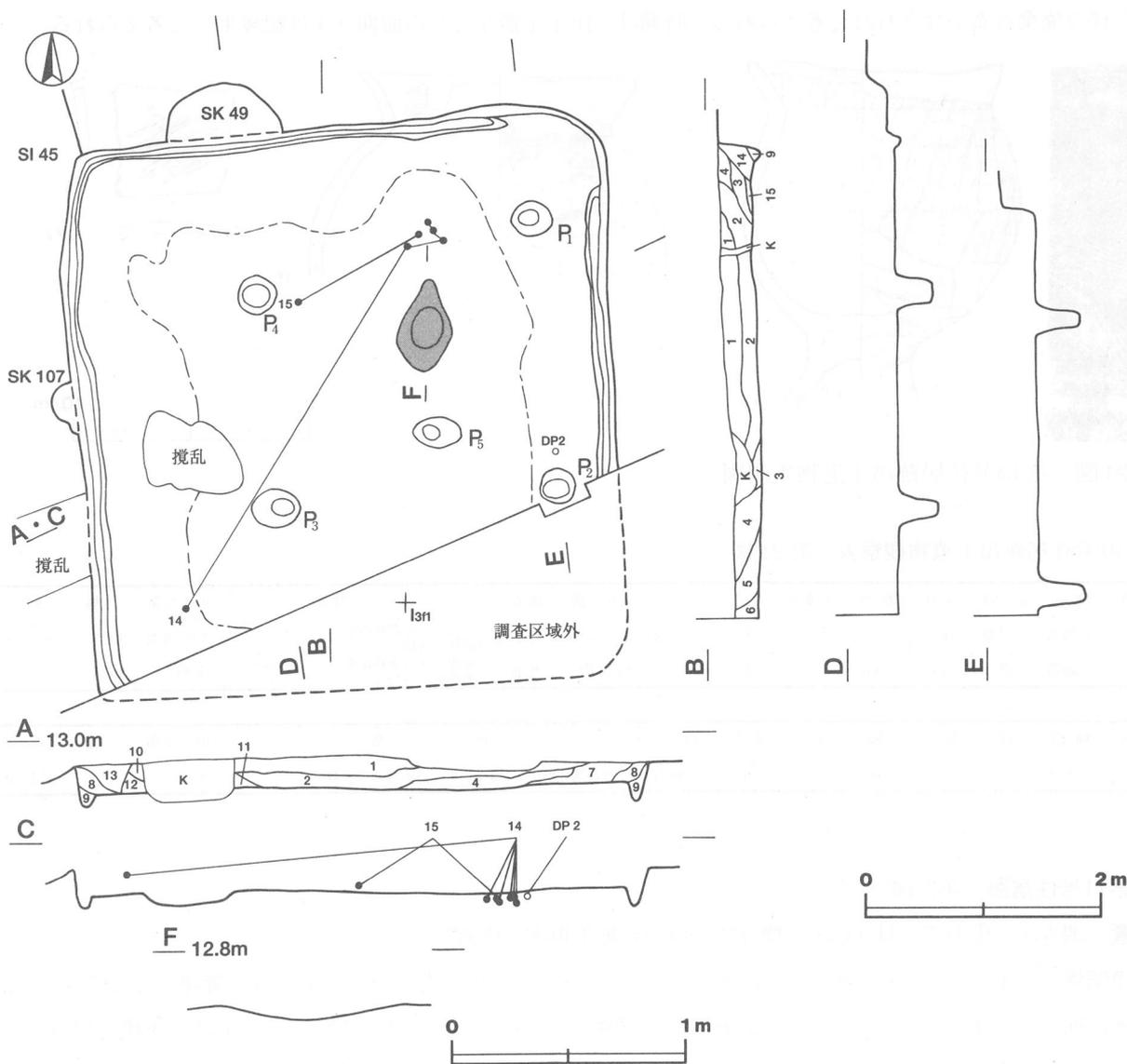
床 ほぼ平坦である。壁際を除いて, よく踏み固められている。壁溝は北東コーナー部を除いて全周し, 深さは5~14cmで, 断面形はU字状を呈している。

ピット 5か所。P1~4は配置から支柱穴と考えられる。深さは33~41cmである。P5は性格不明である。

炉 床面を5cm程度掘り込んだ浅い地床炉で, 中央部やや北東寄りに位置している。火床面は赤変硬化している。覆土は単一層である。

炉土層解説

1 赤褐色 焼土ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量



第20図 第10号住居跡実測図

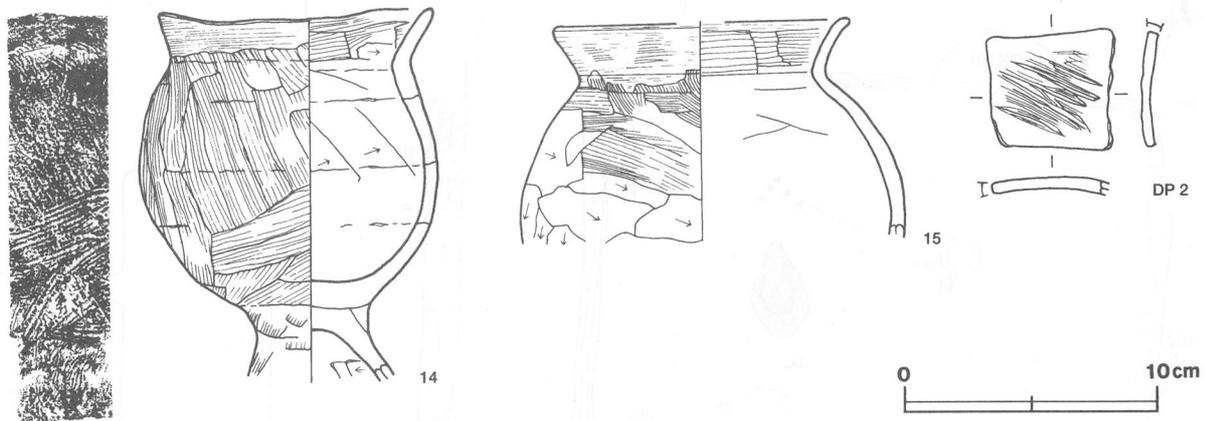
覆土 15層からなる。第1～4層の堆積状況は、周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。壁際を中心に堆積する第5・8・14・15層には、焼土ブロック、炭化物、炭化材が多く含まれていることから、人為的に埋め戻されている可能性が高い。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|-----------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 10 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | 11 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子少量 |
| 4 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 12 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 5 黒褐色 | ローム中ブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 13 極暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子微量 | 14 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック多量, 炭化物少量 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック微量 | 15 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化物微量 |
| 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片126点（高坏2，壺19，甕105），土器片転用砥1点，鉄滓2点が、壁際の覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。同様に、焼土ブロック、炭化物、炭化材が多量に出土している。以上のことから、出土した遺物の大半が、本住居の廃絶後に廃棄されたものと考えられる。また、混入した縄文土器片8点，弥生土器片9点，剥片5点が出土している。

所見 本跡は、壁際に見られる焼土ブロックや炭化材，投棄されたような状態で出土している遺物の存在から、火を伴う廃棄行為がなされたと考えられる。時期は、出土土器などから前期（4世紀後半）と考えられる。



第21図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	土師器	台付甕	10.7	(14.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ，外面ハケ目調整，内面ヘラナデ	上層～床面	90% P L 30
15	土師器	甕	[11.6]	(8.6)	-	石英・長石・雲母	浅黄橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ，外面ハケ目調整後ヘラ削り	床面	35%

番号	種別	径	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP2	転用砥	-	4.8	5.0	0.5	(19.1)	土師器	土師器片転用，4側縁使用，外面線条痕多数	床面	P L 40

第11号住居跡（第22図）

位置 調査区の中央部，H4i3区。標高12.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 大半が削平され，遺存状況は極めて不良である。わずかに北コーナー部付近を確認したにすぎない。削平は地山まで達しているが，しみ状に掘り方の痕跡を認めることができ，おおよその形状と規模を知ることができた。重複関係は北コーナー部の先端を第5号溝に掘り込まれている。また，削平された部分で第6号土坑，第5号掘立柱建物のP4・5と重複しており，時期の検討から本住居が掘り込まれている。

規模と形状 推定される長軸4.8m，短軸4.77mの方形と考えられる。壁は高さ9cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-45°-Wである。

床 ほぼ平坦である。壁際を除いてよく踏み固められている。

ピット 確認されなかった。

炉 床面を掘りくぼめた地床炉と考えられ，中央部の北西寄りに位置している。覆土及び上部は削平されている。確認した火床部は火熱を受けて赤変硬化している。

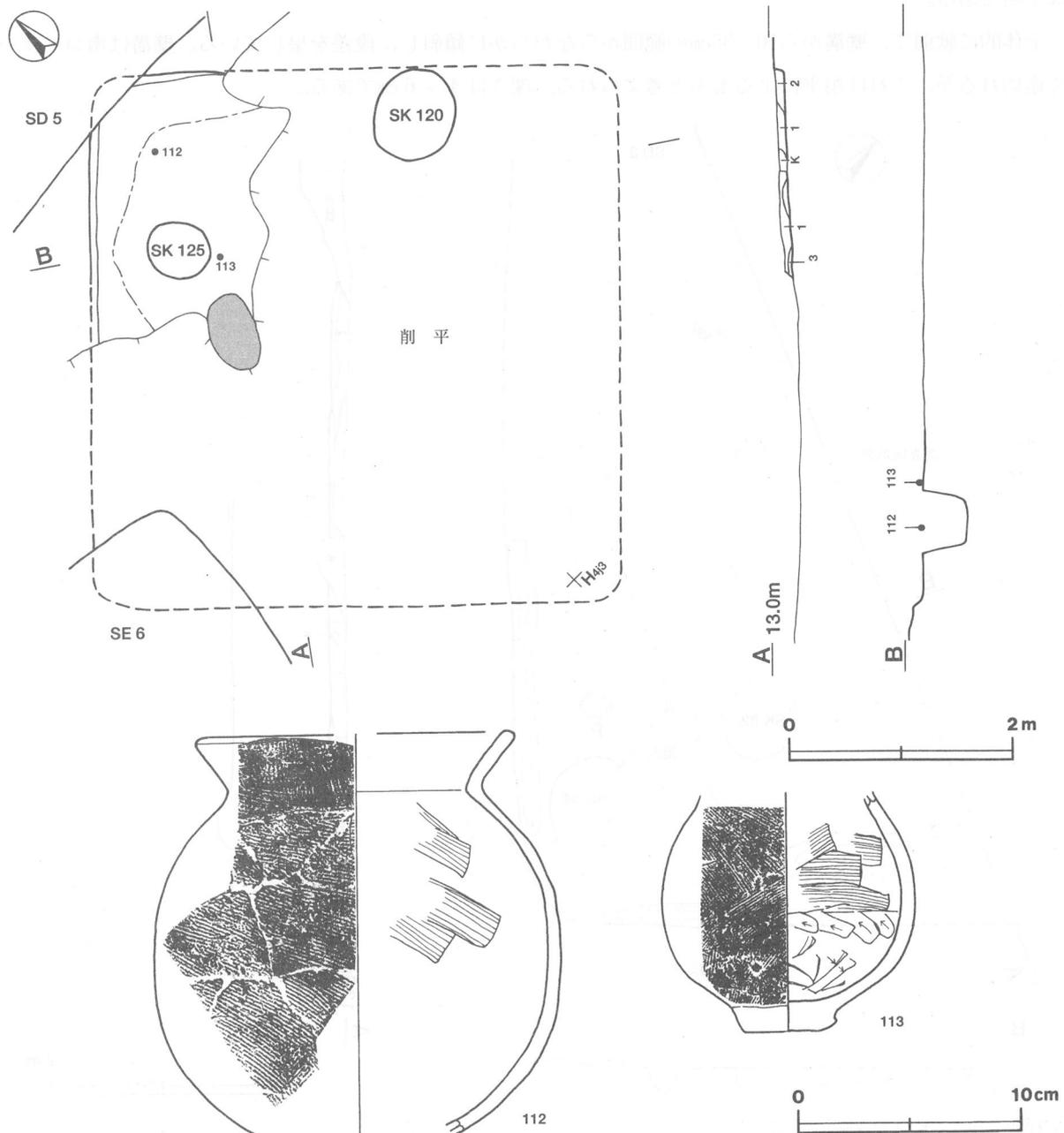
覆土 3層からなる。層厚が11cmと薄いため，堆積状況は不明である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 | 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片16点（甕）が，覆土下層から床面にかけて廃棄されたような状態で出土している。

所見 時期は，出土土器などから前期（4世紀後半）と考えられる。



第22図 第11号住居跡・出土遺物実測図

第 11 号住居跡出土遺物観察表 (第 22 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
112	土師器	甕	[13.6]	(13.0)	-	石英・長石・雲母	暗赤褐	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部ハケ目調整	床面	25%
113	土師器	甕	-	(10.6)	4.0	石英・長石・雲母	灰白	普通	体部外面ハケ目調整, 体部内面上半ハケ目調整, 下半ヘラナデ	床面	65%

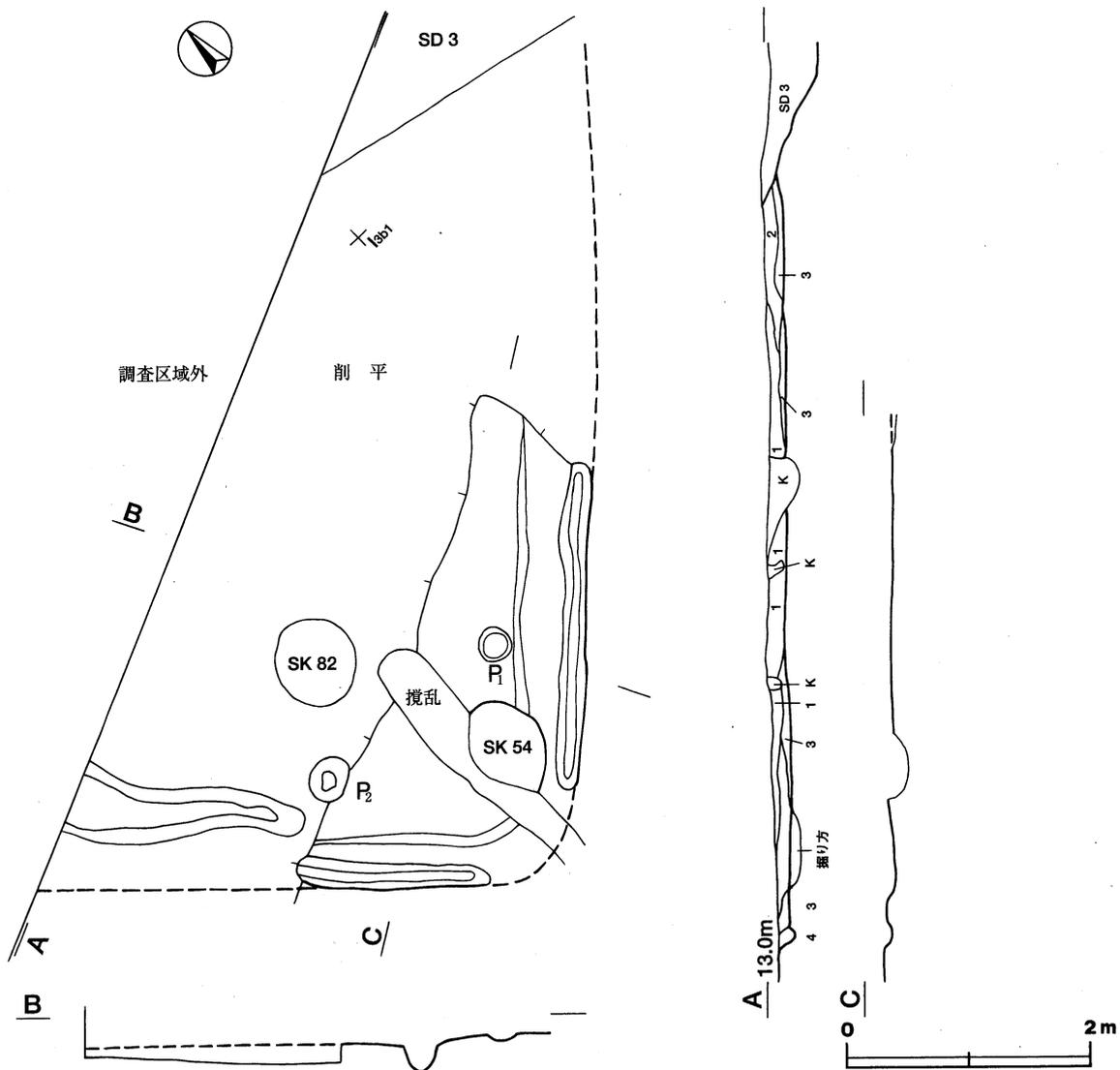
第13号住居跡 (第22図)

位置 調査区の南東部, I 2 b0区。標高12.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 南コーナー部を第54号土坑に, 北東部を第3号溝に掘り込まれている。北西部は調査区域外に位置し, 南東部の大半も調査区際の排水溝によって削平され, 壁溝の痕跡と2か所のピット, 床面の一部が残存しているだけである。

規模と形状 確認した長軸6m, 短軸4.44mで長方形ないし方形と推定される。壁は削平されている。主軸方向は不明である。

床 全体的に軟弱で, 壁溝から10~35cmの範囲からなだらかに傾斜し, 段差を呈している。壁溝は南コーナー部で途切れるが, これは削平によるものと考えられる。深さは4~6cmである。



第23図 第13号住居跡実測図

ピット 2か所。性格は不明である。

炉・竈 調査区域外に位置しているか、あるいは調査区際の排水溝によって削平された可能性が考えられる。

覆土 4層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
2 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量

3 暗褐色 ロームブロック中量
4 褐色 ロームブロック・黒色土粒子少量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 時期は出土遺物がなく不明である。重複関係や覆土の様相、竈が存在した可能性は低いことなどから、中期以前と推定される。

第14号住居跡（第24～27図）

位置 調査区の中央部、I 3 a3区。標高12.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況 北西コーナー一部付近は調査区域外に位置している。現代の廃棄土坑によって中央部が大きく攪乱されている。

規模と形状 長軸7.05m、短軸6.08mの長方形である。壁は高さ7～20cmで、大部分が直立している。主軸方向はN-8°-Wである。

床 ロームブロックを多量に含む褐色土を埋土して構築された貼床である。ほぼ平坦であるが、中央部に向かってなだらかに傾斜している。全体的に軟弱であるが、炉の周囲はよく踏み固められている。掘り方は壁際を中心に掘り込まれており、大小の凹凸が見られる。

ピット 4か所。P 1～3は配置から支柱穴と考えられる。深さは36～39cmである。P 4は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられ、深さ18cmで、覆土は黒褐色土を主体としている。

P 4 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量

2 にぶい褐色 ロームブロック中量

炉 床面を掘りくぼめた地床炉と考えられ、中央部の北寄りに位置している。中央部の攪乱によって覆土及び南側の大半が削平されている。露呈した火床面は、火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 9層からなる。全体的には周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と推定される。ただし、西壁際の第6層は、他層に比べて焼土粒子が多く含まれているため、焼土などが廃棄された可能性が考えられる。第9層は掘り方の覆土である。

土層解説

1 黒色 ローム粒子微量

6 極暗赤褐色 ロームブロック多量、焼土粒子中量、炭化物微量

2 黒褐色 ローム粒子少量

7 灰褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

3 暗褐色 炭化材少量、ロームブロック・焼土粒子微量

8 黒色 ロームブロック中量、焼土粒子少量

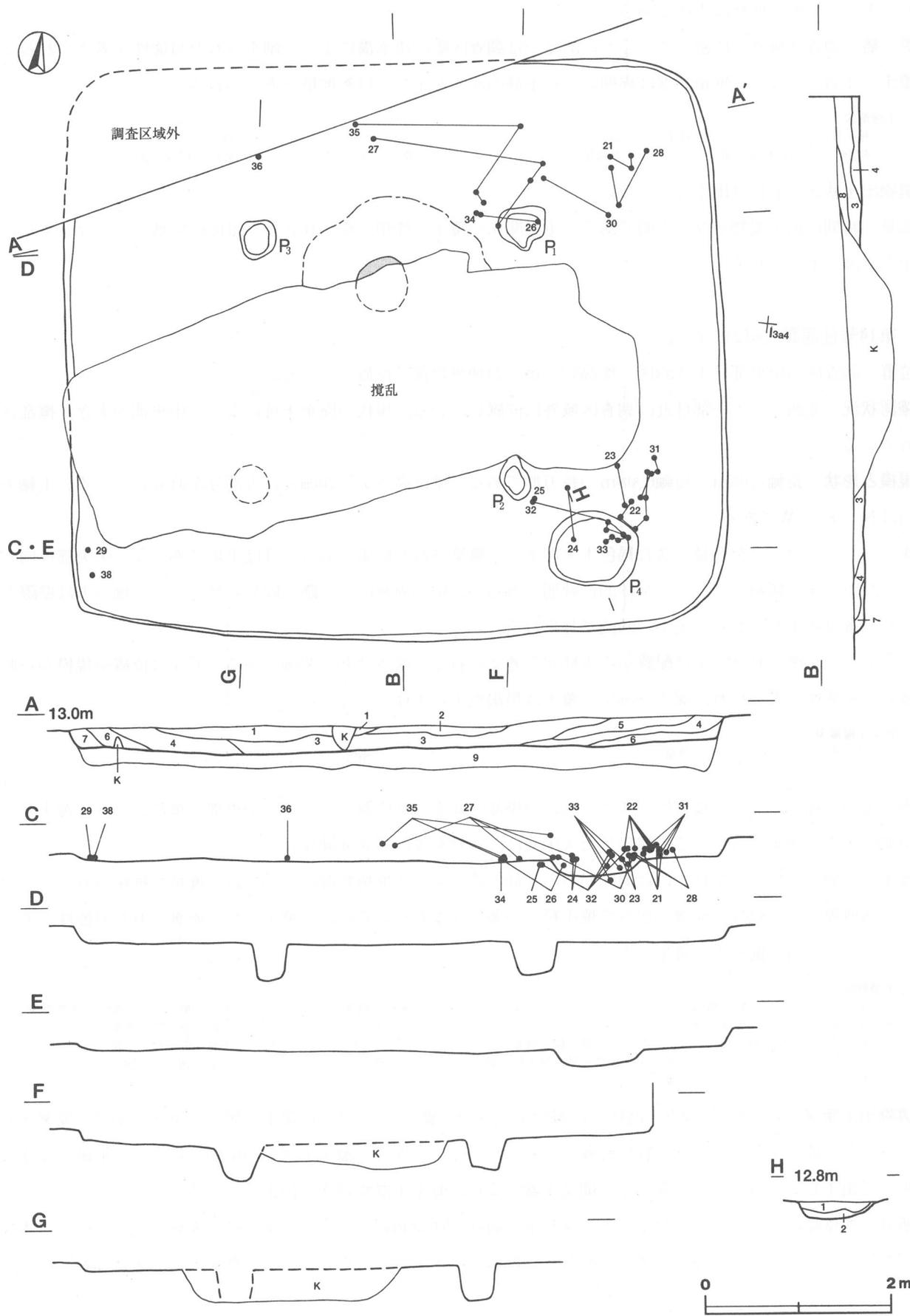
4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量

9 暗褐色 ロームブロック中量（掘り方土層）

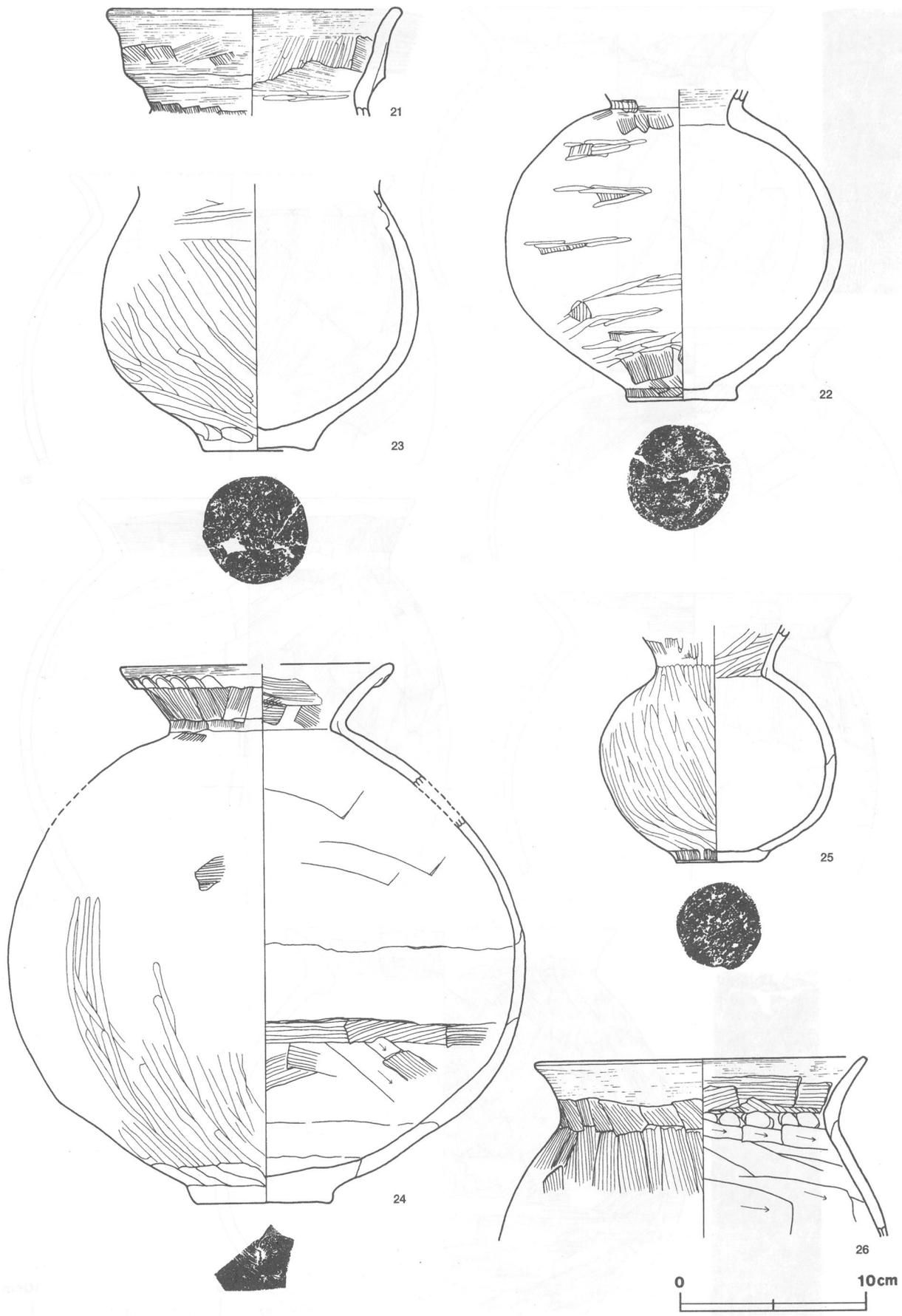
5 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片220点（高坏6、器台7、壺49、甕158）が、主に覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。特に貯蔵穴と考えられるP 4周辺の覆土下層から床面にかけて大形破片がまともに出土している。また、混入した縄文土器片2点、弥生土器片11点が出土している。

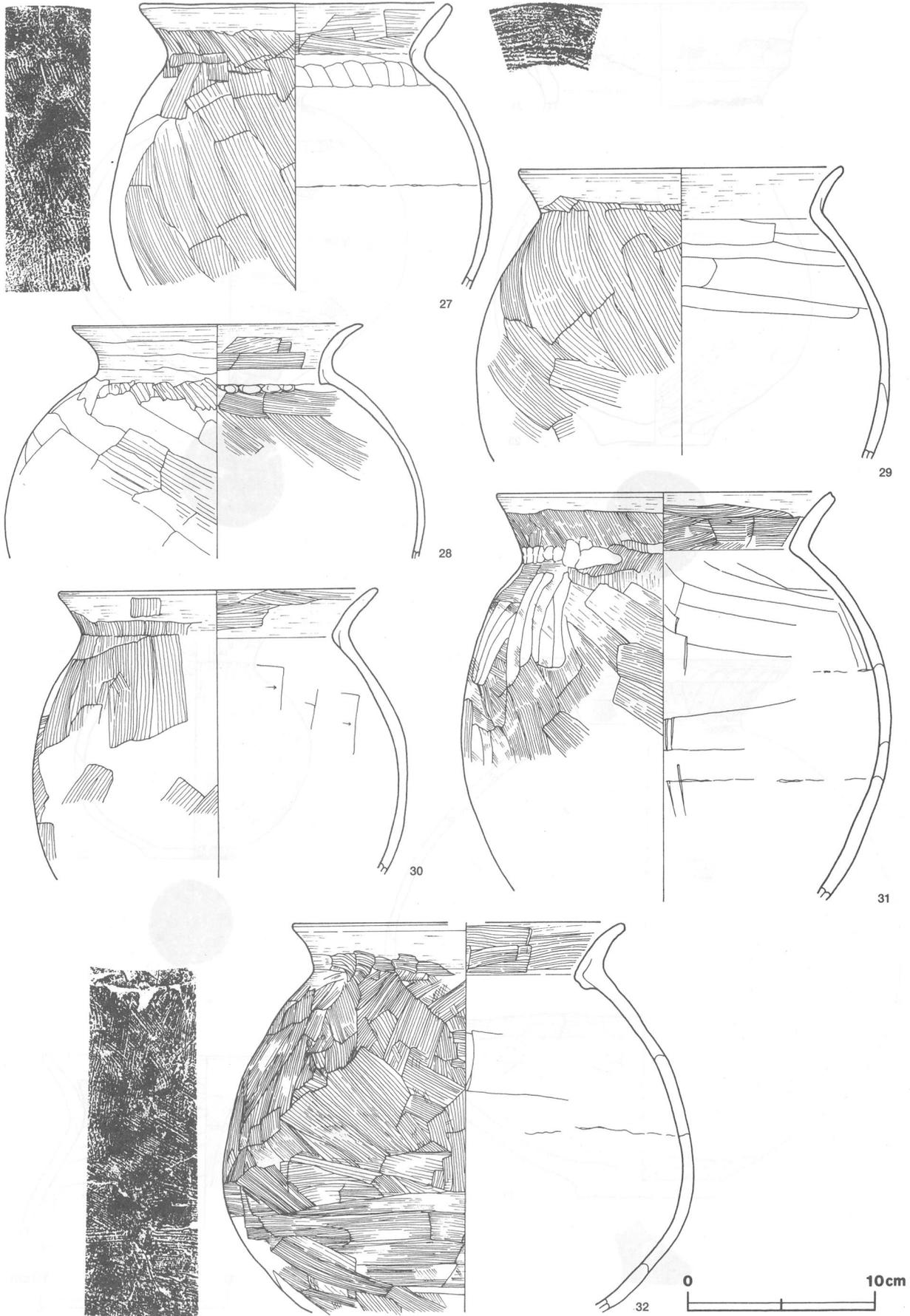
所見 西壁際に見られる焼土粒子を多く含む第6層は、埋没過程において焼土などが廃棄されたもので、本住居の焼失を示すものではないと考えられる。時期は、出土土器などから前期（4世紀末）と考えられる。



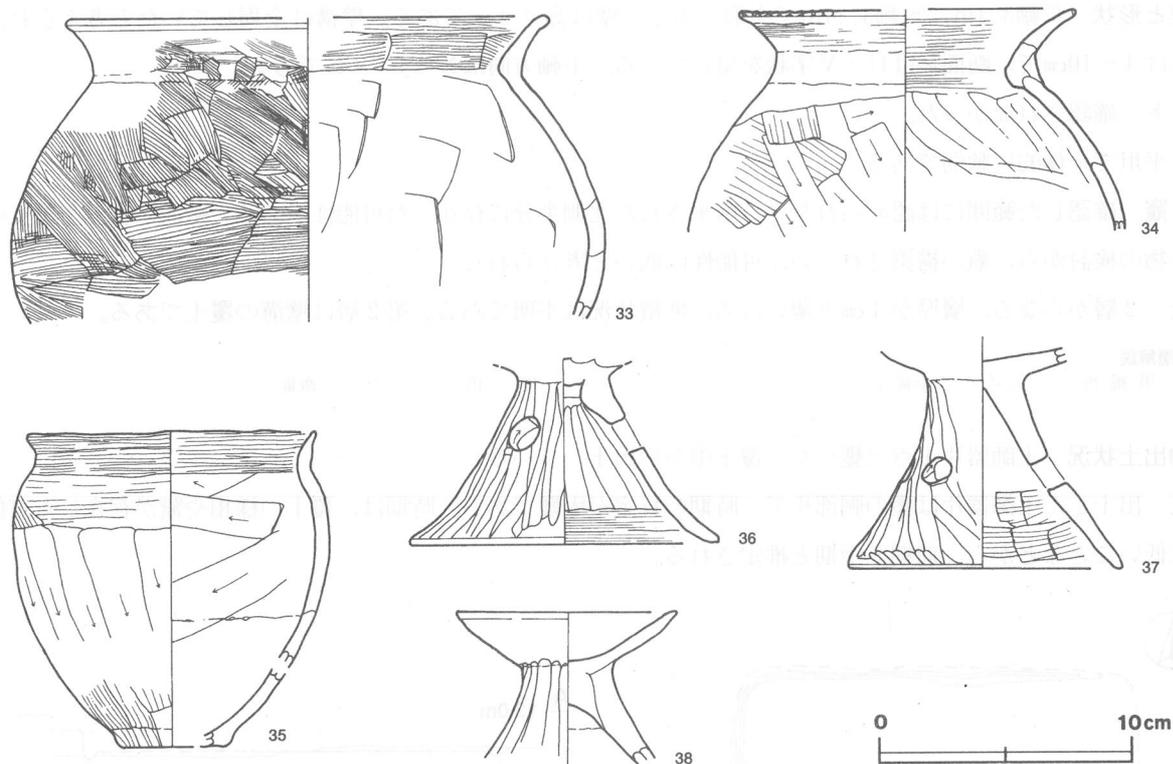
第24図 第14号住居跡実測図



第25图 第14号住居跡出土遺物実測図(1)



第26图 第14号住居跡出土遺物実測図(2)



第27図 第14号住居跡出土遺物実測図(3)

第14号住居跡出土遺物観察表(第25~27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
21	土師器	壺	15.5	(5.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後横ナデ, 内面ヘラ磨き後横ナデ	中層	10%
22	土師器	壺	-	(16.5)	5.8	石英・長石	明赤褐	普通	体部外面ハケ目調整後ヘラ磨き, 底部ナデ	床面	80%
23	土師器	壺	-	(14.3)	6.0	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き, 底部ナデ	中層	50%
24	土師器	壺	[14.6]	(29.0)	7.3	石英・長石・赤色粒	にぶい橙	普通	折り返し口縁部指頭圧痕, 頸部ハケ目調整, 体部外面ヘラ磨き	床面	60%
25	土師器	壺	-	(11.8)	4.4	石英・赤色粒	にぶい黄橙	普通	頸部~体部外面ハケ目調整後ヘラ磨き, 底部ナデ	床面	90% P L 30
26	土師器	甕	17.7	(9.5)	-	石英・長石・赤色粒	橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ	床面	15%
27	土師器	甕	16.6	(15.3)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ヘラナデ後ハケ目調整, 内面ヘラナデ	中~下層	35%
28	土師器	甕	15.5	(12.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ヘラナデ後ハケ目調整	中層	35%
29	土師器	甕	17.3	(15.6)	-	石英・赤色粒	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ	床面	35%
30	土師器	甕	16.8	(15.4)	-	長石・赤色粒	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ	床面	35%
31	土師器	甕	18.0	(21.3)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ	床面	45% P L 34
32	土師器	甕	18.0	(20.9)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ	床面・P4	30%
33	土師器	甕	[19.4]	(12.0)	-	石英・長石	明赤褐	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ	中層	35%
34	土師器	壺	[13.2]	(8.6)	-	長石・雲母・白色粒	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ハケ目調整, ヘラ削り, 内面ヘラナデ	床面	10%
35	土師器	甕	11.4	(12.5)	[4.1]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 下端ハケ目調整, 内面ヘラナデ	中~下層	50%
36	土師器	器台	-	(7.4)	[12.2]	石英・長石・赤色粒	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ磨き, 内面ヘラナデ後横ナデ, 孔3か所	下層	50%
37	土師器	器台	-	(8.7)	10.8	石英・長石・赤色粒	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ磨き, 内面ハケ目調整, 孔4か所	中~下層	30%
38	土師器	器台	8.6	(6.0)	-	石英・長石・雲母	浅黄	普通	器受部摩滅, 脚部外面ヘラ磨き	床面	70%

第17号住居跡(第28図)

位置 調査区の中央部, H 3 j5区。標高12.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 南東コーナー部で第88号土坑を掘り込んでいる。北側半分は削平され, 壁溝の痕跡を確認しているだけである。

規模と形状 長軸3.4m, 短軸3.24mで方形である。壁は高さ4cmである。壁溝は全周していたと考えられ、深さは4~10cmで、断面形はU・V字状を呈している。主軸方向はN-5°-Eである。

ピット 確認されなかった。

床 平坦で全体的に軟弱である。

炉・竈 確認した範囲には認められない。削平された北側半分に存在した可能性がある。壁溝の状況や覆土の含有物の検討から、竈が構築されていた可能性は低いと考えられる。

覆土 2層からなる。層厚が4cmと薄いため、堆積状況は不明である。第2層は壁溝の覆土である。

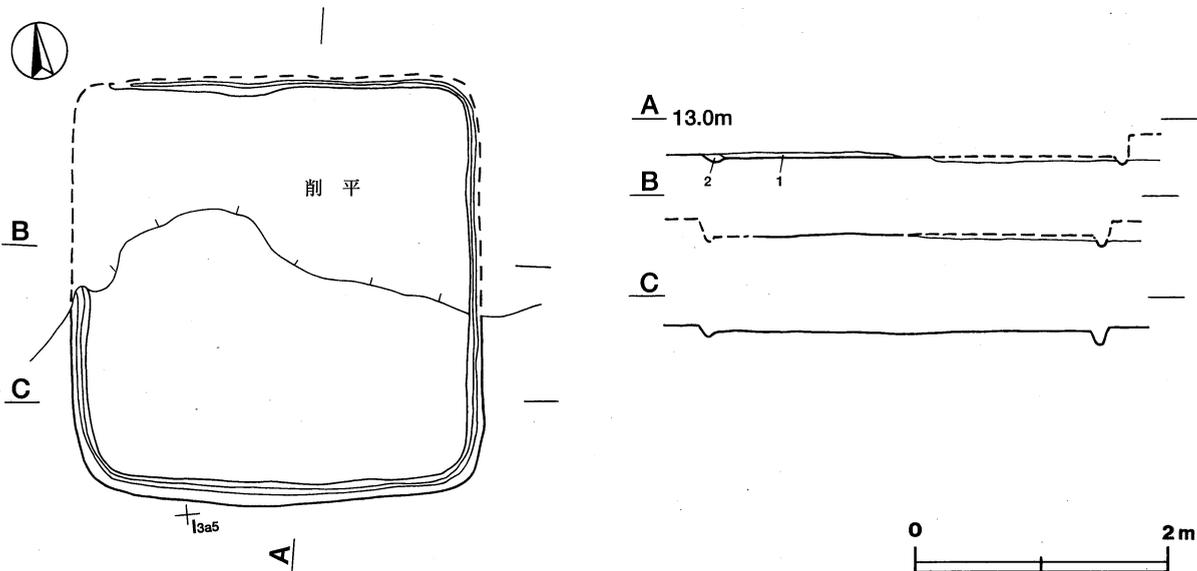
土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

2 黒色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片1点(甕)が、覆土中から出土している。

所見 出土した土師器片は甕の胴部片で、時期の特定が困難である。時期は、覆土の様相や竈が存在した可能性は低いことなどから、前期~中期と推定される。



第28図 第17号住居跡実測図

第19号住居跡 (第29図)

位置 調査区の中央部, H 3 i7区。標高12.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 北東コーナー部を第20号住居と第3号掘立柱建物のP3に, 西端の中央部を第4号掘立柱建物のP1に掘り込まれている。壁や床面は削平され, ピットと掘り方を確認しただけである。

規模と形状 確認した長軸3.85m, 短軸2.9mで長方形である。主軸方向はN-77°-Wである。壁や床面は削平されている。

ピット 1か所。P1の性格は不明である。

炉・竈 確認した範囲には認められない。壁や床面と同様に削平された可能性がある。掘り方の様相から, 竈が構築されていた可能性は低いと考えられる。

覆土 3層からなる。いずれも掘り方の覆土である。堆積状況は人為堆積である。

土層解説

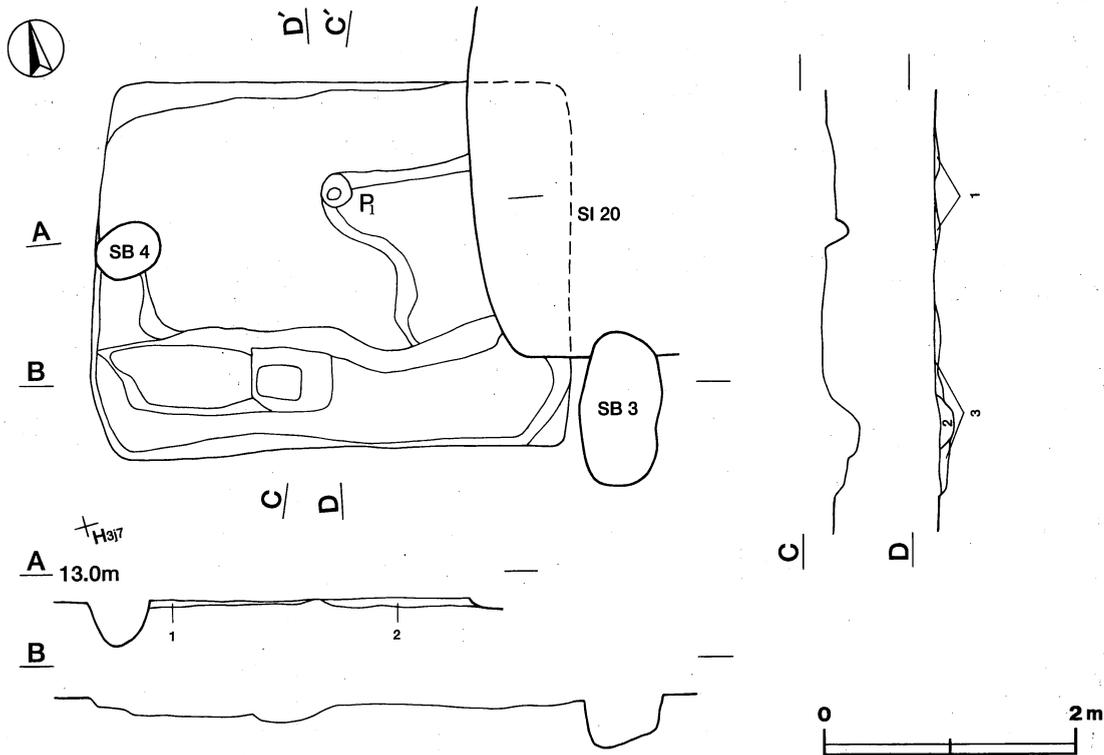
1 にぶい黄褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

3 黒褐色 ロームブロック少量

2 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 時期は出土遺物がなく不明である。重複関係や覆土の様相、竈が存在した可能性は低いことなどから、中期以前と推定される。



第29図 第19号住居跡実測図

第21号住居跡 (第30~33図)

位置 調査区の中央部、H 3 j9区。標高12.8mの台地縁辺部（黒色土壌域）から平坦部にかけて位置している。

重複関係 第20号住居に北西壁の北側上部を、第3号掘立柱建物のP 2~4に覆土及び床面の一部を掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.23m、短軸5.05mで方形である。壁は高さ55~58cmで、直立している。主軸方向はN-39°-Wである。

床 ほぼ平坦であるが、中央部がややくぼんでいる。壁際は軟弱で、支柱穴と考えられるP 1~4の内側はよく踏み固められている。

ピット 5か所。P 1~4は配置から支柱穴と考えられる。深さは58~61cmである。P 5は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。深さは46cmである。

炉 床面を15cm程度掘りくぼめた地床炉で、中央部の北西寄り、P 1とP 4を結んだほぼ線上に位置し、P 4側に偏っている。火床部は火熱を受けて赤変硬化している。覆土は単一層である。

炉土層解説

1 赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量

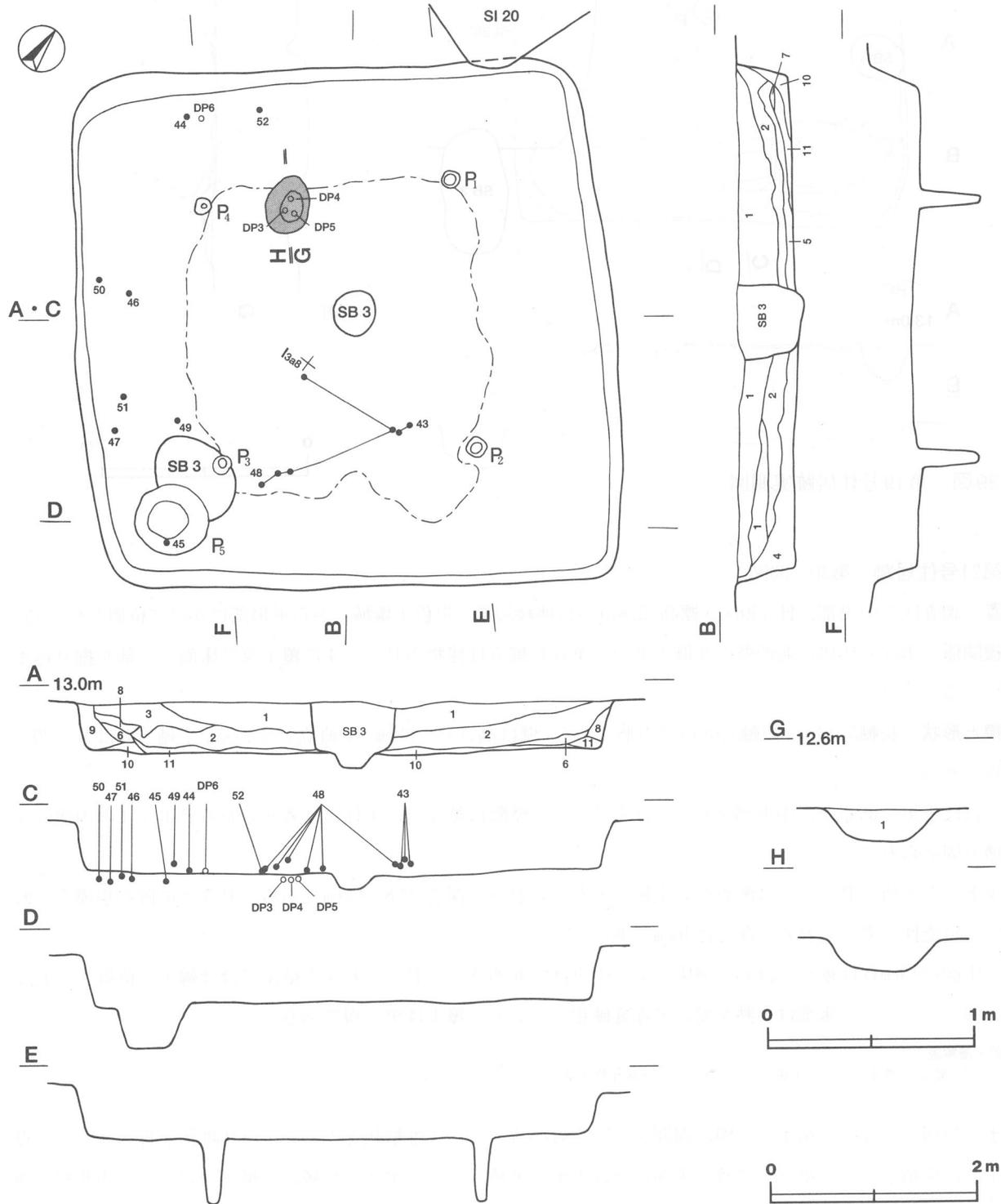
覆土 11層からなる。第1~5層は周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と推定される。壁際中心に堆積している第6~9層、床面にはほぼ水平に堆積している第10・11層は、焼土ブロック、炭化材や炭化物が比較的多く含まれているため、本住居の焼失や廃絶に伴って形成された土層と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・白色粘土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量

- 7 暗赤褐色 焼土ブロック中量, 炭化物少量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量
- 9 褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック中量, 焼土物少量, ロームブロック微量
- 11 暗赤褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量

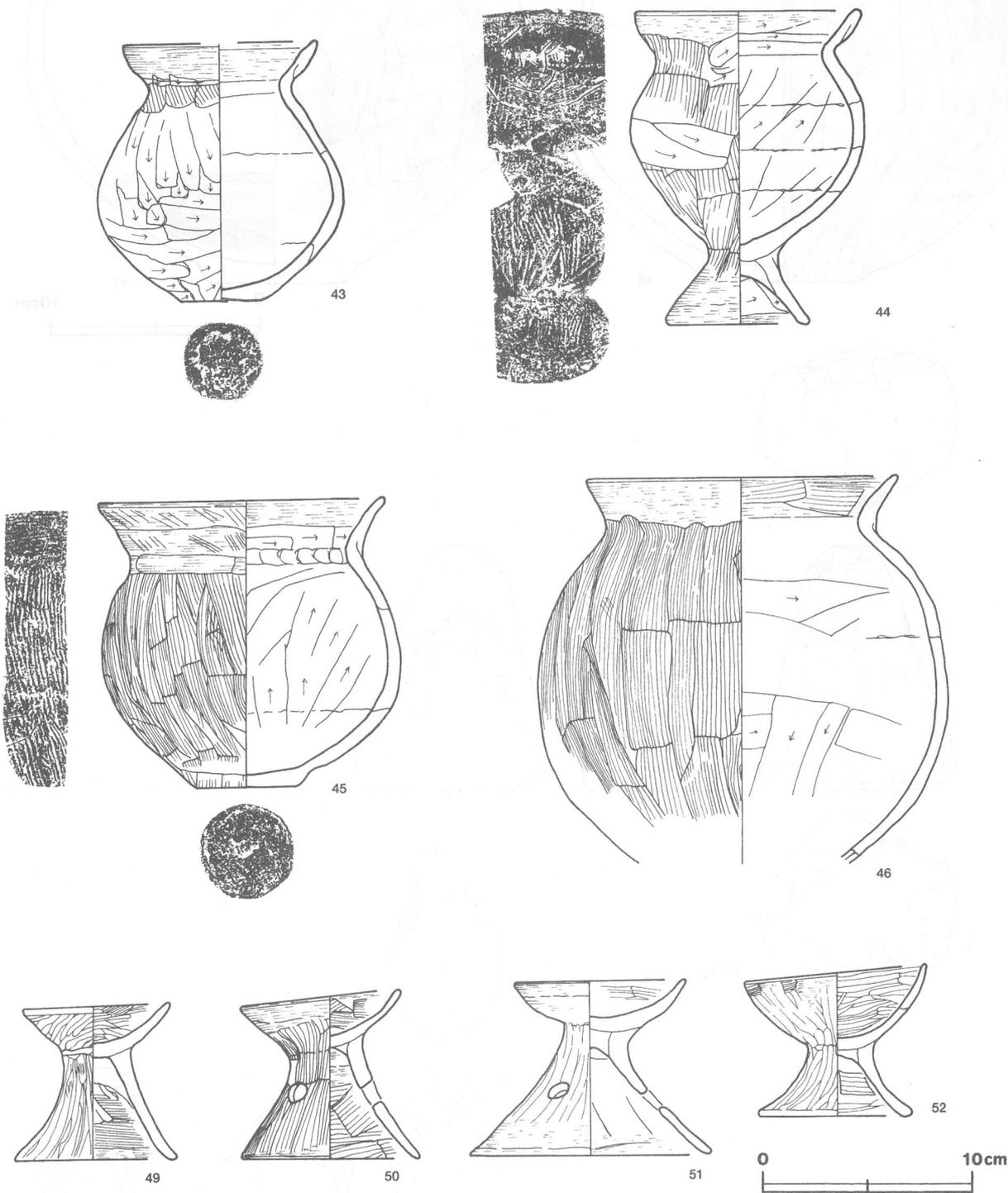
遺物出土状況 土師器片99点(高坏1, 器台3, 壺8, 甕87), 土製支脚4点, 砥石1点が出土している。完形品や大形破片の多くは壁際や炉の周囲, 貯蔵穴と考えられるP5内から出土し, それらは中央部の南側を除いて堆積する第10・11層中や床面上で確認されている。特に4点の土製支脚の内, 3点が炉の上面から出土し



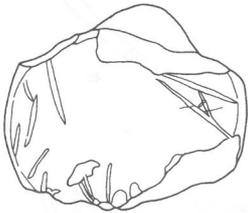
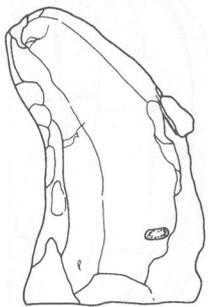
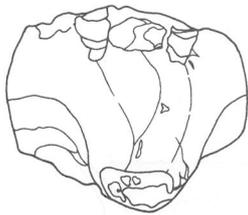
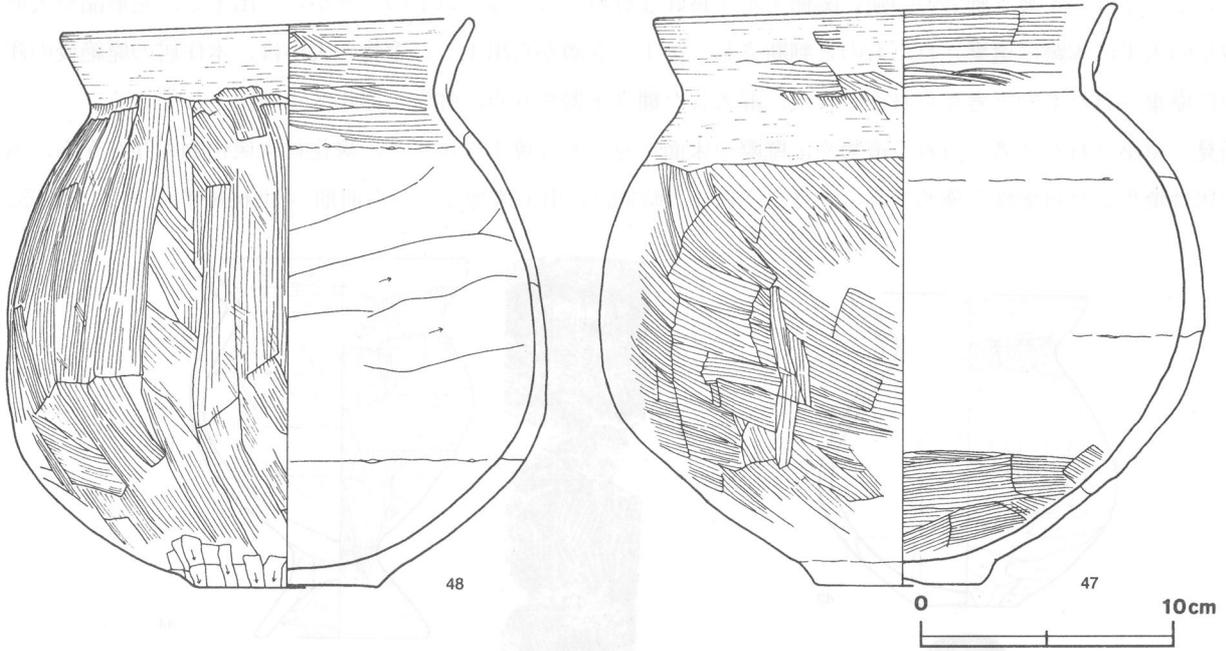
第30図 第21号住居跡実測図

ていることは、土製支脚と炉の強い関係を示す良好な資料と言える。以上のことから、出土した完形品や大形破片の大半は本跡に遺棄されたものと判断され、第1～5層から出土した遺物の大半は、本住居の廃絶後の窪地に廃棄されたものと考えられる。また、混入した縄文土器片6点、弥生土器片8点が出土している。

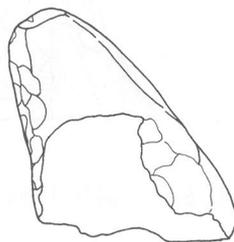
所見 遺棄されたと考えられる遺物や、壁際や床面に見られる焼土ブロック、炭化材や炭化物の存在から、本住居は焼失した可能性が極めて高いと考えられる。時期は、出土遺物などから前期(4世紀後半)と考えられる。



第31図 第21号住居跡出土遺物実測図(1)



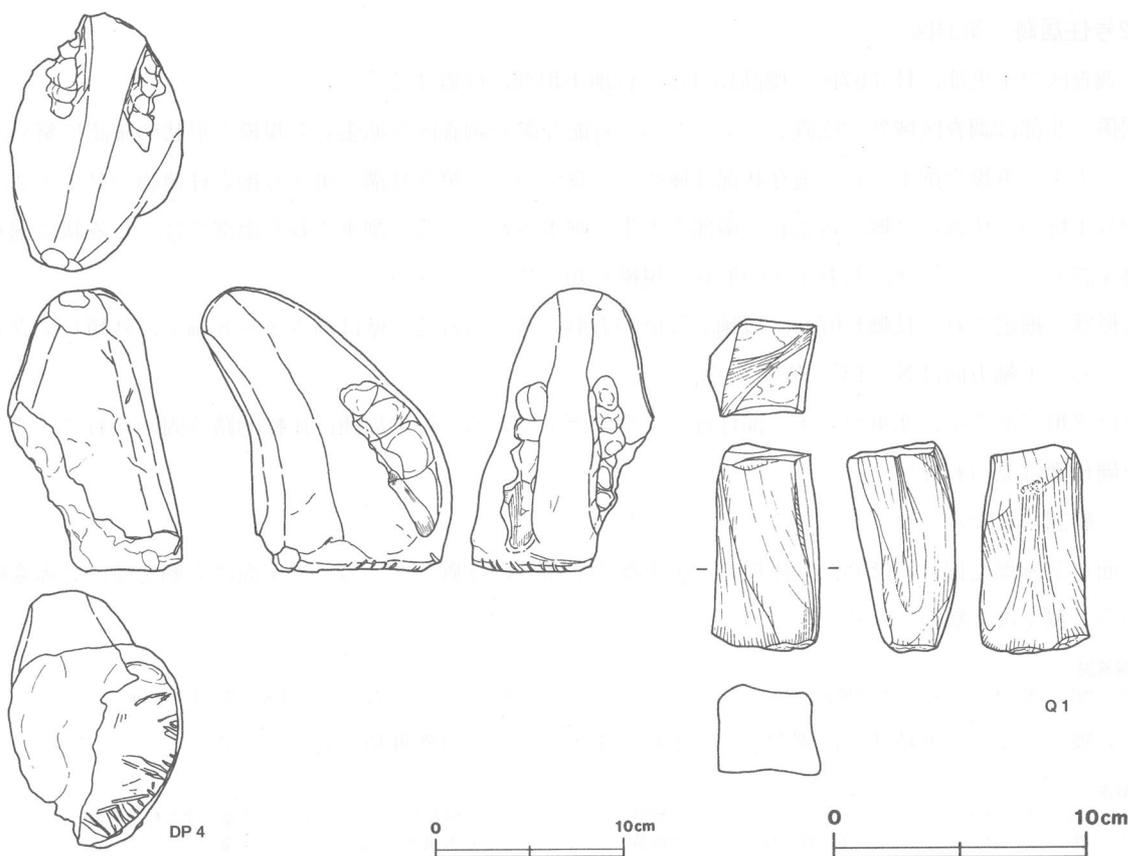
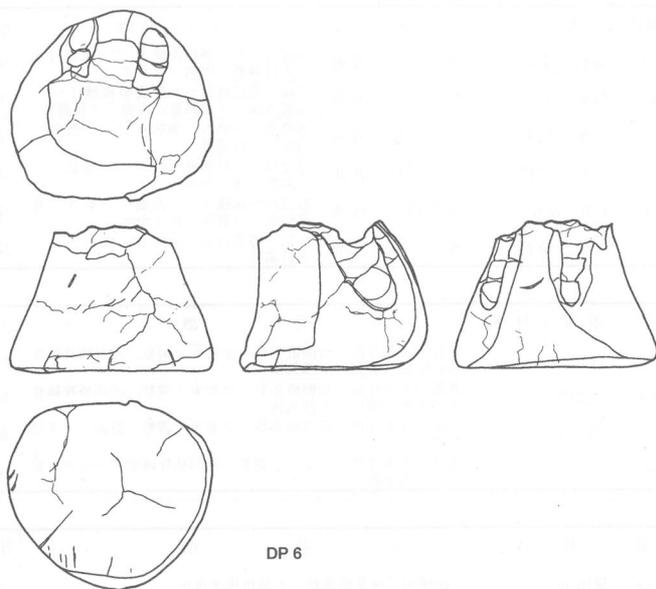
DP 3



DP 5

0 10cm

第32图 第21号住居跡出土遺物実測図(2)



第33図 第21号住居跡出土遺物実測図(3)

第21号住居跡出土遺物観察表(第32~33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
43	土師器	壺	[9.2]	12.4	3.8	長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ, 頸部ハケ目調整, 体部外面ヘラ削り	下層	70% P L 30
44	土師器	台付甕	10.7	14.9	6.9	長石・雲母・赤色粒	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ハケ目調整後ヘラ削り, 内面ヘラナデ	床面	85% P L 30
45	土師器	壺	13.8	13.8	5.0	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 頸部指頭ナデ	P5	90% P L 34
46	土師器	壺	14.7	(18.5)	-	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ	床面	70% P L 34

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
47	土師器	壺	16.1	22.4	7.1	長石・雲母	赤	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ、体部外面ハケ目調整、内面ヘラナデ	床面	95% P L 35・39
48	土師器	甕	18.5	22.9	6.7	石英・長石	橙	普通	口縁～頸部外面ハケ目調整後横ナデ、体部外面ハケ目調整、内面ハケ目調整	下層	75% P L 35
49	土師器	器台	7.0	7.5	7.8	石英・長石	にぶい橙	普通	器受部ヘラ磨き、脚部外面ヘラ磨き、内面ハケ目調整	下層	80% P L 30
50	土師器	器台	7.5	8.0	8.5	長石・雲母	にぶい橙	普通	器受部ハケ目調整後横ナデ、脚部ハケ目調整、孔3か所	床面	95% P L 30
51	土師器	器台	8.2	8.3	11.6	石英・長石・雲母	浅黄橙	普通	器受部外面横ナデ、内面ヘラ磨き、脚部外面ヘラ磨き、孔3か所	床面	95% P L 30
52	土師器	高坏	8.8	7.2	7.3	石英・長石	橙	普通	坏部～脚部外面ヘラ磨き、脚部内面ハケ目調整	床面	85% P L 30

番号	種別	径	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP3	支脚	-	15.8	12.6	(10.6)	(1140.2)	-	背部つまみ作出、指頭痕多数、全面ナデ調整、底部植物繊維状の圧痕、脆弱、下部欠損	炉上面	P L 38・39
DP4	支脚	-	14.8	13.6	(9.3)	(829.9)	-	背部つまみ作出、指頭痕多数、全面ナデ調整、底部植物繊維状の圧痕、脆弱、下部欠損	炉上面	P L 38・39
DP5	支脚	-	(12.5)	(7.3)	(12.1)	(529.3)	-	背部つまみ作出、指頭痕多数、全面ナデ調整、脆弱、下半部欠損	炉上面	P L 38
DP6	支脚	-	(7.7)	10.8	10.0	(527.7)	-	背部つまみ作出、全面ナデ調整、底部植物繊維状の圧痕、脆弱、上部欠損	床面	P L 39

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	8.3	4.3	4.3	183.8	凝灰岩	5面使用、線条痕多数、上部折損後再生	下層	P L 46

第22号住居跡 (第34図)

位置 調査区の中央部、H 3 h7区。標高13.1mの台地平坦部に位置する。

重複関係 北部は調査区域外に位置しているため、可能な限り調査区を拡張して規模と形状の確認に努めた。

しかし、大半が重複や削平され、遺存状況は極めて不良である。第5号溝、第4号掘立柱建物のP 1・2、第72・80号土坑のいずれにも掘り込まれ、南部の大半が削平されている。削平された南部では、しみ状に掘り方の痕跡を認めることができ、おおよその形状と規模を知ることができた。

規模と形状 推定される長軸4.07m、短軸3.77mの方形と考えられる。壁は高さ2～8cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-13°-Wである。

床 ほぼ平坦であるが、北東コーナー部付近がややくぼんでいる。炉の周囲は比較的踏み固められているが、明瞭な硬化面は見られない。

ピット 確認されなかった。

炉 床面を7cm程度掘りくぼめた地床炉で、中央部の北寄りに位置している。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。覆土は2層からなる。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化物微量 2 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

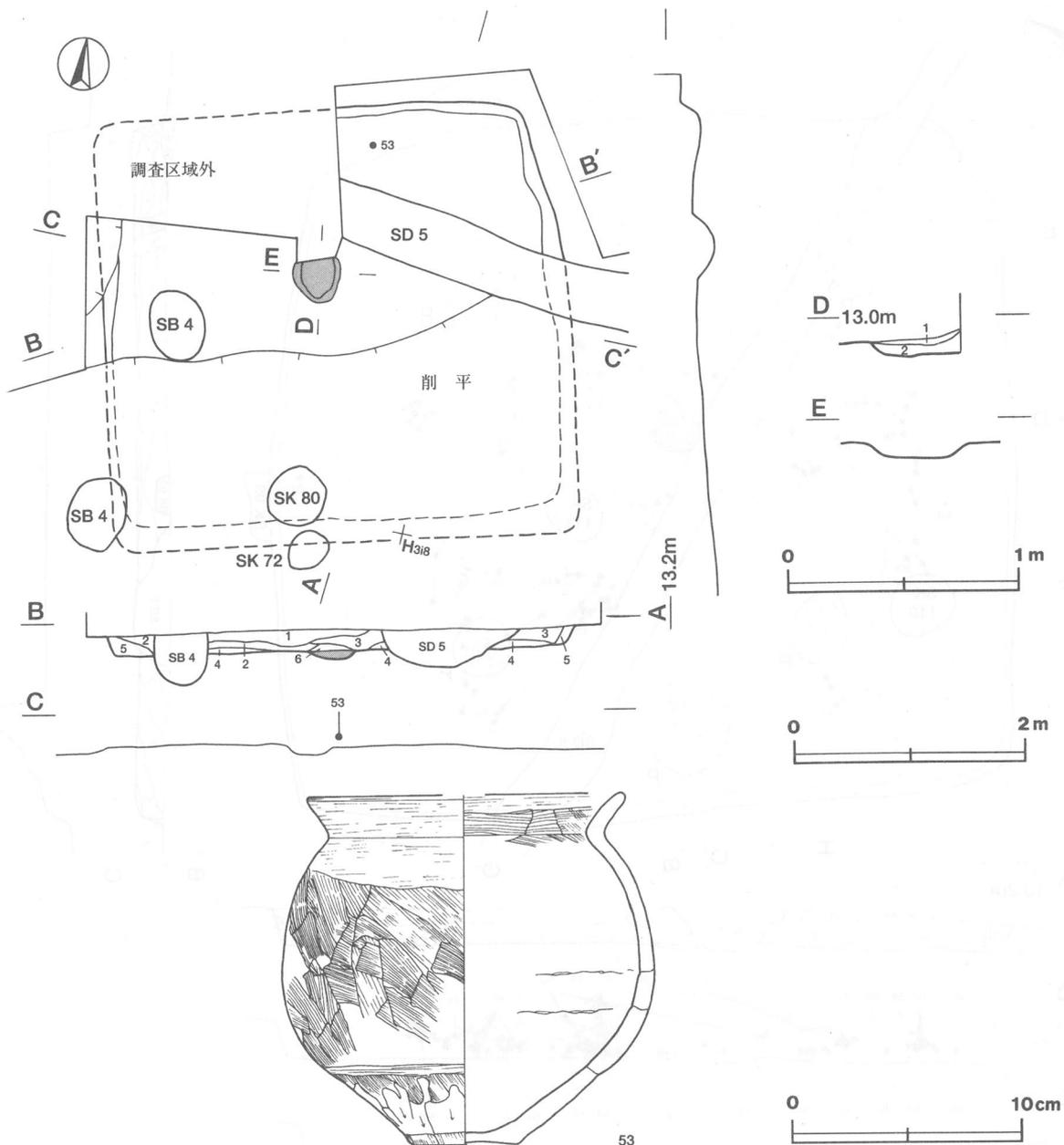
覆土 6層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 4 にぶい黄褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量 5 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
3 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量 6 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片33点（高坏2，甕31）が、覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。また、混入した縄文土器片1点、弥生土器片1点が出土している。

所見 時期は、極めて遺存状況が悪く出土土器も少ないが、前期（4世紀後半）と考えられる。



第34図 第22号住居跡・出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表 (第34図)

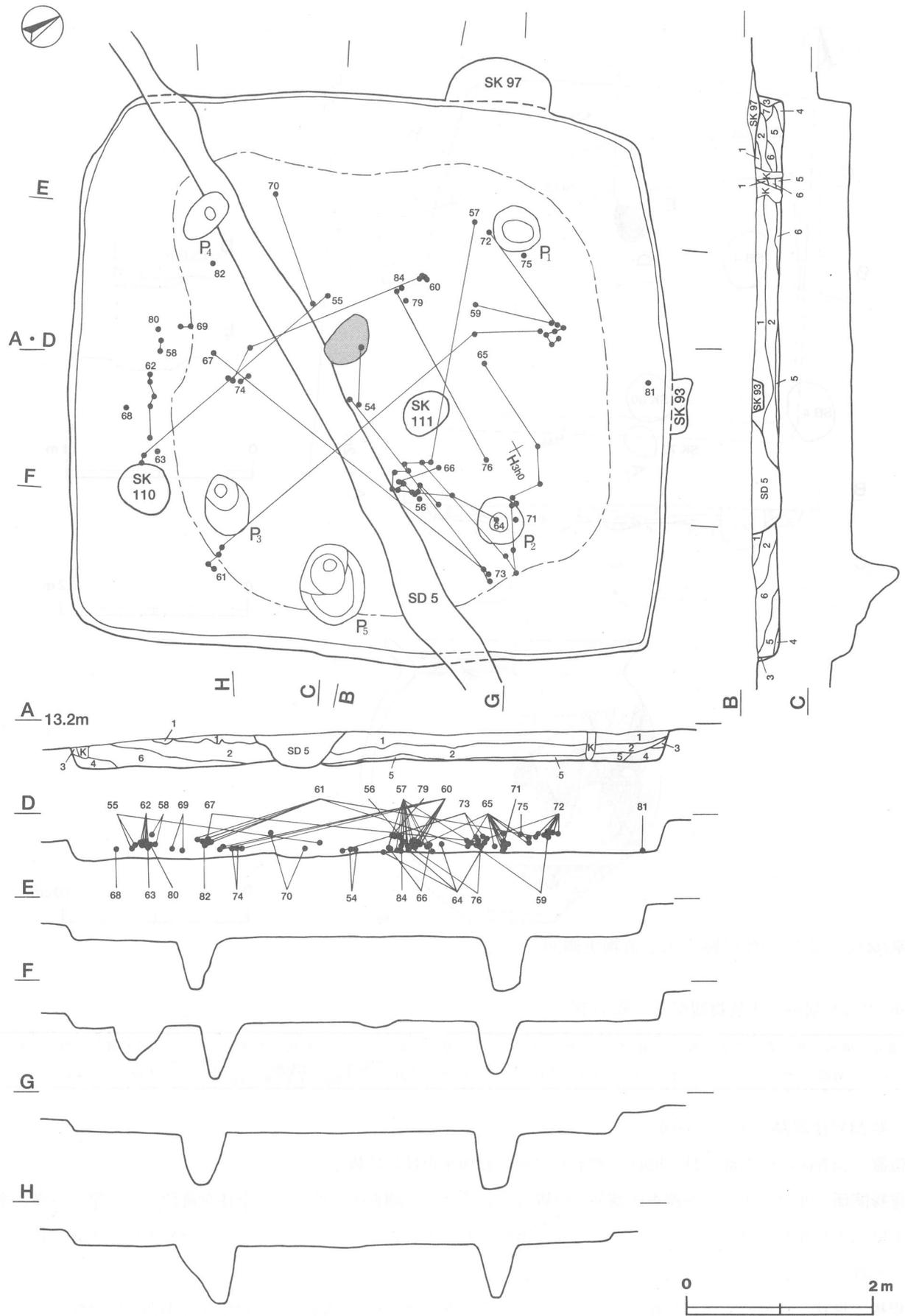
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
53	土師器	甕	[13.8]	15.2	4.5	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 体部下端ヘラ削り	下層	60% P L 35

第23号住居跡 (第35~39図)

位置 調査区の中央部, H 3 h9区。標高13.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 北コーナー部が調査区域外に位置しているため, 調査区を拡張して全体を確認した。第5号溝に南東壁の中央部から西コーナー部にかけてを, 第93・97号土坑に壁の上部を, 第110・111号土坑に床面に達するまで掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.52m, 短軸6.07mの方形である。壁は高さ15~33cmで, 南東壁及び南西壁は外傾して立ち上がり, 北東壁及び北西壁は直立している。主軸方向はN-60°-Wである。



第35图 第23号住居跡实测图

床 ほぼ平坦である。壁際は軟弱で、支柱穴と考えられるP 1～4の内側を中心によく踏み固められている。特に炉の周囲は硬化している。

ピット 5か所。P 1～4は配置から支柱穴と考えられる。深さは66～76cmである。P 5は位置や掘り方の形状から出入口施設に関係するピットと考えられる。深さは59cmである。

炉 地床炉で中央部に位置している。床面と同じ高さで赤変硬化した火床面が露呈している。

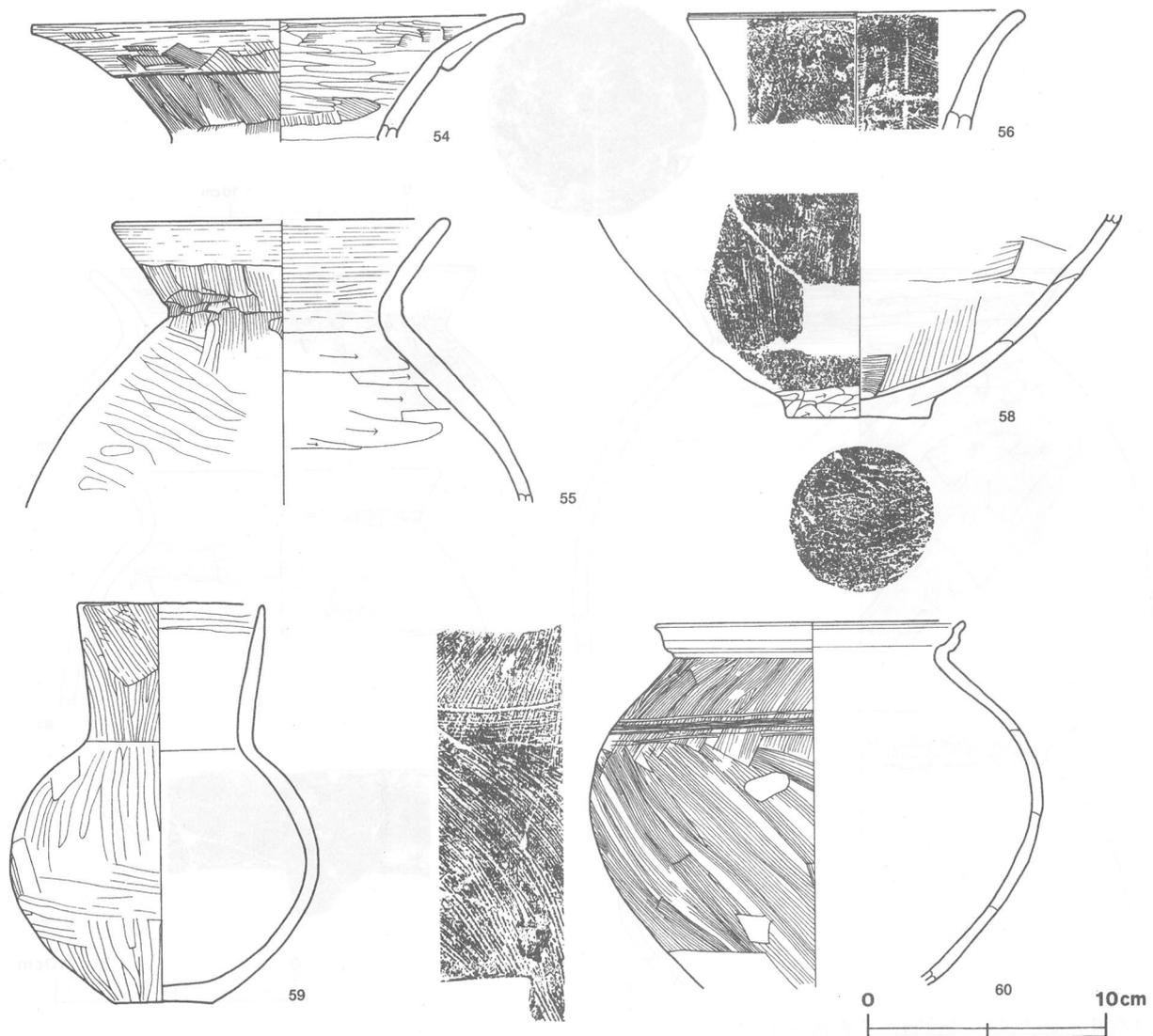
覆土 7層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

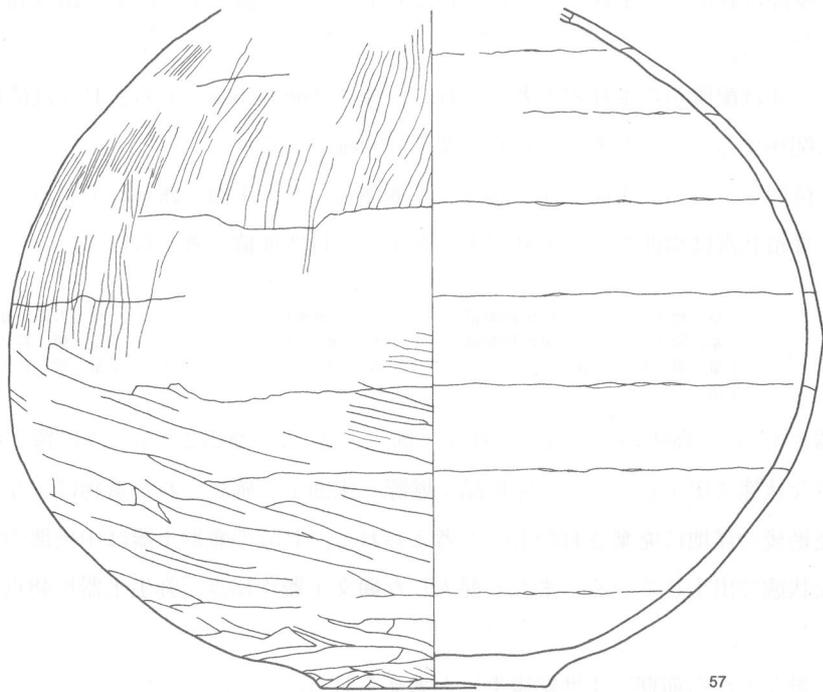
- | | | | |
|----------|-------------------------|----------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化物微量 |
| 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片370点(高坏19, 器台4, 鉢1, 甑1, 壺123, 甕222)が、主に覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。完形品や壁際・床面上で確認された遺物は少なく、大半の遺物は破片で、本住居の廃絶後の窪地に廃棄されたものと考えられる。P57の壺形土器は中央部の床面12cm上位から、破碎されたような状態で出土している。また、混入した縄文土器片13点, 弥生土器片48点, 剥片3点が出土している。

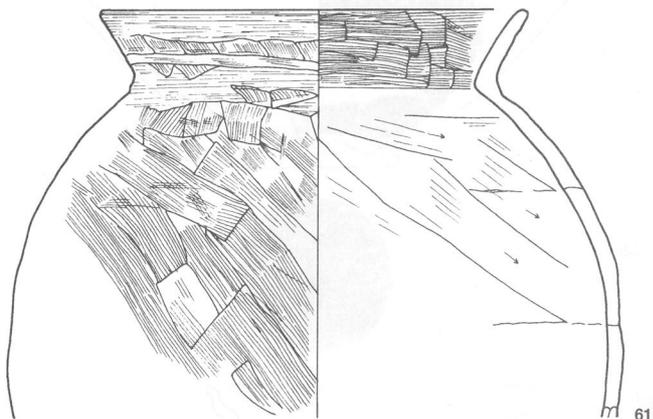
所見 時期は、出土土器などから前期(4世紀後半)と考えられる。



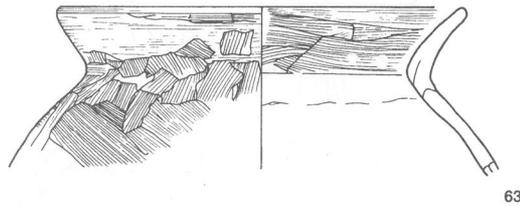
第36図 第23号住居跡出土遺物実測図(1)



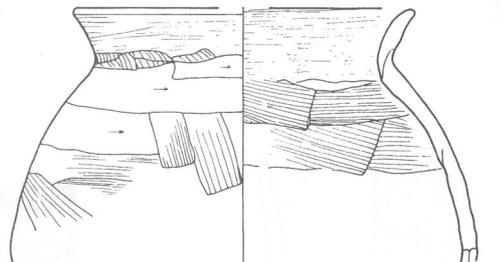
57



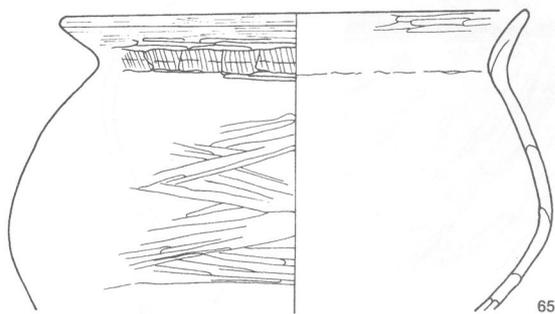
61



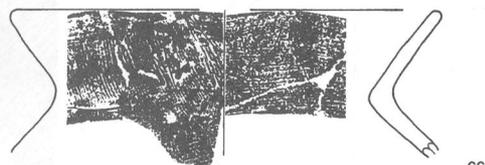
63



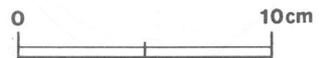
64



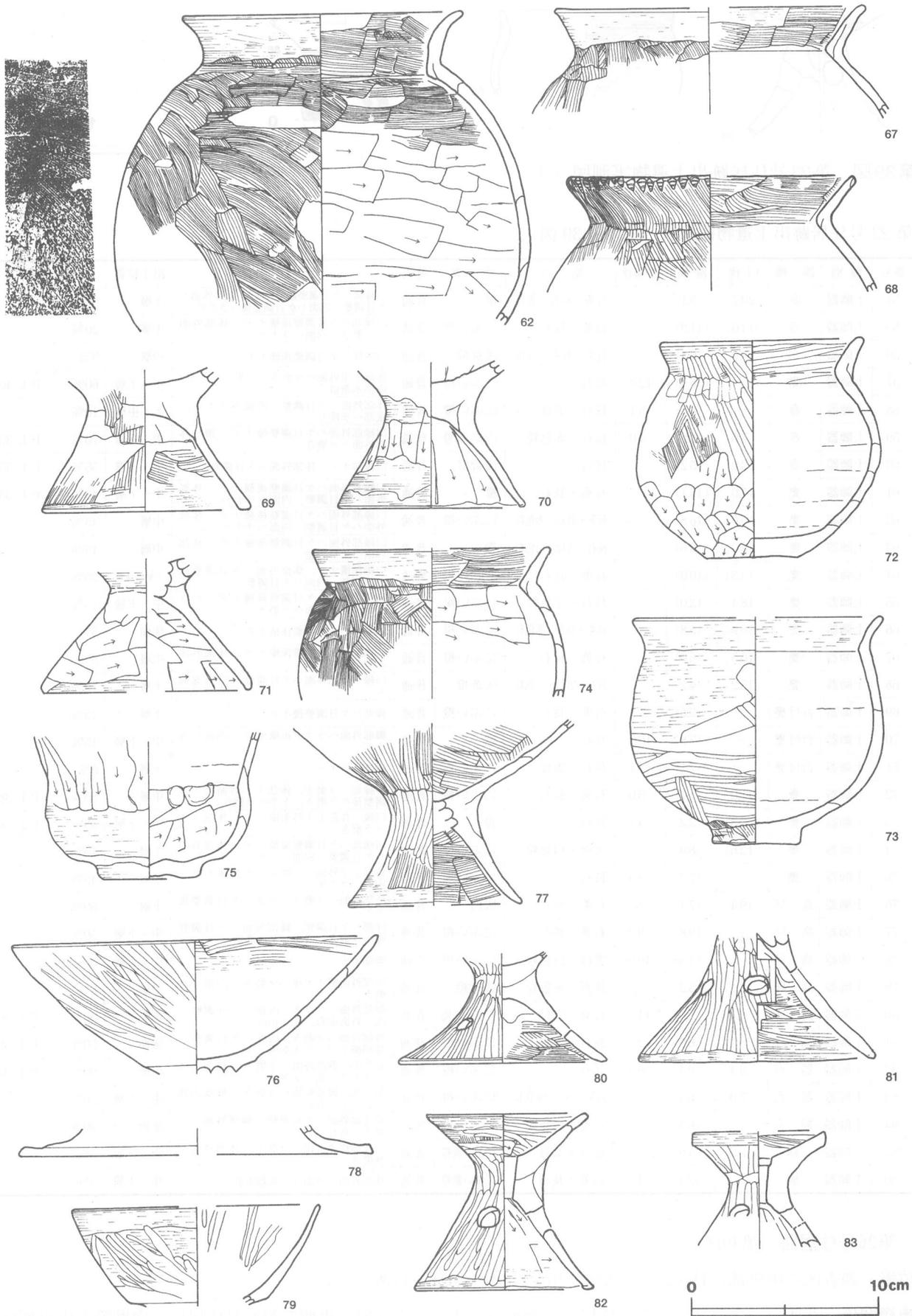
65



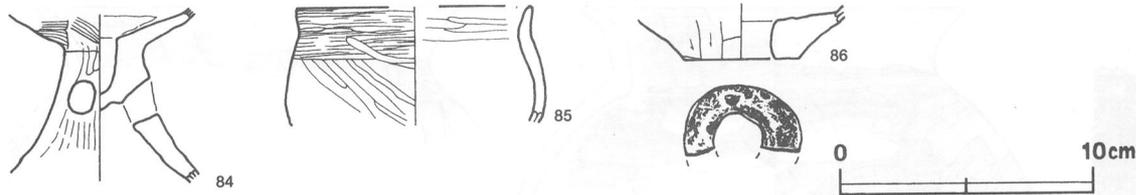
66



第37图 第23号住居跡出土遺物実測図(2)



第38图 第23号住居跡出土遺物実測図(3)



第39図 第23号住居跡出土遺物実測図(4)

第23号住居跡出土遺物観察表(第36~39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
54	土師器	壺	20.7	(5.1)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 頸部外面ハケ目調整, 内面ハケ目調整後ヘラナデ	下層	5%
55	土師器	壺	[14.0]	(11.9)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ヘラ磨き, 内面ヘラナデ	中層	20%
56	土師器	壺	14.0	(6.3)	-	石英・長石・雲母	浅黄橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ	中層	5%
57	土師器	甕	-	(36.3)	12.0	長石	にぶい橙	普通	体部上半外面ヘラ磨き, 下半ヘラナデ, 底部木葉痕	中~下層	60% P L 40
58	土師器	壺	-	(8.5)	6.1	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ, 底部ヘラ削り	上~中層	10%
59	土師器	壺	7.6	16.8	4.0	長石・赤色粒	にぶい黄橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ, 頸~体部外面ヘラ磨き	中~下層	70% P L 35
60	土師器	壺	13.0	(15.2)	-	長石	浅黄橙	普通	口縁部ナデ, 体部外面ハケ目調整	中~下層	50% P L 35
61	土師器	甕	17.0	(16.1)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ	中~下層	45% P L 35
62	土師器	甕	[15.0]	(16.8)	-	石英・長石・赤色粒	にぶい橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ	中層	45%
63	土師器	甕	16.0	(6.6)	-	長石・雲母・白色粒	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整	中層	15%
64	土師器	甕	[13.3]	(10.0)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ハケ目調整後ヘラ削り, 内面ハケ目調整	下層~床面	20%
65	土師器	甕	18.4	(12.0)	-	長石・赤色粒	にぶい褐	普通	口縁部外面ハケ目調整後横ナデ, ヘラ磨き, 体部外面ヘラ磨き	中~下層	15%
66	土師器	甕	[16.9]	(5.8)	-	石英・長石・赤色粒	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ	床面	5%
67	土師器	甕	[16.5]	(6.0)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整	中層	5%
68	土師器	甕	[15.2]	(6.2)	-	長石・雲母・白色粒	灰黄橙	普通	口縁~体部外面ハケ目調整, 口唇部刻み	下層	10%
69	土師器	台付甕	-	(7.6)	11.1	石英・長石	にぶい橙	普通	脚部ハケ目調整後ナデ	下層	15%
70	土師器	台付甕	-	(7.8)	10.1	長石	橙	普通	脚部外面ヘラナデ後横ナデ, 内面ヘラナデ	中~下層	15%
71	土師器	台付甕	-	(7.1)	[11.1]	長石・雲母	にぶい褐	普通	脚部ヘラナデ	下層	5%
72	土師器	甕	11.0	11.7	5.0	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部ヘラ磨き, 体部上半外面ハケ目調整後ヘラ磨き, 下半ヘラ削り	中層	55% P L 36
73	土師器	甕	[13.5]	12.2	4.7	長石	橙	普通	口縁~体部上半外面横ナデ, 体部下半ヘラ磨き	中~下層	65% P L 36
74	土師器	甕	[12.6]	(8.0)	-	雲母・白色粒	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ	下層	15%
75	土師器	甕	-	(7.7)	5.3	長石	にぶい褐	普通	体部上半外面ヘラ削り, 下半横ナデ, 内面ヘラナデ	中層	45%
76	土師器	高坏	19.4	(7.1)	-	石英・長石	灰白	普通	坏部外面ヘラ磨き, 内面ハケ目調整後ナデ	下層	50%
77	土師器	高坏	-	(9.8)	[9.2]	石英・長石	にぶい橙	普通	坏部ハケ目調整, 脚部外面ハケ目調整後ヘラ磨き, 内面ハケ目調整	中~下層	50%
78	土師器	高坏	-	(1.5)	[19.0]	雲母・白色粒	にぶい橙	普通	脚部ナデ	中~下層	5%
79	土師器	高坏	[13.1]	(5.2)	-	長石・赤色粒	浅黄橙	普通	坏部外面横ナデ後ヘラ磨き, 内面ヘラ磨き	中層	5%
80	土師器	高坏	-	(5.9)	11.2	石英・雲母	にぶい赤褐	普通	脚部外面ヘラ磨き, 内面ハケ目調整, 内・外面赤彩, 孔3か所	中層	50% P L 30
81	土師器	高坏	-	(6.8)	12.7	長石・雲母	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ磨き, 内面ハケ目調整, 端部横ナデ, 孔4か所	床面	50% P L 30
82	土師器	器台	8.4	9.4	9.4	長石	にぶい橙	普通	器受部~脚部外面ヘラ磨き, 脚部内面ヘラナデ, 有孔	中層	90% P L 30
83	土師器	器台	[7.0]	(6.2)	-	石英・長石・赤色粒	にぶい橙	普通	器受部~脚部外面ヘラ磨き, 脚部内面ヘラナデ, 有孔	中~下層	20%
84	土師器	器台	-	(6.5)	-	石英・赤色粒	にぶい橙	普通	器受部外面ハケ目調整, 脚部外面ヘラ磨き, 有孔	床面	30%
85	土師器	鉢	[9.3]	(4.6)	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ後ヘラ磨き, 体部外面ヘラ磨き	中~下層	5%
86	土師器	甗	-	(2.1)	4.6	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り, 底部有孔	中~下層	5%

第26号住居跡(第40図)

位置 調査区の中央部, H 4 g4区。標高13mの台地平坦部に位置している。

重複関係 北西コーナー部を第25号住居に, 南東コーナーから南壁の東側を第27号住居に, 南壁際の中央部付近を第169号土坑に掘り込まれ, 南西コーナー部は削平されている。

規模と形状 長軸5.15m, 推定される短軸4.01mの長方形と考えられる。壁は高さ5~12cmで, 外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-72°-Wである。

床 ほぼ平坦である。壁際周辺は軟弱で, 支柱穴と考えられるP1~4の内側を中心に踏み固められている。

ピット 5か所。P1~4は配置から支柱穴と考えられる。深さはP4が最も浅く22cm, その他は42~51cmである。P5は位置から出入り口施設に関するピットと考えられる。深さは24cmである。

炉 床面を8cm程度掘りくぼめた地床炉と推定される。中央部の北寄り, P1とP4を結んだほぼ線上に位置し, P1側にやや偏っている。焼土層や火床部は確認できなかったが, 位置, 規模と形状から地床炉と判断した。覆土は単一層で, 焼土層や火床部は掻き出されたと考えられる。

炉土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量

覆土 3層からなる。層厚は12cmと薄い, 堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し, 自然堆積と考えられる。

土層解説

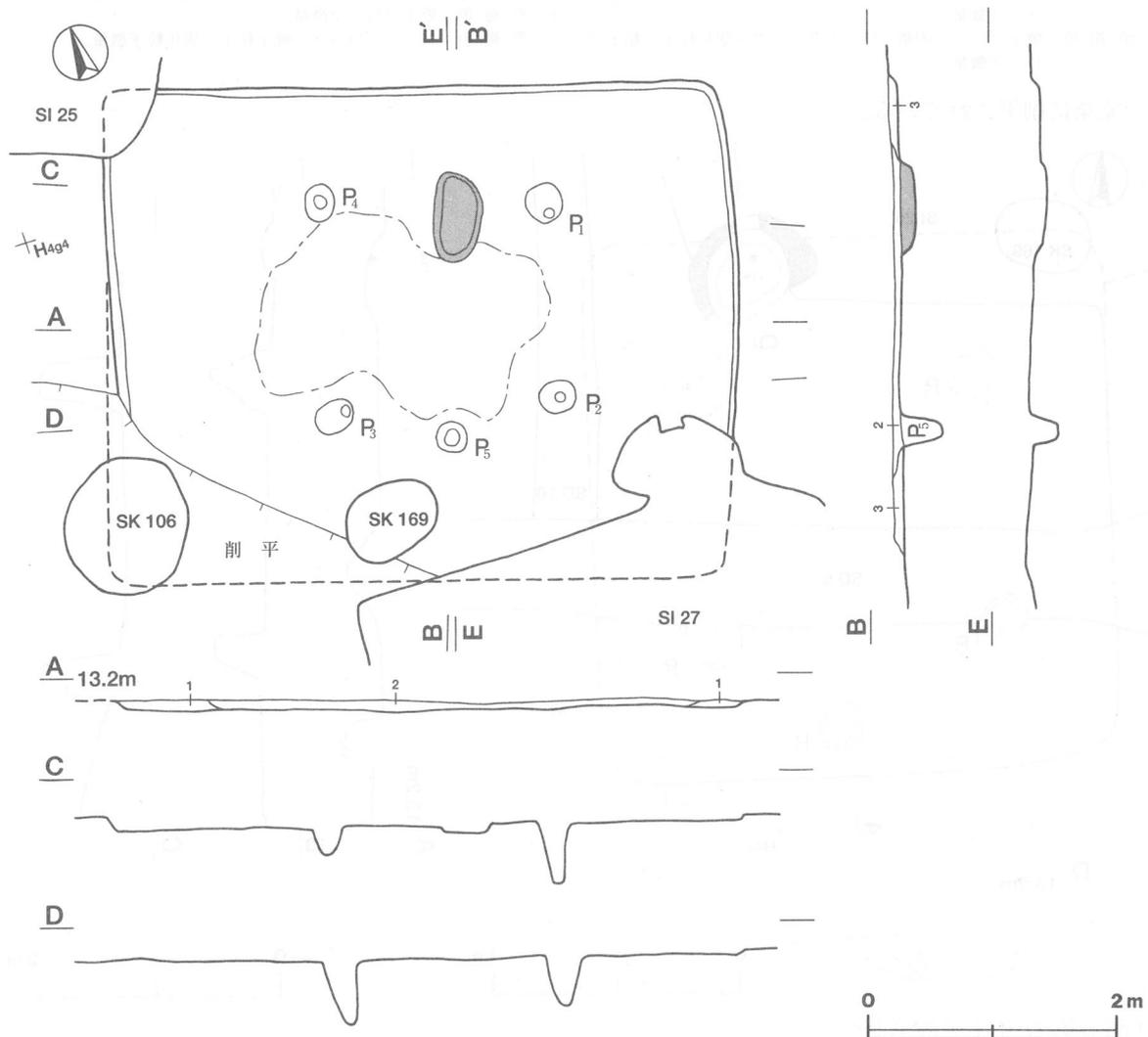
1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量

2 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片6点(甕)が, 主に覆土下層からまばらに出土している。また, 混入した縄文土器片9点, 弥生土器片5点が出土している。

所見 時期は, 出土した土器が小破片のため図示できないが, 前期と考えられる。



第40図 第26号住居跡実測図

第27号住居跡 (第41・42図)

位置 調査区の中央部, H 4 h4区。標高13mの台地平坦部に位置している。

重複関係 北部で第26号住居跡を掘り込んでいる。東壁の中央部から西壁の中央部を第5号溝に, 東壁を第10号溝に掘り込まれている。全体的に壁及び床面は削平され, 5か所のピットと竈の一部を確認しただけである。また, しみ状に掘り方の痕跡を認めることができ, おおよその形状と規模を知ることができた。

規模と形状 推定される長軸4.37m, 短軸4.22mの方形と考えられる。壁は完全に削平されている。竈は北壁の中央部東側に設けられている。主軸方向はN-5°-Eである。

床 完全に削平されている。掘り方の覆土はなく, しみ状の痕跡が確認されたにすぎない。

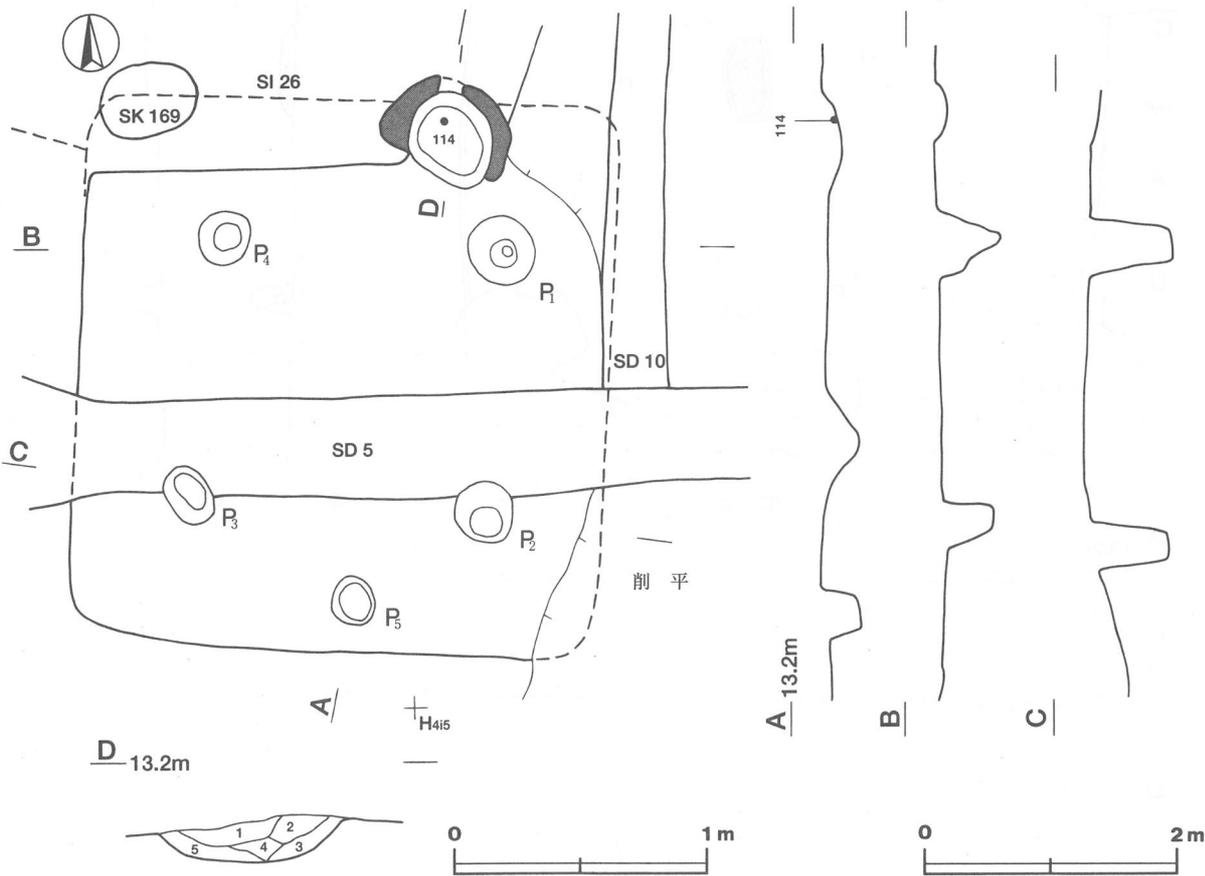
ピット 5か所。P1~4は配置から支柱穴と考えられる。確認面からの深さは42~66cmである。P5は南壁寄りの中央部, はぼ竈に対峙して位置しているため, 出入口施設に関するピットと考えられる。深さ28cmである。柱痕はP1で確認された。

竈 北壁の中央部東側に設けられている。全体的に削平を受け, 遺存状況は不良である。袖部は確認できなかったが, 確認面で砂質粘土ブロックの範囲が馬蹄形に認められ, 袖の基底部付近の残存と考えられる。燃焼部は長軸80cm, 短軸64cmの楕円形を呈し, 確認面からの深さは19cmで皿状にくぼんでいる。覆土中には赤変した硬化面や焼土層は確認できず, 掻き出されたような状態である。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量 | 3 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量 | 4 黒褐色 焼土ブロック微量 |
| | 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |

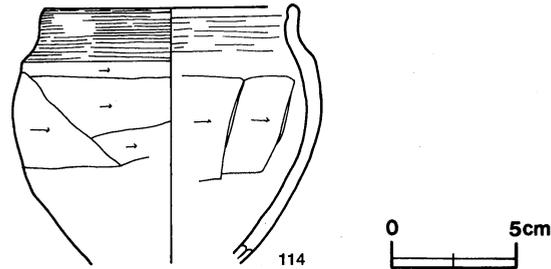
覆土 完全に削平されている。



第41図 第27号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片14点（甕）が、竈の覆土中から出土している。また、混入した弥生土器片1点、古墳時代前期の土師器片6点が出土している。

所見 出土遺物が少なく、時期を決定することは困難であるが、竈の覆土中から出土した114は後期（7世紀後葉）と考えられる。



第42図 第27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡出土遺物観察表（第42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
114	土師器	甕	9.8	(10.1)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	竈底面	85% P L 36

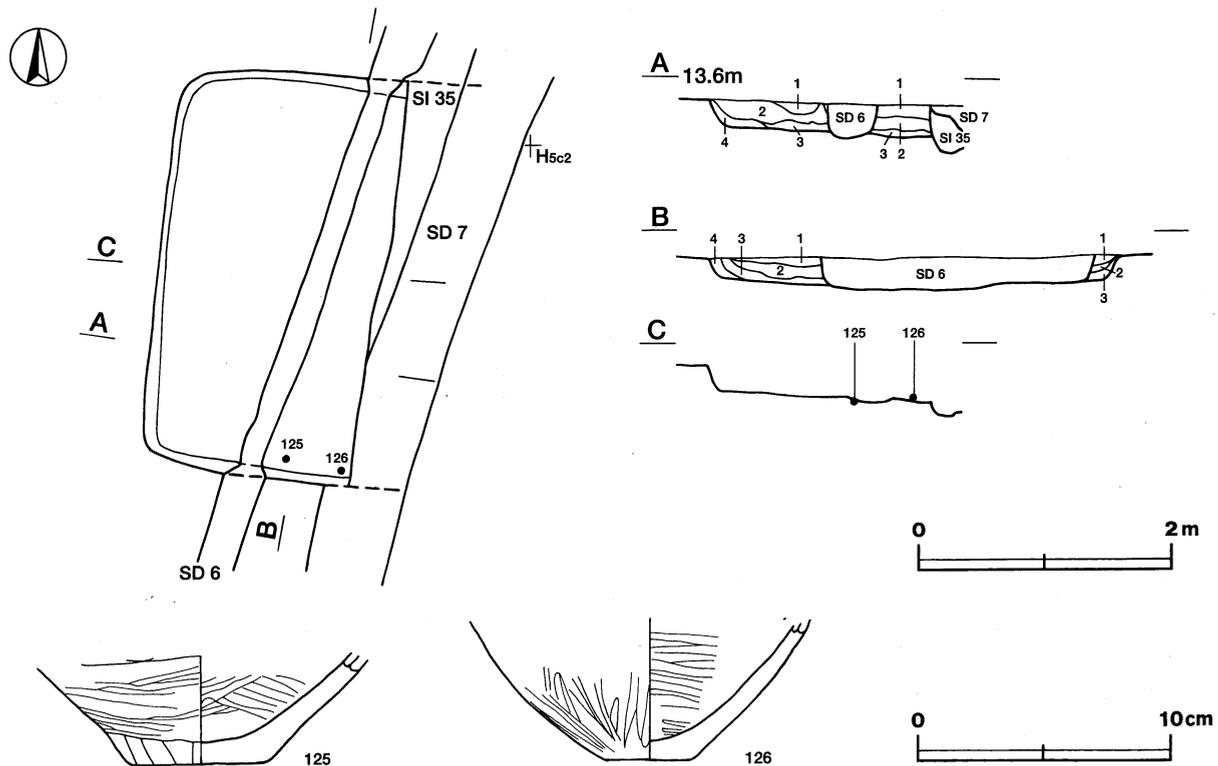
第34号住居跡（第43図）

位置 調査区の北東部、H5c1区。標高13.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 東部を第35号住居及び第6・7号溝に掘り込まれている。

規模と形状 確認した長軸3.22m、短軸1.8mで長方形ないし方形と推定される。壁は高さ16~20cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-5°-Eである。

床 はほぼ平坦で全体的に軟弱である。



第43図 第34号住居跡・出土遺物実測図

ピット 確認した範囲には認められない。

炉・竈 確認した範囲には認められない。

覆土 4層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 焼土粒子少量, ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 にぶい黄赤褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片9点(鉢1, 壺2, 甕6)が, 主に覆土下層からまばらに出土している。また, 混入した縄文土器片12点が出土している。

所見 時期は, 極めて遺存状況が悪く出土土器も少ないが, 前期(4世紀後半)と考えられる。

第34号住居跡出土遺物観察表(第43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
125	土師器	壺	-	(4.3)	5.2	石英・長石	橙	普通	体部外面へラ磨き, 下端へラ削り, 内面へラ磨き	床面	10%
126	土師器	鉢	-	(5.6)	3.3	石英・長石・雲母	橙	普通	体部へラ磨き	床面	10%

第36号住居跡(第44~46図)

位置 調査区の北東部, H5a3区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 西壁の北側を第7号溝に掘り込まれ, 南壁の東側を攪乱されているが, 遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸6.55m, 短軸6.5mの方形である。壁は高さ15~25cmで直立している。壁溝は南壁の東側を除いてほぼ全周し, 深さは4~28cmである。北壁側は浅く, 東壁及び西壁側が深く掘り込まれている。断面形状はU字状を呈している。主軸方向はN-23°-Wである。

床 ほぼ平坦である。壁際及び炉の周囲は軟弱で, 支柱穴と考えられるP1~4と出入り口施設に関係すると考えられるP5の内側は踏み固められている。

ピット 9か所。P1~4は配置から支柱穴と考えられる。深さはP1が47cm, P2が28cm, P3が35cm, P4が60cmで, 北側の柱穴が深く掘り込まれている。P5は位置から出入り口施設に関係するピットと考えられ, 深さは24cmである。P6・7は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。深さはP6が36cm, P7が54cmである。その他のピットは性格不明である。

P6土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子微量

P7土層解説

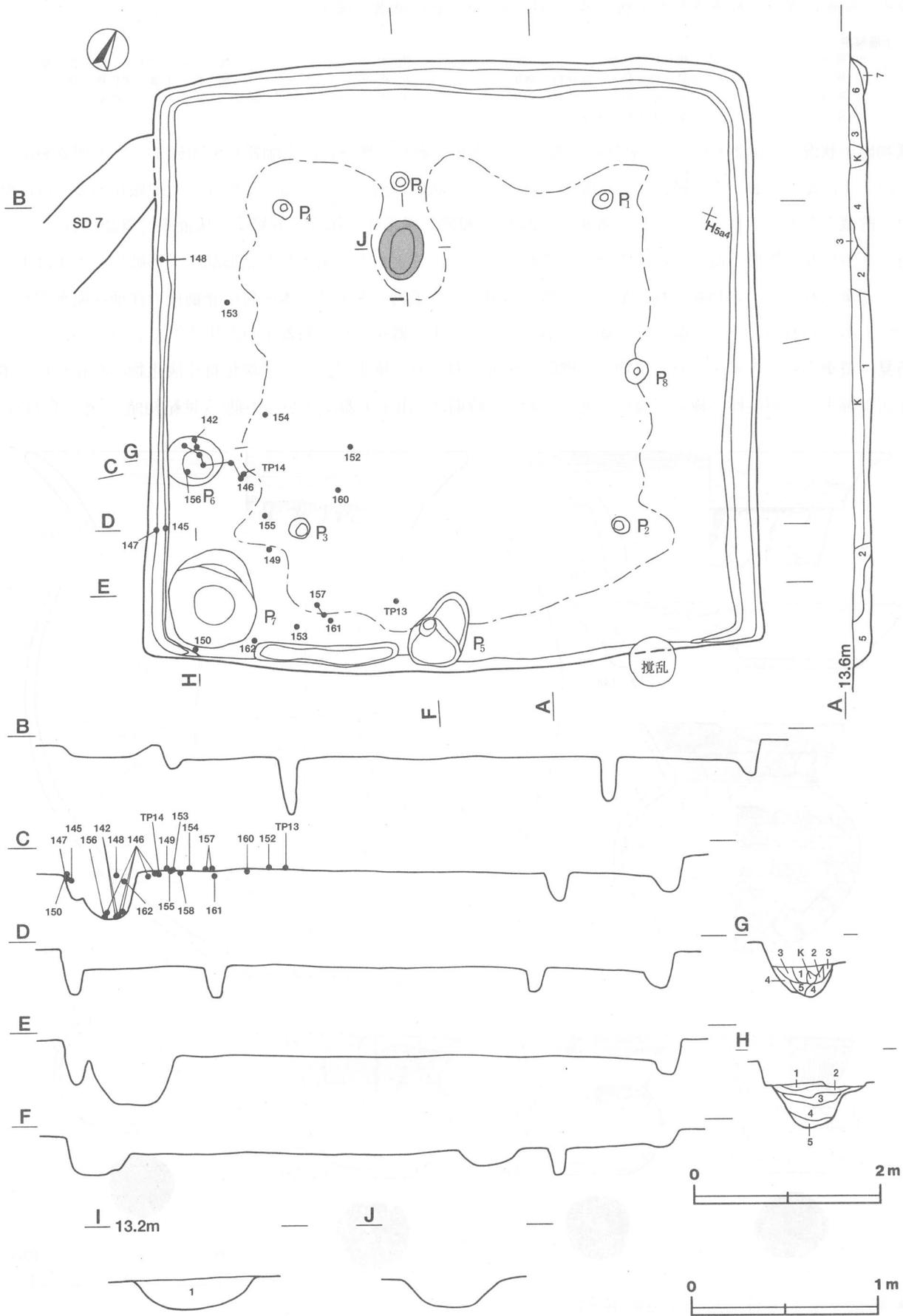
- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 炭化物少量, ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量

炉 床面を17cm程度掘りくぼめた地床炉と推定される。中央部の北西寄り, P1とP4を結んだ線よりも南側に位置し, P4側にやや偏っている。焼土層や火床部は確認できなかったが, 位置, 規模と形状から地床炉と判断した。覆土は単一層で, 焼土層や火床部は掻き出されたと考えられる。

炉土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 7層からなる。第1~4層の堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し, 自然堆積と考えられる。壁際中心に堆積している第5・6層は, 焼土ブロック, 炭化材や炭化物が比較的多く含まれているため, 本住居の



第44图 第36号住居跡実測图

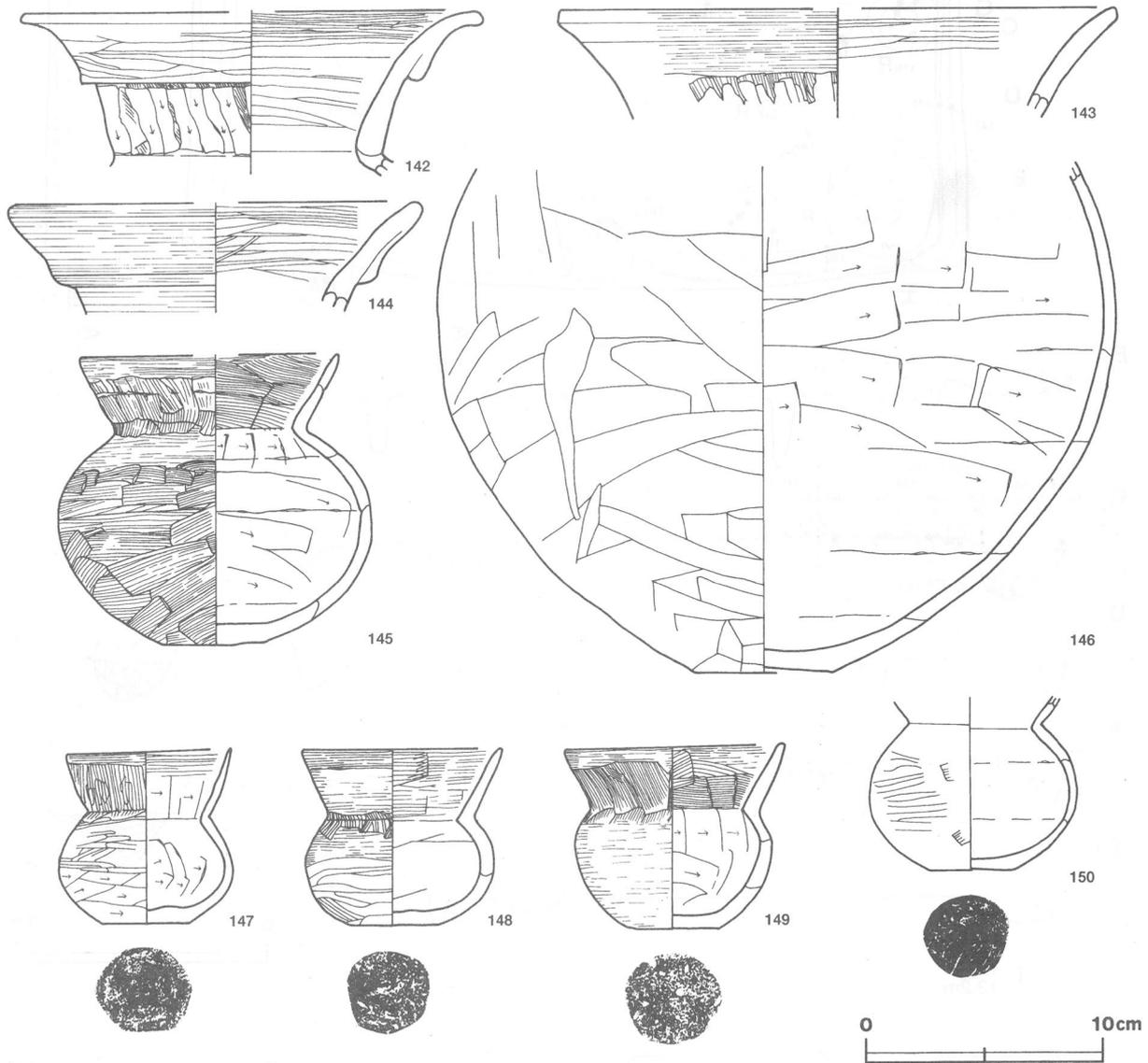
焼失や廃絶に伴って形成された土層と考えられる。第7層は壁溝の覆土である。

土層解説

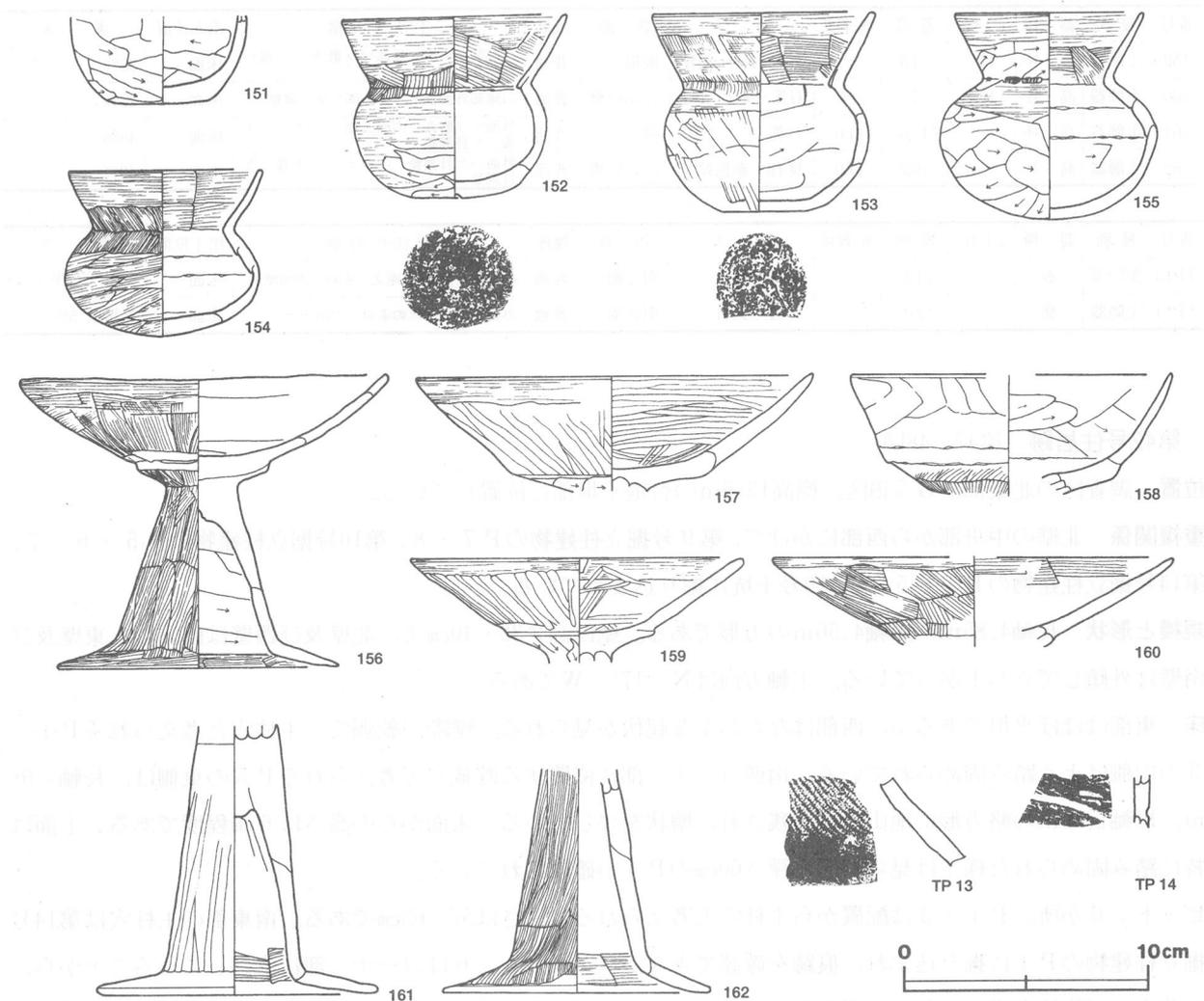
- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化物少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子中量, 炭化物少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック微量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片371点(高坏43, 器台4, 埴20, 壺23, 甕281), 土師器片転用砥1点, 不明鉄製品1点, 主に覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。完形品や大形破片の多くは, 壁際や貯蔵穴と考えられるP6・7の周囲から出土し, 壁際に堆積する第5・6層中や床面上で確認されている。特に9点に及ぶ埴形土器の一括出土は注目される。以上のことから, 出土した完形品や大形破片の大半は本住居に遺棄されたものと判断され, 第1~4層から出土した遺物の大半は, 本住居の廃絶後の窪地に廃棄されたものと考えられる。また, 混入した縄文土器片93点, 弥生土器片1点, 石器1点が出土している。

所見 遺棄されたと考えられる遺物や, 壁際や床面に見られる焼土ブロック, 炭化材や炭化物の存在から, 本住居は焼失した可能性が極めて高いと考えられる。時期は, 出土土器などから中期(5世紀初頭)と考えられる。



第45図 第36号住居跡出土遺物実測図(1)



第46図 第36号住居跡出土遺物実測図(2)

第36号住居跡出土遺物観察表(第45・46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
142	土師器	壺	19.3	(7.0)	-	長石・雲母・赤色粒	にぶい橙	普通	折り返し口縁部ヘラ磨き, 頸部ハケ目調整後ヘラナデ	P6	15%
143	土師器	壺	[23.4]	(4.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ, 頸部外面ハケ目調整後ヘラナデ, 内面ヘラ磨き	床面	5%
144	土師器	壺	[17.6]	(4.6)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	口縁~頸部外面横ナデ, 内面ヘラ磨き	床面	5%
145	土師器	壺	[10.8]	12.2	4.2	長石・雲母・赤色粒	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 頸~体部外面・口縁部内面ハケ目調整, 体部内面ヘラナデ	壁溝	95% P L 36
146	土師器	甕	-	(21.5)	5.7	長石・雲母・赤色粒	にぶい赤褐	普通	体部ヘラナデ	P6	40% P L 37
147	土師器	埴	6.9	7.3	3.7	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	頸~体部外面上半ヘラ磨き, 下半ヘラ削り, 内面ヘラナデ	壁溝	98% P L 30
148	土師器	埴	8.3	7.5	3.7	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ヘラ磨き, 内面ヘラナデ	壁溝	90% P L 30
149	土師器	埴	9.5	7.7	3.8	石英・長石	にぶい褐	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面横ナデ, 内面ヘラナデ	床面	90% P L 30
150	土師器	埴	-	(7.3)	3.4	長石・雲母・赤色粒	橙	普通	体部外面ハケ目調整後ヘラ磨き, 内面摩擦	床面	75%
151	土師器	埴	-	(3.6)	3.6	長石・雲母・赤色粒	橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	床面	45%
152	土師器	埴	9.1	7.5	3.5	長石・雲母・赤色粒	浅黄橙	普通	口縁~体部外面上半ハケ目調整後横ナデ, 下半ヘラ削り, 内面摩擦	床面	90% P L 31
153	土師器	埴	9.2	8.2	3.5	石英・長石	橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ, 体部外面ハケ目調整後ヘラナデ, 内面ヘラナデ	床面	80% P L 31
154	土師器	埴	7.8	6.9	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ, 内面ハケ目調整, 体部外面ハケ目調整, 内面摩擦	床面	90% P L 31
155	土師器	埴	7.8	8.4	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 口縁部内面ハケ目調整後横ナデ	床面	90% P L 31
156	土師器	高坏	15.1	11.9	11.6	長石・雲母	にぶい橙	普通	外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ	P6	90% P L 36
157	土師器	高坏	16.4	(5.6)	-	雲母・赤色粒	橙	普通	口縁部外面横ナデ, 体部ヘラ磨き	床面	40%
158	土師器	高坏	[13.1]	(4.9)	-	長石・赤色粒	にぶい橙	普通	外面ナデ, 下端ハケ目調整, 内面ヘラナデ	床面	45%

番号	種別	器種	口径	器高	底脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
159	土師器	高坏	13.7	(4.3)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	口縁部横ナデ、体部ヘラ磨き、下端ヘラ削り	床面	35%
160	土師器	高坏	[16.4]	(3.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ、体部ハケ目調整	床面	20%
161	土師器	高坏	-	(11.0)	11.6	石英	橙	普通	外面ヘラ磨き、内面上端ヘラナデ、下端ハケ目調整	床面	45%
162	土師器	高坏	-	(9.2)	11.0	長石・赤色粒	にぶい橙	普通	外面ハケ目調整、内面ナデ、下端ハケ目調整	床面	40%

番号	種別	器種	口径	器高	底脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP13	弥生土器	壺	-	(4.2)	-	石英・長石	明赤褐	普通	外面横位RL単節縄文、赤彩、内面摩滅	床面	5% P L 43
TP14	土師器	甕	-	(2.0)	-	石英・長石	明赤褐	普通	外面断面U字状の条痕、内面ナデ	床面	転用砥 5%

第42号住居跡 (第47・48図)

位置 調査区の北東部、G 5 j9区。標高13.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 北壁の中央部から西部にかけて、第9号掘立柱建物のP 7・8、第10号掘立柱建物のP 5・6・7、第14号掘立柱建物のP 1・5、第129号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.85m、短軸4.56mの方形である。壁は高さ32~40cmで、北壁及び西壁は直立し、東壁及び南壁は外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-17°-Wである。

床 東部はほぼ平坦であるが、西部はなだらかな起伏が見られる。壁際が軟弱で、支柱穴と考えられるP 1~3の内側はよく踏み固められている。南西コーナー部に位置する貯蔵穴と考えられるP 5の東側は、長軸1.08m、短軸1.03mの略方形に地山が掘り残され、壇状を呈している。床面からの高さは6cm程度である。上面は特に踏み固められた様子は見られず、深さ60cmのP 4が確認されている。

ピット 6か所。P 1~3は配置から支柱穴と考えられる。深さは57~63cmである。南東部の支柱穴は第14号掘立柱建物のP 1に掘り込まれ、痕跡を確認できなかった。P 5・6はコーナー部に位置していることから、貯蔵穴の可能性が考えられる。平面形及び深さは、P 5が略方形で22cm、P 6が楕円形で56cmである。P 4は地山を掘り残した壇状施設の南側中央部に位置し、出入口施設や隣接する貯蔵穴に関係するピットと推定される。深さは60cmである。

P 5 土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 3 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック多量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |

P 6 土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 3 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 4 黒褐色 | 焼土ブロック多量 |

炉 確認されなかった。

覆土 12層からなる。第1~6層の堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。壁際中心に堆積している第7~11層は、焼土ブロック、炭化材や炭化物が比較的多く含まれているため、本住居の焼失や廃絶に伴って形成された土層と考えられる。第12層は壁溝の覆土である。

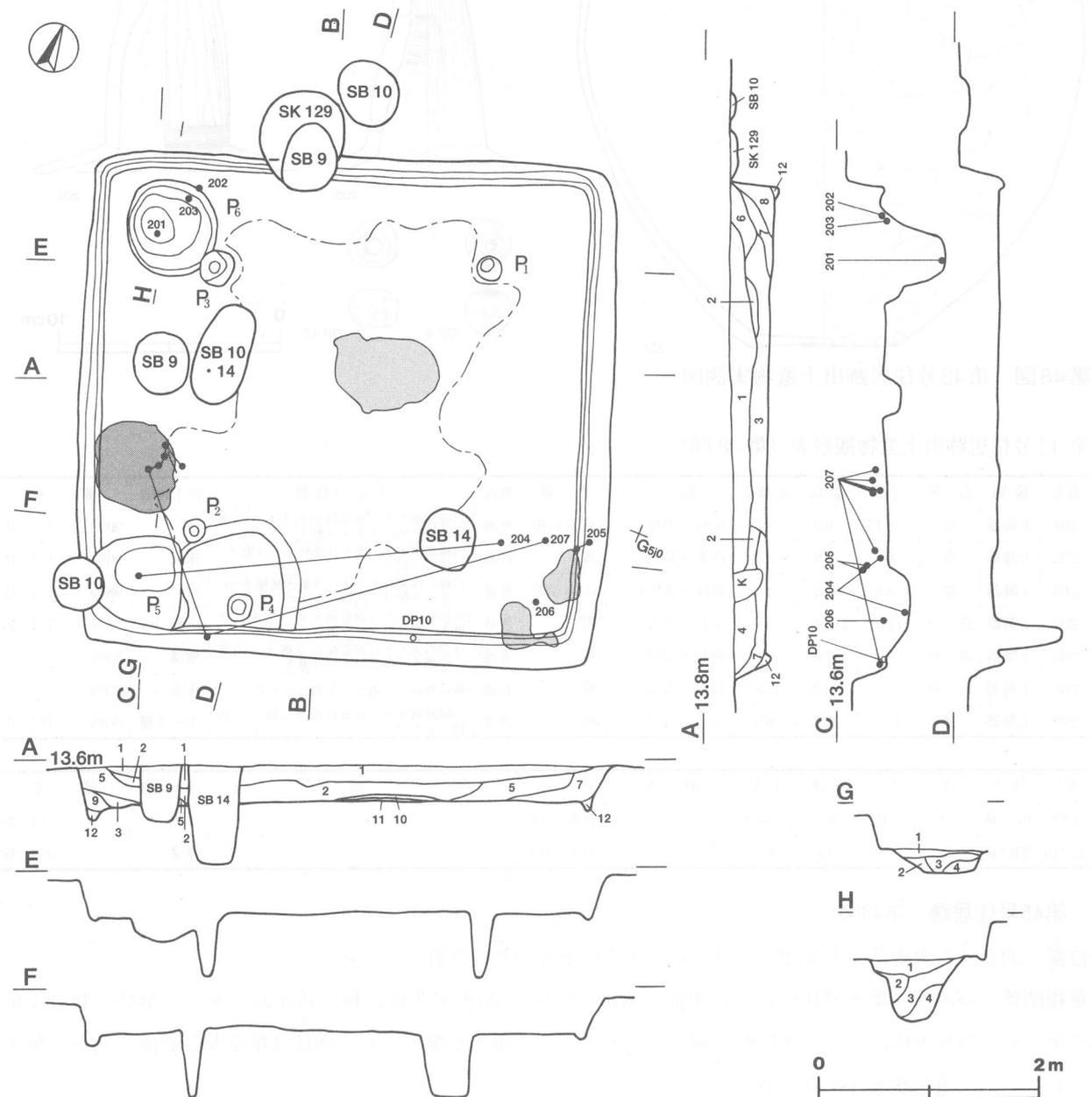
土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|--------|------------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 7 黒褐色 | 炭化物少量、ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・炭化物少量、焼土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 10 黒褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物少量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物微量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック微量 |

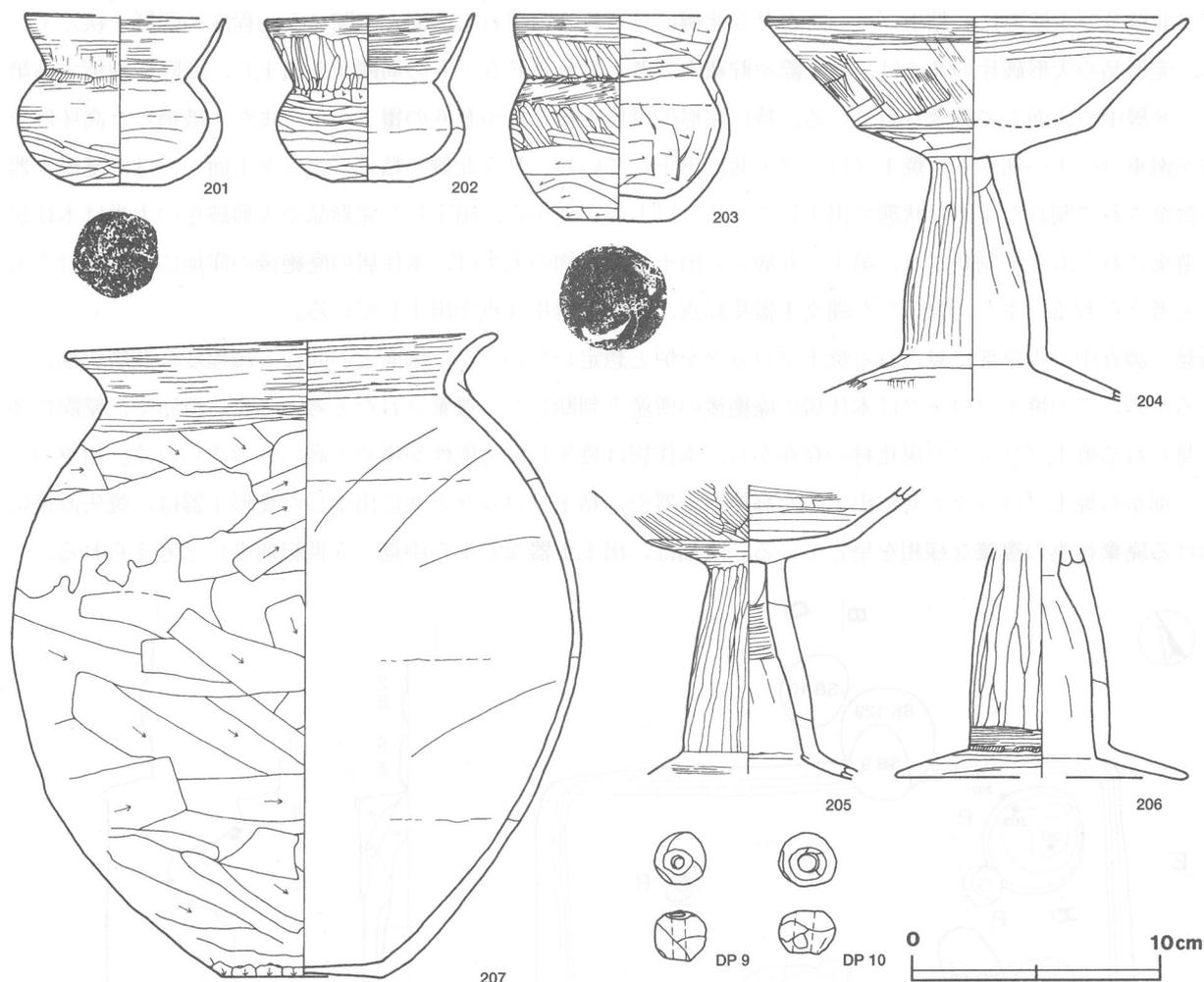
遺物出土状況 土師器片83点(高坏9, 埴7, 壺8, 甕59), 球状土錘2点が、主に覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。遺物の他に、焼土ブロックが南コーナー部と中央部に、大形の炭化

材が北壁及び東壁際に、粘土ブロックがP 5 北側に見られ、いずれも床面との間に 5 cm 程度の間層を挟んでいる。完形品や大形破片の多くは、南壁際や貯蔵穴と考えられる P 5・6 の周囲から出土し、壁際に堆積する第 7・8 層中や床面上で確認されている。特に完形の埴形土器 3 点が P 6 の覆土から、また、破損した高坏形土器が南東コーナー部から、焼土ブロックと共に出土している。P 5 北側の粘土ブロック上面からは、甕形土器が投棄されて割れたような状態で出土している。以上のことから、出土した完形品や大形破片の大半は本住居に遺棄されたものと判断され、第 1～6 層から出土した遺物の大半は、本住居の廃絶後の窪地に廃棄されたものと考えられる。また、混入した縄文土器片 15 点、弥生土器片 5 点が出土している。

所見 調査中、中央部に見られる焼土ブロックを炉と想定していたが、床面との間に 5 cm 程度の間層を挟んでいるため、この焼土ブロックは本住居の廃絶後の所産と判断した。遺棄されたと考えられる遺物や、壁際に多く見られる焼土ブロックや炭化材の存在から、本住居は焼失した可能性が極めて高いと考えられる。南東コーナー部から焼土ブロックと共に出土した高坏形土器や、粘土ブロックと共に出土した甕形土器は、焼失直後における廃棄行為の複雑な様相を呈している。時期は、出土土器などから中期（5 世紀前半）と考えられる。



第47図 第42号住居跡実測図



第48図 第42号住居跡出土遺物実測図

第42号住居跡出土遺物観察表 (第48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
201	土師器	埴	[8.1]	6.9	3.7	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面上半ハケ目調整後横ナデ, 下半ヘラ磨き	P6	90% P L 31
202	土師器	埴	8.6	6.8	3.4	石英・長石	橙	普通	口縁部横ナデ, 頸~体部外面ヘラ磨き, 肩部ヘラ削り	床面	90% P L 31
203	土師器	埴	8.8	8.2	4.3	雲母・赤色粒	にぶい黄橙	普通	口縁~体部外面上半ヘラ磨き後横ナデ, 下半ヘラ削り, 内面ヘラナデ	P6	98% P L 31
204	土師器	高 坏	17.0	(15.4)	-	長石・雲母	橙	普通	坏部外面ハケ目調整後ナデ, 内面ヘラ磨き, 脚部外面ヘラ磨き	下層・P5	95% P L 36
205	土師器	高 坏	-	(11.6)	-	長石・雲母	橙	普通	坏部外面ハケ目調整後ヘラ磨き, 内面ヘラ磨き, 脚部外面ヘラ磨き	壁溝	55%
206	土師器	高 坏	-	(9.2)	[11.8]	長石・雲母	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き, 内面ヘラナデ	床面	20%
207	土師器	甕	17.2	26.0	6.5	長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	中~下層	95% P L 37

番号	種別	径	長さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP9	球状土錘	2.1	2.0	0.4	9.1	-	球体, 外面ナデ	下層	P L 39
DP10	球状土錘	2.4	1.8	0.8	8.5	-	球体, 外面ナデ	壁溝	P L 39

第45号住居跡 (第49図)

位置 調査区の南東部, I 2 e9区。標高12.9mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 南西部を第8号住居に, 南東部を第10号住居・第107号土坑に掘り込まれ, また, 第45~48号土坑や第173・174号土坑によって部分的に掘り込まれている。覆土も削平され, 南部は攪乱及び斜面で完全に削平されている。遺存状況は不良である。

規模と形状 確認した長軸5.1m, 短軸5.04mで長方形ないし方形と推定される。南壁は削平されている。確認した壁は高さ2~4cmと低く, 壁の立ち上がりは不明である。主軸方向はN-69°-Eである。

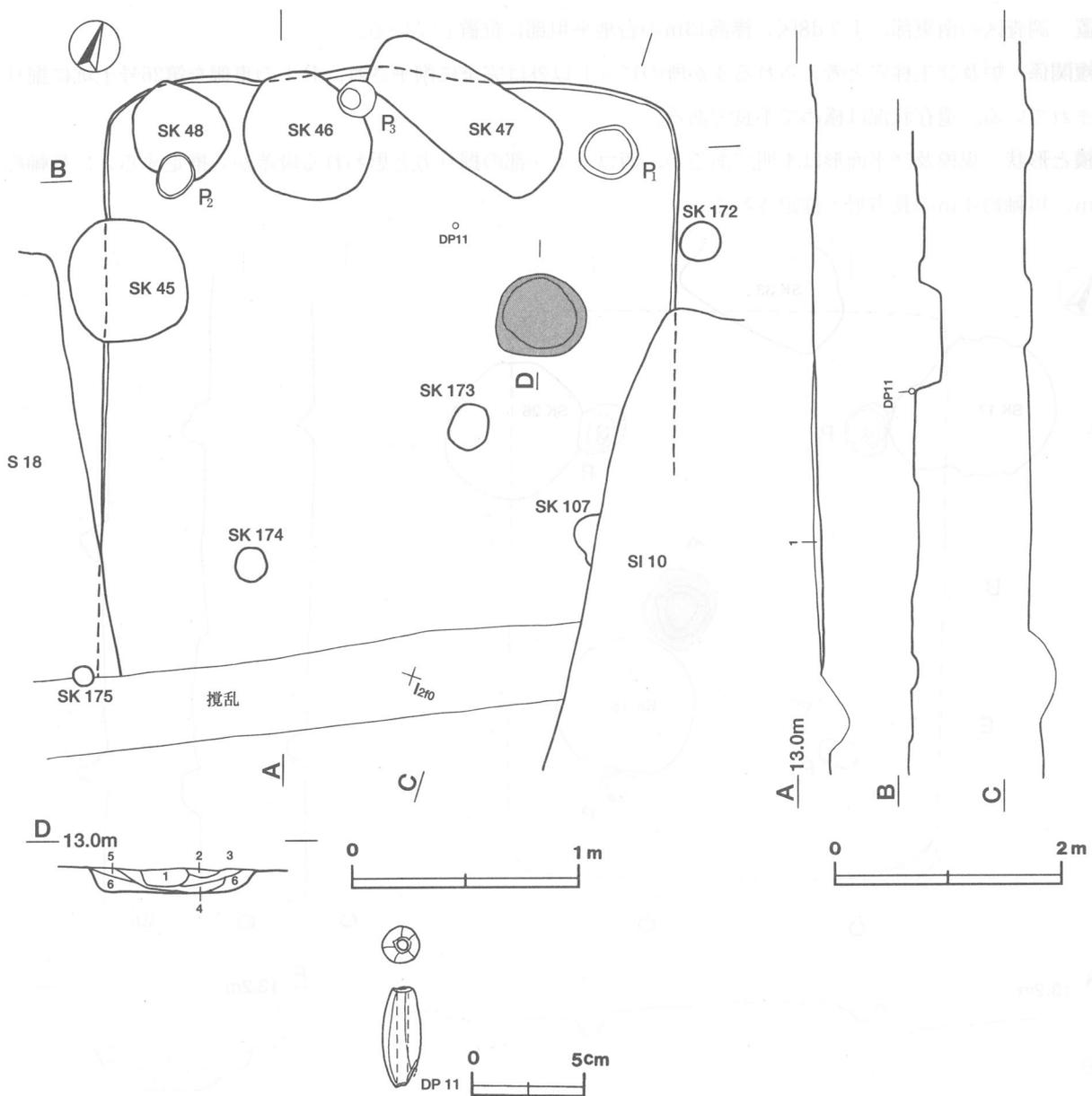
床 ほぼ平坦である。床面は全体的に軟弱で, 踏み固められた様子は見られなかった。

ピット 3か所。いずれも北壁側に位置し, 性格は不明である。P1はコーナー部に位置しているが, 深さ9cmと浅いため, 貯蔵穴の可能性は低いと考えられる。

炉 床面を10cm程度掘りくぼめた地床炉で, 中央部の北東寄りに位置し, かなり東壁側に偏っている。火床面は確認されず, 全体的に軟弱である。覆土は6層からなり, 焼土ブロックと灰が堆積がしている。

炉土層解説

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1 明赤褐色 焼土ブロック少量 | 4 灰赤色 焼土粒子中量, 炭化粒子・灰少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・灰少量 | 5 にぶい赤褐色 焼土ブロック・灰微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック・灰少量 | 6 灰赤色 焼土ブロック微量 |



第49図 第45号住居跡・出土遺物実測図

覆土 単一層である。層厚が6 cmと薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片2点(高坏1, 甕1), 管状土錘1点が, 主に覆土下層からまばらに出土している。これらの他に, 混入した縄文土器片6点, 石器4点が出土している。

所見 時期は, 遺存状況が悪く出土土器も少ないが, 住居跡の形態や重複関係などから前期と考えられる。

第45号住居跡出土遺物観察表(第49図)

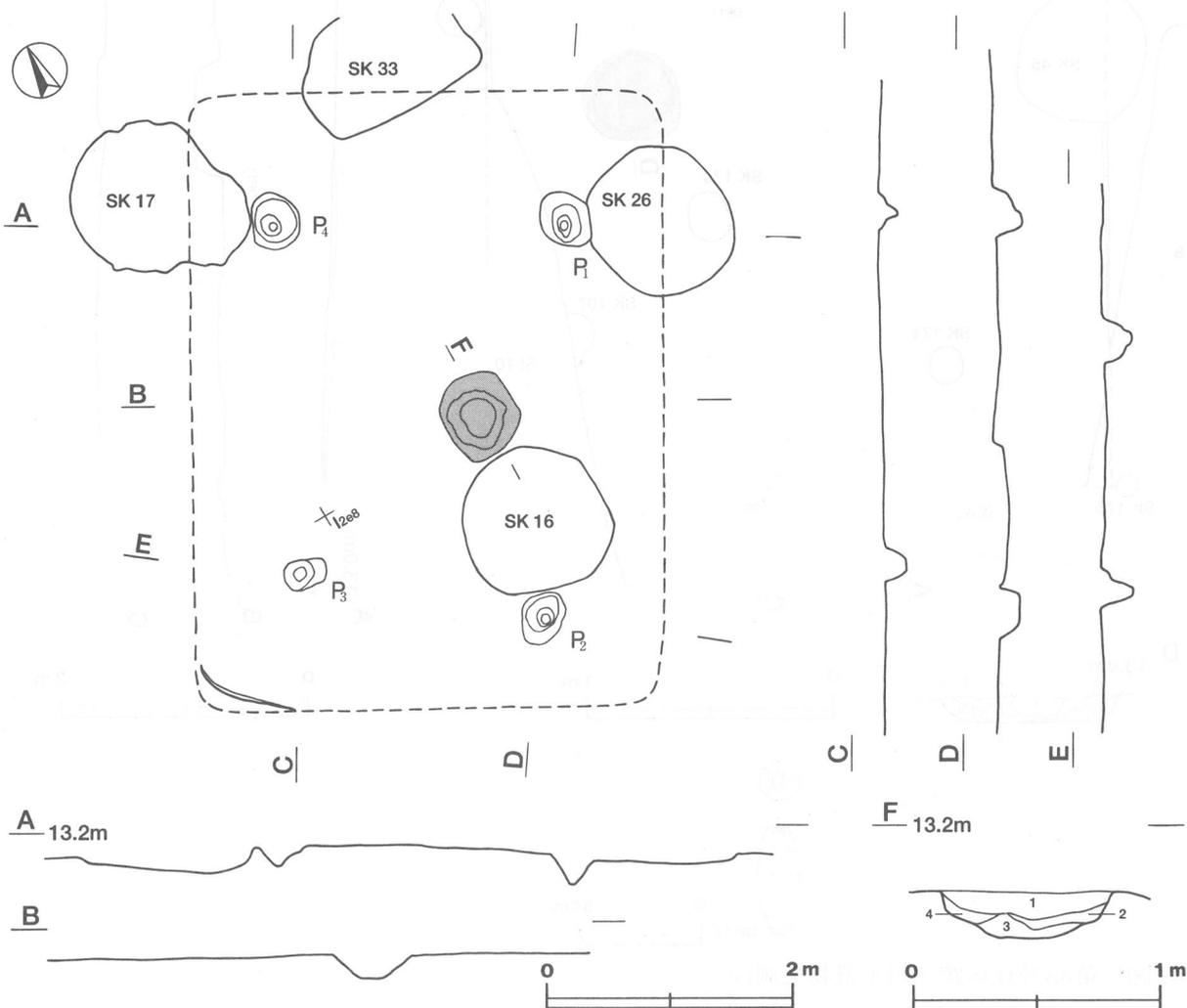
番号	種別	径	長さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP11	管状土錘	1.7	4.4	0.5	11.0	-	円柱状, 外面ナデ	床面	P L 39

第46号住居跡(第50図)

位置 調査区の南東部, I 2 d8区。標高13mの台地平坦部に位置している。

重複関係 炉及び支柱穴と考えられる4か所のピット以外は完全に削平され, P1の東側を第26号土坑に掘り込まれている。遺存状況は極めて不良である。

規模と形状 規模及び平面形は不明であるが, 西コーナー部の掘り方と思われる段差から推定すると, 長軸約5 m, 短軸約4 mの長方形と推定される。



第50図 第46号住居跡実測図

床 完全に削平されている。

ピット 4か所。P1～4は配置から支柱穴と考えられる。深さは16～24cmである。

炉 床面を18cm程度掘りくぼめた地床炉で、中央部の南東寄りに位置している。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。覆土は4層からなる。

炉土層解説

- 1 にぶい赤褐色 ローム粒子多量, 焼土ブロック微量
- 2 にぶい赤褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量

- 3 暗赤褐色 ローム粒子多量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 にぶい赤褐色 ローム粒子多量, 焼土ブロック中量

覆土 完全に削平されている。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺存状況が不良で遺物も出土していないため、詳細は不明である。推定される住居跡の形態や重複関係、周辺に位置する遺構及びグリッドから出土している土器の様相を勘案すると、時期は前期～中期と推定される。

第47号住居跡 (第51図)

位置 調査区の南東部, I 2 f8区。標高12.9mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 大半は調査区域外に位置し、北西コーナー部は攪乱されている。第8号住居跡と重複しているが、削平のため重複関係は不明である。

規模と形状 確認した長軸3.8mから、一辺が4m程度の規模で長方形ないし方形と推定される。壁は高さ18～28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。全体的に軟弱である。

ピット 確認した範囲にはない。

炉 確認した範囲にはない。

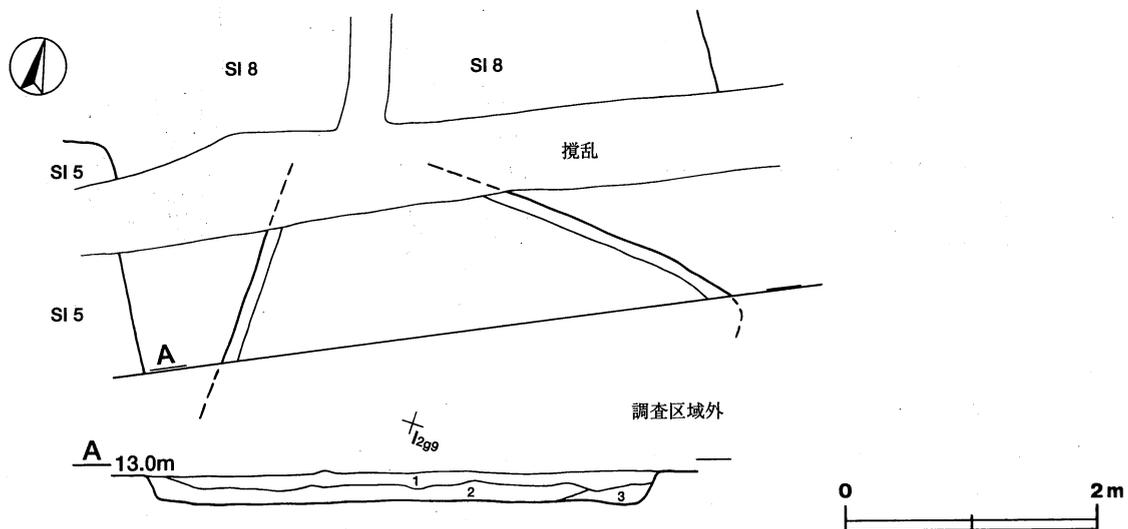
覆土 3層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック微量
- 2 黒色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量

- 3 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片4点(甕)が、覆土下層から疎らに出土している。これらの他に、混入した縄文土器片2点, 弥生土器片2点が出土している。



第51図 第47号住居跡実測図

所見 遺存状況が不良で出土遺物も少ないため、詳細は不明である。時期は、出土した土器が小破片のため示できないが、前期と考えられる。

(2) 掘立柱建物跡

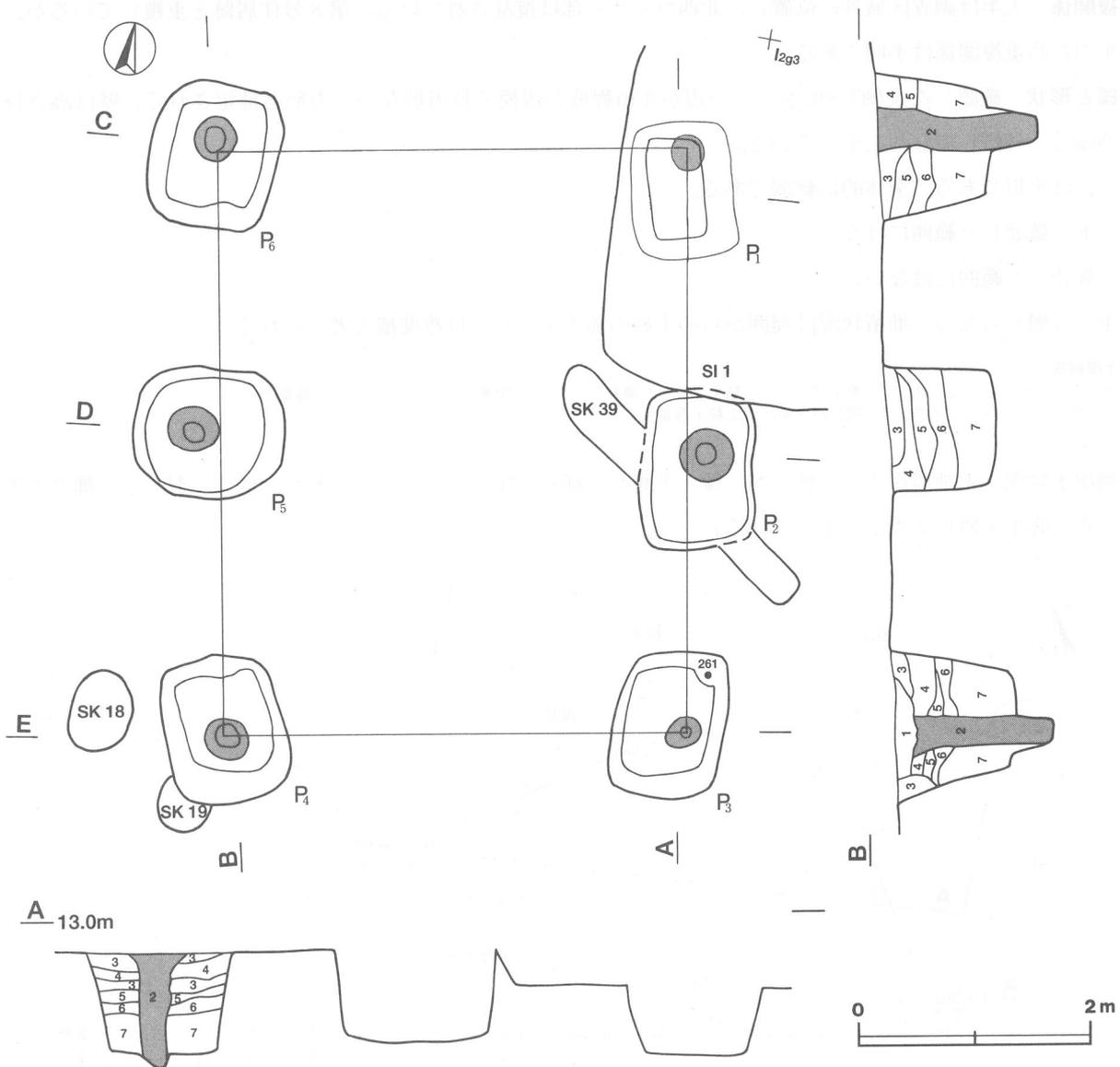
第1号掘立柱建物跡 (第52・53図)

位置 調査区の南西部, I 2g2区。標高12.7mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第1号住居にP1の上部を, 第39号土坑にP2の上部を掘り込まれている。

規模と構造 桁行2間, 梁行1間, 柱穴数6か所の側柱式で, 桁行方向を $N-8^{\circ}-W$ とする南北棟である。桁行は5.03m, 梁行は4.05mで, 面積は約 20.37m^2 である。柱間寸法は桁行が $2.4\sim 2.63\text{m}$, 梁行は $3.95\sim 4.4\text{m}$ である。

柱穴 6か所。長軸 $115\sim 137\text{cm}$, 短軸 $90\sim 110\text{cm}$ の隅丸長方形ないし隅丸方形を呈している。P5を除いて桁行方向に長い。P1を除いて底面の中央部に柱を据えたと考えられる小穴が穿たれている。深さは $95\sim 148\text{cm}$ である。柱痕はP1を除いて確認され, その土層は締まりのない黒色土である。埋土は黒褐色土や暗褐色土,



第52図 第1号掘立柱建物跡実測図

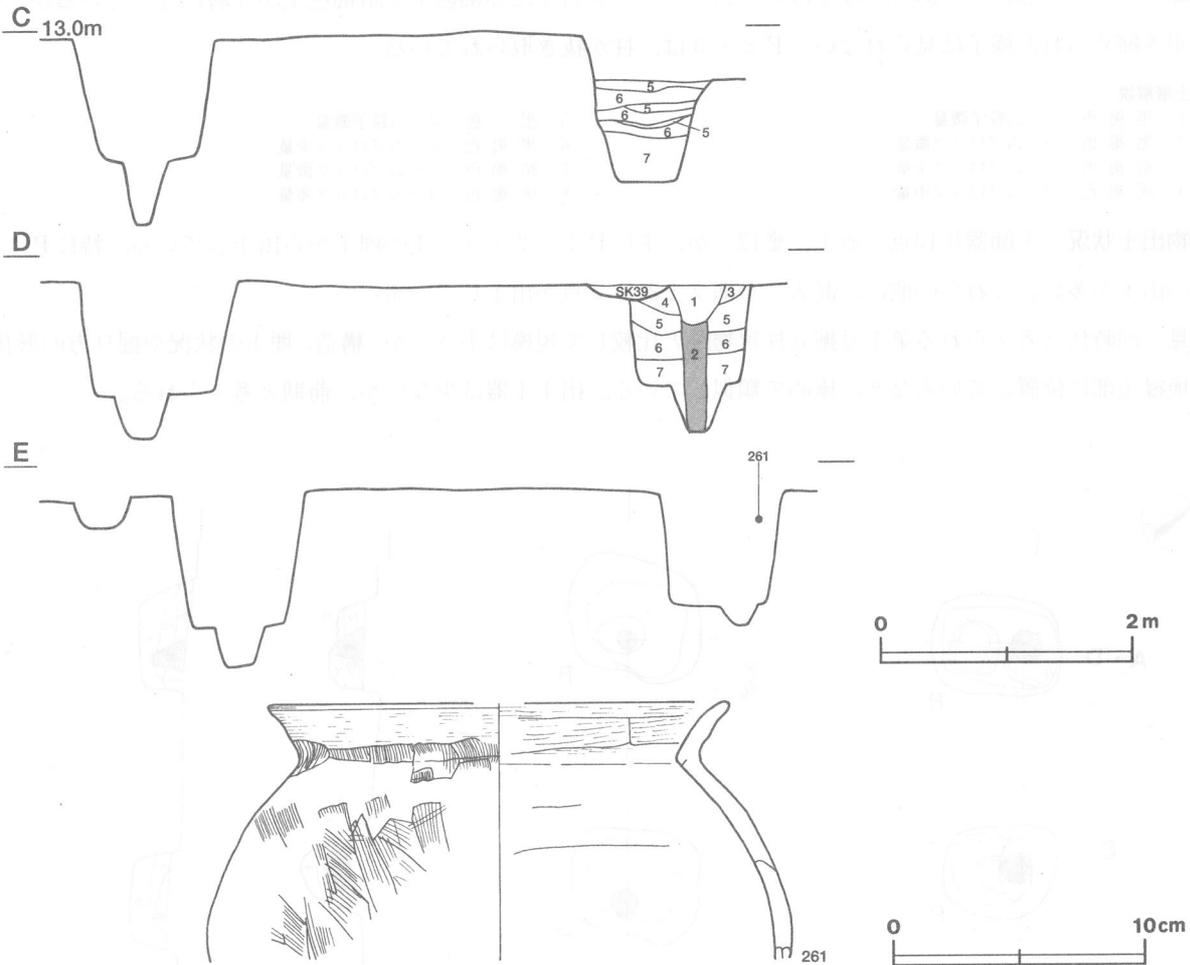
ロームブロックを多量に含んだ黄褐色土が互層になっているが、強く叩き締められた様子は見られない。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片35点（器台1，壺1，甕33）が，P2・3・5・6の埋土から出土している。特にP3から土師器片20点が出土している。これらの他に，混入した縄文土器片3点，弥生土器片1点が出土している。

所見 同時代と考えられる第2号掘立柱建物跡と比較して規模が大きく，柱穴の掘り方もしっかりしている。時期は，出土土器や重複関係などから前期と考えられる。



第53図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
261	土師器	甕	[18.4]	(10.1)	-	長石・雲母・赤色粒	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ハケ目調整，内面ヘラナデ	P3掘り方	10%

第2号掘立柱建物跡 (第54・55図)

位置 調査区の中央部, I 3a6区。標高12.7mの台地縁辺部に位置している。

確認状況 重複や削平もなく, 良好な遺存状況である。同時期と考えられる第1号掘立柱建物跡とは, 直線距離にして約58m離れている。

規模と構造 桁行2間, 梁行1間, 柱穴数6か所の側柱式で, 桁行方向をN-51°-Eとする東西棟である。桁行は3.77m, 梁行は3.17mで, 面積は約11.95㎡である。柱間寸法は桁行が1.77~2m, 梁行は3.17mである。

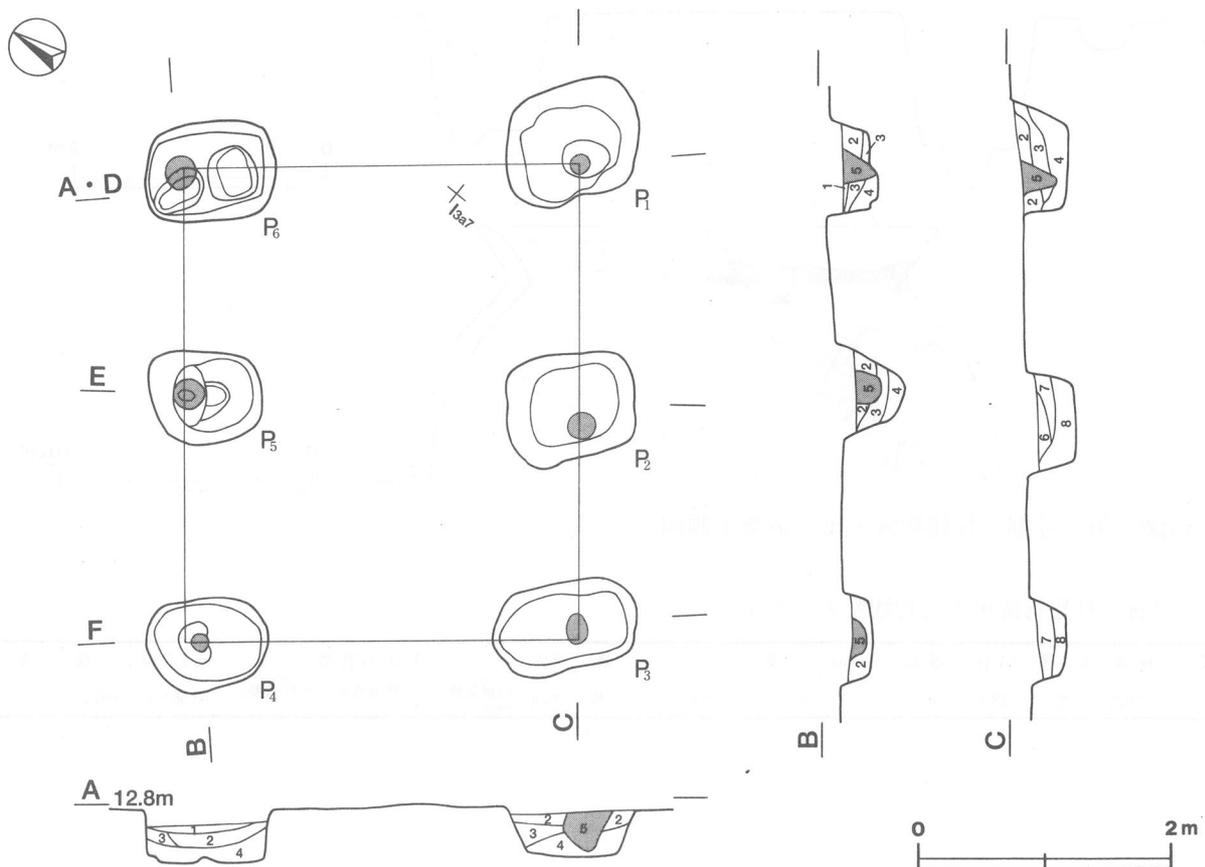
柱穴 6か所。長軸90~118cm, 短軸67~88cmの隅丸長方形ないし楕円形を呈している。いずれも梁行方向に長い。P5・6は底面の北西部に柱を据えたと考えられる小穴が穿たれ, その他の底面からは柱の当たり部分と考えられる硬化面が確認されている。深さは22~53cmである。柱痕はP2・3を除いて確認され, その土層は締まりのない黒色土である。埋土はロームブロックを含んだ黒褐色土や暗褐色土が互層になっているが, 強く叩き締められた様子は見られない。P2・3は, 柱が抜き取られている。

土層解説

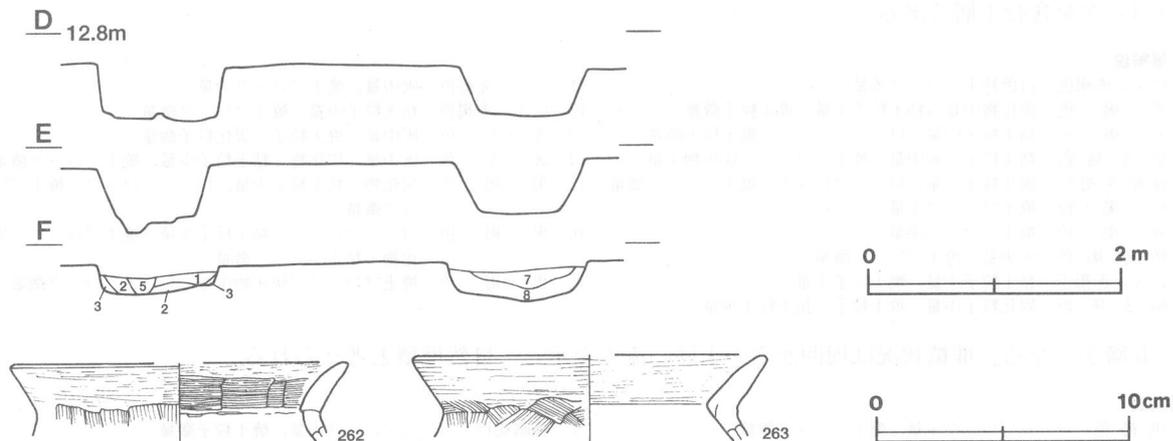
- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 5 黒色 ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック微量 | 6 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | 7 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 4 灰褐色 ロームブロック中量 | 8 灰褐色 ロームブロック多量 |

遺物出土状況 土師器片13点 (壺1, 甕12) が, 主にP1・2・3・4の埋土から出土している。特にP1からの出土が多い。これらの他に, 混入した縄文土器片2点が出土している。

所見 同時代と考えられる第1号掘立柱建物跡と比較して規模は小さいが, 構造, 埋土の状況や掘り方の形状, 台地縁辺部に位置しているなど, 極めて類似している。出土土器は少ないが, 前期と考えられる。



第54図 第2号掘立柱建物跡実測図



第55図 第2号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
262	土師器	甕	[13.4]	(3.1)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ、内面ハケ目調整後ナデ、体部外面ハケ目調整	P1掘り方	5%
263	土師器	甕	[13.8]	(3.5)	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ハケ目調整	P4掘り方	5%

3 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡25軒、掘立柱建物跡10棟、井戸跡1基、土坑2基、方形周溝1基、溝1条である。竪穴住居跡は調査区全域に分布しているが、掘立柱建物跡は調査区の中央部から北東部に分布し、特に北東部の標高13.5mの台地平坦部にまとまっている。以下、それらの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第56・57図)

位置 調査区の南西部、I 2 g3区。標高13mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 南東コーナー部で第177号土坑を、西部で第1号掘立柱建物跡のP1・2を掘り込んでいる。遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸3.63m、短軸3.08mの長方形である。壁は高さ16~33cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-89°-Eである。

床 わずかに凹凸が見られるものの、ほぼ平坦である。壁際やコーナー部付近を除いてよく踏み固められている。特に竈の前面は硬化が著しい。

ピット 6か所。P1・2は竈の両脇に位置しているため、貯蔵穴や柱穴の可能性が考えられるが、推定の域を出ない。深さはP1が16cm、P2が18cmである。P6は南壁際の中央部に位置しているため、出入り口施設に関係するピットと推定される。深さは10cmである。P3~5は性格不明である。

竈 東壁の中央部に設けられている。焚口から煙道までの長さは1.02cmである。燃焼部は長軸72cm、短軸38cmの不整楕円形を呈している。床面からの深さは6cmで、皿状に掘りくぼめられている。火床面は底面のほぼ中央に位置し、径26cmの円形に赤変硬化している。煙道は階段状で外傾しながら立ち上がり、東壁外に47cm張り出している。袖部の最大幅は87cmで、黄褐色粘土ブロックで構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックや

粘土ブロックを含む土層である

竈土層解説

- | | | | | | |
|----|--------|--------------------------|----|--------|-------------------------------------|
| 1 | にぶい赤褐色 | 白色粘土ブロック多量 | 11 | にぶい赤褐色 | 灰中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 | 黒褐色 | 炭化物中量, 粘土粒子少量, 焼土粒子微量 | 12 | にぶい赤褐色 | 粘土粒子中量, 焼土ブロック微量 |
| 3 | 赤褐色 | 粘土粒子中量, ロームブロック・焼土粒子微量 | 13 | 赤灰色 | 灰中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 暗赤褐色 | 粘土粒子・灰中量, 焼土ブロック・炭化物少量 | 14 | 灰赤色 | 灰中量, 炭化物・粘土粒子少量, 焼土ブロック微量 |
| 5 | 極暗赤褐色 | 炭化粒子少量, ロームブロック・焼土ブロック微量 | 15 | 黒褐色 | 炭化物・粘土粒子少量, ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 6 | 灰褐色 | 焼土ブロック中量 | 16 | 黒褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量, 焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック微量 |
| 7 | 赤褐色 | 焼土ブロック中量 | 17 | 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量, ロームブロック微量 |
| 8 | 暗赤褐色 | 灰少量, 焼土ブロック微量 | | | |
| 9 | にぶい赤褐色 | 粘土粒子中量, 焼土粒子少量 | | | |
| 10 | 暗赤灰色 | 炭化粒子中量, 焼土粒子・粘土粒子少量 | | | |

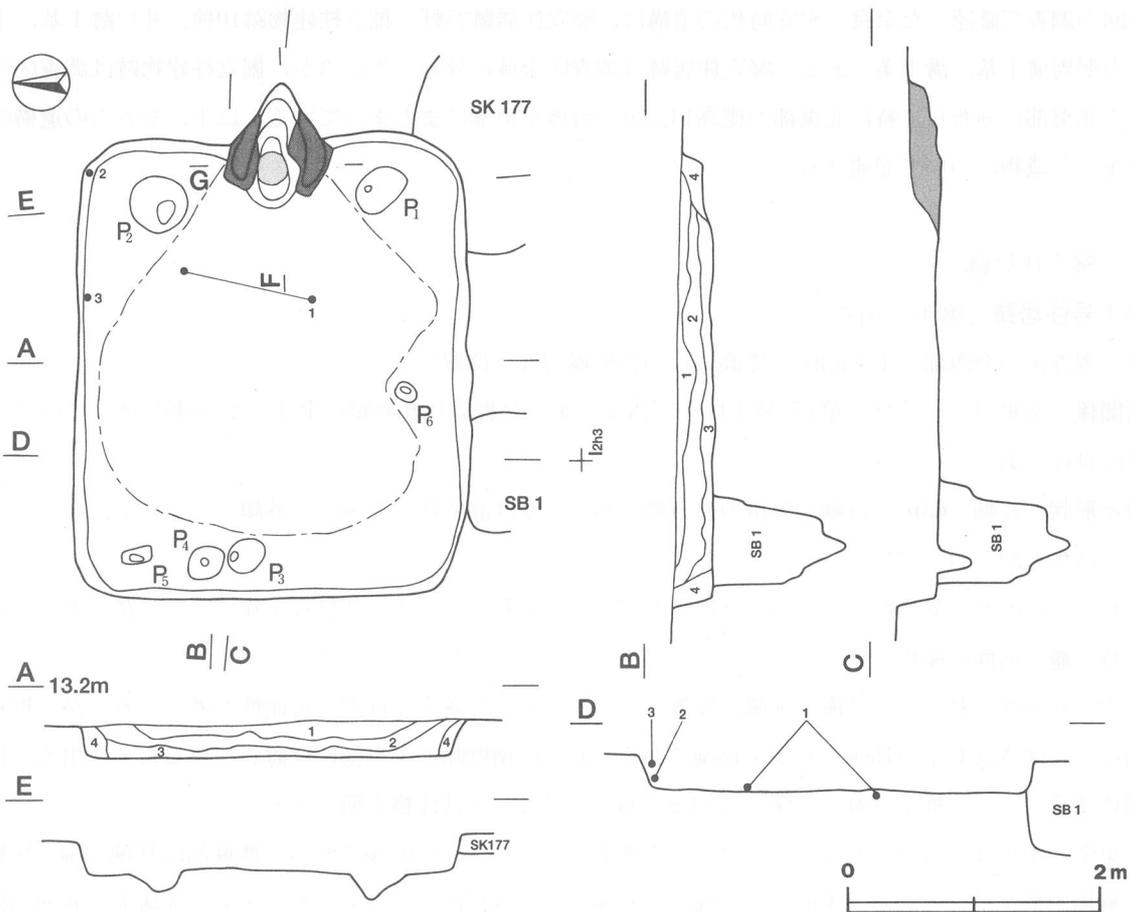
覆土 6層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|------|---------------------|---|------|-------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 4 | 極暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 5 | 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 | 暗赤褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 | 6 | 黒褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片64点(坏4, 鉢2, 甕58), 須恵器片2点(蓋1, 坏1)が, 主に覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。1は中央部の床面から, 2・3は北壁際の覆土中層から, 横位の状態で出土している。中央部の覆土下層から床面にかけて炭化材が出土している。また, 混入した縄文土器片13点, 剥片1点が出土している。

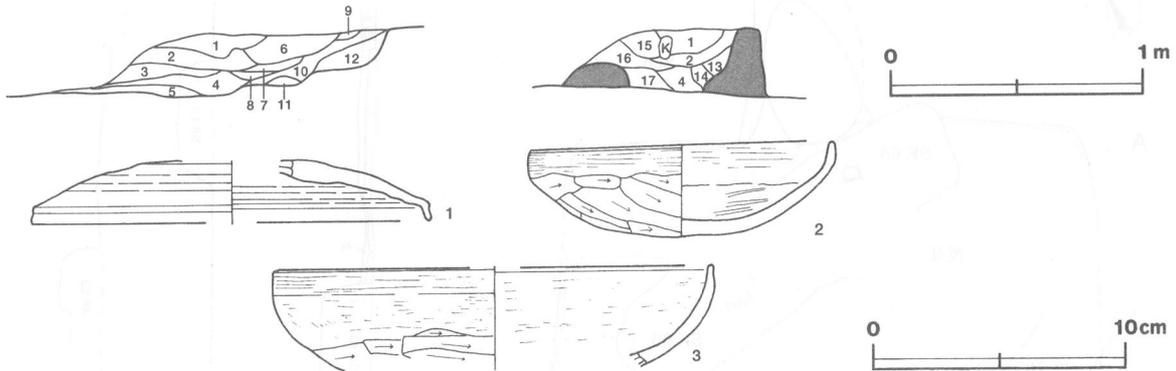
所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。壁際の床面や覆土中層~下層の土器は古い様相を, 中央部の床面や覆土中層~下層の土器は新しい様相を示している。



第56図 第1号住居跡実測図

F 13.2m

G



第57図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表 (第57図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	[15.7]	(2.5)	-	長石・雲母	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	30%
2	土師器	坏	11.9	3.8	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、体部内面ヘラ磨き	下層	70%
3	土師器	坏	[17.6]	(5.0)	-	長石・雲母・赤色粒	明赤褐	普通	口縁～体部横ナデ、体部下端ヘラ削り	中層	30%

第5号住居跡 (第58図)

位置 調査区の南西部, I 2g7区。標高12.9mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 北東コーナー部で第8号住居跡を掘り込んで、第63・76号土坑に掘り込まれている。南東部は調査区域外に位置し、東壁の北側から西壁の北側にかけて溝状に攪乱されている。遺存状況は不良である。

規模と形状 確認した東西軸4.45m, 南北軸2.63mの長方形ないし方形と推定される。壁は高さ6～9cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-17°-Wである。

床 やや凹凸が見られ、全体的に軟弱である。

ピット 確認した範囲にはない。

竈 北壁の中央部に設けられていたと推定される。全体的に削平を受け、袖部や燃焼部は確認できなかったが、北壁の中央部から壁外に張り出す楕円形の掘り込みを竈の痕跡と判断した。その規模は長軸1.16m, 短軸70cm, 床面からの深さは11cm, 断面は皿状を呈し、覆土は黒褐色土を主体としている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 炭化物少量, ロームブロック・焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量

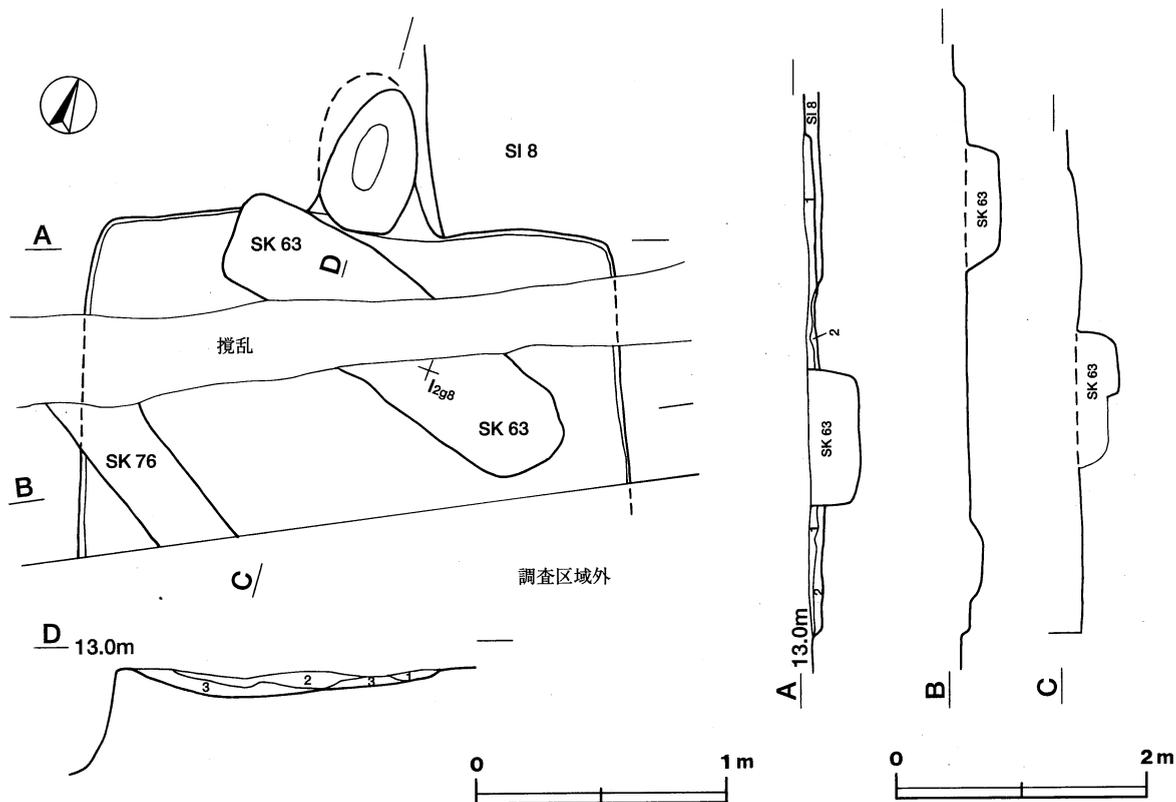
覆土 2層からなる。層厚が12cmと薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 時期は、出土遺物がなく不明である。重複関係からは、古墳時代前期の第8号住居跡を掘り込み、中世以降の第63・76号土坑に掘り込まれているため、おおよそ古墳時代中期以降から平安時代と考えられる。周辺のグリッドや攪乱などから出土している土器の様相からは、9世紀代の可能性が高いと推測される。



第58図 第5号住居跡実測図

第7号住居跡 (第59図)

位置 調査区の南西部, I 2 e6区。標高12.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第6・9号住居跡を掘り込んで西壁の中央部を第27号土坑に, 南壁の東側を第28号土坑に, 北壁の東側を第62号土坑, 第8号井戸に掘り込まれている。また, 中央部から南東コーナー部にかけて溝状に攪乱され, 北部を中心に床面まで削平されるなど, 遺存状況は極めて不良である。

規模と形状 確認した長軸3.82m, 短軸2.9mの長方形と推定される。北壁はほぼ完全に削平されている。確認した壁の高さは最大11cmで, 立ち上がりの形状は不明である。主軸方向はN-13°-Wである。

床 削平されているため, 詳細は不明である。壁溝は南壁に沿ってめぐり, 深さは8~12cmで, 断面形はU字状を呈している。

ピット P1は南西コーナー部に位置しているため, 貯蔵穴の可能性が考えられるが, 推定の域を出ない。深さは10cmである。

P1土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック微量

竈 北壁の中央部に設けられていたと推定される。全体的に削平を受け, 遺存状況は不良である。燃焼部は長軸97cm, 短軸71cmの不整楕円形を呈している。確認面からの深さは12cmで, 皿状に掘りくぼめられている。火床面や焼土層は確認できず, 掻き出されたような状態である。煙道はなだらかに外傾しながら立ち上がり, 東壁外に40cm張り出している。残存する右袖部の一部は黄褐色粘土ブロックで構築されている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量, ロームブロック・炭化材微量
- 2 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化物・粘土粒子微量

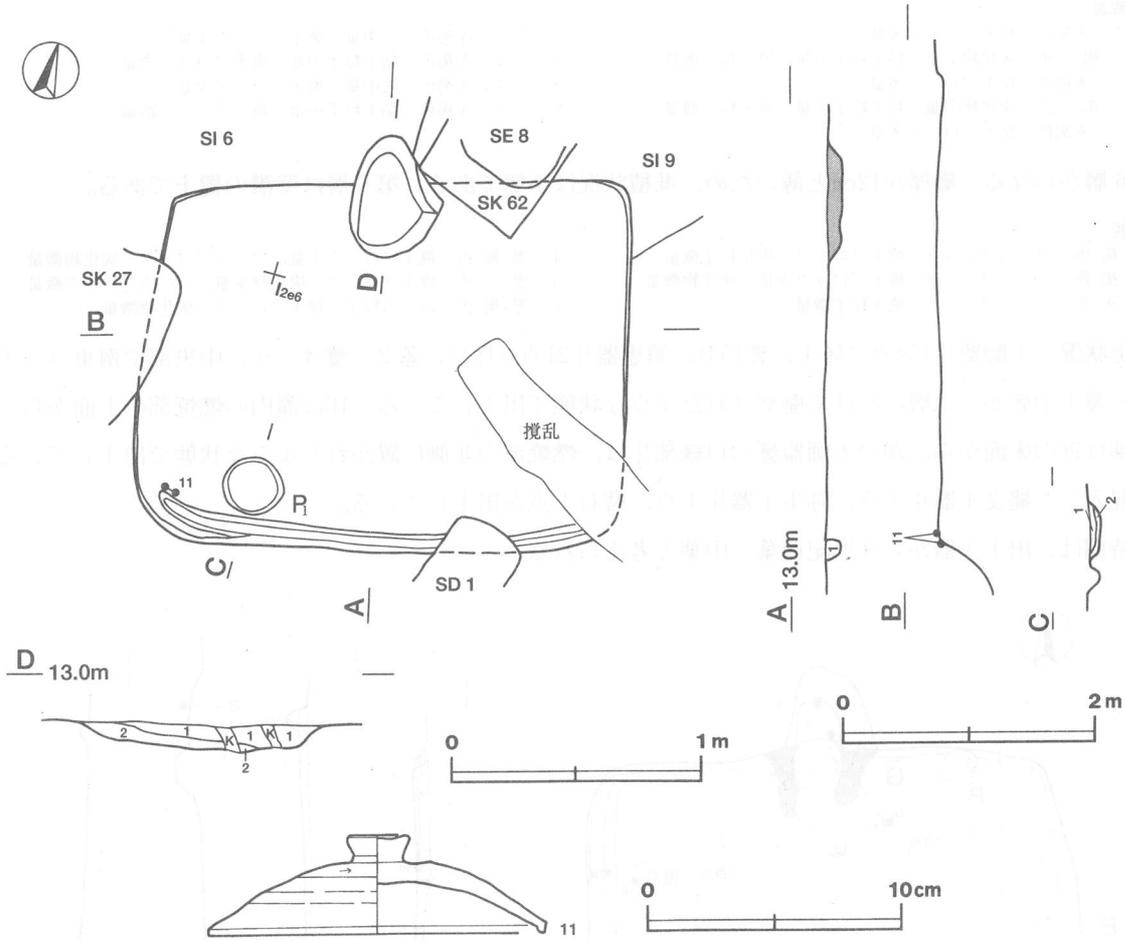
覆土 削平されているため、堆積状況などは不明である。第1層は壁溝の覆土である。南西コーナー一部を中心に残存していた床面直上の覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 須恵器片5点（蓋1，坏4），焼成粘土塊5点が，削平の及ばなかった南部の床面を中心にしてまばらに出土している。11は南東コーナー部の床面から出土している。また，混入した縄文土器片9点，古墳時代の土師器片42点が出土している。5点の焼成粘土塊は，摩滅が著しく性格不明である。

所見 時期は，出土土器から8世紀中葉～後葉と考えられる。



第59図 第7号住居跡・出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表（第59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
11	須恵器	蓋	13.4	3.9	-	石英・長石	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	50%

第12号住居跡（第60・61図）

位置 調査区の南西部，I 2 c0区。標高12.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況 西壁際を現代の暗渠によって溝状に攪乱されている。また，全体的に削平を受けている。

規模と形状 長軸3.91m，短軸3.52mの長方形である。壁は高さ2～6cmで，立ち上がりの形状は不明である。

主軸方向はN-5°-Eである。

床 部分的に攪乱されている。ほぼ平坦で全体的に軟弱であるが，竈の前面及び中央部の南側はよく踏み固め

られている。壁溝は南壁及び東壁に沿って確認され、深さは8~10cmで、断面形はU字状を呈している。
 ピット 2か所。P1は南壁際の中央部にあり、竈に対峙しているため、出入口施設に関係するピットと考えられる。深さ22cmである。北壁の西側に接するP2は性格不明である。

竈 北壁の中央部に設けられている。焚口から煙道までの長さは1.26mである。焚口部はなだらかに傾斜し、
 燃焼部は長軸39cm、短軸35cmの楕円形を呈している。床面からの深さは20cmで、皿状に掘りくぼめられ、多量の焼土ブロックや炭化物、灰が堆積している。火床面は第4・5層の上面と考えられるが、硬化面などは確認されていない。煙道は外傾しながら立ち上がり、北壁外に70cm張り出している。煙道部の底面は火熱により赤変硬化している。袖部の最大幅は92cmで、黄褐色粘土ブロックで構築されている。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 にぶい赤褐色 粘土ブロック多量 | 6 にぶい赤褐色 灰中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 炭化物中量, 粘土粒子少量, 焼土粒子微量 | 7 にぶい赤褐色 粘土粒子中量, 焼土ブロック微量 |
| 3 にぶい赤褐色 粘土ブロック多量 | 8 にぶい赤褐色 灰中量, 焼土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 炭化物中量, 粘土粒子少量, 焼土粒子微量 | 9 にぶい赤褐色 粘土粒子中量, 焼土ブロック微量 |
| 5 にぶい赤褐色 粘土ブロック多量 | |

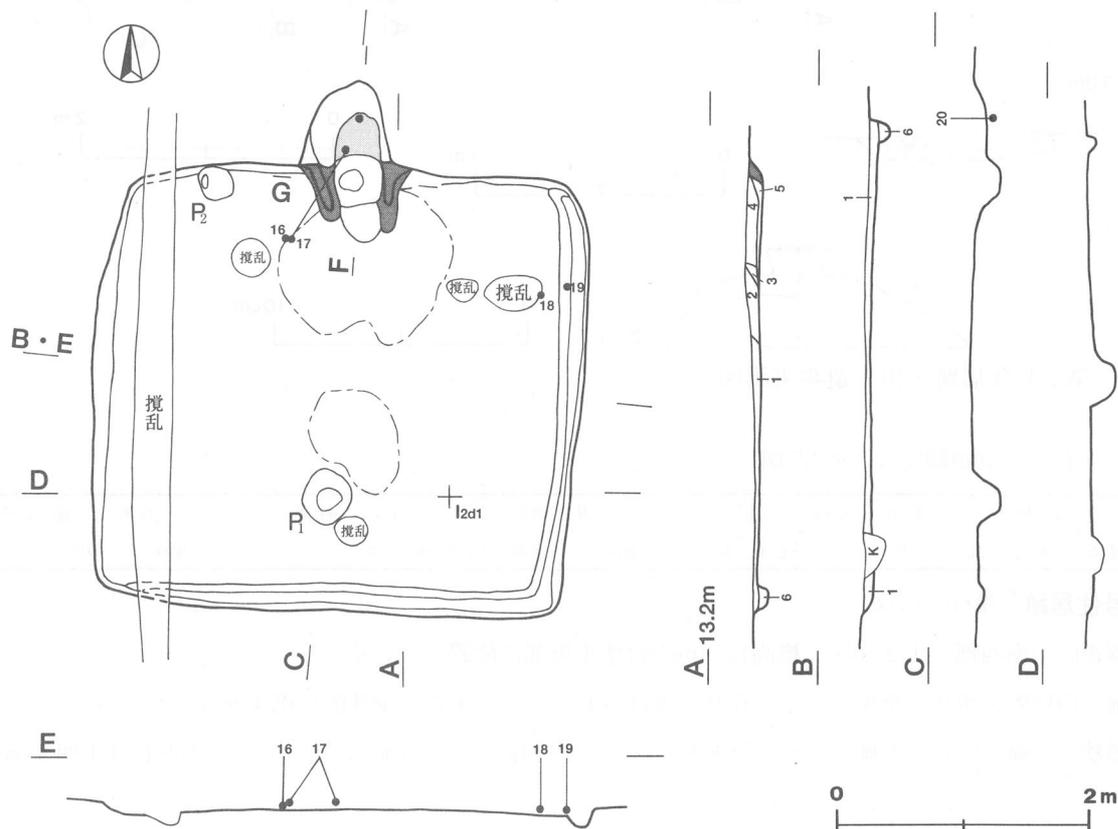
覆土 6層からなる。層厚が12cmと薄いため、堆積状況は不明である。第6層は壁溝の覆土である。

土層解説

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量 | 5 黒色 焼土ブロック・炭化材少量, ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 6 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片154点(坏1, 甕153), 須恵器片21点(坏15, 蓋2, 甕4)が、中央部や南東コーナ
 一部付近の覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。16は竈内の燃焼部の上面から、17
 は竈左袖付近の床面から、20の土師器甕の口縁部片は、燃焼部の北側に置かれたような状態で出土している。
 また、混入した縄文土器片1点, 弥生土器片1点, 磨石1点が出土している。

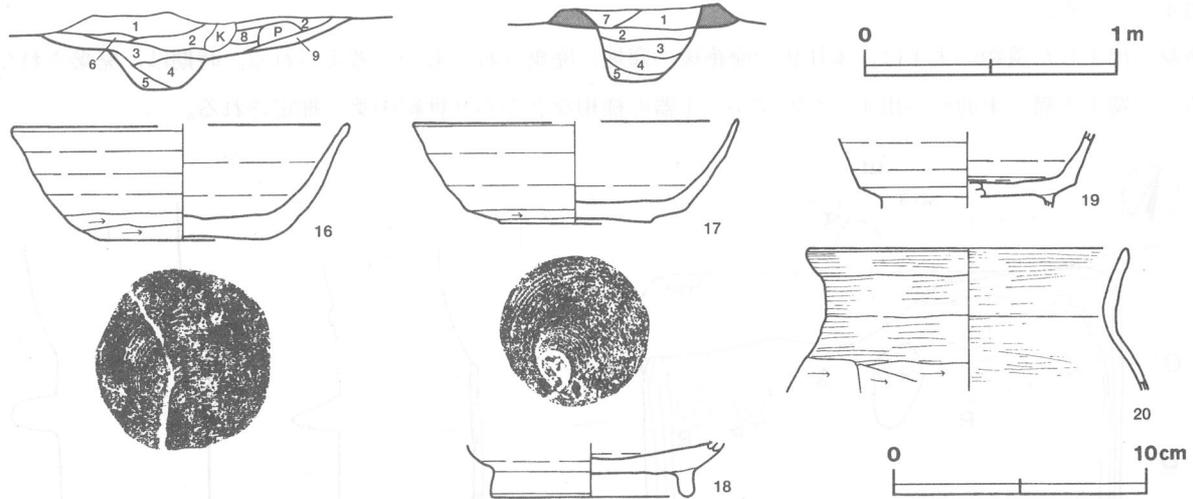
所見 時期は、出土土器から9世紀前葉~中葉と考えられる。



第60図 第12号住居跡実測図

F 13.2m

G



第61図 第12号住居跡・出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表 (第61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
16	須恵器	坏	[13.2]	4.5	6.9	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端へら削り, 底部回転糸切り後, 外縁へら削り	床面	70%
17	須恵器	坏	[13.0]	(3.9)	6.0	長石・雲母	にぶい黄	普通	体部下端へら削り, 底部回転糸切り	下層	55%
18	須恵器	高台付坏	-	(2.2)	8.1	石英・長石・雲母	灰	普通	底部へら削り	下層	35%
19	須恵器	高台付坏	-	(3.0)	(6.8)	長石・針状鉱物	灰褐	普通	底部へら削り	下層	10%
20	土師器	甕	12.8	(5.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面へら削り	下層	5%

第15号住居跡 (第62図)

位置 調査区の中央部, I 3 c3区。標高12.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 北東部を第3号溝に, 床面の一部を第75・77・78号土坑に掘り込まれている。全体的に削平を受けて, 遺存状況は不良である。

規模と形状 長軸3.78m, 確認した短軸3.35mの方形である。壁は高さ4~7cmで, 立ち上がりの形状は不明である。主軸方向はN-74°-Wである。

床 部分的に凹凸が見られる。全体的に軟弱である。壁溝は確認した範囲で全周し, 深さは5~7cmで, 断面形はU字状を呈している。

ピット 4か所。P1は南壁際の中央部に位置しているため, 出入り口施設に関係するピットと考えられる。深さ28cmである。P2・3は配置及び形状から, 柱穴の可能性が考えられる。深さはP2が28cm, P3が21cm, P4は性格不明である。

竈 確認した範囲にはない。北壁の中央部に設けられていたと推測されるが, 北東部は第3号溝に掘り込まれているため不明である。

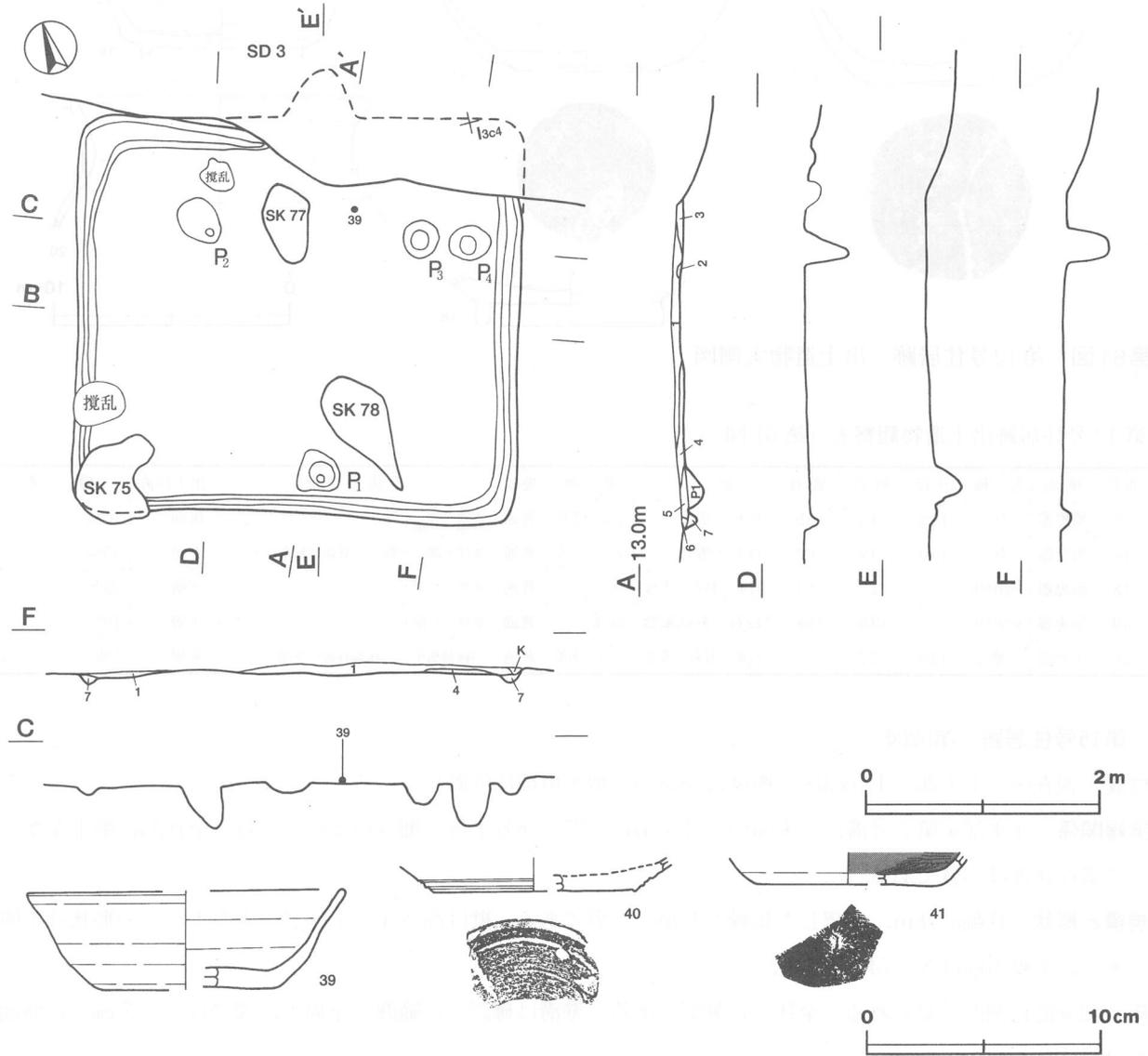
覆土 7層からなる。層厚が12cmと薄いため, 堆積状況は不明である。第7層は壁溝の覆土である。

土層解説

1 黒色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗赤褐色	焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化物微量	5 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
3 黄灰色	黄灰色粘土ブロック多量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量	6 にぶい黄褐色	ロームブロック少量
		7 黒色	ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片34点（坏1，甕33），須恵器片6点（坏5，甕1）が，中央部の覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。いずれも小破片である。また，混入した縄文土器片1点，弥生土器片1点が出土している。

所見 出土した遺物の大半は，本住居の廃絶後の窪地に廃棄されたものと考えられる。時期は，廃棄された土器や，覆土下層～床面から出土したわずかな土器の様相などから9世紀中葉と推定される。



第62図 第15号住居跡・出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表（第62図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
39	須恵器	坏	[13.3]	4.2	[7.0]	石英・長石	にぶい黄橙	普通	底部摩滅	床面	20%
40	須恵器	坏	-	(1.1)	[8.7]	長石・雲母	灰白	普通	体部下端～底部回転ヘラ削り	床面	10%
41	土師器	坏	-	(1.4)	[8.0]	長石・雲母	橙	普通	体部内面ヘラ磨き，黒色処理，底部回転糸切り後，外縁ヘラ削り	P4	5%

第16号住居跡 (第63図)

位置 調査区の中央部, I 3 b5区。標高12.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 南西コーナー部を第3号溝に, 北壁の中央部の竈を第90号土坑に掘り込まれている。また, 西壁際の中央部の床面を攪乱されている。おおむね遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸4.65m, 短軸4.45mの方形である。壁は高さ24~28cmで, 直立している。主軸方向はN-1°-Eである。

床 ほぼ平坦である。壁際やコーナー部付近を除いてよく踏み固められている。壁溝は全周し, 深さは8~24cmで, 断面形はU字状を呈している。

ピット 7か所。P1~4は配置から支柱穴と考えられる。深さは38~54cmである。P5・6は南壁際の中央部にあり, 竈に対峙しているため, 出入り口施設に関係するピットと考えられる。深さ22~24cmである。東壁際の中央部に位置しているP7は, 楕円形で深さは11cmである。その形状から貯蔵穴の可能性も考えられるが, 出土遺物がなく, 性格は不明である。

竈 北壁の中央部東寄りに設けられている。第90号土坑に燃焼部から煙道部の大半を掘り込まれ, 遺存状況は不良である。燃焼部は床面を26cm掘りくぼめ, ロームブロックを多く含む黄褐色土などを埋土して構築している。火床面は第5層上面と考えられるが, 硬化面などは確認されていない。袖部の最大幅は87cmで, 黄褐色粘土ブロックで構築されている。第1~4層は焼土ブロックや灰黄褐色粘土ブロックなどを多く含んでいる。

竈土層解説

1 赤褐色	焼土ブロック・炭化物中量, 粘土ブロック・ローム粒子少量	5 にぶい黄褐色	ロームブロック少量, 粘土ブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2 にぶい黄褐色	粘土ブロック・焼土ブロック炭化物少量	6 にぶい黄褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
3 黒色	炭化物中量, 焼土ブロック少量, ロームブロック・粘土ブロック微量	7 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量		

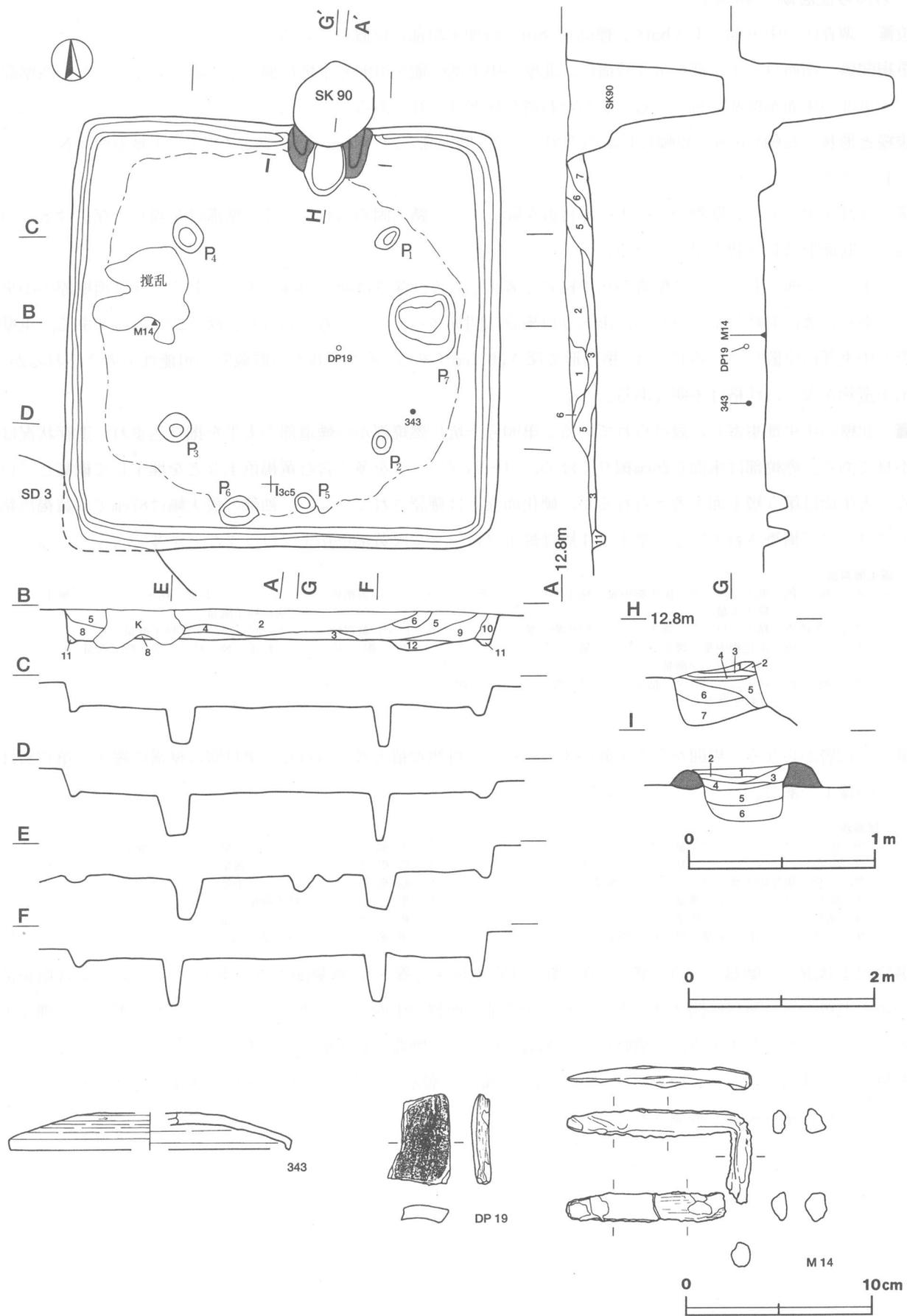
覆土 12層からなる。周囲からの土砂の流入を示し, 自然堆積と考えられる。第11層は壁溝の覆土, 第12層はP7の覆土である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量	7 灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
2 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	8 暗褐色	ロームブロック微量
3 黒色	炭化物中量, ロームブロック微量	9 暗褐色	ロームブロック中量
4 黒褐色	ロームブロック微量	10 黒色	ローム粒子微量
5 極暗褐色	ロームブロック中量	11 褐色	ロームブロック少量
6 黒色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量	12 黒褐色	炭化粒子少量, ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片1点(甕), 須恵器片9点(坏4, 蓋5), 鉄製品1点が出土している。343は南東部の覆土上層から, M14は門金具と考えられ, 中央部の西側の床面上から出土している。また, 混入した縄文土器片2点, 弥生土器片1点, 古墳時代の土師器片88点, 土師器片転用砥1点, 剥片1点が出土している。

所見 出土遺物が少なく, 時期は決定しがたい。覆土上層から出土した343は8世紀後葉と考えられることから, 8世紀中葉~後葉と推測される。



第63图 第16号住居跡・出土遺物実測図

第 16 号住居跡出土遺物観察表 (第 63 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
343	須恵器	蓋	[15.0]	(2.0)	-	長石	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り, 内・外面ロクロナデ	中層	5%

番号	種別	径	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP19	転用砥	-	4.8	3.3	1.0	13.1	土師器	土師器壺片転用, 1側縁使用	中層	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M14	門金具	(10.0)	(6.1)	(1.3)	(34.0)	鉄	U字状, 一端先細り	床面	

第20号住居跡 (第64・65図)

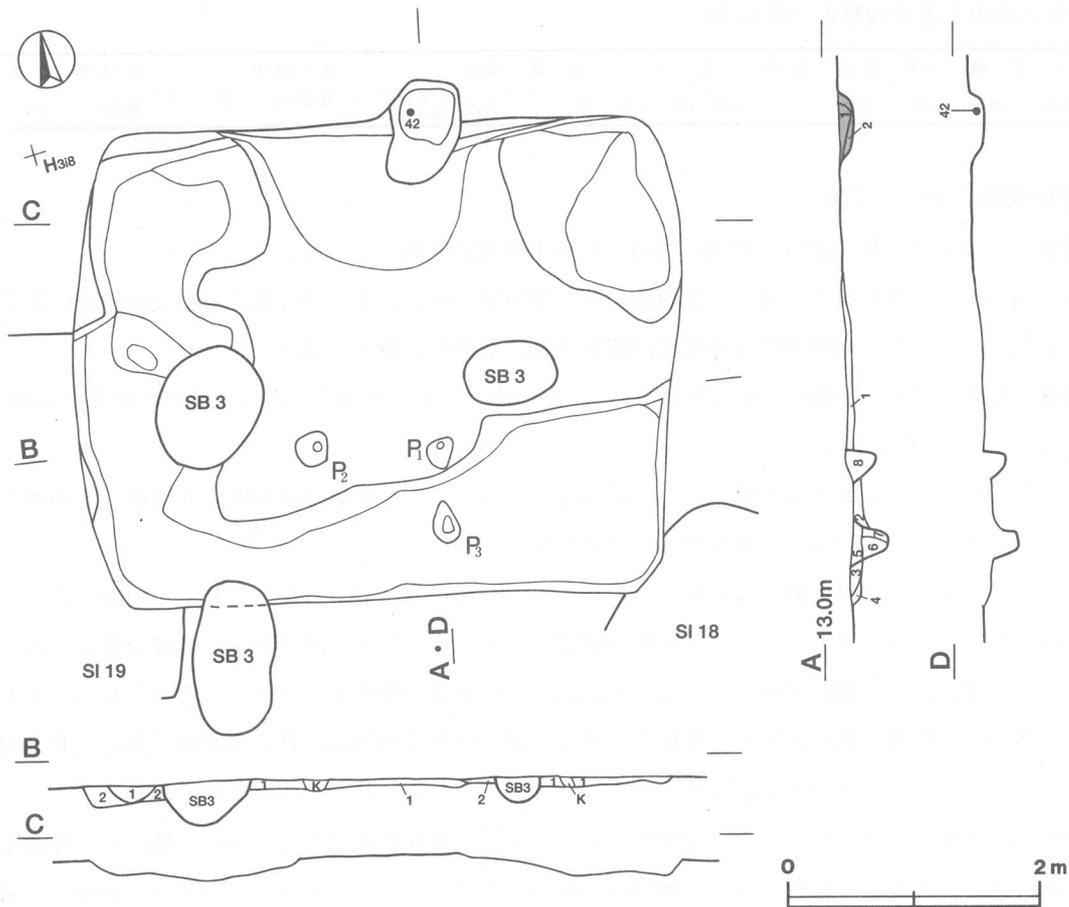
位置 調査区の中央部, H 3 i8区。標高12.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 南東コーナー部で第18号住居跡を, 西部で第19号住居跡を掘り込み, 第3号掘立柱建物のP 8~10に掘り込まれている。ほとんどの壁や床面は削平を受け, 竈とピット及び掘り方を確認しただけである。

規模と形状 確認した長軸4.76m, 短軸3.79mの長方形と推定される。ほとんどの壁は削平されているが, 竈の周囲で確認された壁の高さは最大5cmである。主軸方向はN-23°-Eである。

床 ほとんどの床面は削平されているが, 竈の前面はほぼ平坦である。

ピット 3か所。いずれも中央部の南側に位置している。特にP 1・3は竈に対峙しているため, 出入口施設に関するピットと考えられる。深さ24~26cmである。P 2は性格不明である。



第64図 第20号住居跡実測図

竈 北壁の中央部東寄りに設けられている。全体的に削平を受け、遺存状況は不良である。焚口から煙道までの長さは82cmである。燃焼部は長軸82cm、短軸56cmの楕円形を呈している。床面からの深さは12cmで、皿状に掘りくぼめられている。火床面や焼土層は確認できず、掻き出されたような状態である。煙道はなだらかに外傾しながら立ち上がり、北壁外に30cm張り出している。袖部は確認できなかった。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物少量, ロームブロック微量 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量

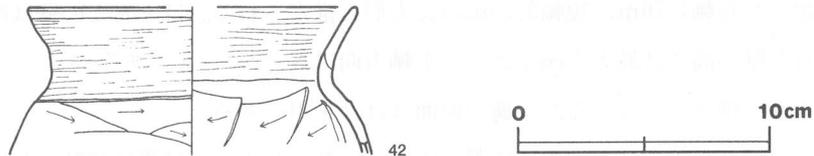
覆土 8層からなる。第1～4層は掘り方の埋土である。第5～7層はP3, 第8層はP1の覆土である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 6 黒褐色 ロームブロック微量
 3 黒褐色 ロームブロック少量 7 暗褐色 ロームブロック中量
 4 暗褐色 ロームブロック少量 8 黒色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片21点(甕), 須恵器片1点(甕)が, 竈の覆土や掘り方の埋土から出土している。42は竈の覆土下層から出土している。また, 混入した古墳時代の土師器片1点が出土している。

所見 時期は, 竈の覆土下層から出土した42などから, 9世紀中葉と考えられる。



第65図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表 (第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
42	土師器	甕	[13.0]	(5.8)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	竈覆土	10%

第24号住居跡 (第66・67図)

位置 調査区の中央部, H4g2区。標高13.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 南コーナー部を第5号溝に, 北西部の壁を第94号土坑に, 部分的に第5号掘立柱建物のP7～10に掘り込まれている。また, 南東壁際の中央部は攪乱され, 全体的に削平を受けている。

規模と形状 長軸5.05m, 短軸4.91mで方形である。壁の高さは6～8cmで, 立ち上がりの形状は不明である。主軸方向はN-24°-Eである。

床 ほぼ平坦である。コーナー部を除いてよく踏み固められている。壁溝は南東壁, 北東壁, 北西壁の西側にめぐっている。深さは8～14cmで, 断面形はU字状を呈している。

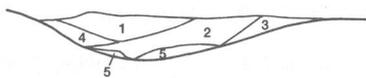
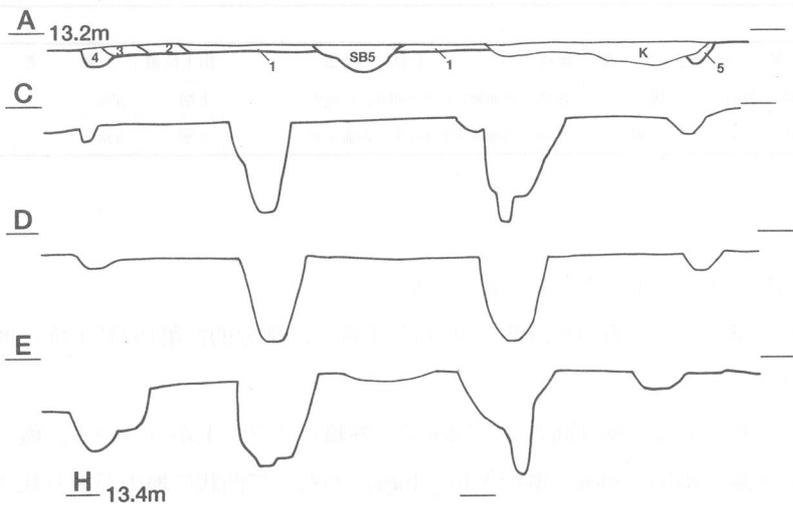
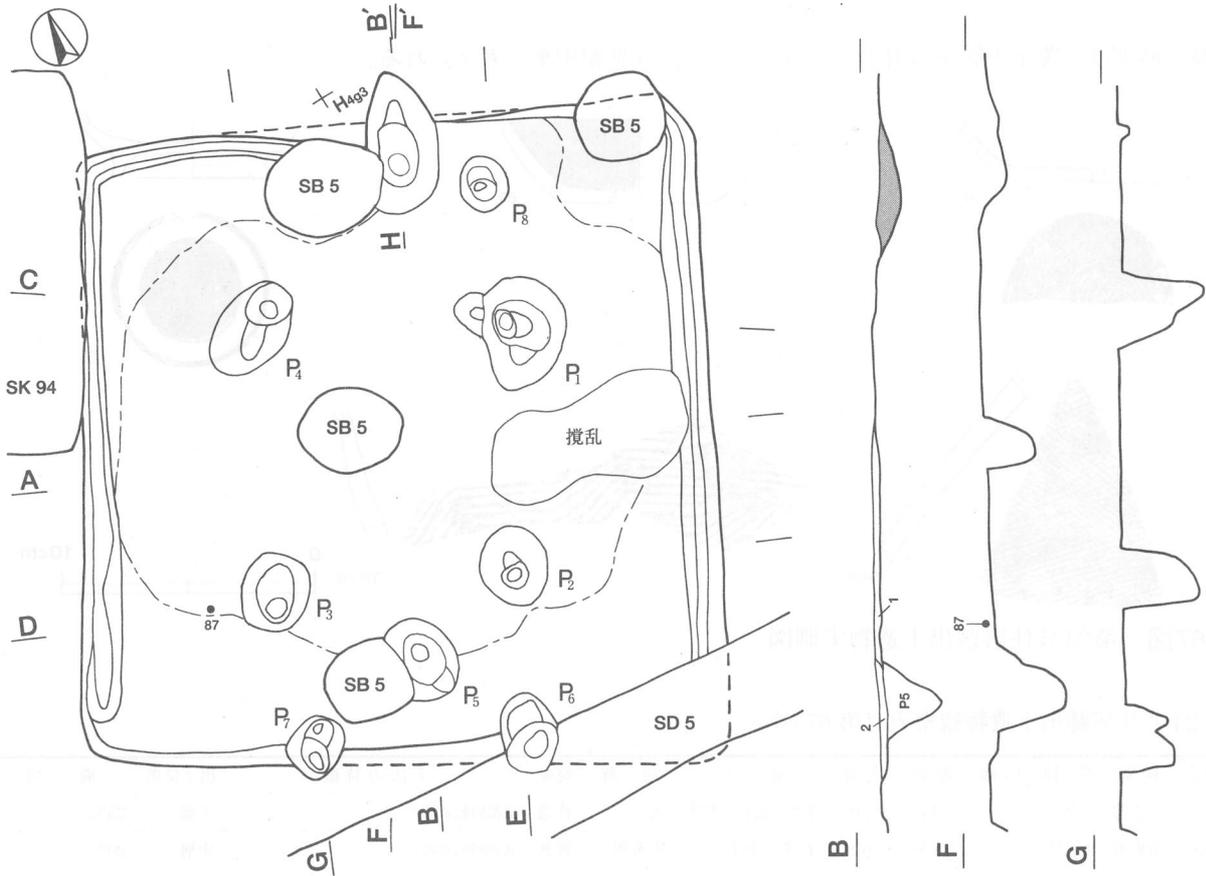
ピット 8か所。P1～4は配置から支柱穴と考えられる。深さは一定ではなく, P1が94cm, P2が60cm, P3が51cm, P4が70cmである。いずれも柱痕が確認されている。P5は深さ48cmで柱痕が確認されている。南西壁際の中央部にあり, 竈に対峙しているため, 出入り口施設に関するピットと考えられる。P6・7は南西壁を3等分する位置に掘り込まれた壁柱穴である。深さはP6が50cm, P7が39cmである。P5同様, 竈に対峙しているため, 出入り口施設に関するピットと考えられる。P8は性格不明である。

竈 北東壁の中央部に設けられている。全体的に削平を受け, 遺存状況は不良である。焚口から煙道までの長さは1.13mである。燃焼部は長軸50cm, 短軸32cmの楕円形を呈している。床面からの深さは16cmで, 皿状に掘りくぼめられている。火床面や焼土層は確認できず, 掻き出されたような状態である。煙道はなだらかに立ち

上がり、北東壁外に39cm張り出している。袖部は確認できなかった。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|----------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック砂質粘土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化材・焼土ブロック少量、ロームブロック微量 | | |
| 3 暗赤褐色 | 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |



第66図 第24号住居跡実測図

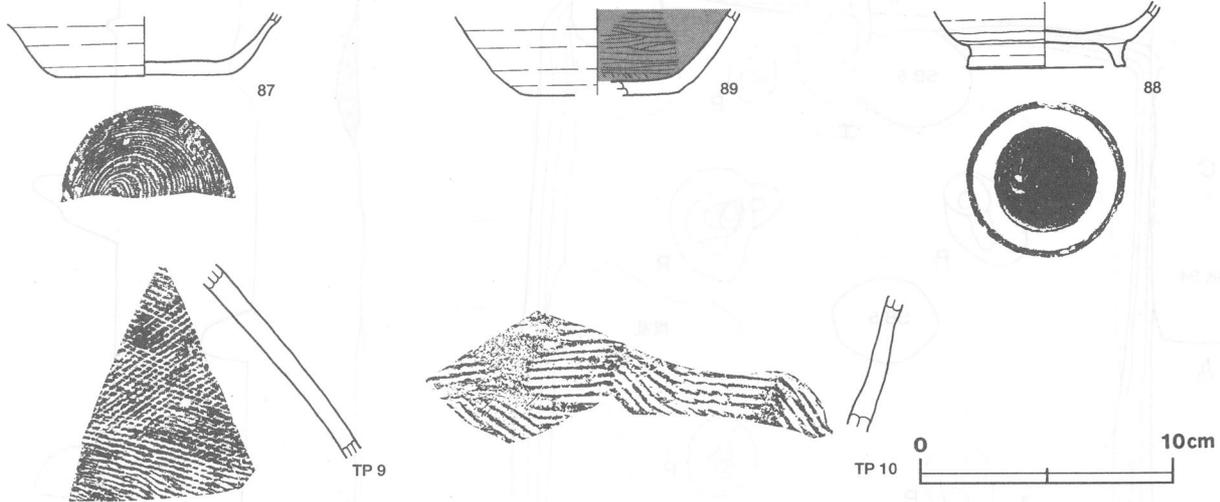
覆土 5層からなる。層厚が8cmと薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化材微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片1点(坏), 須恵器片77点(坏45, 蓋13, 甕19)が, 覆土下層からまばらに出土している。

所見 時期は, 覆土下層から出土した87などから, 9世紀中葉と考えられる。



第67図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表(第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
87	須恵器	坏	-	(2.4)	[7.0]	石英・長石・雲母	灰白	普通	底部回転糸切り	下層	25%
88	須恵器	高台付坏	-	(2.5)	[6.2]	石英・長石	灰黄褐	普通	底部回転糸切り	中層	20%
89	土師器	坏	-	(3.4)	[6.2]	石英・雲母・赤色粒	浅黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き, 黒色処理	下層	15%
TP9	須恵器	甕	-	(7.9)	-	石英・長石	褐灰	普通	外面網目状平行叩き, 内面ナデ	下層	5%
TP10	須恵器	甕	-	(4.9)	-	石英・長石	灰褐	普通	外面縄文原体圧痕, 内面ナデ	下層	5%

第25号住居跡(第68~71図)

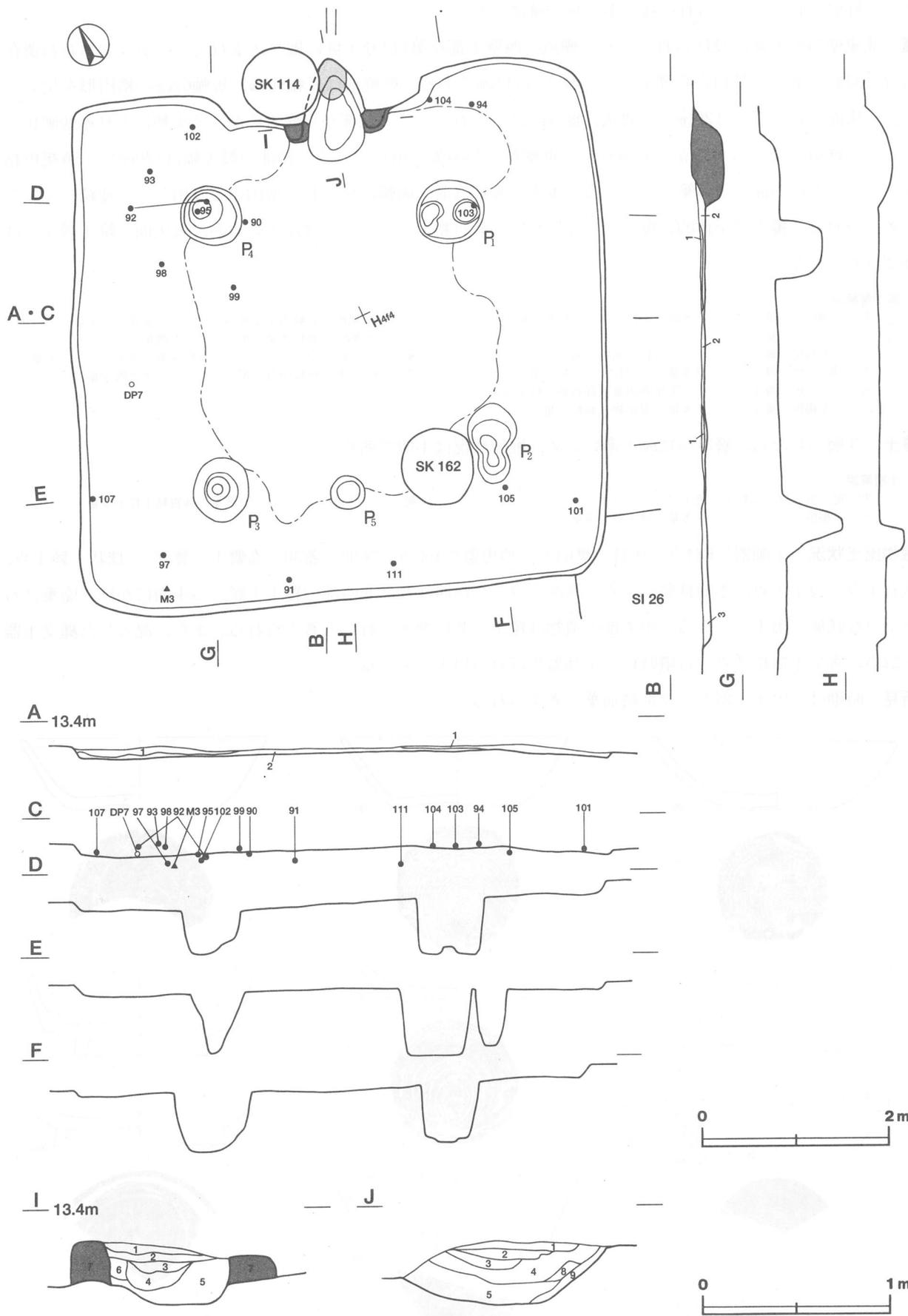
位置 調査区の中央部, H4e3区。標高13.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 南コーナー部で第26号住居跡を掘り込み, 竈の煙道部を第114号土坑に, 部分的に第162号土坑に掘り込まれている。おおむね遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸5.81m, 短軸5.74mの方形である。壁は高さ9~12cmで, 外傾して立ち上がっている。竈が設けられている北東壁の中央部は, 竈の両脇が幅70~80cm, 奥行き40~46cmにわたって凸状に地山が掘り残され, 張り出している。主軸方向はN-22°-Eである。

床 ほぼ平坦である。支柱穴と考えられるP1~4の内側及び竈の前面はよく踏み固められている。

ピット 5か所。P1~4は配置から支柱穴と考えられる。深さは51~63cmである。P5は南西壁寄りの中央部にあり, 竈に対峙しているため, 出入り口施設に関係するピットと考えられる。深さ26cmである。また, P



第68图 第25号住居跡実测图

4では柱痕，P 1～3では柱の抜き取り痕が確認されている。

竈 北東壁の中央部に設けられている。煙道の西壁上部を第114号土坑に掘り込まれているが、おおむね遺存状況は良好である。焚口から煙道までの長さは111cmである。燃焼部は長軸90cm，短軸62cmの楕円形を呈している。床面からの深さは20cmで，皿状に掘りくぼめられている。北部から煙道にかけて火熱により赤変硬化している。煙道はなだらかに立ち上がり，北東壁外に25cm張り出している。袖部の最大幅は120cmで，黄褐色粘土ブロックと砂の混土で構築されている。本来，袖部は竈の両脇に見られる地山の張り出しから連続していたと考えられる。覆土は全体的に焼土ブロックや灰，砂質粘土ブロックを含んでいるが，火床面や焼土層などは確認されていない。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------|
| 1 明赤褐色 焼土ブロック多量，砂粒中量，炭化物・粘土粒子少量 | 6 にぶい赤褐色 砂粒中量，焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 にぶい赤褐色 焼土ブロック・炭化物・砂粒少量 | 7 にぶい赤褐色 砂粒多量，焼土ブロック微量 |
| 3 赤褐色 焼土ブロック多量，炭化粒子・砂粒少量 | 8 褐色 ロームブロック・砂粒中量，焼土ブロック少量 |
| 4 灰赤色 焼土ブロック・炭化物中量，砂質粘土粒子少量 | 9 赤灰色 砂粒中量，焼土ブロック・炭化物少量 |
| 5 にぶい赤褐色 焼土ブロック多量，炭化物・砂粒少量 | |

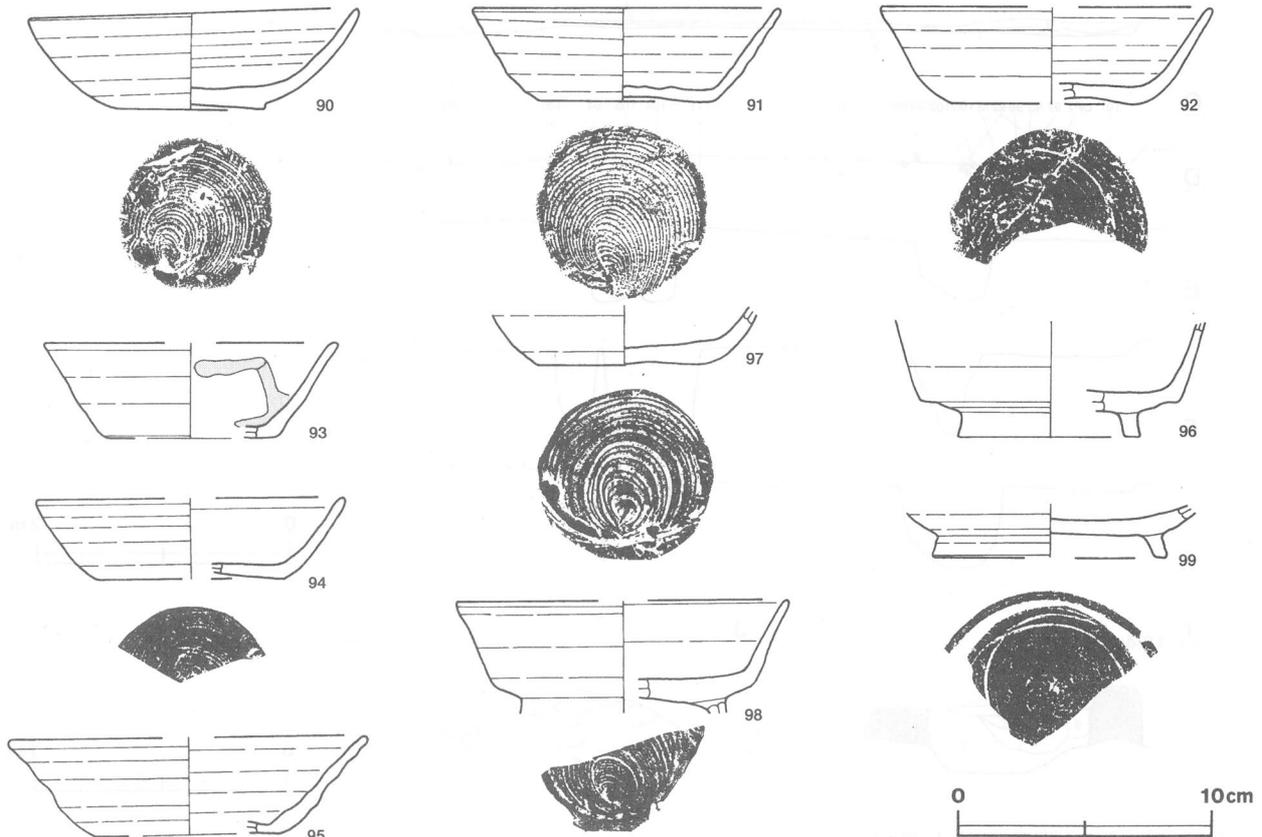
覆土 3層からなる。層厚が12cmと薄いため，堆積状況は不明である。

土層解説

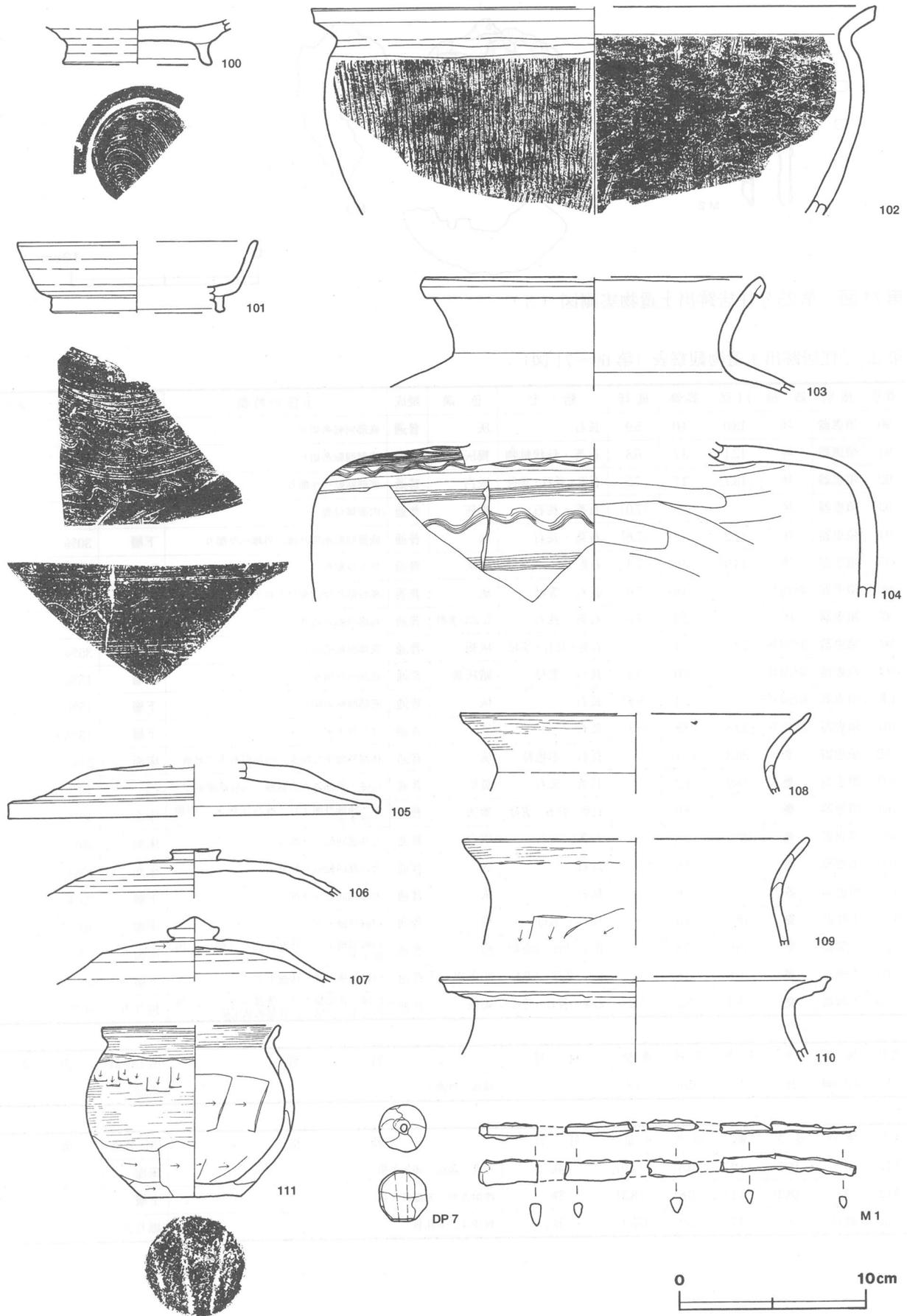
- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量 | 3 褐色 ロームブロック多量，砂質粘土粒子少量 |
| 2 にぶい褐色 ロームブロック多量，焼土粒子少量 | |

遺物出土状況 土師器片684点（坏41，甕643），須恵器片160点（坏93，蓋30，高盤1，甕36），球状土錘1点，砥石1点，刀子1点，不明鉄製品1点，鉄滓1点が，南西部及び北西部の覆土下層から床面にかけて廃棄されたような状態で出土している。中央部の遺物は覆土と共に削平されたと考えられる。また，混入した縄文土器片22点，弥生土器片2点，古墳時代の土師器片77点が出土している。

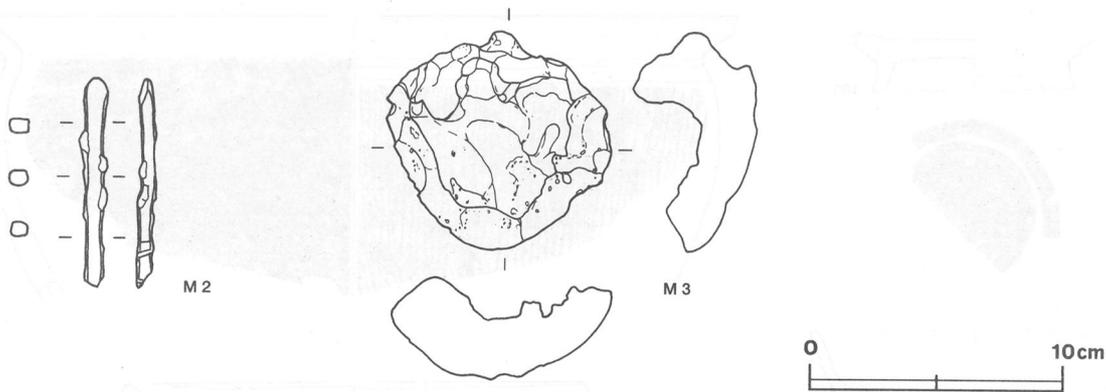
所見 時期は，出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第69図 第25号住居跡出土遺物実測図（1）



第70图 25号住居跡出土遺物実測図(2)



第71図 第25号住居跡出土遺物実測図(3)

第25号住居跡出土遺物観察表(第69~71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
90	須恵器	坏	13.0	4.0	5.9	長石	灰	普通	底部回転糸切り	床面	95%
91	須恵器	坏	12.1	3.7	6.8	石英・針状鉱物	褐灰	普通	底部回転糸切り	床面	85%
92	須恵器	坏	[13.1]	3.7	[7.5]	石英・長石・雲母	灰白	普通	底部回転ヘラ削り	下層・P4	60%
93	須恵器	坏	-	3.8	[7.0]	石英・長石	褐灰	普通	内面煤付着	下層	45%
94	須恵器	坏	[12.2]	3.2	[7.6]	石英・長石	灰	普通	底部回転糸切り後、外縁ヘラ削り	下層	30%
95	須恵器	坏	[14.0]	3.9	[7.4]	石英・長石・雲母	褐灰	普通	ロクロ整形	P4	25%
96	須恵器	高台付坏	-	(3.6)	[7.0]	長石・雲母	灰	普通	高台貼り付け後ロクロナデ	床面	15%
97	須恵器	坏	-	(2.3)	7.0	石英・長石	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	掘り方	20%
98	須恵器	高台付坏	[13.2]	(4.4)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	底部回転糸切り	中層	35%
99	須恵器	高台付坏	-	(2.0)	9.2	長石・雲母	暗灰黄	普通	底部ヘラ削り	下層	15%
100	須恵器	高台付坏	-	(2.4)	[9.8]	長石	灰	普通	底部回転糸切り	下層	15%
101	須恵器	高台付坏	[12.8]	3.8	[9.1]	長石	灰	普通	ロクロナデ	下層	15%
102	須恵器	甕	[30.3]	(11.1)	-	長石・赤色粒	灰	普通	体部外面平行叩き、内面凹形当て具痕	床面	5%
103	須恵器	甕	[18.0]	(6.2)	-	石英・長石	黄灰	普通	口縁~頸部外面自然釉、口唇部摩滅	P1	10%
104	須恵器	甕	-	(8.6)	-	石英・長石・雲母	紫灰	普通	肩~体部外面平行・波状沈線文、内面ヘラナデ	床面	10%
105	須恵器	蓋	[20.0]	(2.8)	-	石英・長石	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	20%
106	須恵器	蓋	-	(2.6)	-	長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	25%
107	須恵器	蓋	-	(3.6)	-	長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	下層	25%
108	土師器	甕	[18.8]	(4.3)	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ	床面	10%
109	土師器	甕	[18.6]	(5.8)	-	長石・雲母・赤色粒	橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ	床面	5%
110	土師器	甕	[20.8]	(4.6)	-	長石・雲母・赤色粒	明赤褐	普通	口縁部横ナデ、体部ナデ	下層	5%
111	土師器	甕	[9.4]	9.2	5.2	石英・長石・雲母	褐灰	普通	口縁~体部横ナデ、体部ヘラナデ、外面下半ヘラ削り、底部板状圧痕	掘り方	90%

番号	種別	径	長さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP7	球状土鐘	2.6	2.7	0.6	15.8	-	球体、外面ナデ	床面	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	刀子	(16.7)	(1.4)	(0.8)	(14.0)	鉄	刀身~基部、切先欠損	床面	
M2	釘	(8.3)	(1.1)	(0.8)	(8.3)	鉄	断面方形、先端部欠損	下層	
M3	鉄滓	8.1	8.7	5.0	375.4	鉄	碗状滓、多孔質	掘り方	

第28号住居跡 (第95図)

位置 調査区の北東部, G 6 f6区。標高13.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第51号住居に掘り込まれ, 竈の煙道部の一部を残しているだけである。

竈 袖部及び燃焼部は完全に破壊されている。残存する煙道部の一部は最大長43cm, 最大幅58cmの三角形を呈し, なだらかに立ち上がっている。覆土は2層からなり, 焼土ブロックを含む土層が堆積している。

竈土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック少量

2 黒褐色 焼土ブロック多量

所見 本住居は竈の煙道部の一部を確認したにすぎず, 詳細は不明である。第51号住居に掘り込まれていることから, 時期は8世紀末葉以前と考えられる。

第29号住居跡 (第72・73図)

位置 調査区の中央部, H 4 f7区。標高12.9mの台地平坦部に位置する。

重複関係 第170号土坑に北西コーナー部を掘り込まれている。全体的に削平を受けて, 遺存状況は不良である。特に北壁の一部及び南部は完全に削平されている。竈が北壁と東壁の2か所で確認されたことから, 2軒の住居の重複と推測されたが, 土層観察の結果, 竈の造り替えと判断した。

規模と形状 長軸5.22m, 推定される短軸4.75mの方形と考えられる。壁は高さ10~12cmで外傾して立ち上がっている。古期と考えられる竈1を通る主軸方向はN-15°-E, 新时期と考えられる竈2を通る主軸方向はN-99°-Eである。

床 ほぼ平坦である。支柱穴と考えられるP1~4の内側と竈の前面を中心によく踏み固められている。

ピット 6か所。P1~4は配置から支柱穴と考えられる。深さは24~43cmである。P5は南壁寄りの中央部にあり, 旧竈に対峙しているため, 出入口施設に関係するピットと考えられる。深さ16cmである。P6は性格不明である。

竈 2か所。北壁の中央部に設けられている竈1は, 完全に破壊され埋め戻されていたため, 古期の竈と考えられる。焚口から煙道までの長さは103cmである。燃焼部は長軸79cm, 短軸57cmの楕円形を呈している。床面からの深さは16cm, 皿状に掘りくぼめられている。煙道はなだらかに立ち上がり, 北壁外に34cm張り出している。上部は火熱により赤変硬化している。覆土は全体的に焼土ブロック, 粘土ブロックを含んでいるが, 火床面や焼土層などは確認できなかった。東壁の中央部やや南側に設けられている竈2は, 焚口から煙道までの長さは110cmである。燃焼部は長軸109cm, 短軸58cmの楕円形を呈している。床面からの深さは8cmで, 皿状に掘りくぼめられている。煙道はなだらかに立ち上がり, 東壁外に35cm張り出している。袖部の最大幅は126cmで, 黄褐色粘土ブロックと砂の混土で構築されている。覆土は全体的に焼土ブロック, 粘土ブロックを含んでおり, 最下層には焼土層が堆積している。以上のことから, 竈1(北竈)から竈2(東竈)への造り替えが考えられる。

竈1土層解説

1 灰黄褐色 砂質粘土ブロック中量, 炭化物・焼土粒子少量

3 褐色 焼土粒子少量, 粘土ブロック微量

2 灰黄褐色 粘土ブロック少量, 焼土ブロック微量

4 にぶい黄褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量

竈2土層解説

1 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量, 炭化物・砂質粘土ブロック少量

3 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子少量

2 暗赤褐色 焼土ブロック多量, 炭化粒子・粘土粒子少量

4 赤褐色 焼土ブロック中量, 炭化物・粘土粒子少量

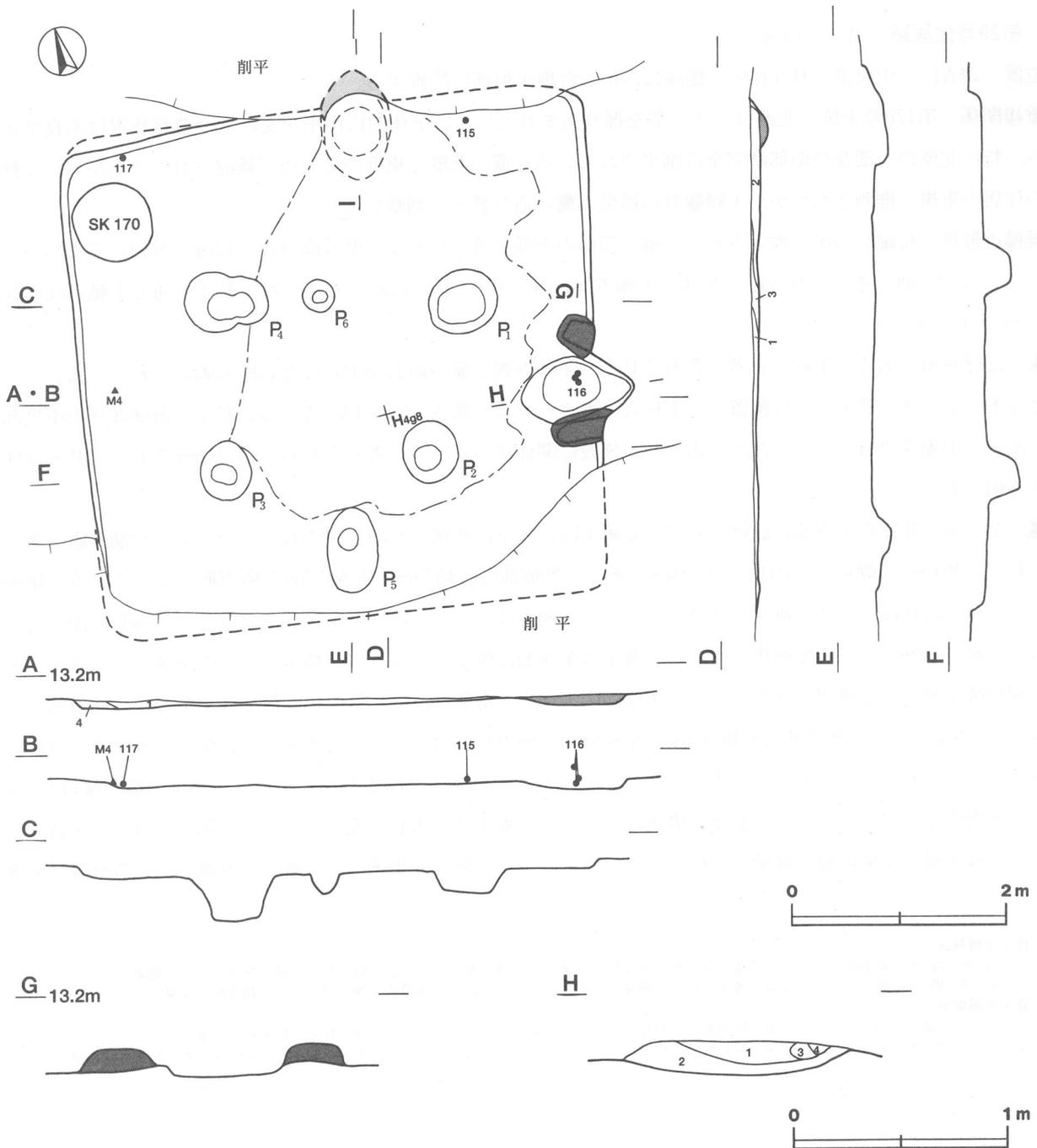
覆土 4層からなる。層厚が12cmと薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

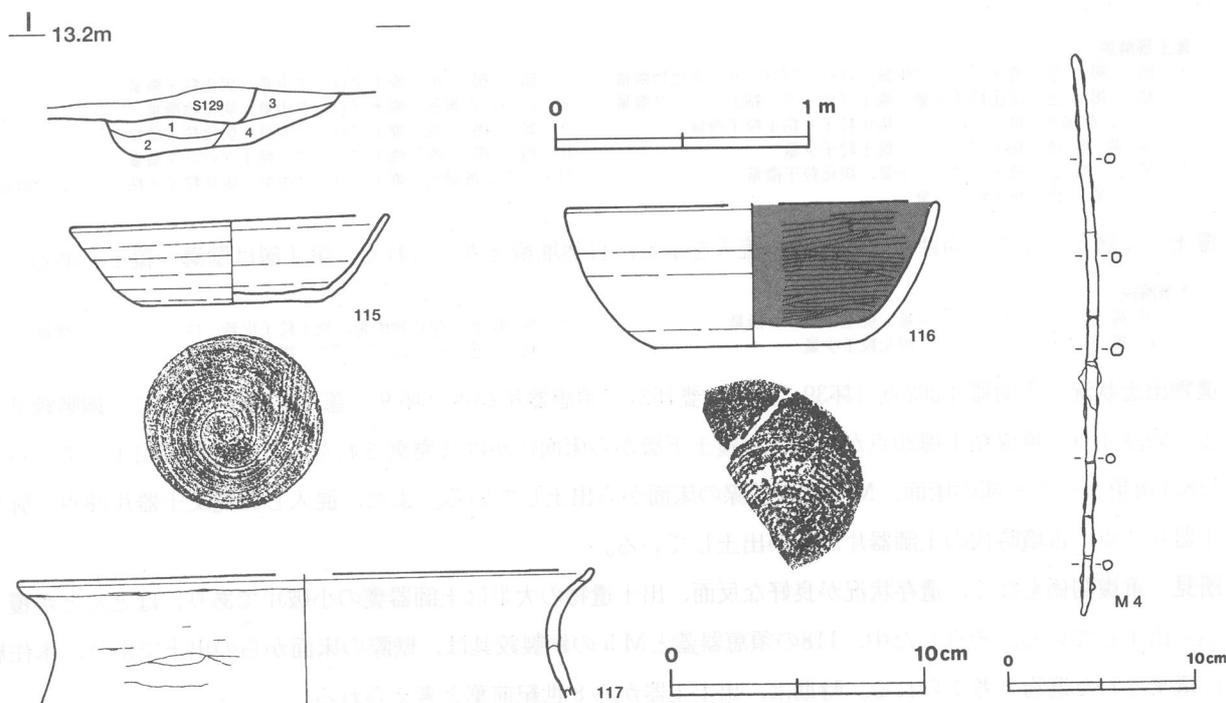
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土ブロック少量 | 4 褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片26点(坏15, 甕11), 須恵器片26点(坏19, 蓋1, 甕6), 鉄製紡錘車1点, 鉄滓2点が, 壁際の覆土下層から床面にかけて出土している。115は北壁際の床面から, 116は竈2の覆土中層から廃棄されたような状態で出土している。また, 混入した縄文土器片8点, 剥片1点, 古墳時代の土師器片11点が出土している。

所見 本住居の竈は, 竈1(北竈)から竈2(東竈)へ造り替えられたと考えられる。時期は, 出土土器から9世紀中葉~後葉と考えられる。



第72図 第29号住居跡実測図



第73図 第29号住居跡・出土遺物実測図

第29号住居跡出土遺物観察表 (第73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
115	須恵器	坏	12.5	3.4	7.1	石英・長石	灰	普通	底部回転ヘラ削り	床面	90%
116	土師器	坏	[14.6]	5.6	8.0	雲母・赤色粒	橙	普通	内面ヘラ磨き, 黒色処理, 底部回転糸切り	竈覆土	40%
117	土師器	甕	[23.0]	(5.1)	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部ナデ	床面	5%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M4	軸棒	29.6	1.2	0.6	26.8	鉄	断面方形, 紡輪欠損	床面	

第33号住居跡 (第74・75図)

位置 調査区の中央部, H 4 b0区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

確認状況 重複及び攪乱や削平もなく, 遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸4.56m, 短軸4.33mの方形である。壁は高さ20~30cmで, 外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-15°-Eである。

床 ほぼ平坦である。支柱穴と考えられるP 1~4の内側及び竈の前面はよく踏み固められている。壁溝は南東及び南西コーナー部を除いてめぐっている。深さは2~16cmで, 断面形はU字状を呈している。

ピット 5か所。P 1~4は配置から支柱穴と考えられる。深さは30~42cmである。P 5は南壁寄りの中央部にあり, 竈に対峙しているため, 出入口施設に関係するピットと考えられる。深さ28cmである。また, P 1では柱痕, P 2~4では柱の抜き取り痕が確認されている。

竈 北壁の中央部に設けられている。焚口から煙道までの長さは105cmである。燃焼部は長軸74cm, 短軸47cmの楕円形を呈している。床面からの深さは18cmで, 皿状に掘りくぼめられている。火床面は第10層上面と考えられるが, 硬化面などは確認されていない。煙道はなだらかに立ち上がり, 北壁外に59cm張り出している。袖部の最大幅は95cmで, 黄褐色粘土ブロックで構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックや粘土ブロックを

含んでいる。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------|-----------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 | 7 暗褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 炭化粒子少量, 焼土ブロック・粘土ブロック微量 | 8 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化物微量 |
| 3 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 | 9 暗褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 4 灰黄褐色 | 粘土ブロック・焼土粒子少量 | 10 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 11 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化粒子・粘土ブロック微量 |
| 6 暗褐色 | 焼土粒子少量 | | |

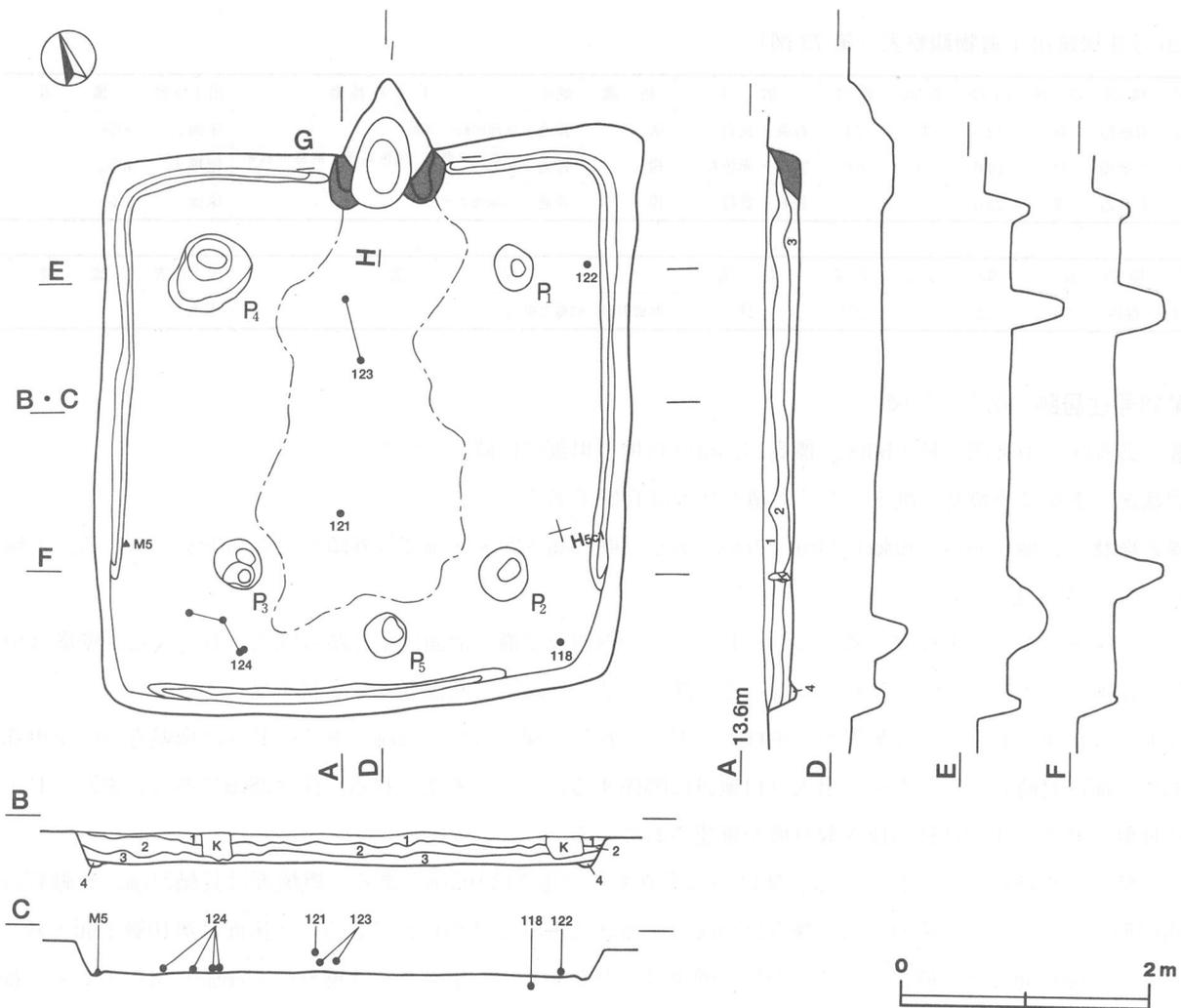
覆土 4層からなる。周囲からの土砂の流入を示し, 自然堆積と考えられる。第4層は壁溝の覆土である。

土層解説

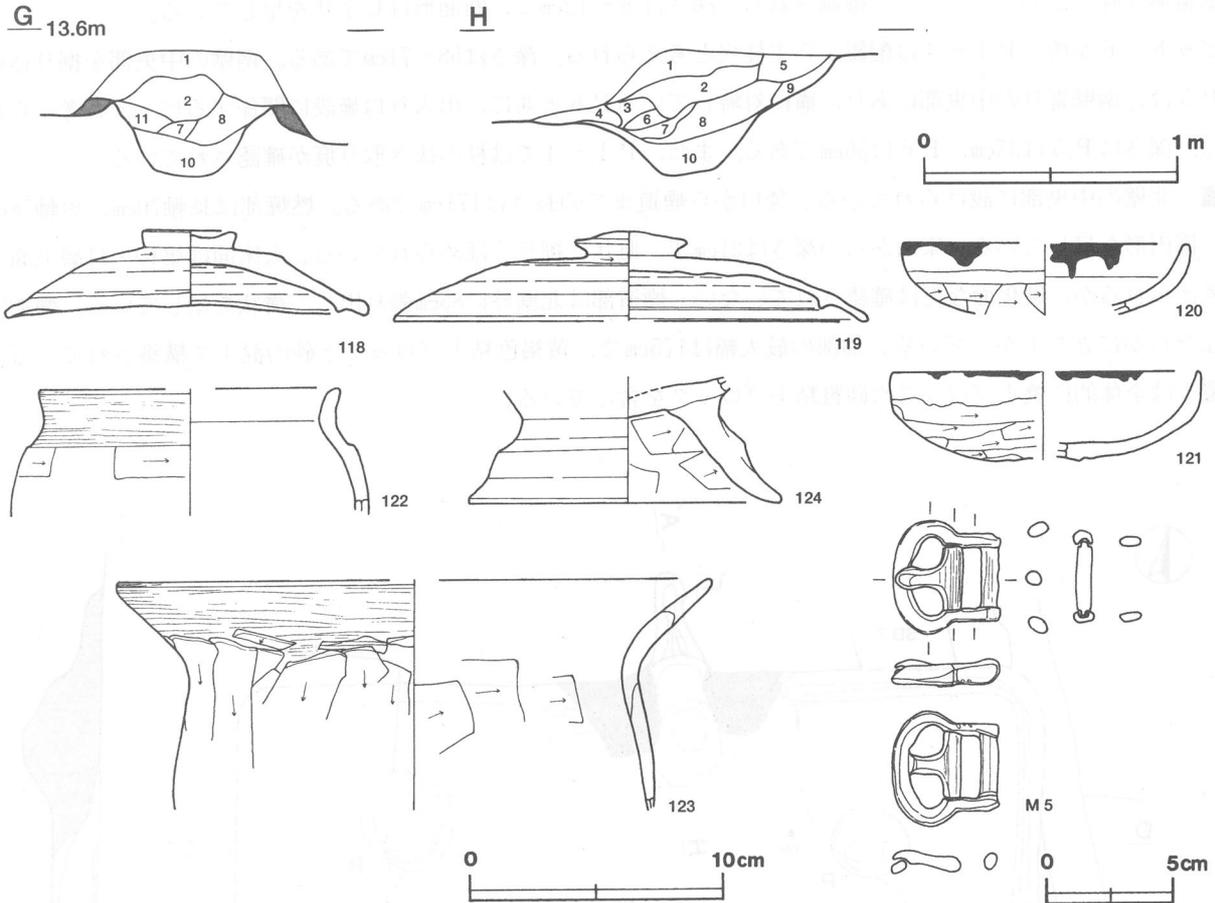
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 3 黒褐色 | 炭化物中量, 焼土粒子少量, ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片202点(坏39, 鉢1, 甕162), 須恵器片23点(坏9, 蓋4, 壺2, 甕8), 銅製鉸具1点, 鉄滓4点, 焼成粘土塊20点が, 南部の覆土下層から床面にかけて廃棄されたような状態で出土している。118は南東コーナー部の床面, M5は西壁際の床面から出土している。また, 混入した縄文土器片38点, 弥生土器片3点, 古墳時代の土師器片20点が出土している。

所見 重複関係もなく, 遺存状況が良好な反面, 出土遺物の大半は土師器甕の小破片であり, ほとんどが覆土から出土している。そうした中, 118の須恵器蓋とM5の銅製鉸具は, 壁際の床面からの出土であり, 本住居に遺棄された遺物と考えられる。時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第74図 第33号住居跡実測図



第75図 第33号住居跡・出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表 (第75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
118	須恵器	蓋	14.3	3.4	-	石英・長石	黄灰	普通	天井部ヘラ削り	床面	95%
119	須恵器	蓋	[19.0]	3.5	-	長石・雲母・赤色粒	にぶい褐	普通	天井部ヘラ削り	床面	25%
120	土師器	坏	[11.4]	(2.8)	-	石英・長石	明赤褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り	床面	煤付着 15%
121	土師器	坏	[12.2]	(3.5)	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り	中層	煤付着 20%
122	土師器	鉢	[11.8]	(5.0)	-	石英・雲母	黒褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り	下層	10%
123	土師器	甕	[23.5]	(9.1)	-	長石	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	下層	15%
124	土師器	台付甕	-	(5.0)	12.3	長石・雲母	橙	普通	台部外面上半指頭ナデ, 下半横ナデ, 内面ヘラナデ	床面	20%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M5	鉸具	4.2	4.5	1.1	37.6	銅	弓金具固定, 刺金可動式, 馬具	床面	

第35号住居跡 (第76~78図)

位置 調査区の北東部, H 5 c2区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 西部で第34号住居跡を掘り込み, 東部を第37号住居に, 西壁の一部を第6号溝に掘り込まれているが, 遺存状況は比較的良好である。

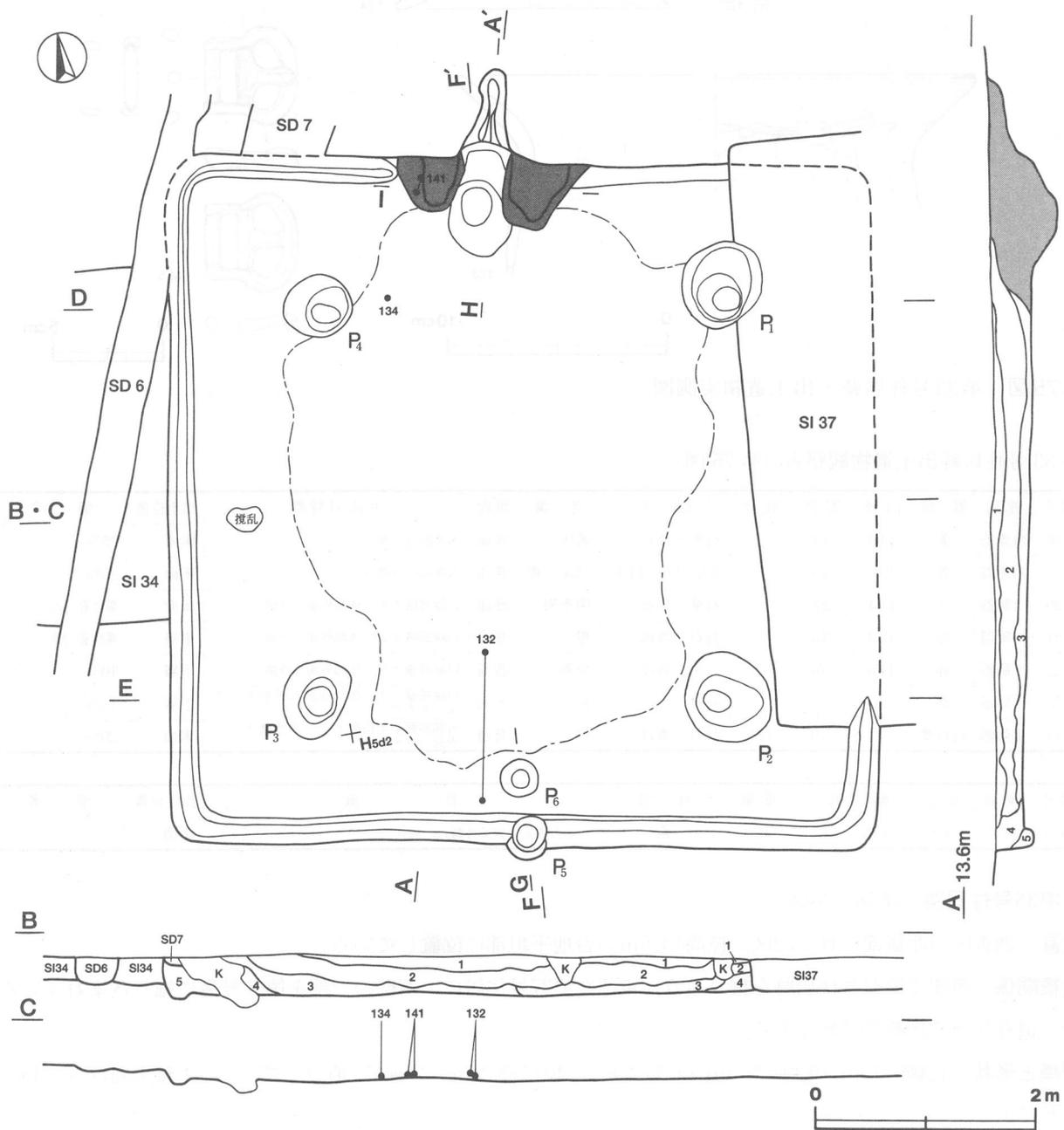
規模と形状 長軸6.45m, 短軸6.22mの方形である。壁は高さ26~30cmで, 直立している。主軸方向はN-14°-Eである。

床 ほぼ平坦である。支柱穴と考えられるP1~4の内側及び竈の前面はよく踏み固められている。壁溝は北

壁東側を除いてめぐっていると推測される。深さは8~12cmで、断面形はU字状を呈している。

ピット 6か所。P1~4は配置から支柱穴と考えられる。深さは58~71cmである。南壁の中央部を掘り込むP5は、南壁寄りの中央部にあり、竈に対峙しているP6と共に、出入り口施設に関するピットと考えられる。深さはP5は35cm、P6は56cmである。また、P1~4では柱の抜き取り痕が確認されている。

竈 北壁の中央部に設けられている。焚口から煙道までの長さは171cmである。燃焼部は長軸70cm、短軸58cmの楕円形を呈している。床面からの深さは21cmで、皿状に掘りくぼめられている。火床面は第10・11層上面と考えられるが、硬化面などは確認されていない。煙道部は北壁外に85cm張り出し、溝状を呈している。煙道はなだらかに立ち上がっている。袖部の最大幅は175cmで、黄褐色粘土ブロックと砂の混土で構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックや砂質粘土ブロックを含んでいる。



第76図 第35号住居跡実測図

竈土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量, 焼土ブロック微量	8 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量, 粘土ブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子・砂粒微量	9 褐色	粘土ブロック・砂粒少量, 焼土ブロック微量
3 暗赤褐色	焼土ブロック中量, 粘土ブロック・炭化粒子・砂粒微量	10 褐色	焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
4 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量, 粘土ブロック・炭化物・砂粒微量	11 暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量
5 暗褐色	炭化粒子・砂粒少量, ロームブロック・焼土粒子微量	12 褐色	焼土ブロック・炭化物少量
6 暗褐色	炭化粒子・砂粒少量, ロームブロック・粘土粒子微量	13 暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化物・砂粒中量
7 暗赤褐色	砂粒少量, 焼土ブロック微量	14 にぶい褐色	砂粒多量, ローム粒子・焼土ブロック中量
		15 暗赤褐色	焼土ブロック・砂粒中量, 炭化粒子少量
		16 にぶい褐色	ローム粒子・炭化粒子中量, 焼土粒子・砂粒少量
		17 にぶい褐色	砂粒多量, 炭化物中量, 焼土粒子少量, ロームブロック微量

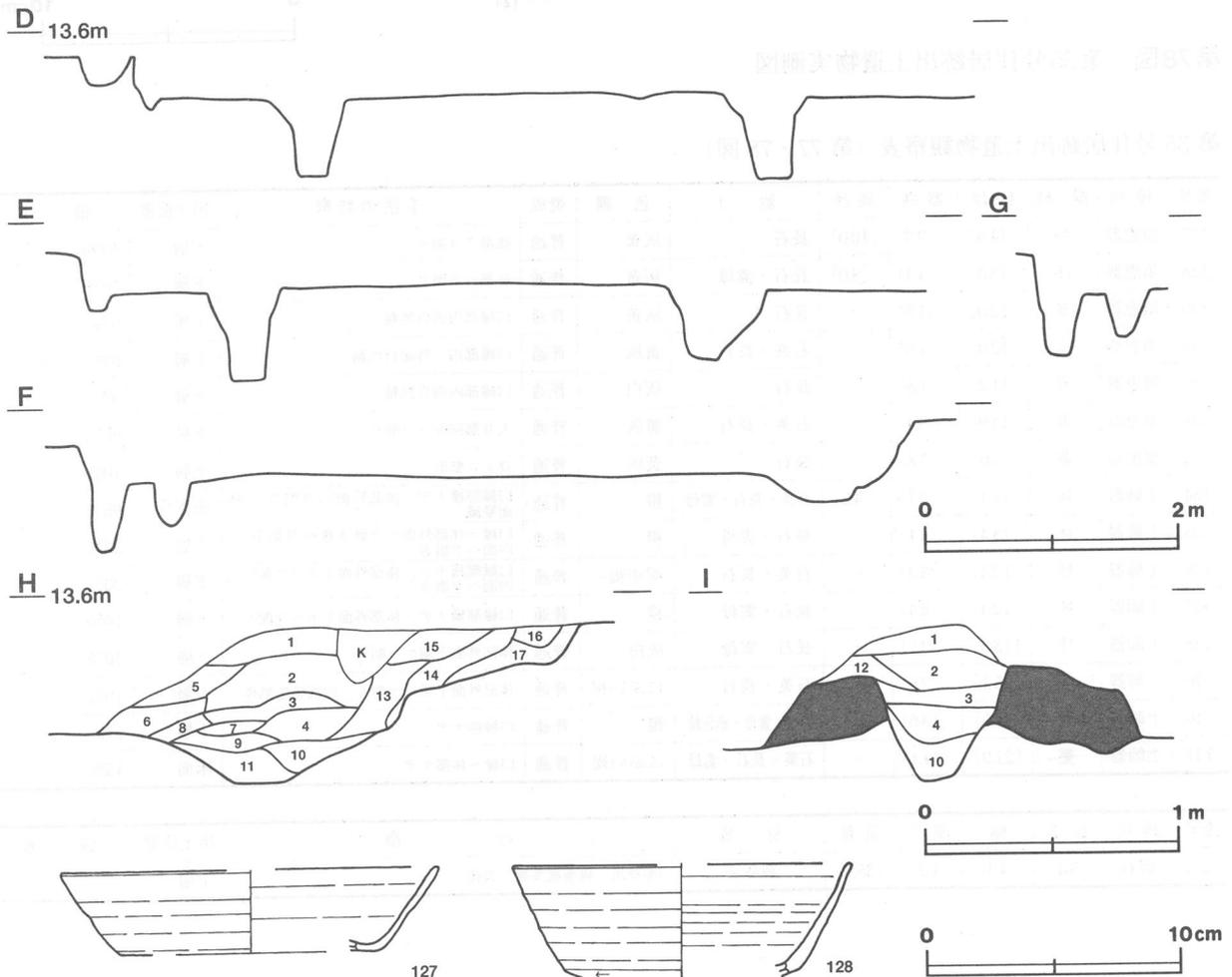
覆土 5層からなる。周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

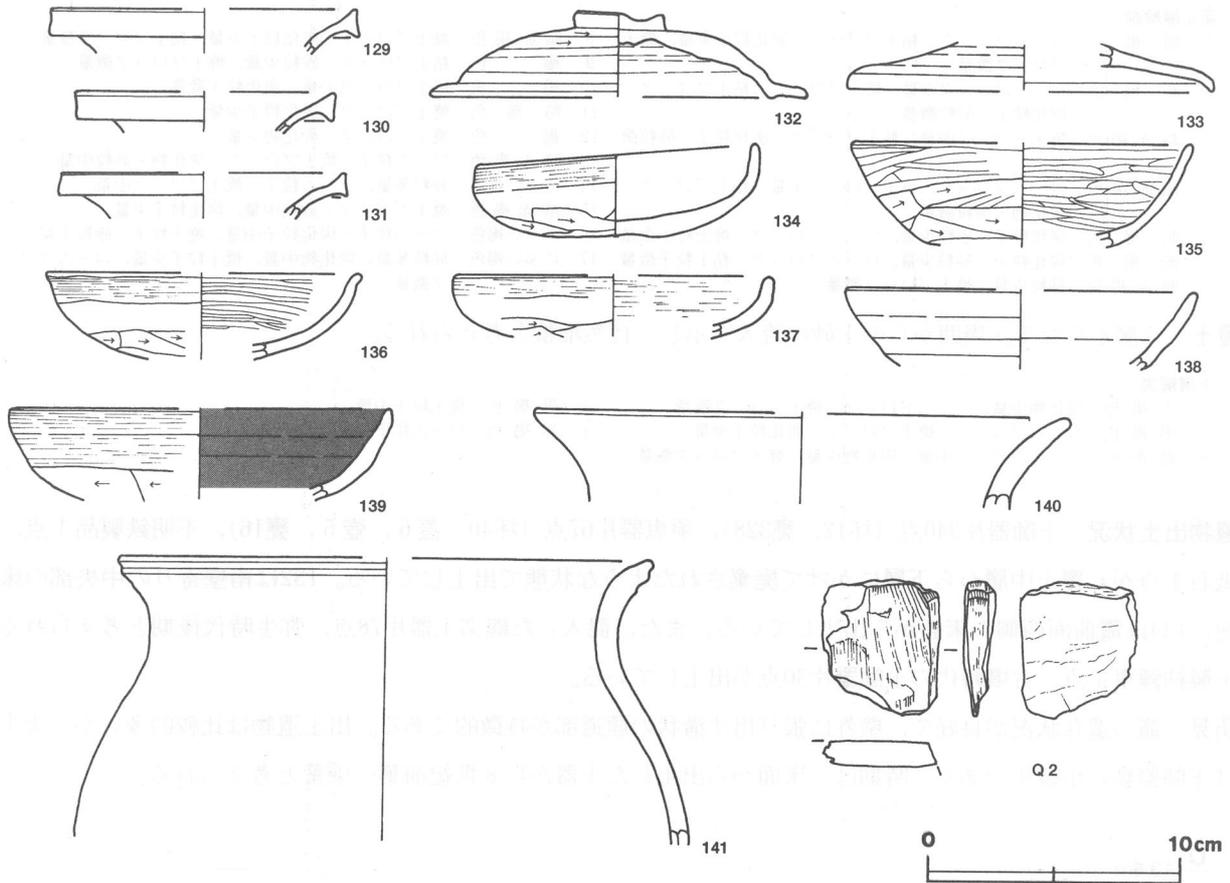
1 黒褐色	炭化物少量, ロームブロック・焼土ブロック微量	4 黒褐色	焼土粒子中量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	5 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化物少量, 焼土ブロック微量		

遺物出土状況 土師器片340点(坏12, 甕328), 須恵器片67点(坏40, 蓋6, 壺5, 甕16), 不明鉄製品1点, 砥石1点が, 覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。132は南壁寄りの中央部の床面, 134は竈前面西側の床面から出土している。また, 混入した縄文土器片78点, 弥生時代後期と考えられる土製紡錘車1点, 古墳時代の土師器片30点が出土している。

所見 竈の遺存状況が良好で, 壁外に張り出す溝状の煙道部が特徴的である。出土遺物は比較的多いが, 大半は土師器甕の小破片である。時期は, 床面から出土した土器から8世紀前葉~中葉と考えられる。



第77図 第35号住居跡・出土遺物実測図



第78図 第35号住居跡出土遺物実測図

第35号住居跡出土遺物観察表 (第77・78図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
127	須恵器	坏	[14.9]	3.3	[10.0]	長石	灰黄	普通	底部ヘラ削り	下層	10%
128	須恵器	坏	[13.3]	(4.4)	[8.0]	長石・雲母	灰黄	普通	底部ヘラ削り	下層	10%
129	須恵器	壺	[12.0]	(1.8)	-	長石	灰黄	普通	口縁部内面自然釉	下層	5%
130	須恵器	壺	[12.0]	(1.8)	-	石英・長石	黄灰	普通	口縁部内・外面自然釉	下層	5%
131	須恵器	壺	[11.2]	(1.8)	-	長石	灰白	普通	口縁部内面自然釉	下層	5%
132	須恵器	蓋	14.9	3.4	-	石英・長石	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	下層	90%
133	須恵器	蓋	[14.0]	(1.8)	-	長石	黄灰	普通	ロクロ整形	下層	10%
134	土師器	坏	11.1	3.7	4.2	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面摩滅	床面	95%
135	土師器	坏	[13.4]	(4.1)	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部体部外面ヘラ磨き後ヘラ削り, 内面ヘラ磨き	下層	25%
136	土師器	坏	[12.4]	(3.3)	-	石英・長石	明赤褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面下半ヘラ削り, 内面ヘラ磨き	下層	20%
137	土師器	坏	[12.4]	(2.4)	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面下半ヘラ削り	下層	10%
138	土師器	坏	[13.8]	(3.1)	-	長石・雲母	灰白	普通	体部外面下端ヘラ削り	下層	10%
139	土師器	坏	[15.1]	(3.6)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面下半ヘラ削り, 内面黒色処理	下層	10%
140	土師器	甕	[21.0]	(3.6)	-	長石・雲母・赤色粒	橙	普通	口縁部ナデ	下層	5%
141	土師器	甕	[21.0]	(11.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部体部ナデ	床面	15%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	砥石	(5.4)	(4.6)	(1.2)	(35.0)	凝灰岩	3面使用, 線条痕多数, 欠損	下層	

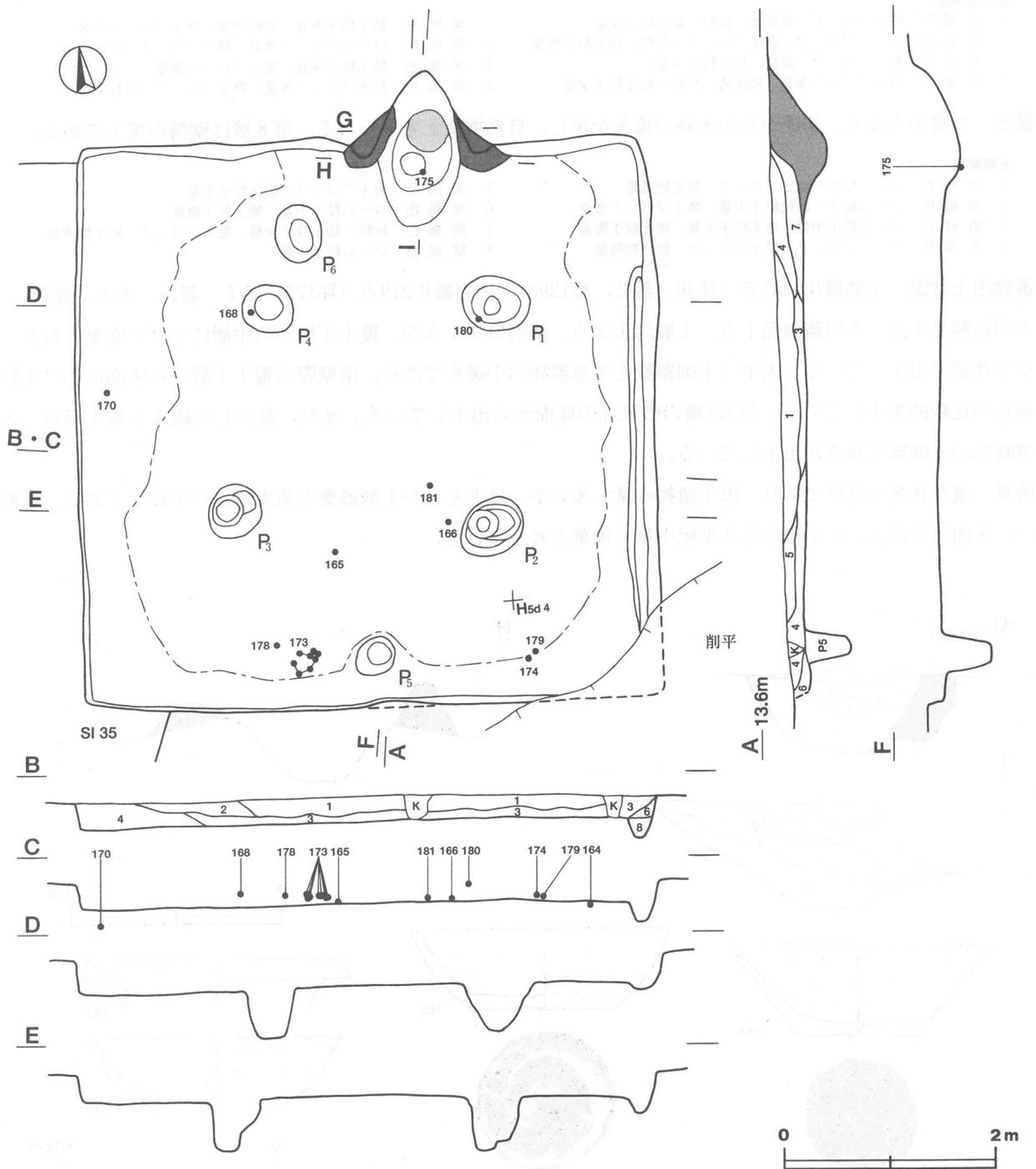
第37号住居跡 (第79~81図)

位置 調査区の北東部, H 5 c3区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 西部で第35号住居跡を掘り込んでいる。南東コーナー部を削平されているものの, 遺存状況は比較的良好である。

規模と形状 長軸5.55m, 短軸5.3mの方形である。壁は高さ16~32cmで, 直立している。主軸方向はN-6°-Eである。

床 ほぼ平坦である。壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は東壁の一部にめぐり, 深さは6~20cmで, 断面形はU字状を呈している。



第79図 第37号住居跡実測図

ピット 6か所。P1～4は配置から支柱穴と考えられる。深さは45～52cmである。P5は南壁寄りの中央部にあり、竈に対峙しているため、出入口施設に関係するピットと考えられる。深さは48cmである。また、P1～4では柱抜き取り痕が確認されている。

竈 北壁の中央部東寄りに設けられている。焚口から煙道までの長さは149cmである。燃焼部は長軸78cm、短軸55cmの楕円形を呈している。床面からの深さは24cmで、皿状に掘りくぼめられている。火床面は北側に偏り、径40cmの円形に赤変硬化している。煙道はなだらかに立ち上がり、壁外に71cm張り出している。袖部の最大幅は160cmで、黄褐色粘土ブロックと砂の混土で構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックや砂質粘土ブロックを含んでいるが、焼土・粘土ブロックの含有は比較的少なく、焼土層などは確認されていない。

竈土層解説

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック・炭化物・砂粒・粘土粒子少量 | 5 褐灰色 粘土粒子多量、砂粒中量、焼土ブロック少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂粒・粘土粒子微量 | 6 褐灰色 ロームブロック多量、焼土ブロック・砂粒少量 |
| 3 黒褐色 焼土ブロック・砂粒・粘土粒子少量 | 7 黒褐色 粘土粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 4 黒褐色 焼土ブロック多量、炭化物・砂粒・粘土粒子少量 | 8 暗褐色 粘土ブロック多量、焼土ブロック・砂粒少量 |

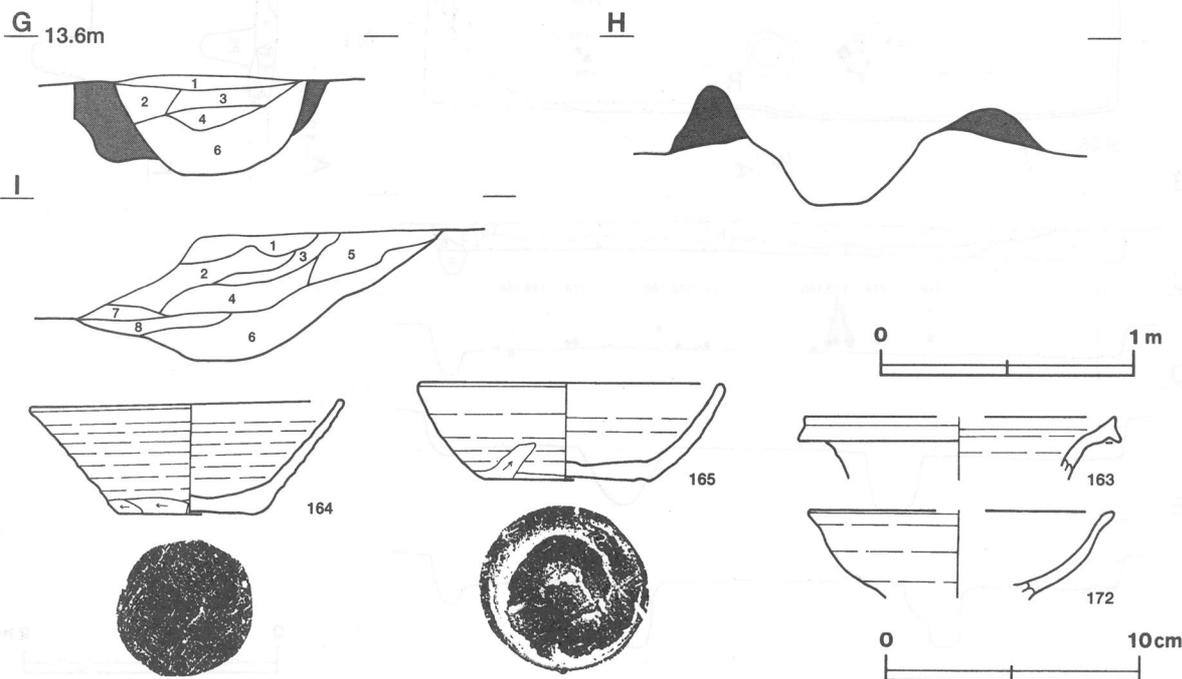
覆土 8層からなる。周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。第8層は壁溝の覆土である。

土層解説

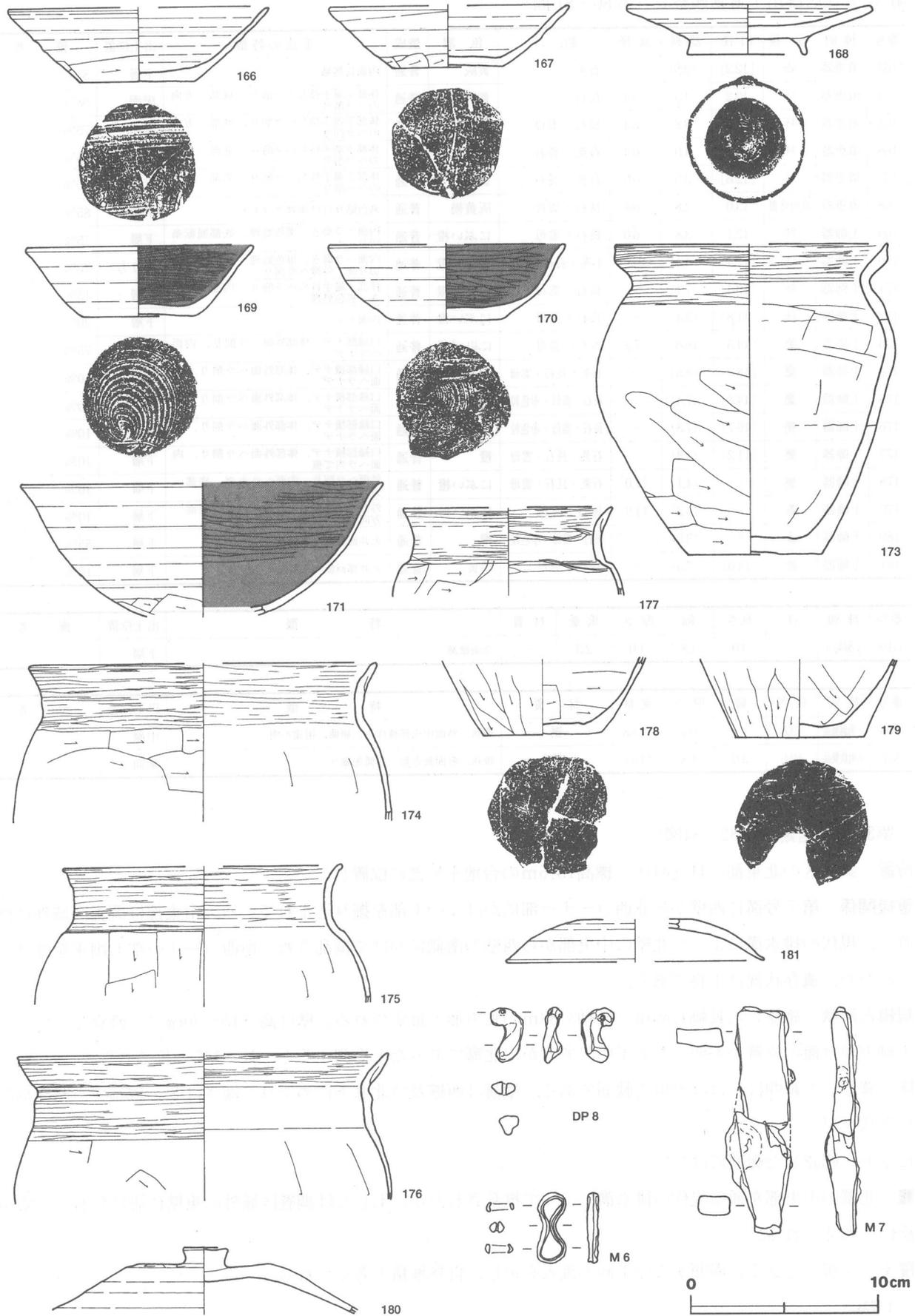
- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化物微量 | 5 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色 砂粒・粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 8 暗褐色 ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師器片1341点(坏46, 蓋2, 甕1293), 須恵器片219点(坏125, 皿1, 蓋11, 壺4, 甕78), 不明鉄製品1点, 不明銅製品1点, 土製勾玉1点, 鞆羽口片1点が、覆土下層から中層にかけて廃棄されたような状態で出土している。大半は土師器甕と須恵器坏の小破片である。南壁際の覆土下層から床面にかけて大形破片が比較的集中している。175は竈の燃焼部の底面から出土している。また、混入した縄文土器片88点, 古墳時代の土師器片36点が出土している。

所見 遺存状況が良好であり、出土遺物の量も多いが、ほとんどが土師器甕と須恵器坏の小破片である。時期は、床面から出土した土器から9世紀中葉～後葉と考えられる。



第80図 第37号住居跡・出土遺物実測図



第81图 第37号住居跡出土遺物実測図

第 37 号住居跡出土遺物観察表 (第 80・81 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
163	須恵器	壺	[12.2]	(2.5)	-	石英	黄灰	普通	内面自然釉	下層	5%
164	須恵器	坏	12.2	4.5	5.4	長石	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	床面	98%
165	須恵器	坏	12.0	3.8	6.4	長石・雲母	にぶい黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	床面	75%
166	須恵器	坏	[14.0]	4.0	6.4	石英・長石	暗灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	床面	45%
167	須恵器	坏	[12.6]	3.3	6.0	石英・長石	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	下層	40%
168	須恵器	高台付皿	13.0	2.8	6.4	長石・雲母	灰黄褐	普通	高台貼り付け後ロクロナデ	下層	85%
169	土師器	坏	12.1	3.8	6.0	長石・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き, 黒色処理, 底部回転糸切り	下層	75%
170	土師器	坏	[12.4]	4.1	[5.9]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き, 黒色処理, 底部回転糸切り後, 外縁ヘラ削り	掘り方	20%
171	土師器	坏	[19.4]	(7.1)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 内面ヘラ磨き, 黒色処理	下層	15%
172	土師器	坏	[11.8]	(3.4)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	内面ナデ	下層	20%
173	土師器	甕	[14.5]	16.6	7.2	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	下層	75%
174	土師器	甕	[18.8]	(8.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	下層	10%
175	土師器	甕	[14.8]	(7.4)	-	長石・雲母・赤色粒	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	下層	10%
176	土師器	甕	[19.7]	(7.8)	-	長石・雲母・赤色粒	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	下層	10%
177	土師器	甕	[11.2]	(4.8)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラ当て痕	下層	10%
178	土師器	甕	-	(4.1)	[7.0]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ, 底部一方向のヘラ削り	下層	10%
179	土師器	蓋	-	(4.2)	11.9	長石・雲母	にぶい橙	普通	外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ, 底部一方向のヘラ削り	下層	10%
180	土師器	蓋	-	(3.5)	-	長石・雲母・赤色粒	橙	普通	天井部回転ヘラ削り	下層	55%
181	土師器	蓋	[14.0]	(2.3)	-	長石・雲母	浅黄	普通	天井部回転ヘラ削り	下層	10%

番号	種別	径	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP8	土製勾玉	-	3.0	1.8	1.0	2.3	-	全面摩滅	下層	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M6	不明銅製品	3.8	1.7	0.7	5.8	銅	環状, 外面中央部稜作出, 屈曲, 用途不明	中層	
M7	不明鉄製品	12.0	3.0	1.8	115.7	鉄	板状, 断面長方形, 片側先細り	床面	

第39号住居跡 (第82~84図)

位置 調査区の北東部, H 5 e1区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第7号溝に西壁から北西コーナー部にかけての上部を掘り込まれている。南東部は調査区域外に位置し, 現代の排水溝によって北壁の中央部から西壁の南側にかけて攪乱され, 南西コーナー部も削平を受けているため, 遺存状況は不良である。

規模と形状 確認した長軸4.65m, 短軸3.88mの長方形と推定される。壁は高さ15~30cmで, 直立している。主軸方向は竈の位置が不明のため不明であるが, 北竈であったと推測すると, N-14°-Eである。

床 確認した範囲は, ほぼ平坦で軟弱である。壁溝は西壁及び北壁下にめぐり, 深さは8~12cmで, 断面形はU字状を呈している。

ピット 確認した範囲にはない。

竈 北壁の中央部を通る現代の排水溝によって攪乱されたか, もしくは調査区域外の東壁に設けられている可能性が考えられる。

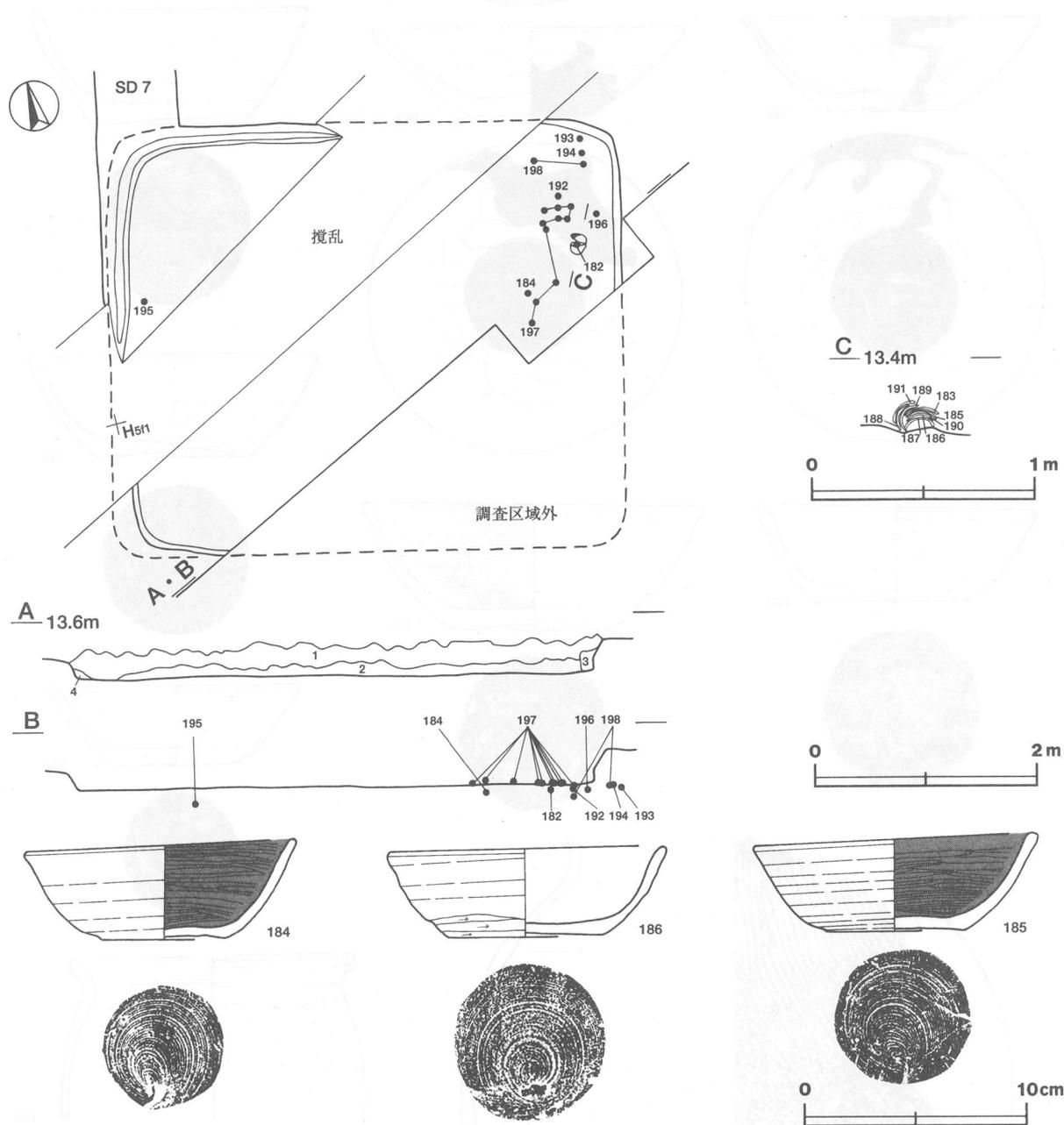
覆土 4層からなる。周囲からの土砂の流入を示し, 自然堆積と考えられる。

土層解説

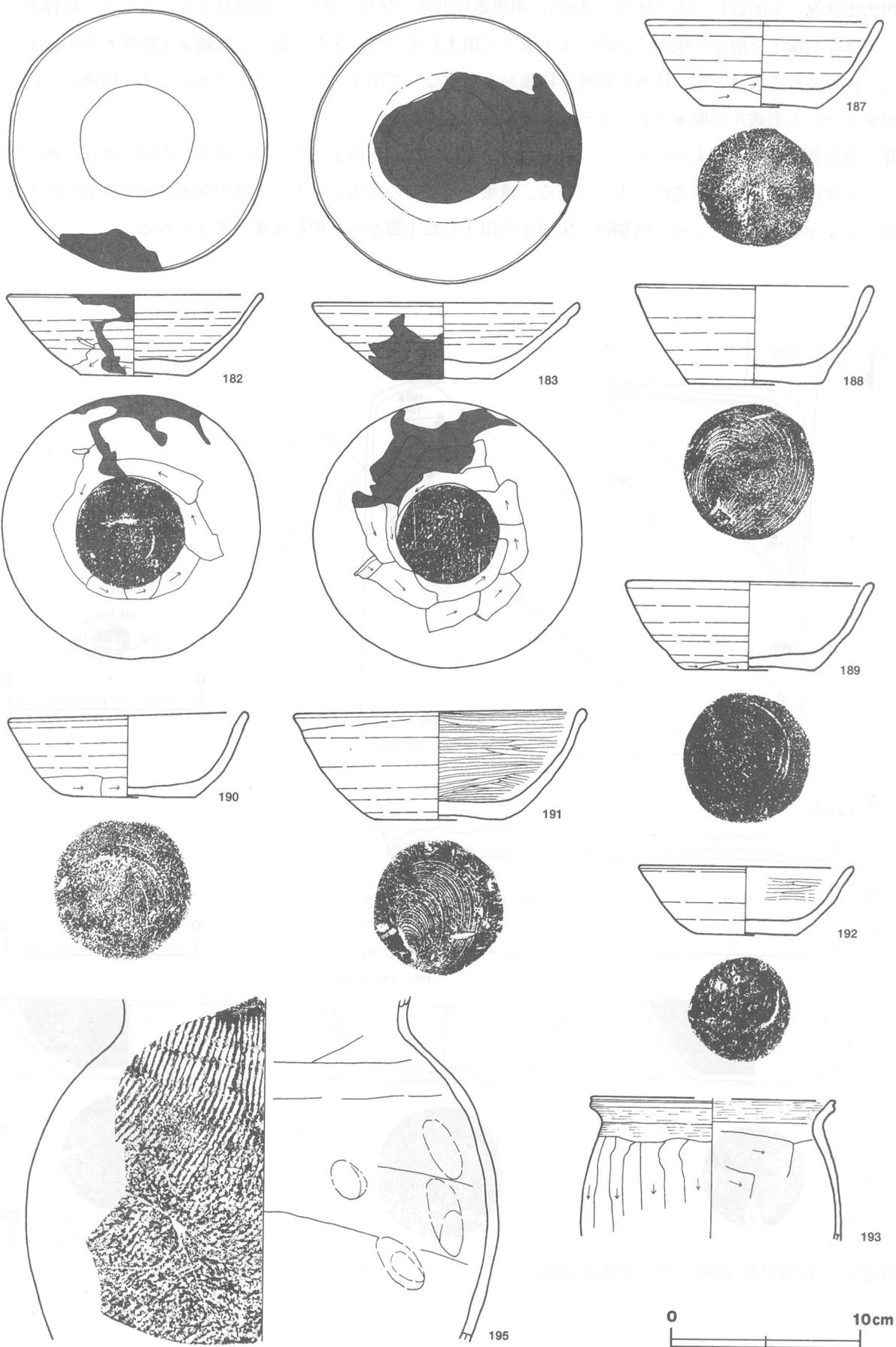
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化材微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片72点（坏12，甕60），須恵器片25点（坏10，甕15），鉄製品3点（刀子1，紡錘車2）が，東壁際の覆土下層から床面にかけてまとまって出土している。また，混入した縄文土器片8点も出土している。注目されるのは，床に伏せた状態で坏類が8点重なって出土していることである。その周囲からは，土師器甕などの大形破片が廃棄されたような状態で出土している。

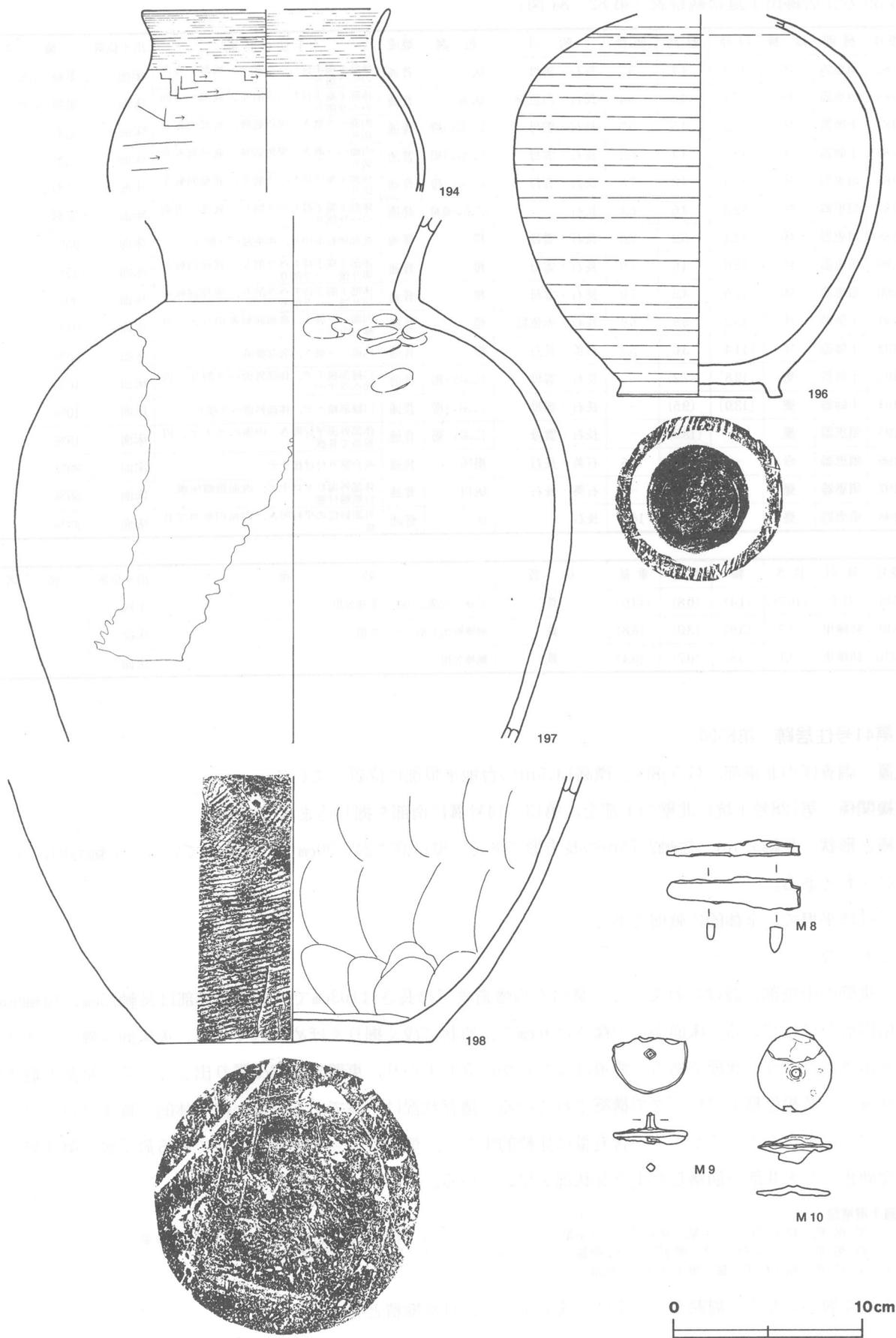
所見 遺存状況は不良にもかかわらず，たくさんの完形の土器が出土している。それらの出土状況は極めて特異で，丁寧に8点の坏類を逆位に重ねている。遺棄されたものと考えられると，土器の保有状況や保管の仕方などを知る上で示唆に富んでいる。時期は，床面から出土した土器から9世紀後葉と考えられる。



第82図 第39号住居跡・出土遺物実測図



第83图 第39号住居跡出土遺物实测图(1)



第84图 第39号住居跡出土遺物実測図(2)

第 39 号住居跡出土遺物観察表 (第 82~84 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
182	須恵器	坏	13.2	4.4	5.7	長石・雲母	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	床面	墨痕 完形
183	須恵器	坏	14.1	4.0	5.4	長石・白色粒	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	床面	墨痕 完形
184	土師器	坏	12.2	4.5	5.7	長石・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き, 黒色処理, 底部回転糸切り	床面	完形
185	土師器	坏	12.5	4.4	6.2	長石・雲母	にぶい褐	普通	内面ヘラ磨き, 黒色処理, 底部回転糸切り	床面	完形
186	須恵器	坏	12.3	4.0	7.8	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部回転糸切り	床面	完形
187	須恵器	坏	12.3	4.6	6.1	長石	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	床面	完形
188	須恵器	坏	12.4	5.2	7.0	長石・雲母	橙	普通	底部回転糸切り, 中央部ヘラ削り	床面	95%
189	須恵器	坏	12.9	4.6	7.9	長石・雲母	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部回転糸切り後, ヘラ削り	床面	95%
190	須恵器	坏	12.5	4.5	7.0	長石・雲母	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部回転糸切り後, ヘラ削り	床面	90%
191	土師器	坏	15.2	5.8	6.9	長石・赤色粒	橙	普通	内面ヘラ磨き, 底部回転糸切り後, 外縁ヘラ削り	床面	95%
192	土師器	坏	[11.4]	3.6	5.3	石英・長石	橙	普通	内面ヘラ磨き, 底部摩滅	床面	55%
193	土師器	甕	[12.8]	(7.2)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	床面	10%
194	土師器	甕	[13.0]	(9.5)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り	床面	10%
195	須恵器	甕	-	(18.0)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	体部外面平行叩き, 内面ヘラナデ, 円形当て具痕	床面	15%
196	須恵器	壺	-	(20.2)	8.6	石英・長石	褐灰	普通	高台貼り付け後ナデ	床面	90%
197	須恵器	甕	-	(27.8)	-	石英・長石	灰白	普通	体部外面ロクロナデ, 内面指頭圧痕, 自然釉付着	床面	50%
198	須恵器	甕	-	(14.1)	14.6	長石	灰	普通	外面斜位の平行叩き, 内面円形当て具痕	床面	35%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M8	刀子	(16.7)	(1.4)	(0.8)	(14.0)	鉄	刀身, 片側, 切先・茎部欠損	下層	
M9	紡錘車	(1.7)	(3.9)	(3.0)	(8.8)	鉄	軸棒断面方形, 上下欠損	床面	
M10	紡錘車	4.1	3.8	(0.7)	(9.4)	鉄	軸棒欠損	床面	

第41号住居跡 (第85図)

位置 調査区の北東部, G 5 j8区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第128号土坑に北壁の上部を, 第13・14号溝に南部を掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.3m, 短軸2.75mの長方形である。壁は高さ24~30cmで, 直立している。主軸方向はN-104°-Eである。

床 ほぼ平坦で, 全体的に軟弱である。

ピット なし。

竈 東壁の中央部に設けられている。焚口から煙道までの長さは103cmである。燃焼部は長軸75cm, 短軸60cmの楕円形を呈している。床面からの深さは6cmで, 皿状に浅く掘りくぼめられている。火床面は確認できず, 掻き出されたような状態である。煙道はなだらかに立ち上がり, 東壁外に53cm張り出している。袖部の最大幅は86cmで, 黄褐色粘土ブロックで構築されている。遺存状況は不良である。覆土は全体的に焼土ブロックや粘土ブロックを含んでいるが, その含有量は比較的少ない。焼土ブロックを主体としている最下層の第4層は, 赤変硬化した天井部が崩落したような状況を呈している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 粘土粒子少量, 焼土ブロック微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量, 炭化物少量
- 5 黒褐色 焼土粒子少量

覆土 4層からなる。周囲からの土砂の流入を示し, 自然堆積と考えられる。

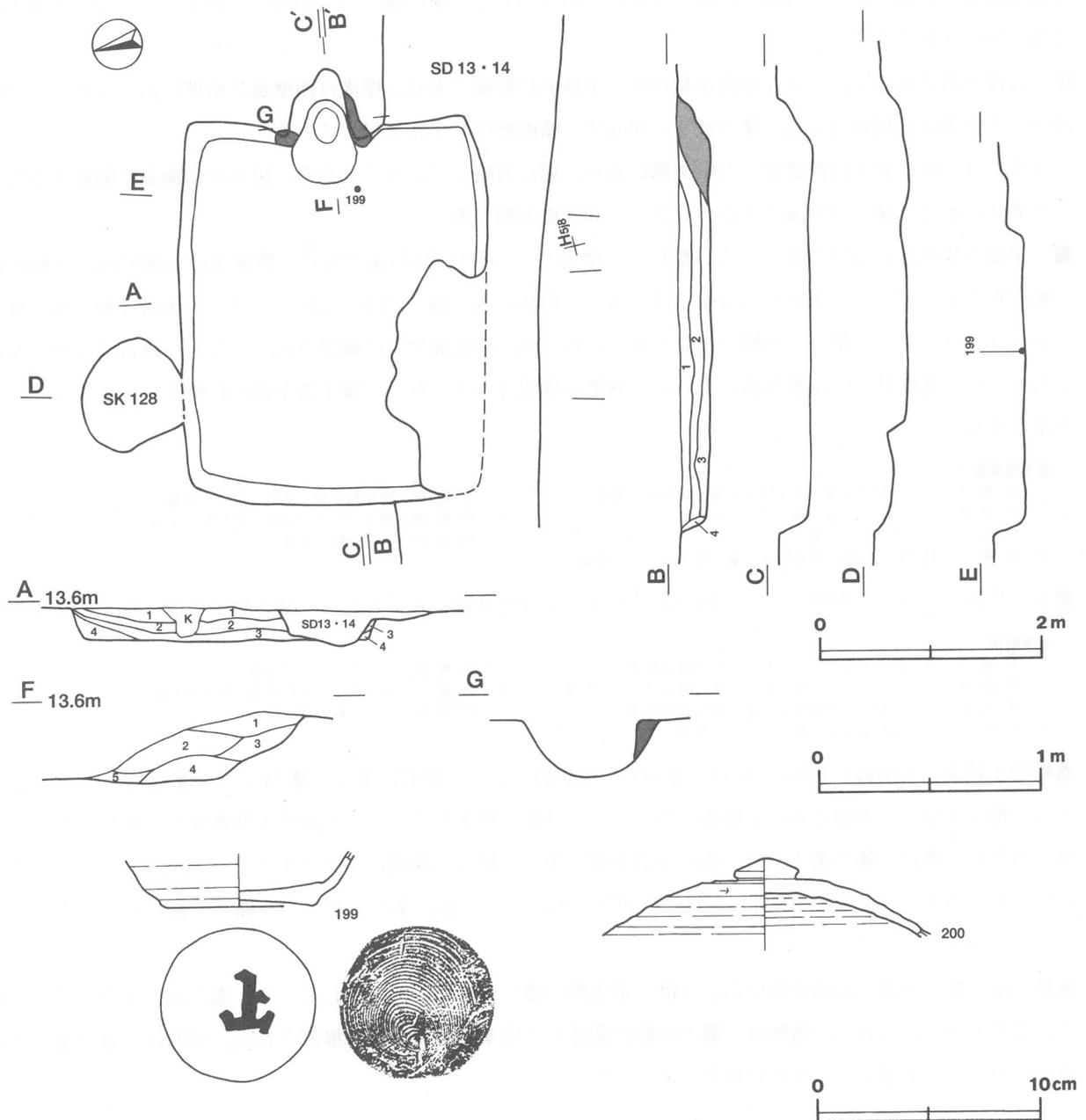
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック多量

- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 明褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片132点（坏2，甕130），須恵器片28点（坏19，蓋4，壺2，甕3）が，覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。大半は土師器甕の小破片である。199は底部に「上」と墨書された須恵器坏で，竈の前面の床面から出土している。また，混入した縄文土器片8点，古墳時代前期の土師器片9点が出土している。

所見 本住居はかなり小形で，床面積は9.1㎡である。内部施設もなく，床は全体的に軟弱である。出土遺物は，ほとんどが土師器甕の小破片である。時期は，出土土器から9世紀中葉～後葉と考えられる。



第85図 第41号住居跡・出土遺物実測図

第41号住居跡出土遺物観察表（第85図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
199	須恵器	坏	-	(2.4)	6.7	長石	浅黄	普通	底部回転糸切り	床面	墨書・上10%
200	須恵器	蓋	-	(3.6)	-	長石・雲母	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	25%

第43号住居跡（第86・87図）

位置 調査区の北東部，H 5 a0区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第9・10号掘立柱建物跡の柱穴を掘り込んでいる。また，東壁の南側上部から西壁の南側上部及び竈の南側半分を，第13・14号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.42m，短軸3.73mの長方形と考えられる。壁は高さ35～45cmで，直立している。主軸方向はN-105°-Eである。

床 ほぼ平坦であるが，小さな起伏が見られ，全体的に軟弱である。壁溝は西壁及び南壁に沿ってめぐり，南西コーナー部で途切れている。深さは5～10cmで，断面形はU字状を呈している。

ピット 3か所。P1は西壁寄りの中央部にあり，竈に対峙していることから，出入口施設に関するピットと考えられる。深さは14cmである。P2・3は性格不明である。

竈 東壁の中央部に設けられている。焚口から煙道までの長さは144cmである。燃焼部は長軸93cm，短軸45cmの楕円形を呈している。床面からの深さは8cmで，皿状に浅く掘りくぼめられている。火床面は最も多く焼土ブロックを含んでいる第5・6層の下面と考えられるが，硬化面などは確認されていない。煙道はなだらかに立ち上がり，北壁外に69cm張り出している。袖部は確認されていない。覆土は全体的に焼土ブロックなどの含有量が少ない。

竈土層解説

- | | |
|------------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量 | 5 黒褐色 炭化物少量，焼土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量，焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 焼土ブロック中量，炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 焼土ブロック多量 | 7 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 4 暗褐色 粘土粒子中量，炭化粒子少量，焼土ブロック微量 | |

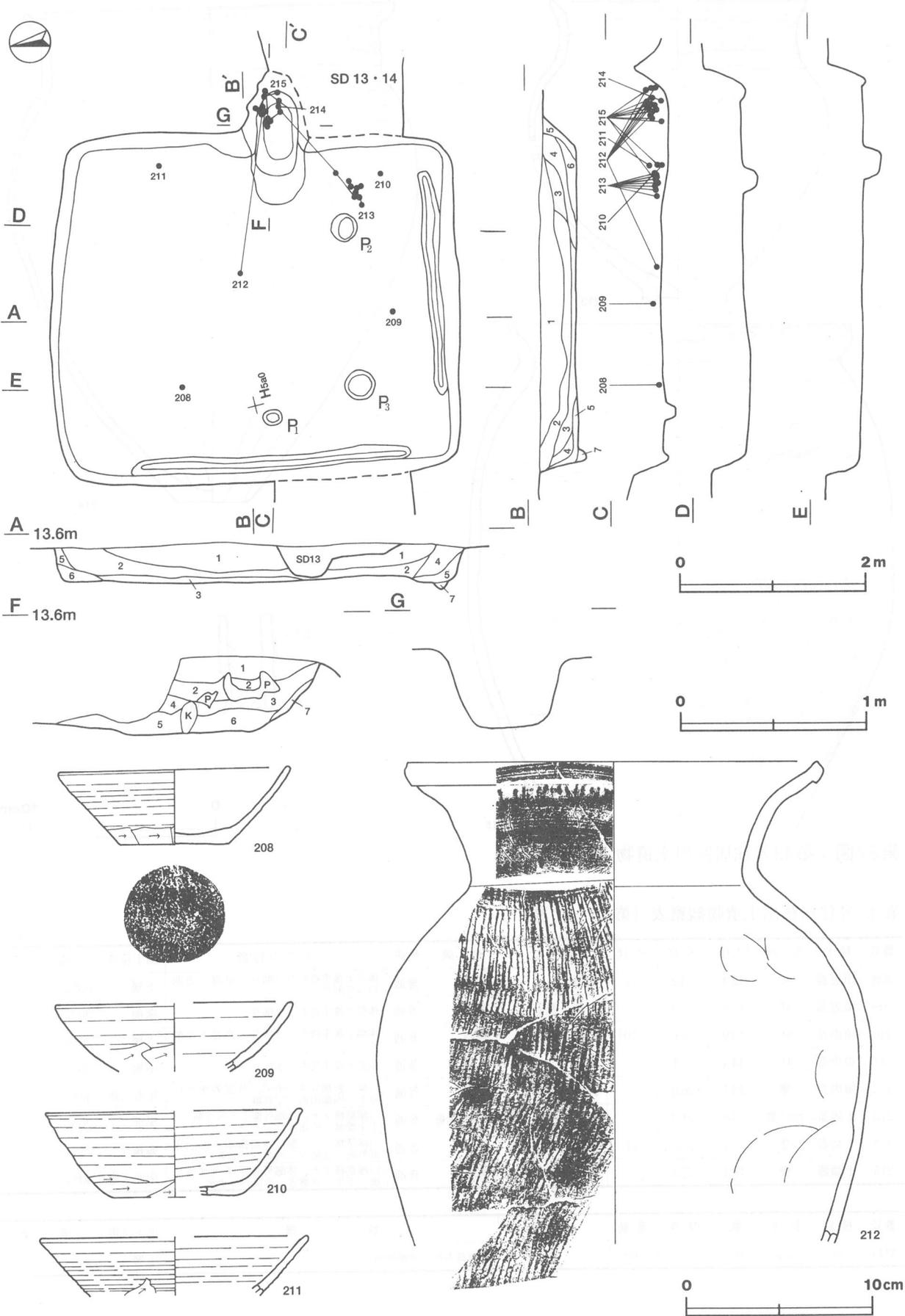
覆土 7層からなる。周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。第7層は壁溝の覆土である。

土層解説

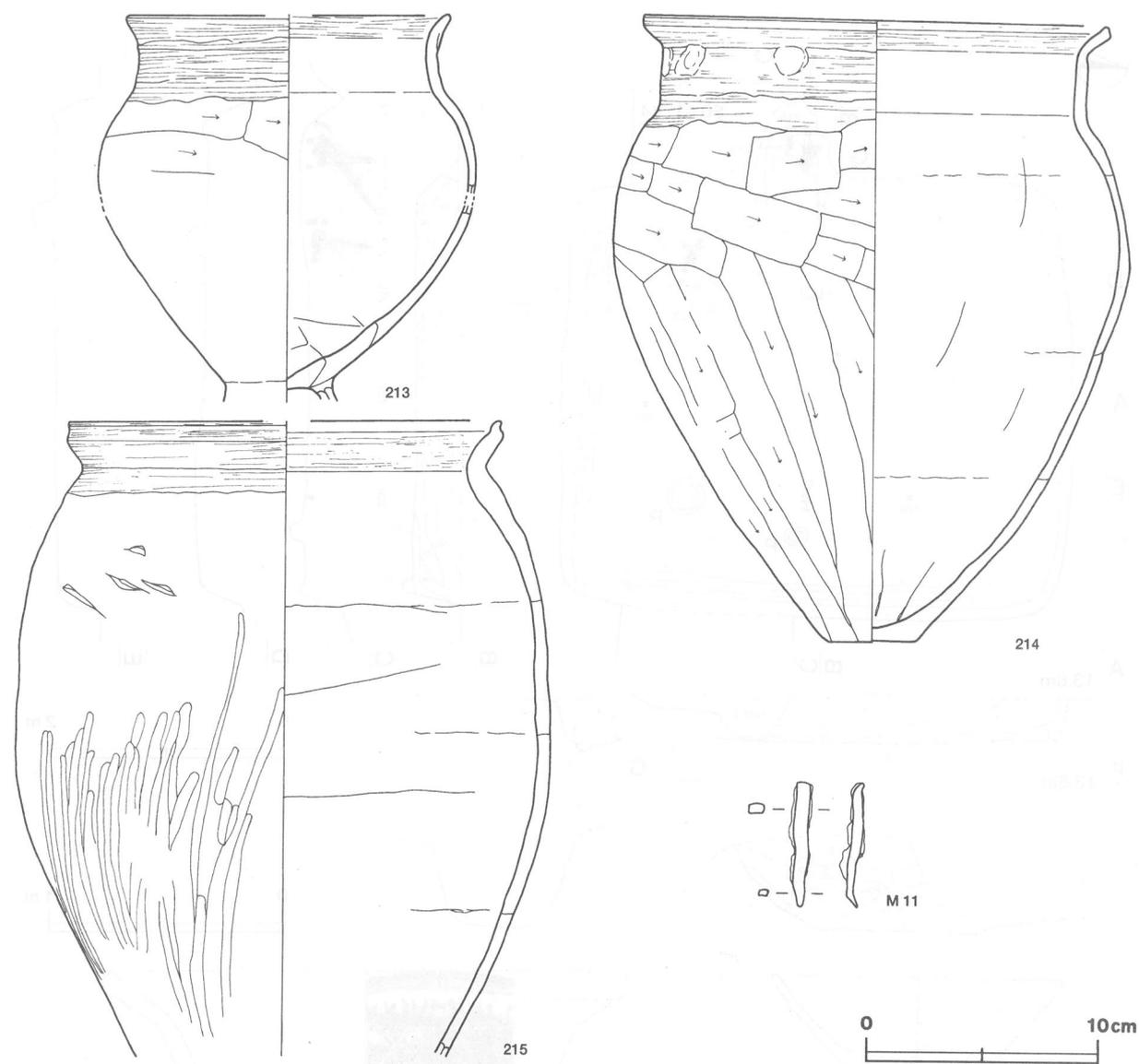
- | | |
|-------------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量，焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 焼土粒子・砂粒少量，炭化物微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量 | 7 暗褐色 ローム粒子微量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子少量，焼土ブロック微量 | |

遺物出土状況 土師器片403点（坏18，甕385），須恵器片77点（坏47，蓋7，甕23），不明鉄製品1点，鉄滓4点が，覆土下層から中層にかけて廃棄されたような状態で出土している。大半は土師器甕の小破片である。土師・須恵器の甕は，竈の覆土中層や竈の前面南側の覆土下層から床面にかけてまとまって出土している。特にほぼ完形の214は，竈の覆土中層から斜位の状態で出土している。また，混入した縄文土器片12点，弥生土器片13点が出土している。

所見 竈の覆土や竈の前面南側から，土師・須恵器の甕がまとまって出土している。竈の袖が完全に除去されていることから，これらの遺物は，竈の廃絶に関連して廃棄されたものと推測される。時期は，竈の覆土や床面から出土した土器から，9世紀後葉と考えられる。



第86图 第43号住居跡・出土遺物実測図



第87図 第43号住居跡出土遺物実測図

第43号住居跡出土遺物観察表 (第86・87図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
208	須恵器	坏	12.4	4.2	5.7	長石	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	下層	85%
209	須恵器	坏	[12.8]	(3.8)	-	石英・長石	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	床面	20%
210	須恵器	坏	[13.9]	4.6	[7.0]	石英・長石	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部ヘラ削り	下層	20%
211	須恵器	坏	[14.4]	3.1	-	長石	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り	中層	10%
212	須恵器	甕	22.1	(26.0)	-	長石・赤色粒	灰黄	普通	口縁~頸部ロクロナデ, 体部外面平行叩き, 内面凹形当て具痕	床面・竈	40%
213	土師器	台付甕	[13.8]	[21.6]	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面上半ヘラ削り, 下半摩滅, 内面ヘラナデ	床面	20%
214	土師器	甕	19.8	26.7	3.7	長石・雲母・赤色粒	橙	普通	口縁部横ナデ, 頸部外面指頭圧痕, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	竈覆土	75%
215	土師器	甕	[18.4]	(27.3)	-	長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面上半ヘラ当て痕, 下半ヘラ磨き, 内面ヘラナデ	床面・竈	40%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M11	釘	5.4	0.7	0.7	4.0	鉄	断面長方形, 両端屈曲	下層	

第44号住居跡 (第88・89図)

位置 調査区の北東部、G 6 h3区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

確認状況 竈の煙道部の張り出しが2か所確認されていることから、2軒の重複する住居跡を想定したが、北壁と床面を共に使用していること、北竈は完全に破壊され埋め戻されていることなどから、竈の造り替えを伴う住居の拡張と判断した。拡張前をA、拡張後をBと枝番号を付して区別した。第44-A号住居跡は、2か所のピットと、壁溝及び竈の痕跡を確認した。第44-B号住居跡は、第44-A号住居を東側に65cm、南側に35cm、西側に28cmほど拡張している。攪乱や削平もなく、遺存状況は比較的良好である。

規模と形状 A号住居跡は、確認した壁溝から長軸3.52m、短軸3.22m程度の長方形と推定される。北壁は直立し、壁溝は西壁及び南壁に沿ってめぐっていたと推定される。深さは6cmで、断面形はU字状を呈している。主軸方向はN-1°-Eである。B号住居は、長軸4.4m、短軸3.54mの長方形である。壁は高さ26~32cmで、直立している。主軸方向はN-90°-Eである。

床 ほぼ平坦である。竈の前面から中央部にかけて、よく踏み固められている。

ピット 4か所。P1・2は上面を踏み固められていることから、確実に拡張前のピットと考えられる。両ピットは、焼土ブロックや粘土ブロックなどの竈に起因する含有物を多量に含む土で埋め戻されている。深さは共に16cmである。B号住居の床面で確認されたP3は北西コーナー部、P4は南西コーナー部に位置している。深さは8~10cmと浅く、性格は不明である。

P1土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

P2土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

竈 A号住居の竈1は、北壁の東部に設けられている。袖部はもとより完全に破壊されているため、詳細は不明である。煙道はなだらかに立ち上がり、北壁外に37cm張り出している。本来、袖部及び燃焼部の位置する場所は、長軸100cm、短軸96cmの楕円形に掘り込まれ、床面からの深さは10cmである。覆土は焼土ブロックや炭化物を含む黒褐色土で、埋め戻されていると考えられる。B号住居の竈2は、東壁の中央部南寄りに設けられている。焚口から煙道までの長さは100cmである。燃焼部は長軸68cm、短軸43cmの楕円形を呈している。床面からの深さは4cmで、皿状に浅く掘りくぼめられている。火床面は最下層の第5層上面と考えられるが、硬化面などは確認されていない。煙道はなだらかに立ち上がり、東壁外に35cm張り出している。袖部の最大幅は160cmで、黄褐色粘土ブロックで構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックを多く含んでいる。

竈1土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化物微量 3 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量

2 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量

竈2土層解説

1 赤灰色 粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 4 にぶい赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子少量

2 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量 5 暗赤灰色 焼土ブロック・炭化粒子少量

3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量

覆土 10層からなる。周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量

2 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量

3 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量

4 黒褐色 ロームブロック微量

5 暗褐色 ロームブロック微量

6 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量

7 黒褐色 ローム粒子微量

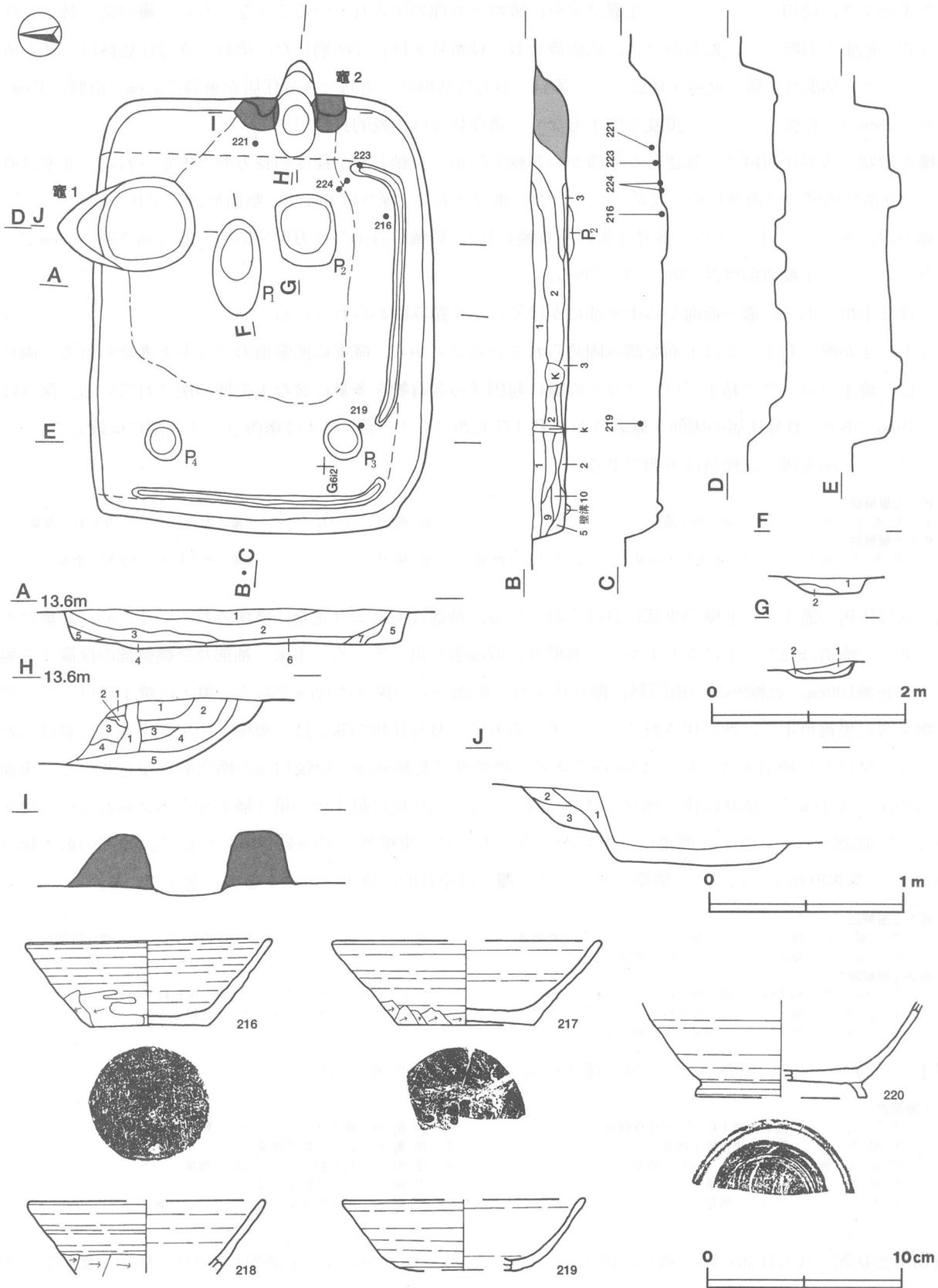
8 黒褐色 粘土粒子・ローム粒子微量

9 黒褐色 ローム粒子中量

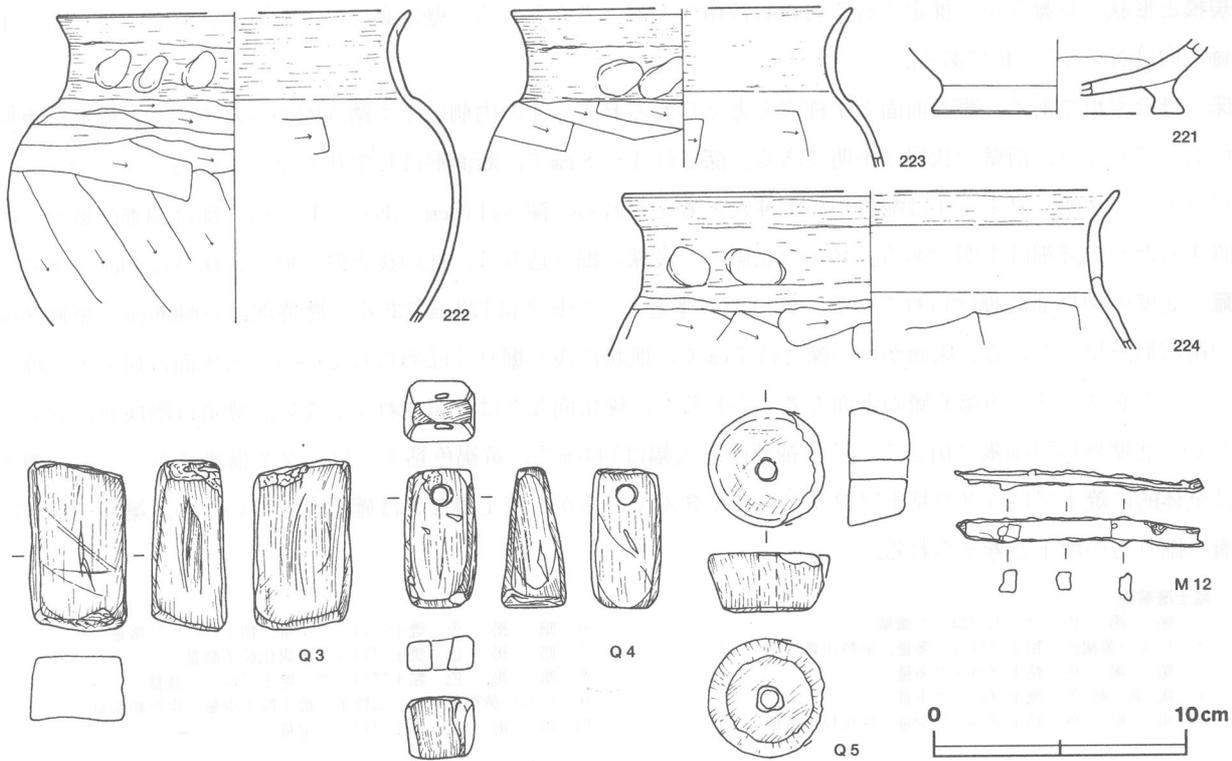
10 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 A号住居に伴う遺物は出土していない。B号住居からは、土師器片159点(坏7, 甕152), 須恵器片77点(坏39, 蓋7, 壺1, 甕30), 不明鉄製品1点, 砥石2点, 石製紡錘車1点が、南東コーナー部及

び南壁際の覆土下層から床面にかけて、廃棄されたような状態で出土している。大半は土師・須恵器の甕や坏の小破片である。また、混入した縄文土器片7点が出土している。
 所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第88図 第44号住居跡・出土遺物実測図



第89図 第44号住居跡出土遺物実測図

第44号住居跡出土遺物観察表 (第88・89図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
216	須恵器	坏	12.7	4.3	6.2	石英・長石	灰褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	床面	85%
217	須恵器	坏	[13.6]	(4.3)	[7.0]	長石	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	床面	20%
218	須恵器	坏	[12.0]	(3.7)	-	石英・長石	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り	床面	20%
219	須恵器	坏	[12.7]	3.5	[6.0]	石英・長石	褐灰	普通	内・外面クロコナデ	中層	20%
220	須恵器	高台付坏	-	(4.9)	[8.8]	長石・雲母	浅黄	普通	底部回転糸切り	床面	30%
221	須恵器	壺	-	(2.9)	[10.0]	石英・長石	にぶい褐	普通	底部内面自然釉付着	床面	30%
222	土師器	甕	[13.9]	(12.2)	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ, 頸部外面指頭圧痕, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	下層	25%
223	土師器	甕	[13.6]	(6.2)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 頸部外面指頭圧痕, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	床面	20%
224	土師器	甕	[19.6]	(6.2)	-	石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ, 頸部外面指頭圧痕, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	床面	10%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	砥石	6.7	3.9	2.9	118.3	凝灰岩	6面使用, 線条痕多数, 両端折損後再生	床面	
Q4	砥石	5.5	2.8	2.5	50.0	凝灰岩	6面使用, 上部有孔, 線条痕多数	下層	
Q5	紡錘車	4.6	(4.5)	2.4	(71.4)	凝灰岩	全面研磨, 中央部有孔, 線条痕多数, 一部欠損	下層	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M12	刀子	(9.8)	(1.1)	(0.7)	(8.2)	鉄	基部断面長方形, 刀身欠損	下層	

第48号住居跡 (第90・91図)

位置 調査区の北東部, G 6 i3区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 西部南側で第166号土坑を掘り込んでいる。南東部は調査区域外に位置している。遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸5m, 推定される短軸4.77mの方形と考えられる。壁は高さ51~62cmで, 直立している。主軸方向はN-1°-Eである。

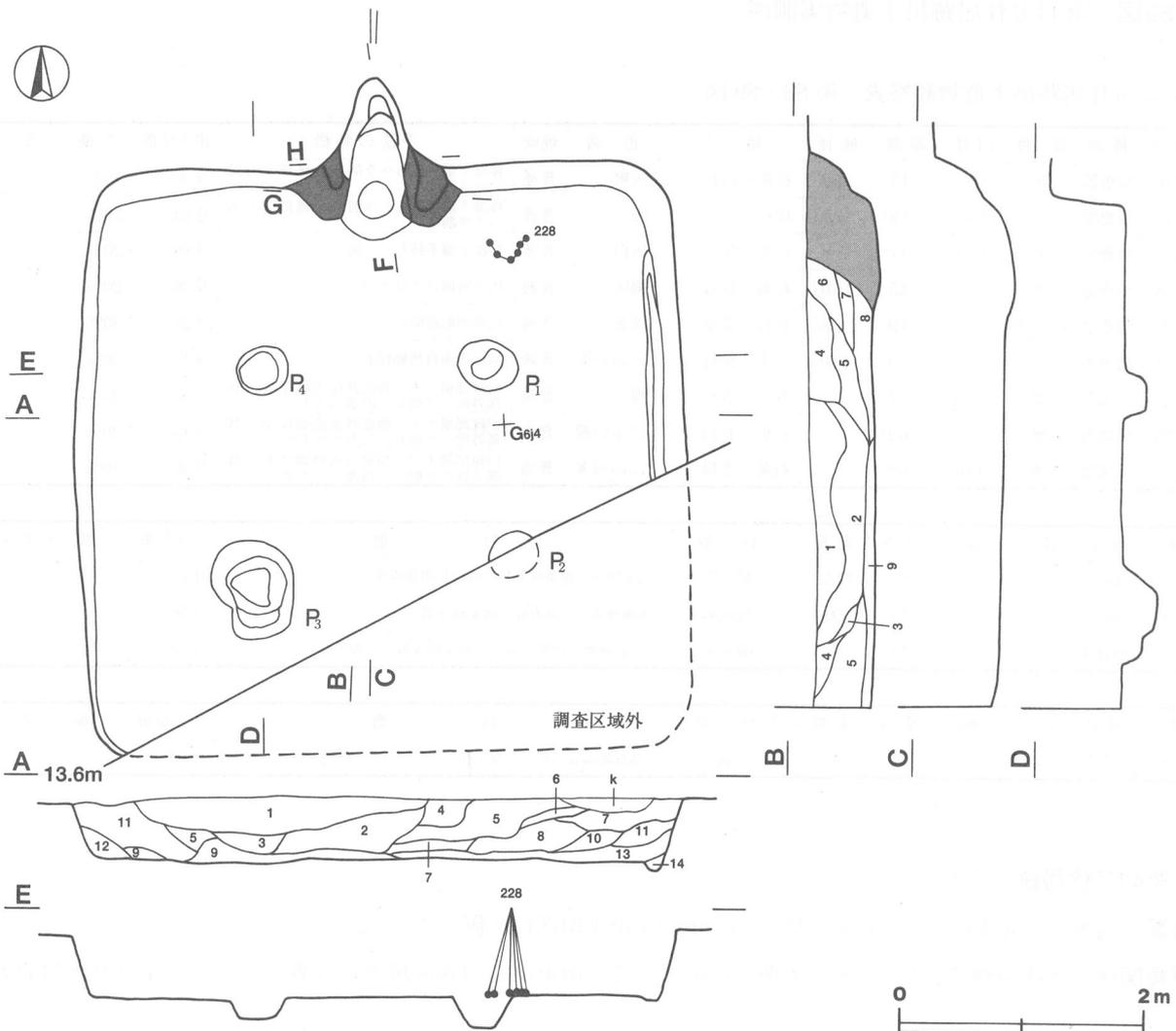
床 ほぼ平坦である。竈の前面と支柱穴と考えられるP1~4の内側はよく踏み固められている。壁溝は東壁に沿ってめぐり, 南壁の状況は不明である。深さは4~8cmで, 断面形はU字状を呈している。

ピット 4か所。P1~4は配置から支柱穴と考えられる。深さは16cmである。P2の一部は調査区域外に位置するため, 詳細は不明である。P3の北側の一段深い掘り込みは, 柱の抜き取り痕で, 深さは30cmである。

竈 北壁の中央部に設けられている。焚口から煙道までの長さは123cmである。燃焼部は長軸90cm, 短軸56cmの楕円形を呈している。床面からの深さは7cmで, 皿状に浅く掘りくぼめられている。火床面は最も多く焼土ブロックを含んでいる第6層の下面と考えられるが, 硬化面などは確認されていない。煙道は階段状に立ち上がり, 北壁外に74cm張り出している。袖部の最大幅は144cmで, 黄褐色粘土ブロックで構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックや粘土ブロックを多く含んでいるが, 焼土層などは確認されていない。第9・10層は竈の掘り方の埋土と考えられる。

竈土層解説

- | | |
|-------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック微量 | 6 暗褐色 焼土ブロック中量, 粘土ブロック微量 |
| 2 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量, 砂粒中量 | 7 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 粘土ブロック多量 | 8 暗褐色 粘土ブロック・焼土ブロック微量 |
| 4 灰黄褐色 焼土ブロック少量 | 9 にぶい黄褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化物微量 |
| 5 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 10 暗褐色 焼土ブロック少量 |



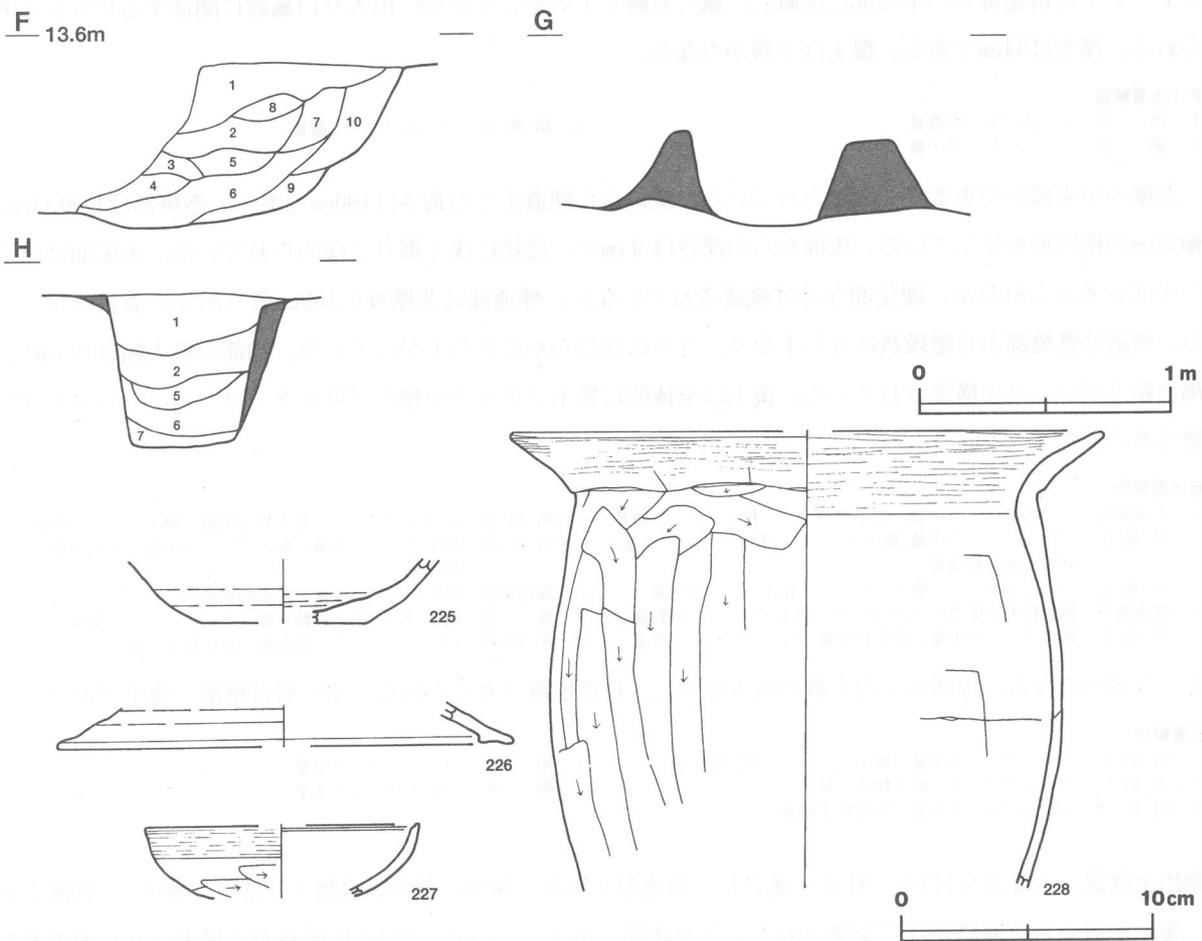
第90図 第48号住居跡実測図

覆土 14層からなる。ロームブロックを含む黒褐色土や暗褐色土で埋め戻された状況を示し、人為堆積と考えられる。第14層は壁溝の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | 炭化物少量, ロームブロック微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 12 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量 | 13 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | 14 暗褐色 | ローム粒子・炭化物微量 |

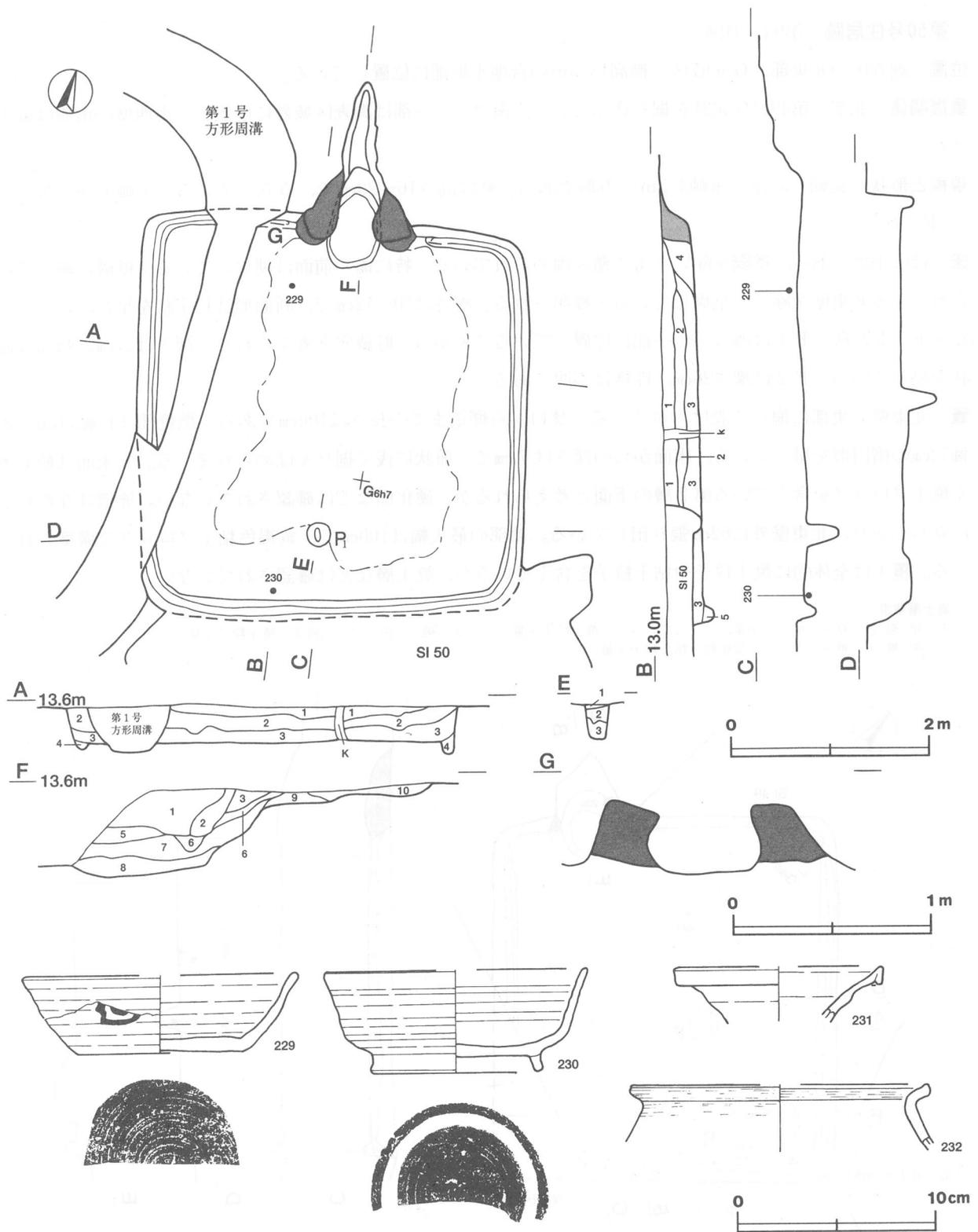
遺物出土状況 土師器片170点(坏19, 甕151), 須恵器片44点(坏16, 蓋20, 壺1, 甕7), 鉄滓1点が, 覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。大半は土師器甕の小破片である。228は竈の前面東側の床面から出土している。また, 混入した縄文土器片21点, 古墳時代の土師器片19点が出土している。
所見 本住居は人為的に埋め戻されている。出土遺物が少ないことから, 短期間で埋め戻されたものと推測される。時期は, 床面から出土した土器から8世紀前葉と考えられる。



第91図 第48号住居跡・出土遺物実測図

第48号住居跡出土遺物観察表(第91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
225	須恵器	坏	-	(2.5)	[11.8]	石英・長石	灰白	普通	内・外面ロクロナデ	床面	10%
226	須恵器	蓋	[23.2]	(1.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	内・外面ロクロナデ	下層	5%



第92図 第49号住居跡・出土遺物実測図

第49号住居跡出土遺物観察表 (第92図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
229	須恵器	坏	13.7	3.9	8.2	長石	灰白	普通	内・外面ロクロナデ, 底部回転糸切り	下層	墨書 45%
230	須恵器	高台付坏	[13.3]	5.2	8.4	長石・雲母	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り	床面	45%
231	須恵器	壺	[5.6]	(2.8)	-	石英・長石	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ, 外面自然軸付着	床面	10%
232	土師器	甕	[15.0]	(3.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	下層	10%

第50号住居跡 (第93・94図)

位置 調査区の北東部, G 6 h7区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 北部で第49号住居跡を掘り込んでいる。南コーナー部は調査区域外に位置し, 南西壁の南側は削平されている。

規模と形状 長軸3.55m, 短軸3.5mの方形である。壁は高さ16~20cmで, 直立している。主軸方向はN-43°-Eである。

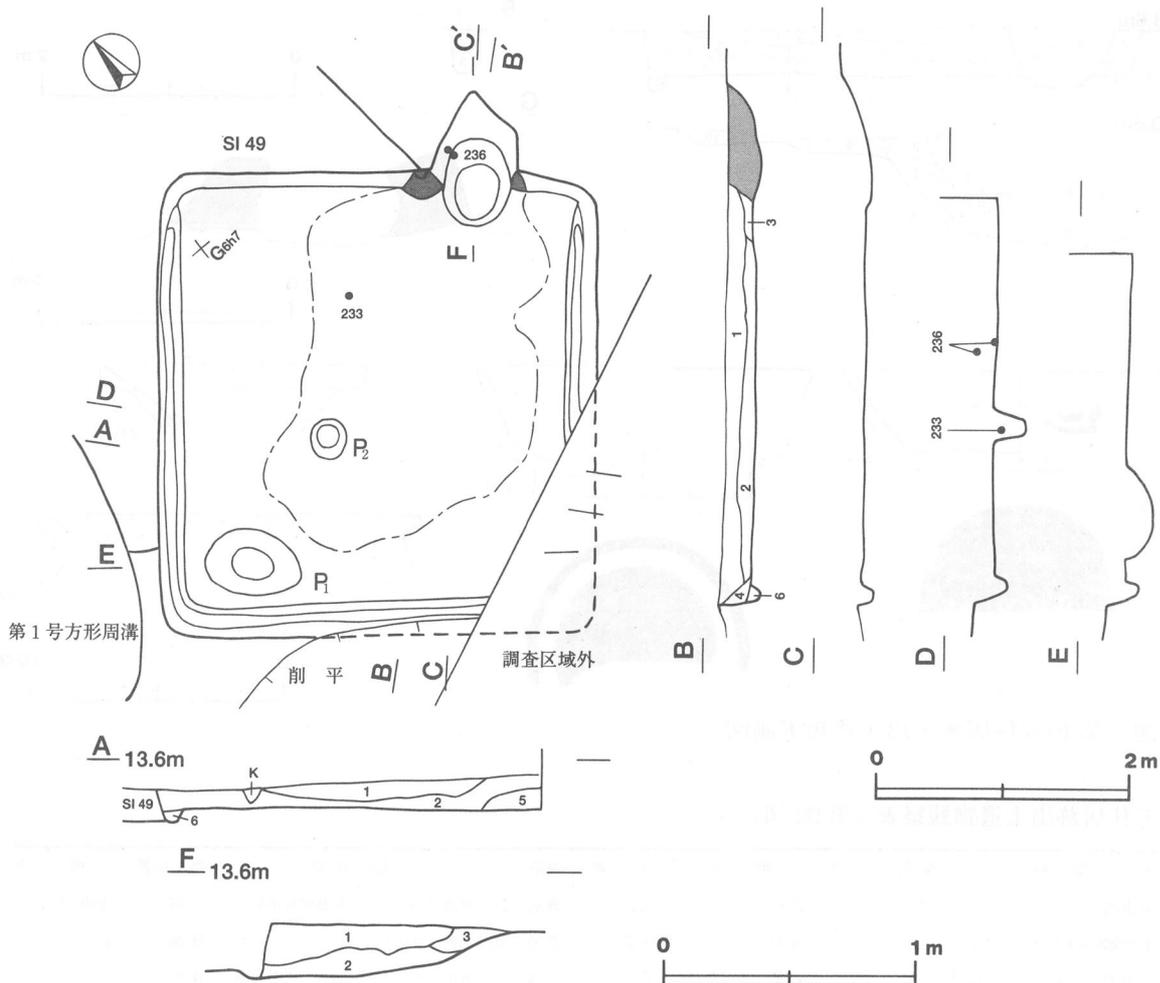
床 ほぼ平坦である。壁際を除いてよく踏み固められている。特に竈の前面は硬化している。壁溝は竈の設けられている北東壁を除いて全周していると推測される。深さは10~12cmで, 断面形はU字状を呈している。

ピット 2か所。P1は西コーナー部に位置していることから, 貯蔵穴と考えられる。深さは21cm, 断面は皿状を呈している。P2は深さ26cm, 性格は不明である。

竈 北東壁の東部に偏って設けられている。焚口から煙道までの長さは106cmである。燃焼部は長軸71cm, 短軸52cmの楕円形を呈している。床面からの深さは7cmで, 皿状に浅く掘りくぼめられている。火床面は最も多く焼土ブロックを含んでいる第2層の下面と考えられるが, 硬化面などは確認されていない。煙道はなだらかに立ち上がり, 北東壁外に62cm張り出している。袖部の最大幅は100cmで, 黄褐色粘土ブロックで構築されている。覆土は全体的に焼土粒子や粘土粒子を含んでいるが, 焼土層などは確認されていない。

竈土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量



第93図 第50号住居跡実測図

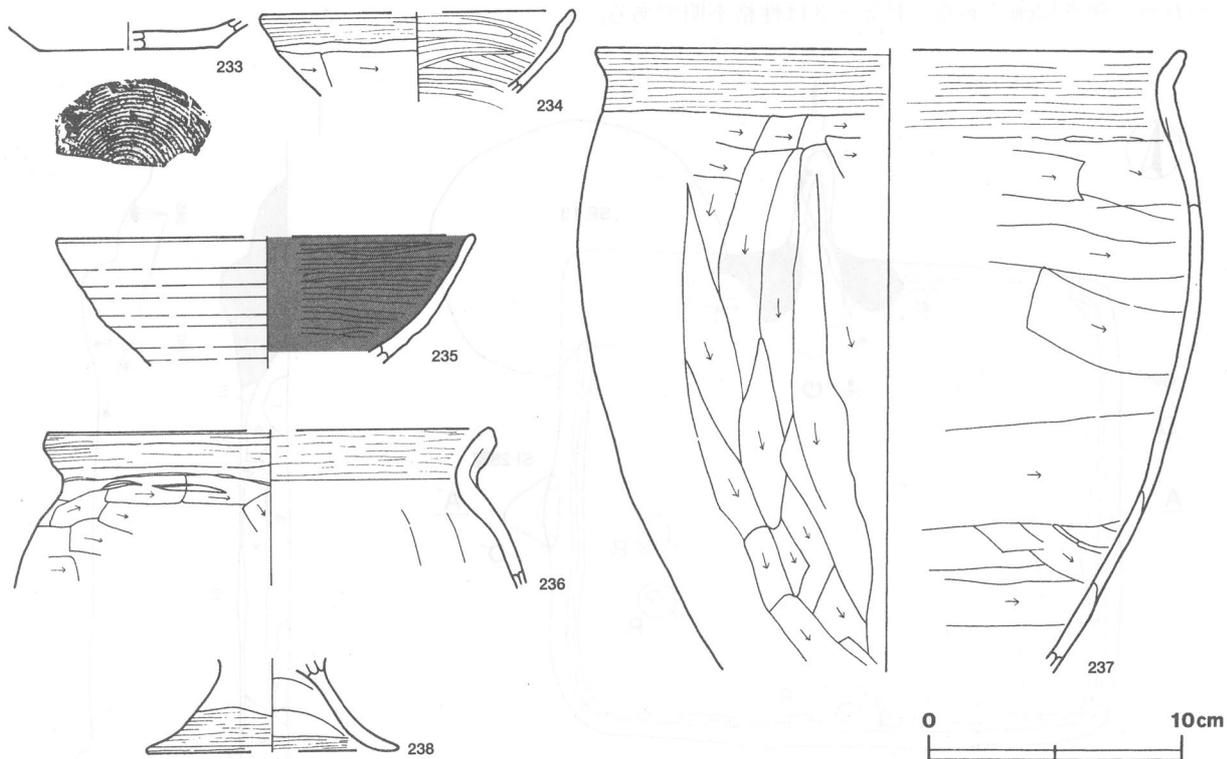
覆土 6層からなる。周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。第6層は壁溝の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|---------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化物少量 | 5 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片150点(坏7, 甕143), 須恵器片35点(坏18, 蓋5, 甕12), 鉄滓1点が, 覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。大半の遺物は土師器甕の小破片である。233は中央部北側の床面から, 236は竈の覆土中層から出土している。また, 混入した縄文土器片4点が出土している。

所見 本住居は小形で, 床面積は12.4㎡である。内部施設の特徴は, 貯蔵穴がコーナー部に設けられていること, 竈が壁の中央部ではなく, 偏って設けられていることである。時期は, 出土土器から10世紀前葉~中葉と考えられる。



第94図 第50号住居跡出土遺物実測図

第50号住居跡出土遺物観察表(第94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
233	須恵器	坏	-	(1.1)	[7.1]	長石・雲母	灰白	普通	内・外面ロクロナデ, 底部回転系切り	床面	10%
234	土師器	坏	[12.4]	(3.2)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面へら削り, 内面へら磨き	床面	10%
235	土師器	坏	[17.6]	(5.0)	-	長石・雲母	灰褐	普通	体部外面ロクロナデ, 内面へら磨き, 黒色処理	床面	20%
236	土師器	甕	[17.8]	(6.3)	-	長石・赤色粒	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面へら削り, 内面へらナデ	竈覆土	10%
237	土師器	甕	[23.3]	(24.6)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面へら削り, 内面へらナデ	床面	10%
238	土師器	台付甕	-	(3.7)	[10.1]	石英・長石	明赤褐	普通	台部外面横ナデ, 内面へらナデ	下層	5%

第51号住居跡 (第95~97図)

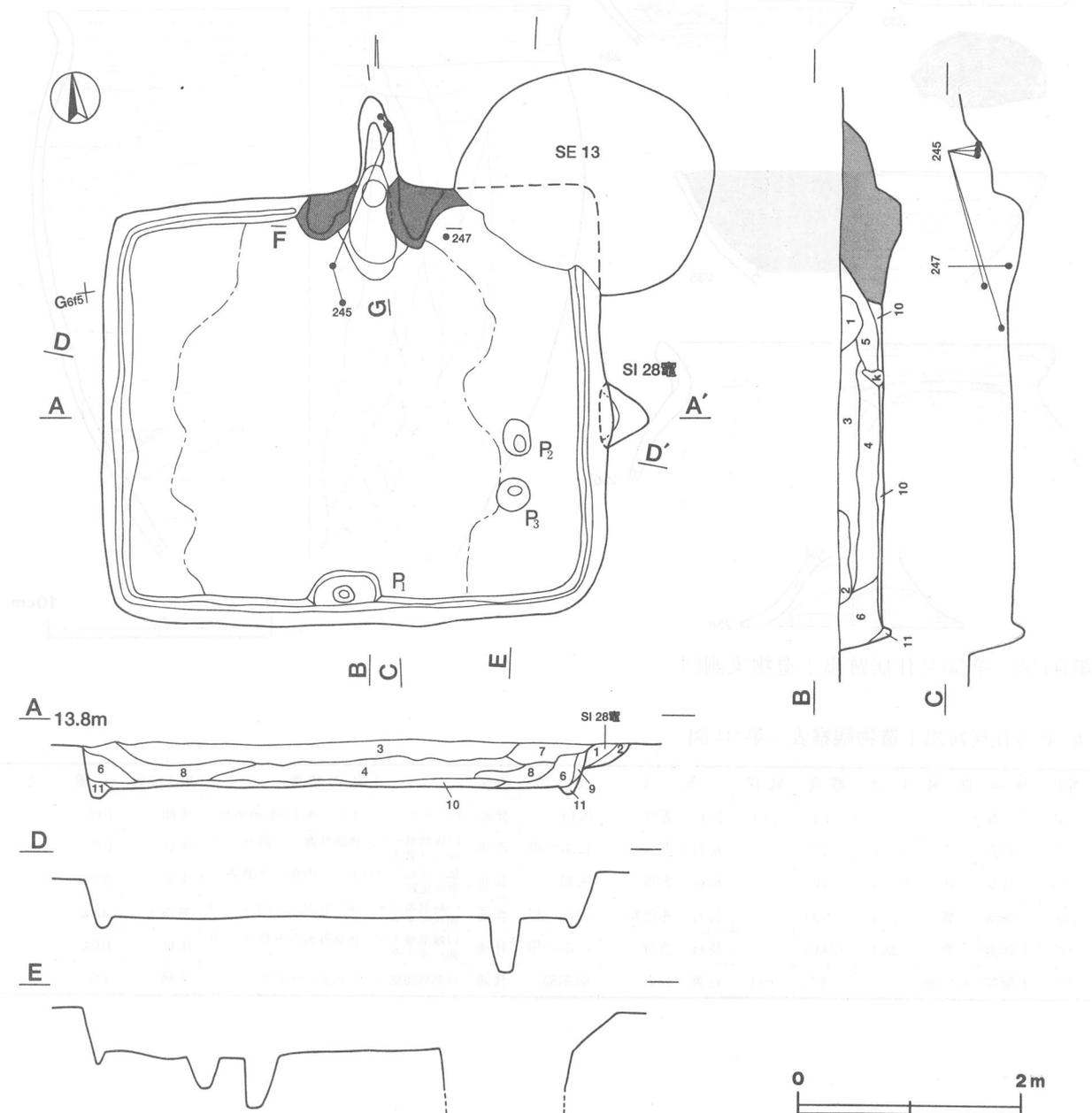
位置 調査区の北東部, G 6 f6区。標高13.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第28号住居跡を掘り込んでいる。北東コーナー部を第13号井戸に掘り込まれているものの、遺存状況は良好である。調査当初, 東壁の中央部に位置する竈の存在から, 本住居の竈は造り替えられていると推測していたが, 土層観察の結果, 2軒の住居跡の重複と判断した。

規模と形状 長軸4.55m, 短軸3.83mの長方形である。壁は高さ38~42cmで, 直立している。主軸方向はN-6°-Eである。

床 ほぼ平坦である。東壁及び西壁際とコーナー部を除いた竈の前面から南壁にかけて, よく踏み固められている。壁溝は全周し, 深さは7~12cmである。断面形はU字状を呈している。

ピット 3か所。P1は南壁際の中央部にあり, 竈に対峙しているため, 出入口施設に関するピットと考えられる。深さ12cmである。P2・3は性格不明である。



第95図 第28・51号住居跡実測図

竈 北壁の中央部やや東寄りに設けられている。焚口から煙道までの長さは166cmである。燃焼部は長軸88cm、短軸41cmの楕円形を呈している。床面からの深さは18cmで、皿状に掘りくぼめられている。火床面は第4層の下面と考えられるが、硬化面などは確認されていない。煙道は燃焼部から外傾しながら立ち上がり、さらになだらかに立ち上がっている。北壁外に88cm張り出している。袖部は黄褐色粘土ブロックと砂の混土で構築されている。右袖の東端部は第13号井戸に掘り込まれ、確認した袖部の最大幅は143cmである。覆土は全体的に焼土ブロック、粘土ブロックを含んでおり、焼土ブロックは第3・4・6・7層に比較的多く含まれている。最下層の第8・9層は竈の掘り方の埋土と考えられる。

竈土層解説

- | | |
|------------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック・粘土ブロック微量 | 6 灰黄褐色 砂粒多量, 焼土ブロック中量 |
| 2 灰黄褐色 砂粒中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量 | 7 灰褐色 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量, 炭化粒子・砂粒少量 | 8 暗褐色 焼土ブロック微量 |
| 4 にぶい赤褐色 炭化粒子・砂粒少量, 焼土ブロック微量 | 9 褐色 ローム粒子中量 |
| 5 灰黄褐色 砂粒中量, 焼土ブロック微量 | |

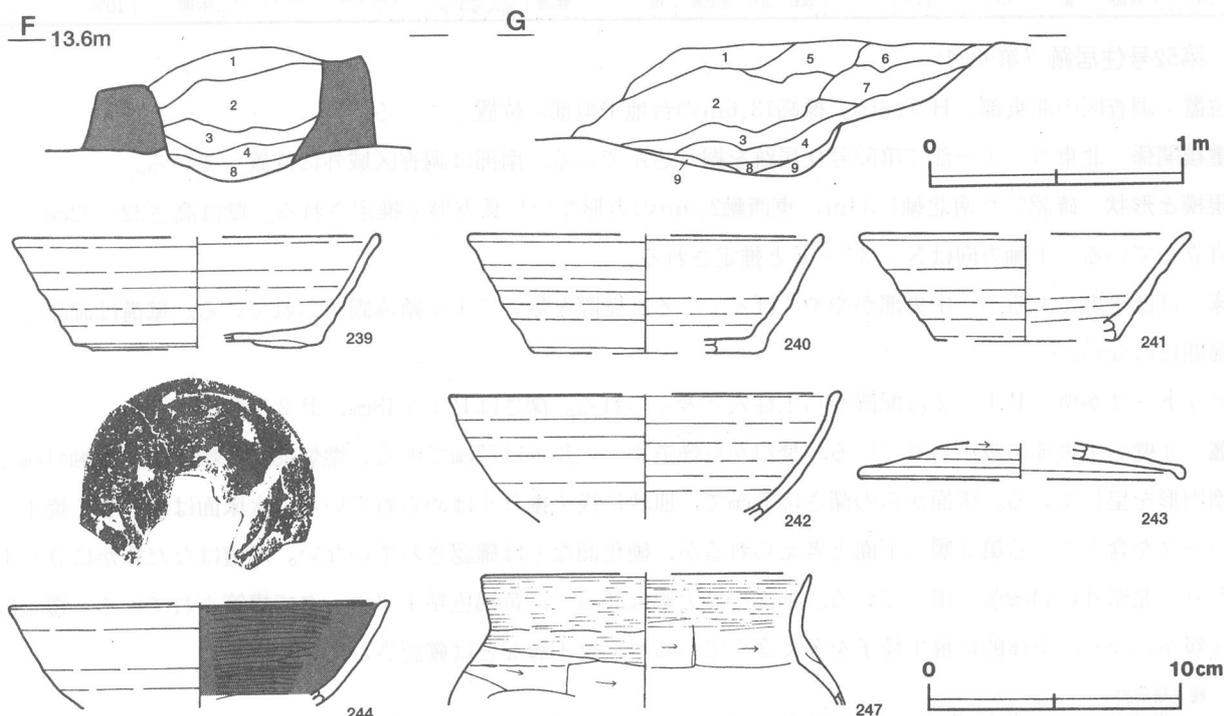
覆土 11層からなる。周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。第11層は壁溝の覆土である。

土層解説

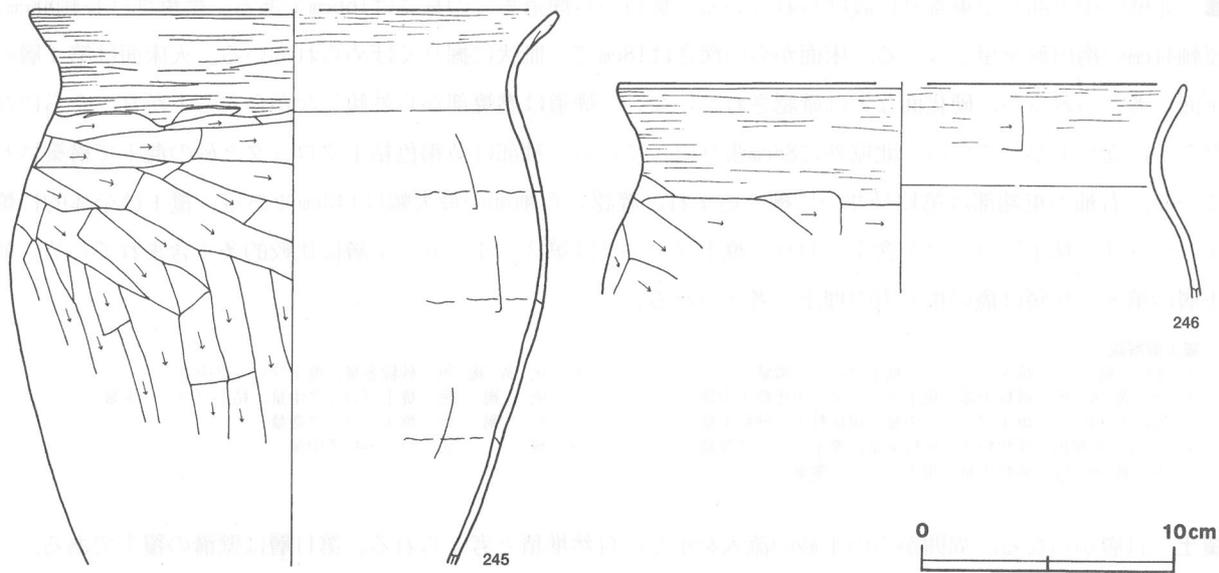
- | | |
|------------------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量 | 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック多量 | 7 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | 8 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 5 灰黄褐色 粘土ブロック・砂粒多量, ロームブロック・焼土粒子微量 | 10 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| | 11 暗褐色 ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片251点(坏6, 甕245), 須恵器片72点(坏47, 蓋13, 壺2, 甌1, 甕9), 鞆羽口片1点が、覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。特に竈の煙道部の覆土や竈の周辺の覆土下層から中層にかけて、土師器甕の大形破片が廃棄されたような状態で出土している。また、混入した縄文土器片11点、磨石1点が出土している。

所見 竈の遺存状況が良好で、壁外に張り出す溝状の煙道部が特徴的である。出土した遺物の大半は土師器甕の小破片である。時期は、床面や竈の覆土から出土した土器から9世紀前葉と考えられる。



第96図 第51号住居跡・出土遺物実測図



第97図 第51号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡出土遺物観察表 (第96・97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
239	須恵器	坏	[14.1]	4.4	[9.8]	石英・長石	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ, 底部回転ヘラ削り	床面	50%
240	須恵器	坏	[14.0]	4.6	[9.0]	石英・雲母	灰白	普通	内・外面ロクロナデ, 底部ヘラ削り	床面	20%
241	須恵器	坏	-	4.2	[7.5]	石英・長石・雲母	黄褐	普通	内・外面ロクロナデ	床面	10%
242	須恵器	坏	[15.6]	(5.1)	-	長石	灰黄	普通	内・外面ロクロナデ	床面	10%
243	須恵器	蓋	[12.8]	(14.0)	-	長石・雲母	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	下層	5%
244	土師器	坏	[15.0]	(4.1)	-	石英・長石・雲母	浅黄	普通	体部外面ロクロナデ, 内面ヘラ磨き, 黒色処理	床面	10%
245	土師器	甕	[21.2]	(22.0)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	床面・竈	40%
246	土師器	甕	[22.8]	(8.3)	-	石英・長石	明赤褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	床面	10%
247	土師器	甕	[13.1]	(5.1)	-	長石・雲母・赤色粒	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	床面	10%

第52号住居跡 (第98図)

位置 調査区の北東部, H 5 c6区。標高13.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 北東コーナー部で第53号住居跡を掘り込んでいる。南部は調査区域外に位置している。

規模と形状 確認した南北軸1.33m, 東西軸2.9mの方形ないし長方形と推定される。壁は高さ22~32cmで, 直立している。主軸方向はN-3°-Eと推定される。

床 ほぼ平坦であるが, 中央部がややくぼんでいる。壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は確認した範囲にはない。

ピット 2か所。P 1・2は配置から支柱穴と考えられる。深さはP 1が48cm, P 2が42cmである。

竈 北壁の中央部に設けられている。焚口から煙道までの長さは77cmである。燃烧部は長軸65cm, 短軸41cmの楕円形を呈している。床面からの深さは5cmで, 皿状に浅く掘りくぼめられている。火床面は最も多く焼土ブロックを含んでいる第3層の下面と考えられるが, 硬化面などは確認されていない。煙道はなだらかに立ち上がり, 北壁外に44cm張り出している。袖部の最大幅は86cmで, 黄褐色粘土ブロックで構築されている。覆土は3層からなり, 全体的に焼土粒子を多く含んでいるが, 焼土層などは確認されていない。

竈土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量

3 暗赤褐色 砂粒中量, 焼土ブロック少量

2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量

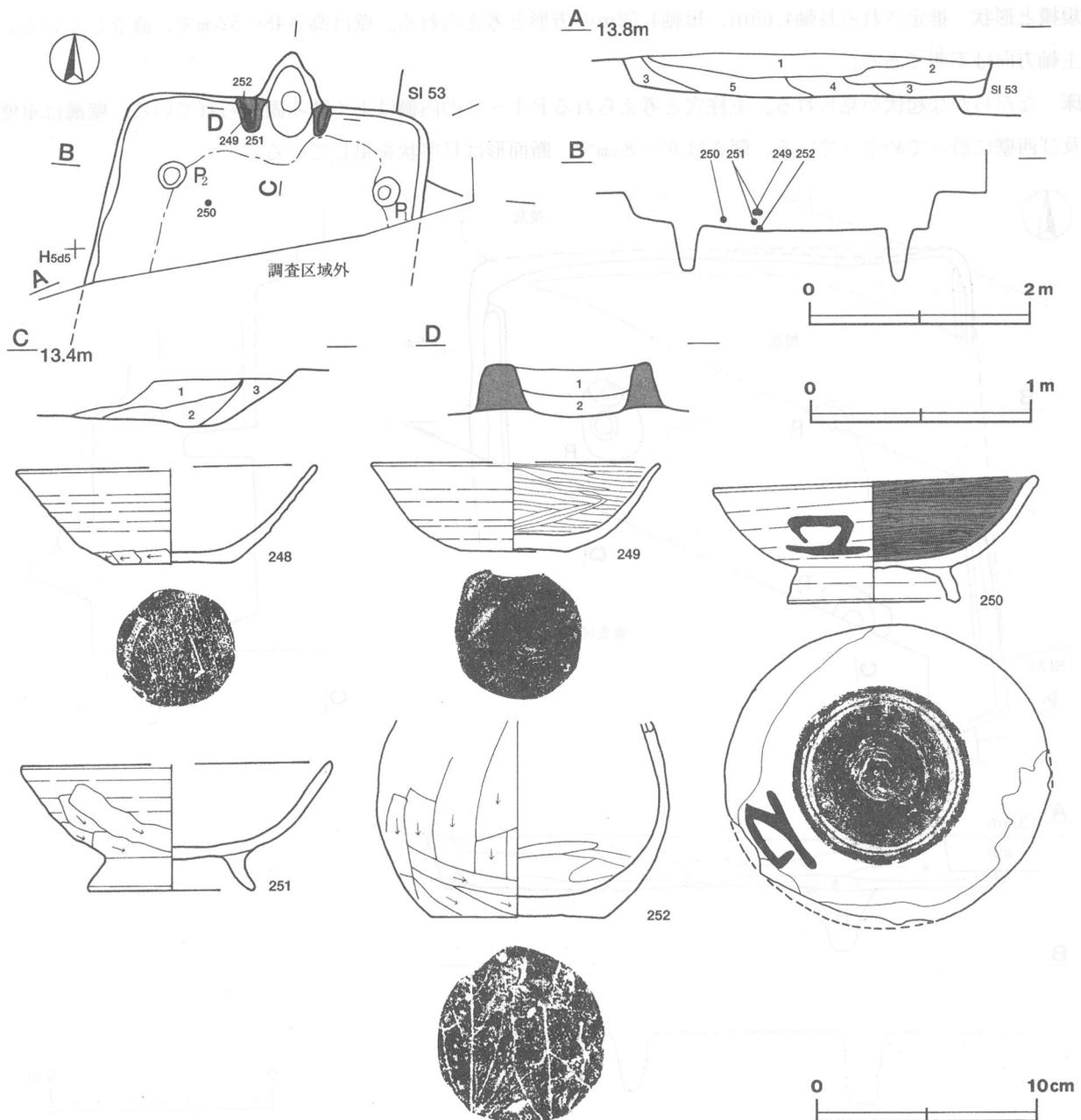
覆土 5層からなる。周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。第6層は壁溝の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物・粘土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片38点(坏8, 甕30), 須恵器片11点(坏3, 蓋5, 甕3)が, 覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。大半の遺物は土師器甕の小破片である。特に竈の左袖部や焚き口部の周辺から, 大形破片がまとまって出土している。250は体部外面に墨書された土師器の高台付坏で, ほぼ床面から出土している。また, 混入した縄文土器片1点, 磨石1点が出土している。

所見 本跡は一辺が3m程度の小形の住居と推測される。南部が調査区域外に位置しているため, 詳細は不明であるが, 確認した2か所のピットから, 支柱穴を有していると推測される。時期は, 出土土器から10世紀前葉と考えられる。



第98図 第52号住居跡・出土遺物実測図

第 52 号住居跡出土遺物観察表 (第 98 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
248	土師器	坏	[13.4]	4.3	5.3	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	竈袖部	55%
249	土師器	坏	[13.0]	4.0	4.9	長石・雲母・赤色粒	にぶい橙	普通	体部外面ロクロナデ, 内面ヘラ磨き, 底部回転糸切り後ヘラ削り	竈袖部	50%
250	土師器	高台付坏	14.8	5.7	7.9	石英・長石	にぶい橙	普通	外面ロクロナデ, 内面ヘラ磨き, 黒色処理	下層	墨書 90%
251	土師器	高台付坏	[14.0]	5.8	7.4	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面下端ヘラ削り, 内面摩滅	竈袖部	45%
252	土師器	甕	-	(8.9)	7.8	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ, 底部木葉痕	竈袖部	45%

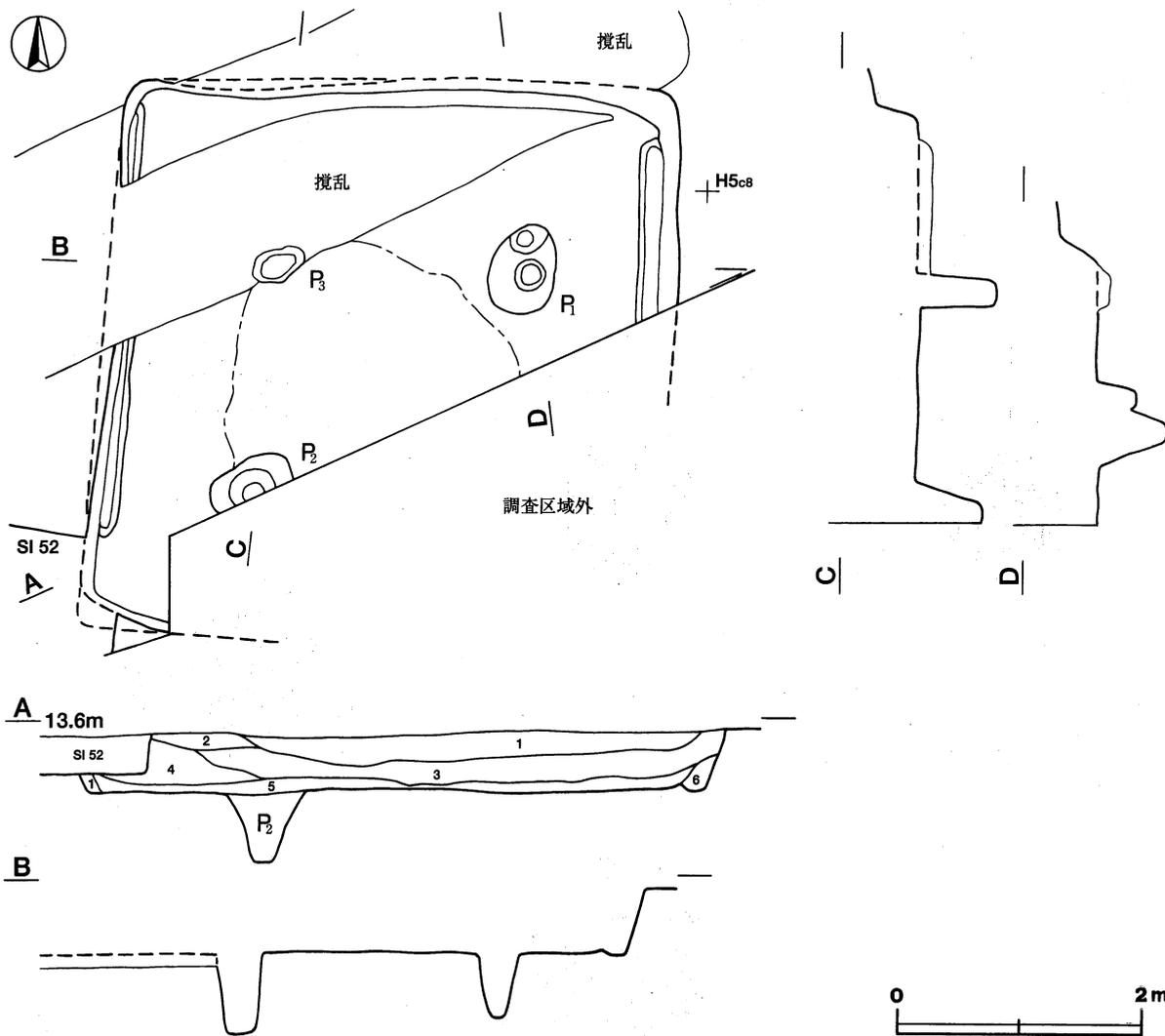
第53号住居跡 (第99・100図)

位置 調査区の北東部, H 5 c7区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 南西コーナー部を第52号住居に掘り込まれている。南東部は調査区域外に位置し, 北壁及び西壁北側は, 現代の排水溝によって削平されている。

規模と形状 推定される長軸4.66m, 短軸4.52mの方形と考えられる。壁は高さ48~52cmで, 直立している。主軸方向は不明である。

床 ならかな起伏が見られる。支柱穴と考えられる P 1~3 の内側はよく踏み固められている。壁溝は東壁及び西壁に沿ってめぐっている。深さは 6~8 cm で, 断面形は U 字状を呈している。



第99図 第53号住居跡実測図

ピット 3か所。P1～3は配置から支柱穴と考えられる。深さは57～65cmである。

竈 確認した範囲にはない。北壁は削平されているが、竈が構築されていた痕跡はまったく見あたらないことから、調査区域外の東壁に設けられていた可能性が高いと考えられる。

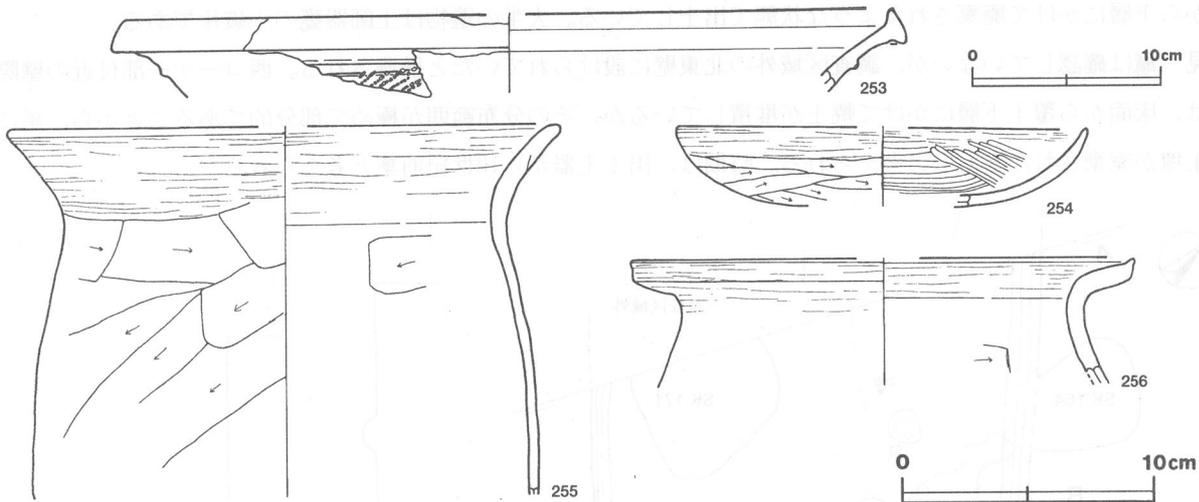
覆土 6層からなる。周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。第6層は壁溝の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|------------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 灰褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 明褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片123点(坏18, 甕105), 須恵器片21点(坏10, 蓋2, 壺1, 甕8)が, 覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。大半の遺物は土師器甕の小破片である。また, 混入した縄文土器片11点, 古墳時代の土師器片5点が出土している。

所見 竈は確認していないが, 東壁に設けられていたと推測される。時期は, 出土土器から8世紀後葉～9世紀前葉と考えられる。



第100図 第53号住居跡出土遺物実測図

第53号住居跡出土遺物観察表(第100図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
253	須恵器	甕	[41.1]	(4.3)	-	雲母・黒色粒	灰白	普通	頸部外面歯菌による刺突列点文, 内・外面クロナデ	下層	5%
254	土師器	坏	[16.1]	(3.1)	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラ磨き	下層	10%
255	土師器	甕	[21.8]	(14.5)	-	長石・雲母・黒色粒	明赤褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	下層	20%
256	土師器	甕	[20.0]	(5.0)	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ナデ, 内面ヘラナデ	下層	5%

第54号住居跡(第101図)

位置 調査区の北東部, G6e7区。標高13.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 南西壁の上部を第164号土坑に, 中央部の南側を第171号土坑に掘り込まれている。北東部は調査区域外に位置している。

規模と形状 確認した長軸3.62m, 短軸3.31mの方形ないし長方形と推定される。壁は高さ10～26cmで, 直立している。主軸方向は不明である。

床 ほぼ平坦である。中央部はよく踏み固められている。壁溝は確認した範囲で全周している。深さは6～10cmで, 断面形はU字状を呈している。

ピット 3か所。P1は南コーナー部に位置していることから、貯蔵穴と考えられる。深さは40cm、断面は円筒状を呈している。P2・3は共に浅く、性格不明である。

P1土層解説

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 | 5 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック微量 | |

竈 確認した範囲にはない。調査区域外の北東壁に設けられていた可能性が高いと考えられる。

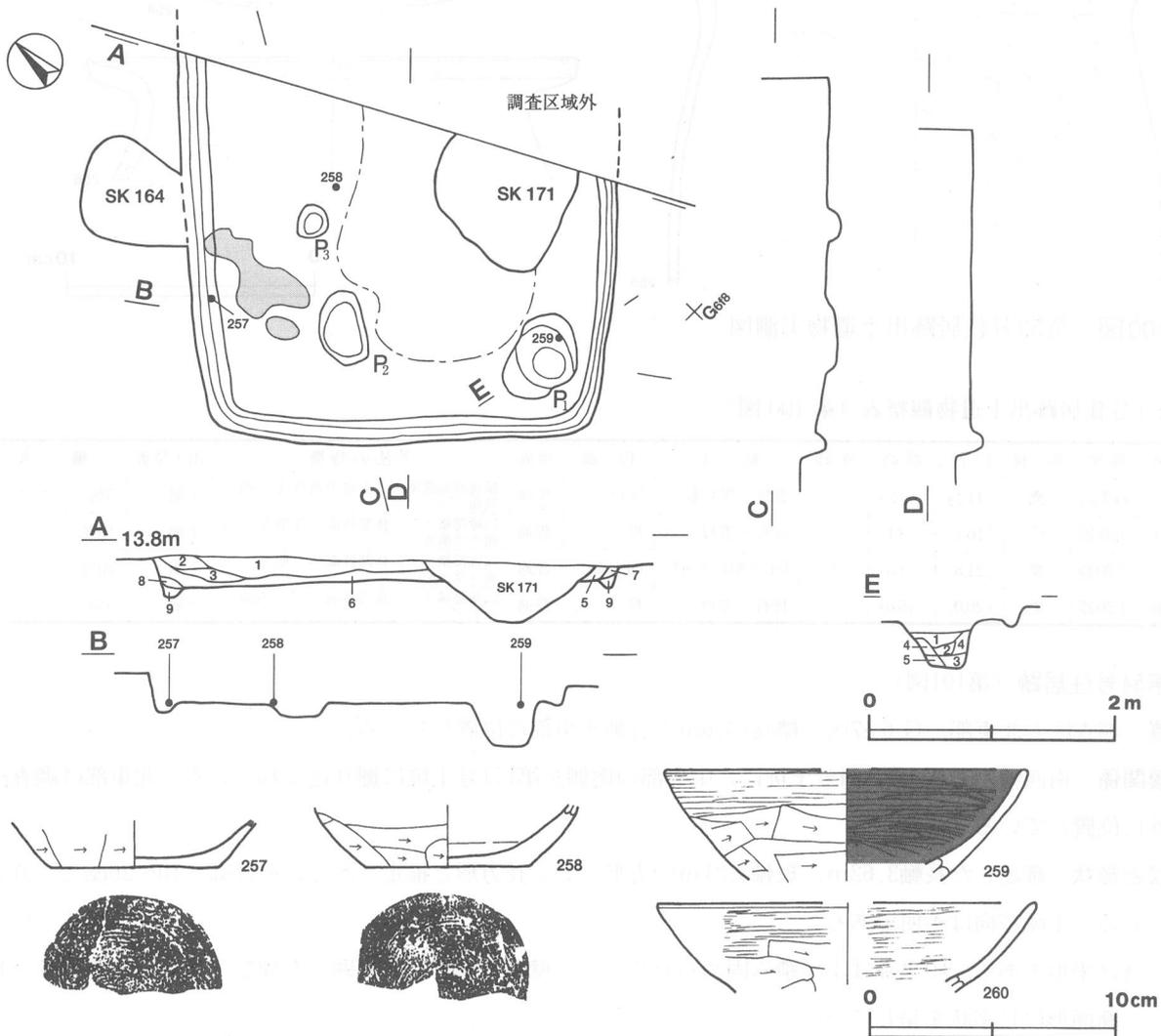
覆土 9層からなる。周囲からの土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。第9層は壁溝の覆土である。また、西コーナー部付近の壁際では、床面から覆土下層にかけて焼土が堆積している。

土層解説

- | | |
|----------------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 灰褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 7 褐色 ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 8 褐色 焼土ブロック微量 |
| 4 褐色 ロームブロック多量, 粘土粒子微量 | 9 暗褐色 ローム粒子微量 |
| 5 褐色 ロームブロック多量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片79点(坏19, 甕60), 須恵器片14点(坏3, 蓋1, 高盤1, 壺3, 甕6)が、覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。大半の遺物は土師器甕の小破片である。

所見 竈は確認していないが、調査区域外の北東壁に設けられていたと推測される。西コーナー部付近の壁際では、床面から覆土下層にかけて焼土が堆積しているが、その分布範囲が極めて部分的であることから、単に焼土塊が廃棄されたとも考えられる。時期は、出土土器から10世紀前葉と考えられる。



第101図 第54号住居跡・出土遺物実測図

第54号住居跡出土遺物観察表(第101図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
257	土師器	坏	-	(1.9)	(6.9)	石英・長石	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 内面ナデ, 底部回転糸切り後ヘラ削り	壁溝	15%
258	土師器	坏	-	(2.5)	(6.8)	石英・長石	明褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 内面ナデ, 底部回転糸切り後ヘラ削り	床面	15%
259	土師器	坏	[14.8]	(4.5)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ, 外面下半手持ちヘラ削り, 内面ヘラ磨き, 黒色処理	P1	10%
260	土師器	坏	[15.4]	(3.5)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 外面下半手持ちヘラ削り, 内面ナデ	床面	5%

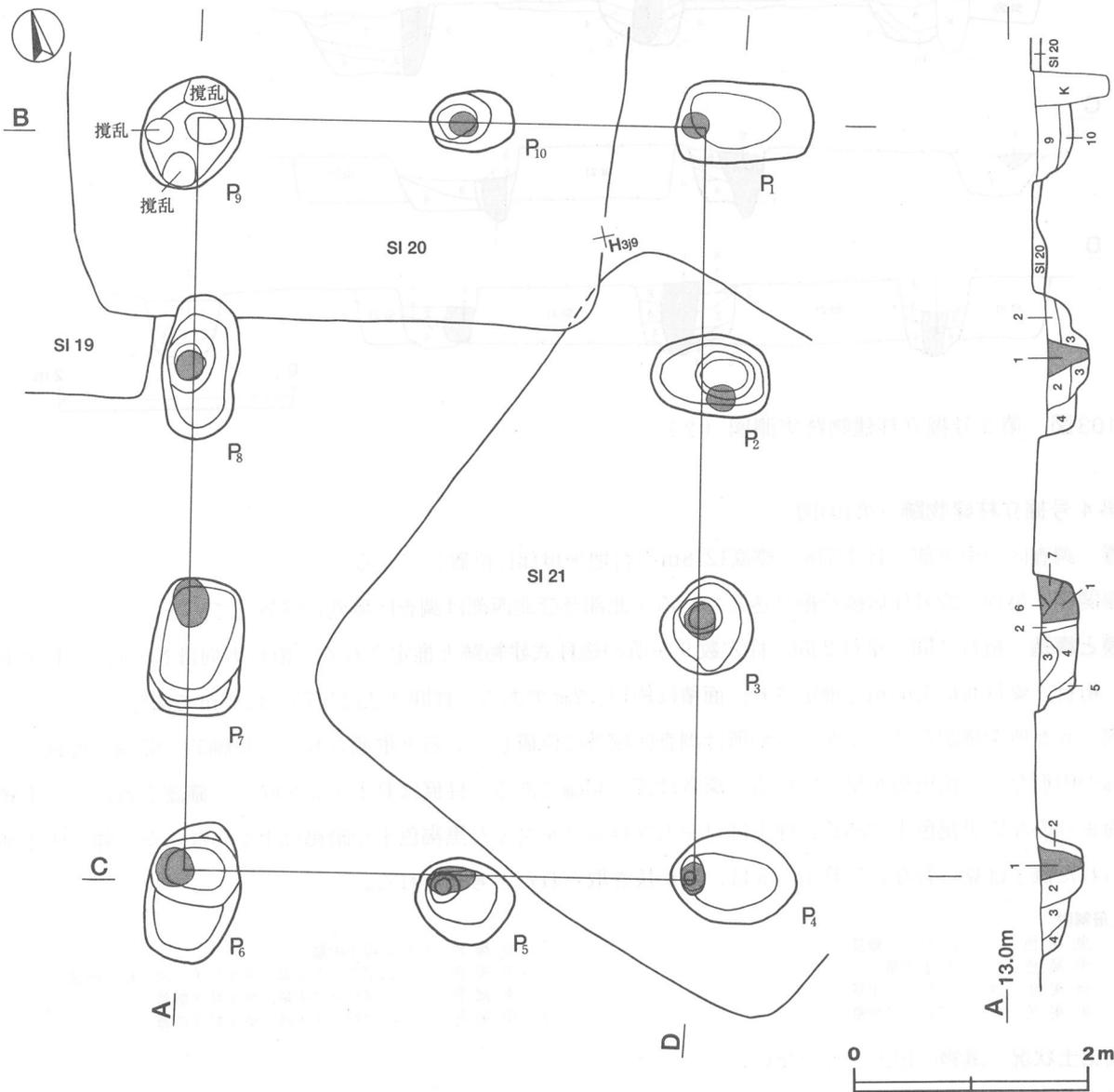
(2) 掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡(第102・103図)

位置 調査区の中央部, H3j8区。標高12.8mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第20・21号住居跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間, 梁行2間, 柱穴数10か所の側柱式建物跡で, 桁行方向をN-14°-Eとする南北棟である。桁行は6.42m, 梁行は4.4mで, 面積は約28.25㎡である。柱間寸法は桁行が2.1~2.25m, 梁行は2.1~2.3mである。



第102図 第3号掘立柱建物跡実測図(1)

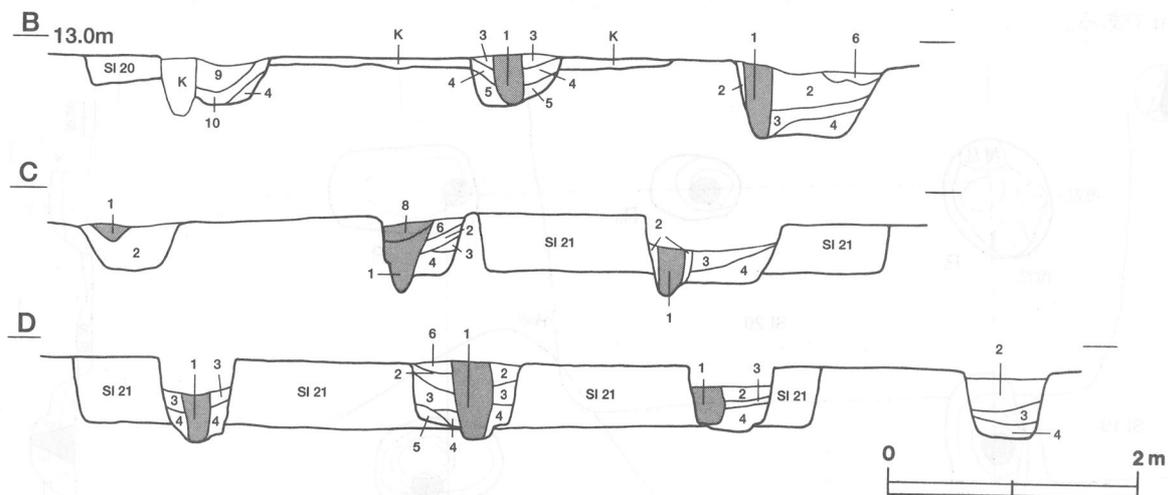
柱穴 10か所。長軸74~122cm, 短軸51~81cmの楕円形を呈している。長軸方向は, P 1・2・4・5・10が
 梁行方向, P 6~8が桁行方向としている。P 2~6・8・10, は底面に柱を据えたと考えられる小穴が穿た
 れている。深さは37~64cmである。柱痕はP 9を除いて確認され, その土層は締まりのない黒色土である。埋
 土はロームブロックを含んだ黒褐色土や暗褐色土からなるが, 強く叩き締められた様子は見られない。P 9は,
 柱が抜き取られたと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|--------|-----------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 褐色 | ローム粒子多量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量 | 10 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 混入したとみられる古墳時代の土師器片18点(甕18)が出土している。

所見 時期は, 検討できるような遺物が出土していないが, 9世紀中葉と考えられる第20号住居跡を掘り込
 んでいることから, 9世紀後葉以降と推測される。



第103図 第3号掘立柱建物跡実測図(2)

第4号掘立柱建物跡(第104図)

位置 調査区の中央部, H 3 i7区。標高12.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第19・22号住居跡を掘り込んでいる。北部及び北西部は調査区域外に位置している。

規模と構造 桁行2間, 梁行2間, 柱穴数9か所の総柱式建物跡と推定される。桁行方向はN-12°-Eであ
 る。桁行・梁行共に3.65mと推定され, 面積は約13.32㎡である。柱間寸法は1.75~1.89mである。

柱穴 6か所を確認しているが, 3か所は調査区域外に位置していると推測される。長軸55~65cm, 短軸43~
 55cmの円形ないし楕円形を呈している。深さは27~43cmである。柱痕はP 1・5を除いて確認され, その土層
 は締まりのない黒褐色土である。埋土はロームブロックを含んだ黒褐色土や暗褐色土からなるが, 強く叩き締
 められた様子は見られない。P 1・5は, 柱が抜き取られたと考えられる。

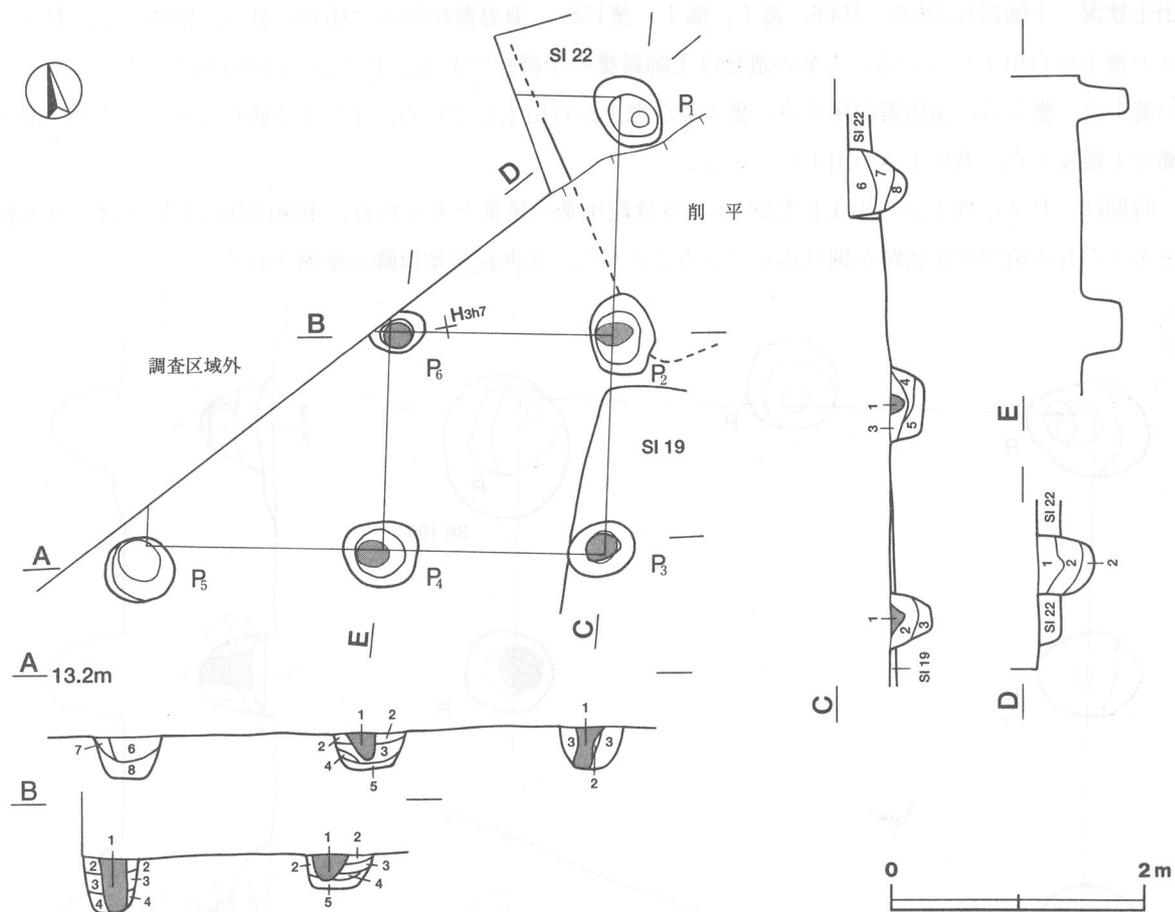
土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | 8 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 時期は, 古墳時代前期~中期の第19・22号住居跡を掘り込んでいることから, 古墳時代中期以降である

ことは確実である。さらに、8～9世紀代と推測される第8号掘立柱建物跡が、本跡と同様な規模と構造を呈し、相互の関連が考えられるため、8～9世紀代の可能性が高いと考えられる。



第104図 第4号掘立柱建物跡実測図

第5号掘立柱建物跡 (第105・106図)

位置 調査区の中央部，H 4 h3区。標高13.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第11・24号住居跡を掘り込み，P 1の上部を第106号土坑に，P 3の北部を第5号溝に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間，梁行2間，柱穴数10か所の側柱式建物跡，桁行方向をN-19°-Eとする南北棟である。桁行は6.48m，梁行は4.54mで，面積は約29.42㎡である。柱間寸法は桁行が1.95～2.35m，梁行は2.14～2.4mである。

柱穴 10か所。長軸59～112cm，短軸50～98cmの円形ないし楕円形を呈している。深さは53～85cmである。P 2では柱痕が確認されている。その土層は締まりのない極暗褐色土である。埋土はロームブロックを含んだ黒褐色土や暗褐色土からなるが，強く叩き締められた様子は見られない。底面に柱を据えたと考えられる小穴が穿たれている。なお，P 2を除くすべての柱穴で，柱の抜き取り痕が確認されている。その覆土である第1～3層には焼土粒子や炭化粒子が比較的多く含まれている。

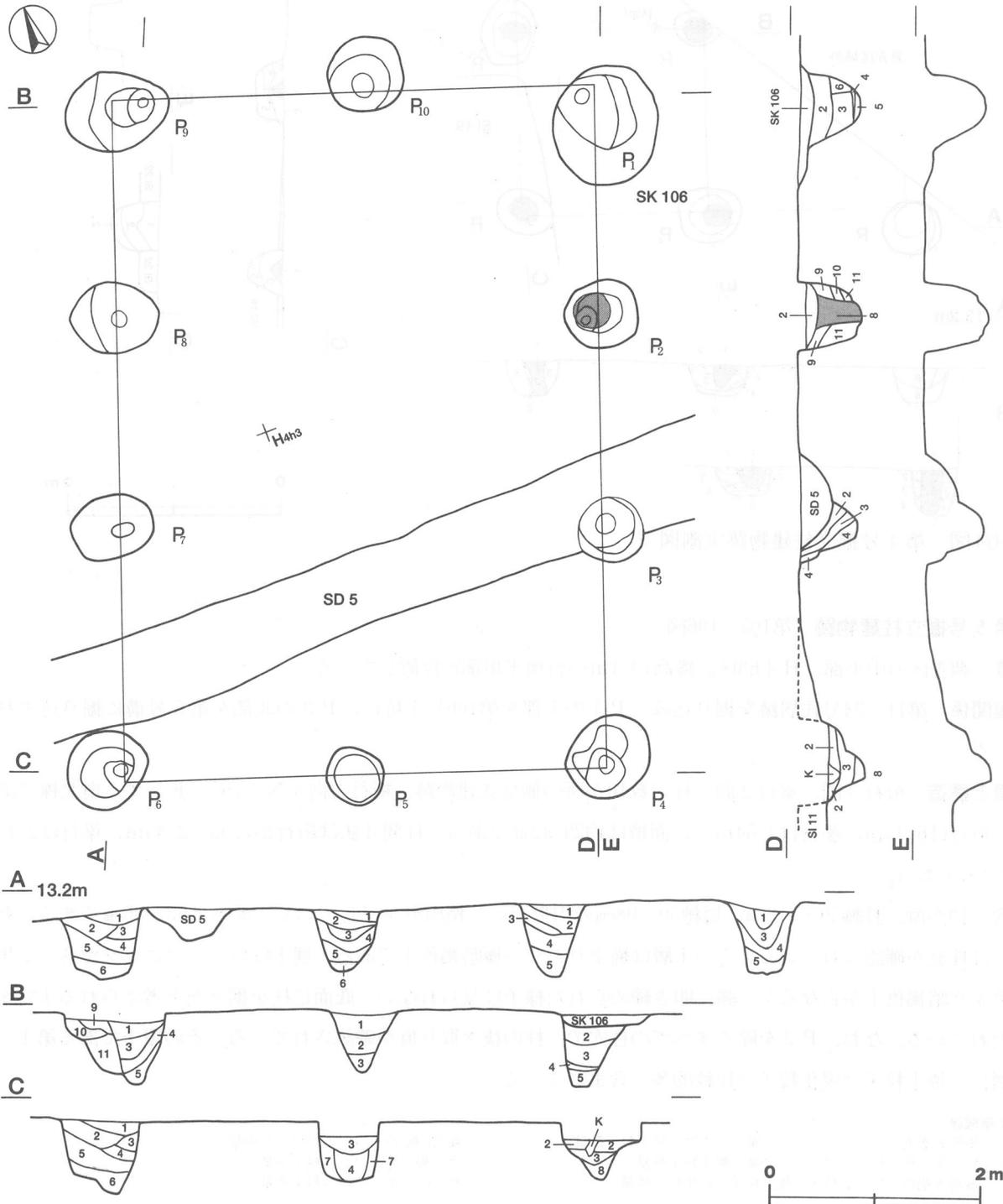
土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------|--------|-----------|
| 1 極暗赤褐色 | ロームブロック少量，炭化物・焼土粒子微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量，焼土粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 極暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子多量 |

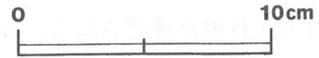
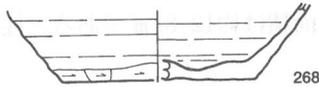
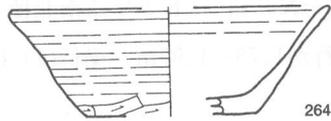
- | | | | |
|--------|------------------------|--------|-----------|
| 7 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 8 極暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 11 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 9 黒褐色 | ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師器片226点 (坏66, 蓋1, 甑1, 甕158), 須恵器片53点 (坏30, 蓋5, 甕18) が, P 3 ~ 6・9の覆土から出土している。大半の遺物は土師器甕の小破片である。P 2からは264をはじめとして, 土師器の蓋1点, 甕5点, 須恵器の坏6点, 甕3点が埋土から出土している。すべて小破片である。また, 混入した縄文土器片1点, 剥片1点が出土している。

所見 時期は, P 2の埋土から出土した264が, 9世紀中葉~後葉と考えられ, 重複関係においては, 9世紀中葉と考えられる第24号住居跡を掘り込んでいることから, 9世紀後葉以降と推測される。



第105図 第5号掘立柱建物跡実測図



第106図 第5号掘立柱建物跡出土遺物実測図

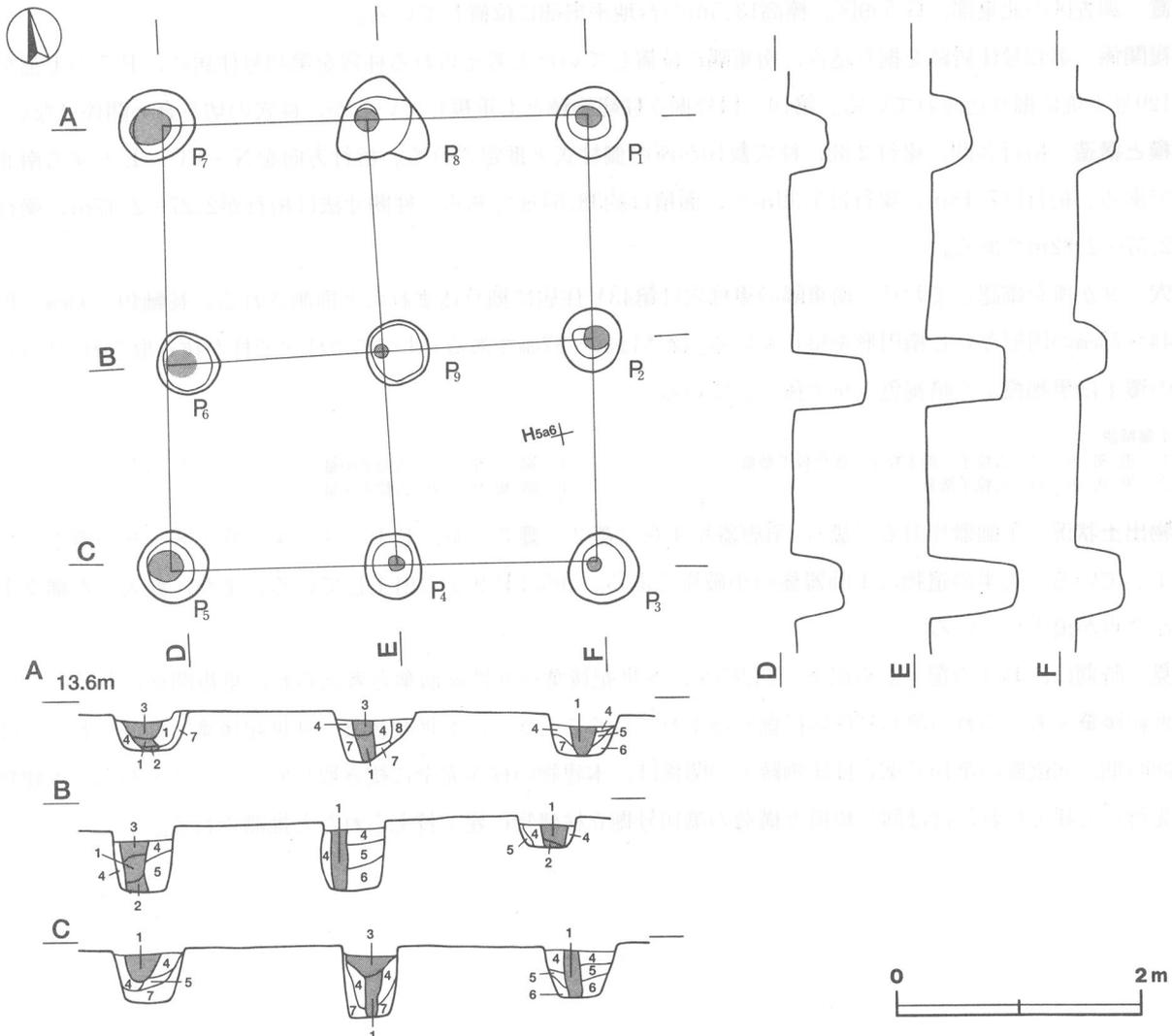
第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
264	須恵器	坏	[12.6]	4.2	[6.8]	石英・長石	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 内面ロクロナデ	P2掘り方	25%
268	須恵器	坏	-	(2.9)	[7.6]	長石・白色粒	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	P2掘り方	30%

第8号掘立柱建物跡 (第107図)

位置 調査区の北東部, H 5 a6区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

確認状況 重複及び攪乱や削平もなく, 遺存状況は良好である。同様な規模と構造の第4号掘立柱建物跡との直線距離は, 約60mである。



第107図 第8号掘立柱建物跡実測図

規模と構造 桁行2間，梁行2間，柱穴数9か所の総柱式建物跡で，桁行方向をN-11°-Eとする南北棟である。桁行は3.66m，梁行は3.5mで，面積は約12.81㎡である。柱間寸法は桁行が1.75~1.97m，梁行は1.65~1.85mである。

柱穴 9か所。長軸53~78cm，短軸48~63cmの円形ないし楕円形を呈している。深さは25~74cmである。すべての柱穴で柱痕が確認されている。その土層は締まりのない暗褐色土である。埋土はロームブロックを含んだ黒褐色土や暗褐色土及び褐色土からなるが，強く叩き締められた様子は見られない。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|---------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 明褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック多量 | 6 にぶい褐色 | ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 7 にぶい褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック中量 | 8 にぶい褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 土師器片3点（甕）が，P7・8の埋土から出土している。また，混入した縄文土器片8点，古墳時代の土師器片15点が出土している。

所見 時期は，P7・8の埋土から3点の武蔵型甕の口縁部及び胴部片が出土していることから，8世紀後葉~9世紀後葉と推測される。

第9号掘立柱建物跡（第108図）

位置 調査区の北東部，G5i9区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第42号住居跡を掘り込み，南東隅に位置していたと考えられる柱穴を第43号住居に，P7の上部を第129号土坑に掘り込まれている。第10・14号掘立柱建物跡とも重複しているが，柱穴の切り合い関係はない。

規模と構造 桁行3間，梁行2間，柱穴数10か所の側柱式と推定される。桁行方向をN-13°-Eとする南北棟である。桁行は7.15m，梁行は5.39mで，面積は約38.54㎡である。柱間寸法は桁行が2.27~2.47m，梁行は2.57~2.82mである。

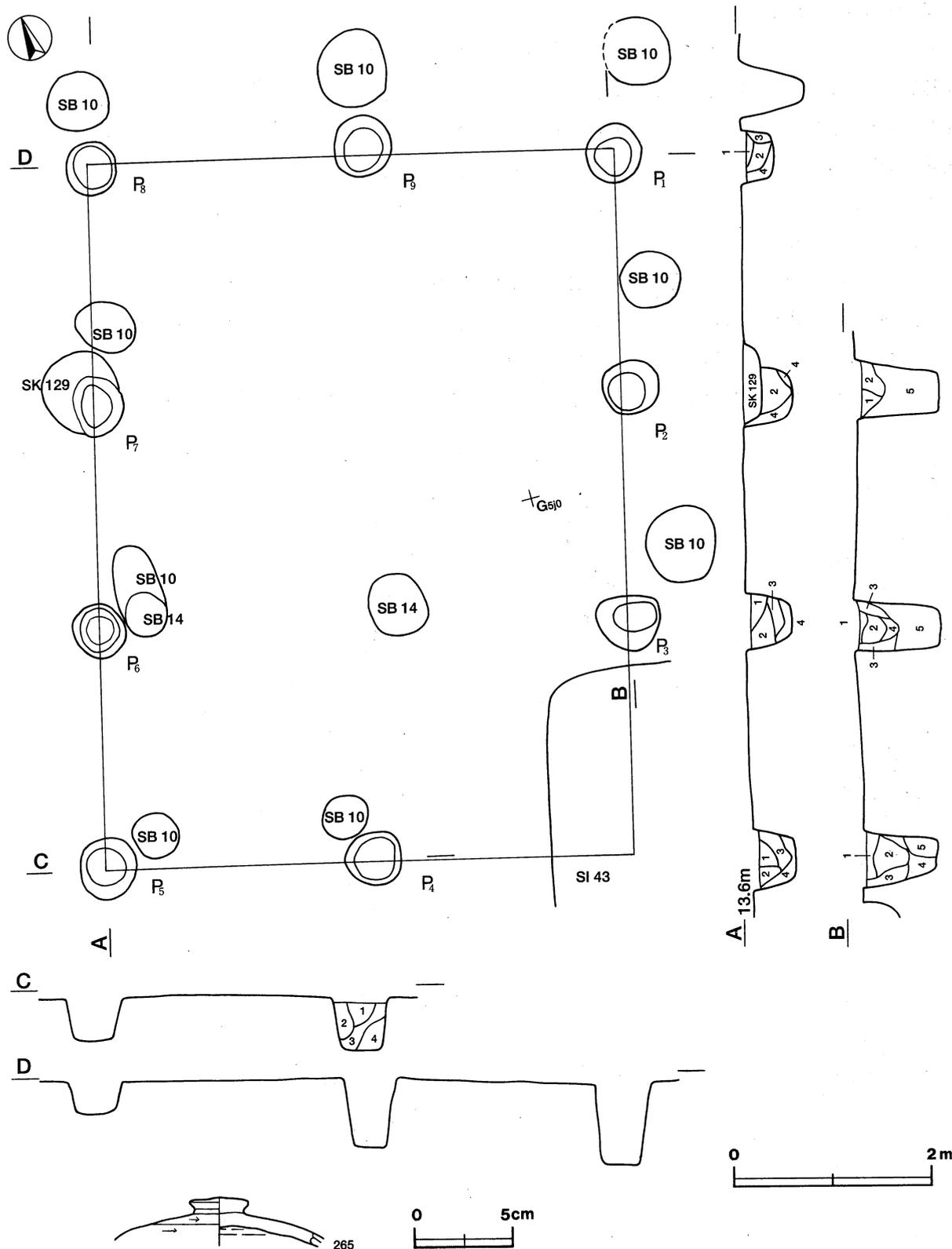
柱穴 9か所を確認しており，南東隅の妻柱穴は第43号住居に掘り込まれたと推測される。長軸49~93cm，短軸44~75cmの円形ないし楕円形を呈している。深さは35~87cmである。すべての柱穴で柱が抜き取られている。その覆土は黒褐色土や暗褐色土を主体としている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片31点（甕），須恵器片4点（蓋2，甕2）が，P1・3・4・6・8・9の覆土から出土している。大半の遺物は土師器甕の小破片である。265はP9から出土している。また，混入した縄文土器片2点が出土している。

所見 時期は，P9の覆土から出土した265が，8世紀後葉~9世紀前葉と考えられ，重複関係においては，9世紀後葉と考えられる第43号住居に掘り込まれていることから，8世紀後葉~9世紀後葉と推測される。ほぼ同時期，同位置の第10号掘立柱建物跡との関係は，本建物の柱が完全に抜き取られていることから，本建物が先行して建てられ，ほぼ同じ規模と構造の第10号掘立柱建物に建て替えられたと推測される。



第108図 第9号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第9号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
265	須恵器	蓋	-	(2.4)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	天井部回転ヘラ削り	P9中層	10%

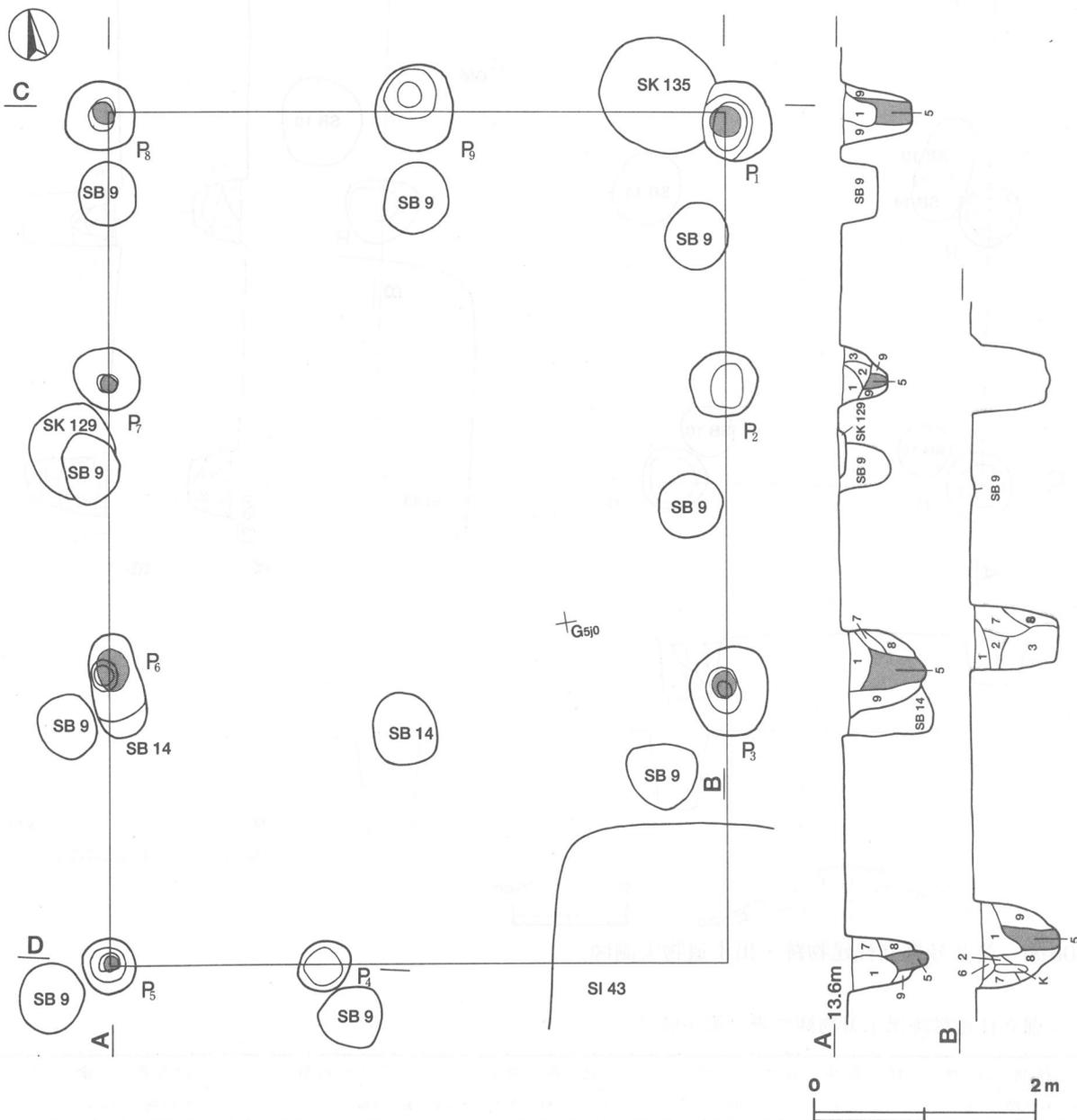
第10号掘立柱建物跡 (第109・110図)

位置 調査区の北東部, G 5 i9区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第42号住居跡, 第14号掘立柱建物跡を掘り込み, 南東隅の妻柱穴を第43号住居に, P 1の東側上部を第135号土坑に掘り込まれている。第9号掘立柱建物跡とも重複しているが, 柱穴の切り合い関係はない。

規模と構造 桁行3間, 梁行2間, 柱穴数10か所の側柱式建物跡と推定される。桁行方向を $N-10^{\circ}-E$ とする南北棟である。桁行は7.48m, 梁行は5.6mで, 面積は約41.89 m^2 である。柱間寸法は桁行が2.38~2.65m, 梁行は1.92~2.83mである。

柱穴 9か所を確認しており, 南東隅の妻柱穴は第43号住居に掘り込まれている。長軸55~65cm, 短軸50~60cmの円形ないし楕円形を呈している。深さは19~83cmである。柱痕が完全に確認されたのはP 1だけである。その土層は締まりのない黒褐色土である。埋土はロームブロックを含んだ黒褐色土や暗褐色土及び褐色土からなるが, 強く叩き締められた様子は見られない。P 2・4・9は柱が抜き取られ, P 3・5~8は土層の上部



第109図 第10号掘立柱建物跡実測図

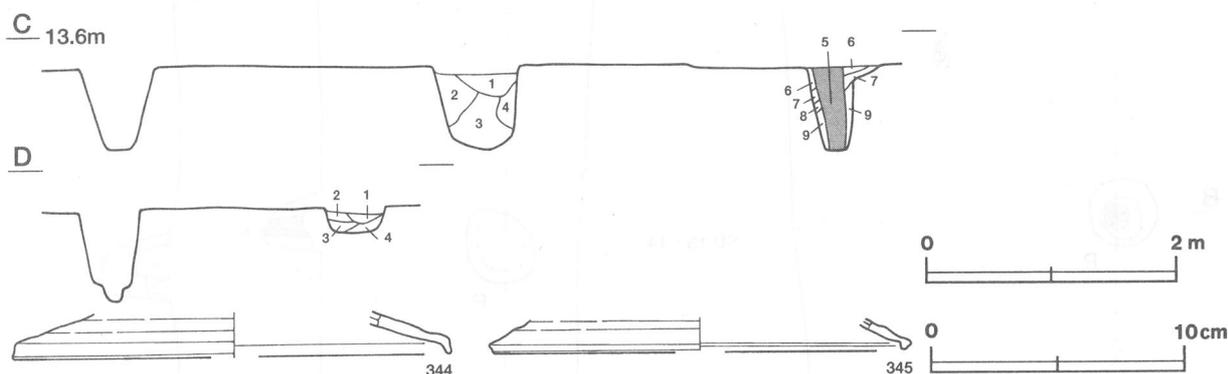
で柱の抜き取り痕，下部で柱痕が確認されている。柱の抜き取り痕の覆土は，黒褐色土を主体としている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 8 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子微量 | 9 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片10点（坏3，甕7），須恵器片7点（坏3，蓋4）が，P2・3・5～9の覆土や埋土から出土している。344はP6の埋土から，345はP7の柱の抜き取り痕の覆土から出土している。また，混入した弥生土器片2点，古墳時代の土師器片53点，石鏃1点，剥片1点が出土している。

所見 時期は，出土土器が8世紀後葉～9世紀中葉と考えられ，重複関係においては，9世紀後葉と考えられる第43号住居跡に掘り込まれていることから，8世紀後葉～9世紀中葉と推測される。ほぼ同時期，同位置の第9号掘立柱建物との関係は，第9号掘立柱建物が柱を完全に抜き取られていることから，第9号掘立柱建物が先行して建てられ，ほぼ同じ規模と構造の本建物に建て替えられたと推測される。



第110図 第10号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第10号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第110図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
344	須恵器	蓋	[17.4]	(1.8)	-	長石	灰白	普通	内・外面ロクロナデ	P5掘り方	5%
345	須恵器	蓋	[16.2]	(1.3)	-	長石	灰白	普通	内・外面ロクロナデ	P2下層	5%

第11号掘立柱建物跡（第111図）

位置 調査区の北東部，G5j6区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 P6の南側上部を第13・14号溝に掘り込まれている。

規模と構造 桁行2間，梁行2間，柱穴数8か所の側柱式建物跡で，桁行方向をN-100°-Eとする東西棟である。桁行は5.53m，梁行は4.86mで，面積は約26.97㎡である。柱間寸法は桁行が2.74～2.81m，梁行は2.31～2.55mである。

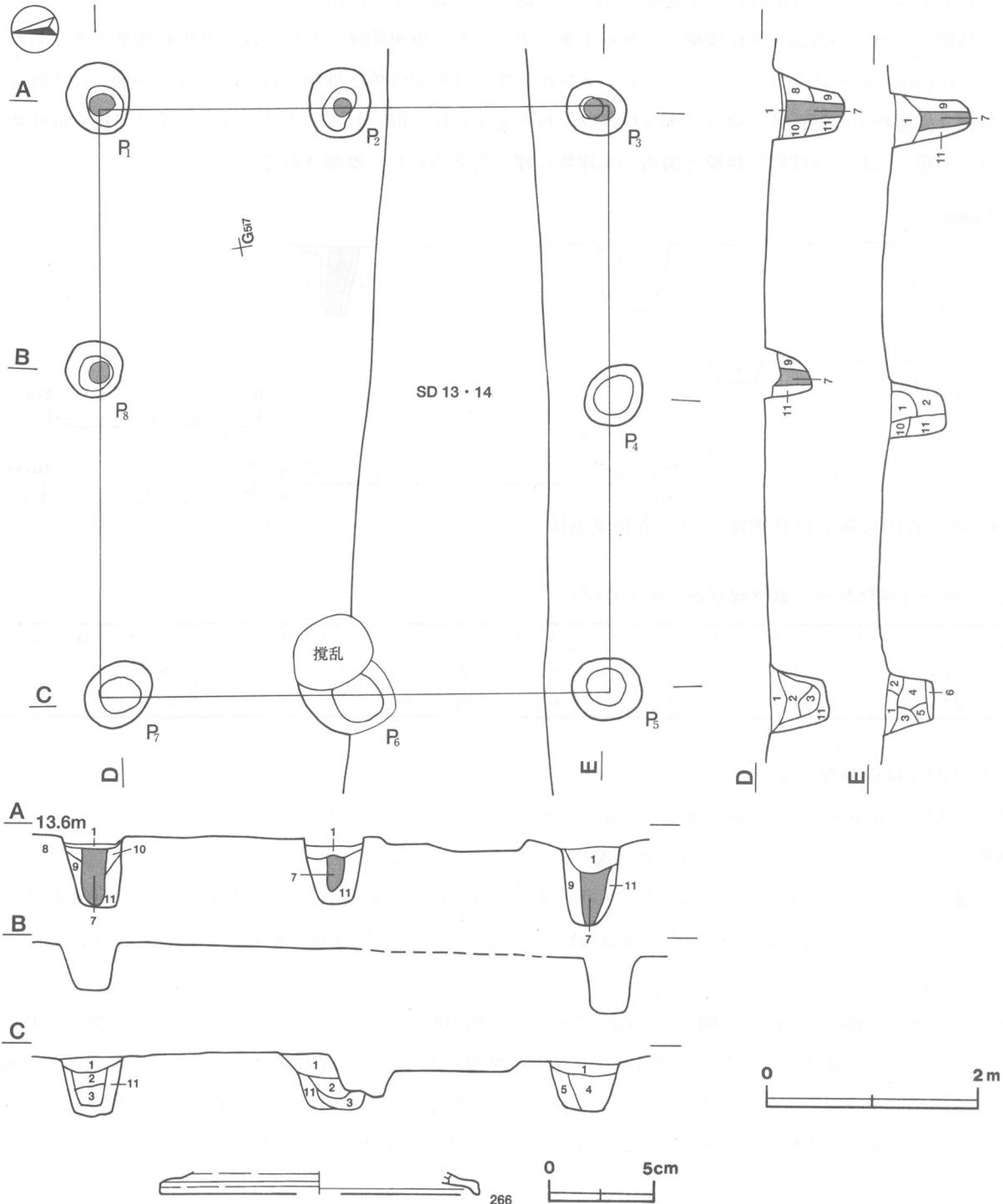
柱穴 8か所。長軸56～69cm，短軸51～72cmの円形ないし楕円形を呈している。深さは47～74cmである。P1～3・8では柱痕が確認され，その土層は締まりのない黒褐色土である。埋土はロームブロックを含んだ黒褐色土や暗褐色土及び褐色土からなるが，強く叩き締められた様子は見られない。その他の柱穴は柱が抜き取られている。その覆土は比較的含有物の少ない黒褐色土や暗褐色土を主体としている。

土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------|-----------|------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ローム粒子中量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 9 褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量 | 11 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 6 褐色 | ローム粒子中量 | | |

遺物出土状況 土師器片13点(甕), 須恵器片1点(蓋)が, P1・2から出土している。大半の遺物は土師器甕の小破片である。266はP2の埋土から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀後葉~9世紀中葉と考えられる。



第111図 第11号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第 11 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第 111 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
266	須恵器	蓋	[15.2]	(1.1)	-	長石・白色粒	褐灰	普通	内・外面ロクロナデ	P2掘り方	5%

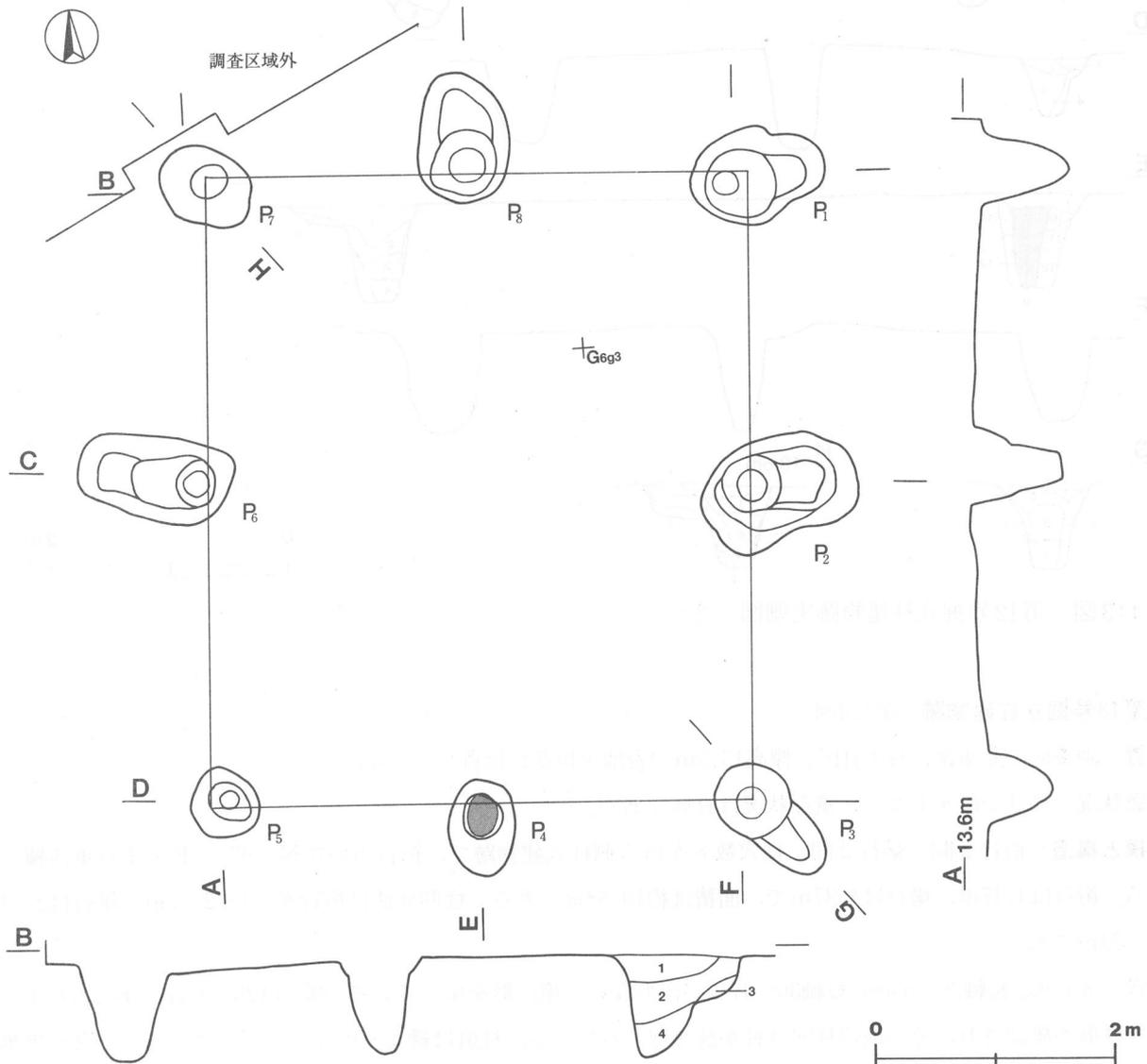
第12号掘立柱建物跡 (第112・113図)

位置 調査区の北東部, G 6 g2区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

確認状況 攪乱や削平もなく, 遺存状況は良好である。P 7の北西部は調査区域外に位置していたが, 拡張して全体を確認している。

規模と構造 桁行2間, 梁行2間, 柱穴数8か所の側柱式建物跡で, 桁行方向を $N-4^{\circ}-E$ とする南北棟である。桁行は5.3m, 梁行は4.58mで, 面積は約24.27 m^2 である。柱間寸法は桁行が2.64~2.66m, 梁行は2.28~2.3mである。

柱穴 8か所。すべての柱穴で柱が抜き取られている。特にP 1・2・6・8では, 柱を抜き取るために柱穴の側部が掘り込まれ, 平面形を大きく改変されている。長軸111~133cm, 短軸62~83cmの楕円形を呈している。P 3~5・7は, 柱が抜き取られているものの, 本来の柱穴の様相をほぼ留めている。長軸62~83cm, 短軸54



第112図 第12号掘立柱建物跡実測図 (1)

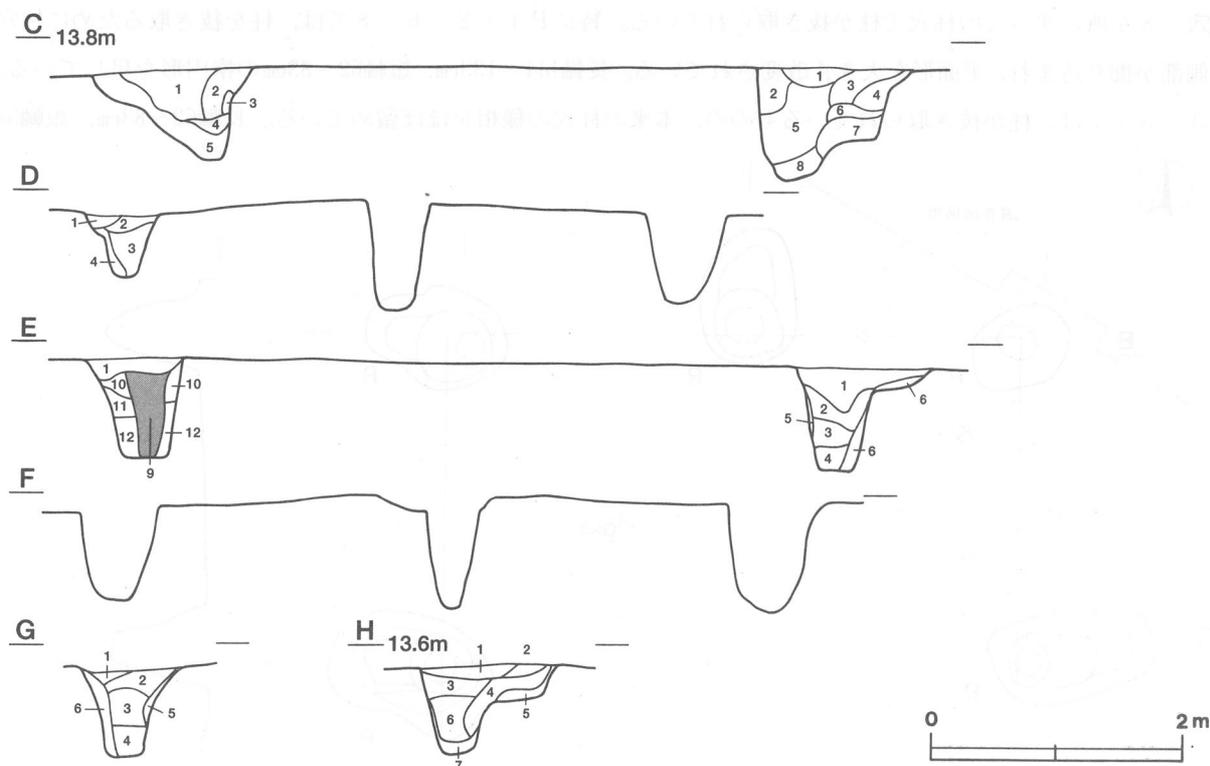
～64cmの円形ないし楕円形を呈している。深さは48～90cmである。P 4 では土層の下部～中部で柱痕が確認されている。上部は柱の抜き取りのために掘り込まれている。柱痕は締まりのないロームブロックを含む黒褐色土である。埋土はロームブロックを含んだ暗褐色土や黒褐色土からなるが、強く叩き締められた様子は見られない。柱の抜き取り痕の覆土は、ロームブロックを多く含んだ黒褐色土や暗褐色土を主体としている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|--------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 8 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック中量 | 11 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量 | 12 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 時期は、8世紀後葉～9世紀中葉と推測される第11号掘立柱建物跡が、本建物と同様な規模と構造を呈し、相互の関連が考えられるため、8～9世紀代の可能性が高いと考えられる。



第113図 第12号掘立柱建物跡実測図(2)

第13号掘立柱建物跡(第114図)

位置 調査区の北東部, G 6j1区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

確認状況 攪乱や削平もなく、遺存状況は良好である。

規模と構造 桁行2間, 梁行2間, 柱穴数8か所の側柱式建物跡で、桁行方向をN-97°-Eとする東西棟である。桁行は4.47m, 梁行は4.37mで、面積は約19.53㎡である。柱間寸法は桁行が2.1～2.37m, 梁行は2.14～2.23mである。

柱穴 8か所。長軸39～55cm, 短軸36～47cmの円形ないし楕円形を呈している。深さは20～47cmである。P 4・8で柱痕が確認され、その他の柱穴は柱が抜き取られている。柱痕は締まりのないロームブロックを含む黒褐色土である。柱の抜き取り痕の覆土は、ロームブロックを多く含む暗褐色土と褐色土を主体としている。第6

層は埋土である。

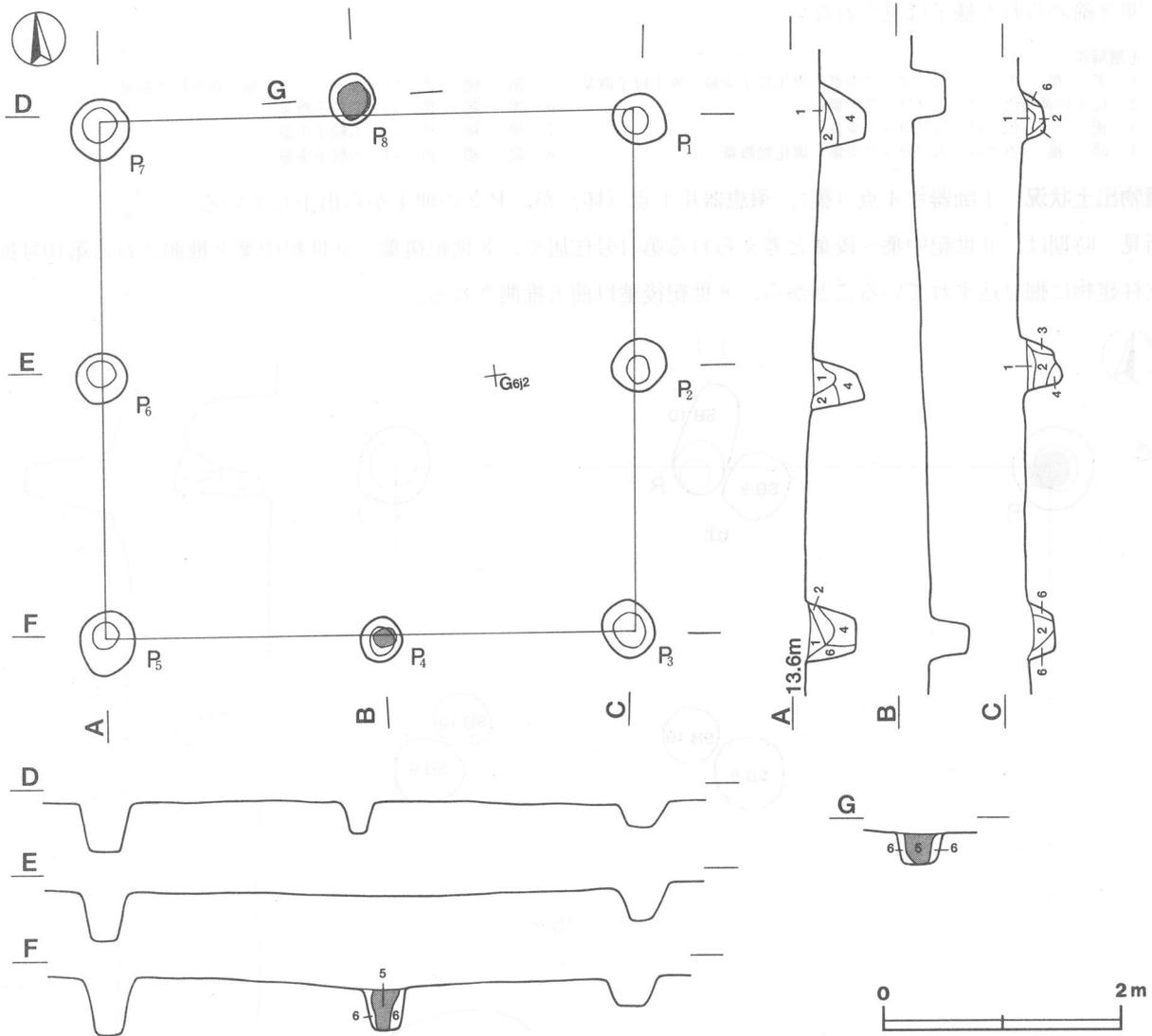
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック微量
- 6 暗褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片3点(甕), 須恵器片1点(蓋)が, P3・5・6の覆土から出土している。また, 混入した縄文土器片63点が出土している。

所見 時期は, 8世紀後葉以前と推測される第14号掘立柱建物跡が, 本建物と同様な規模と構造を呈し, 相互の関連が考えられるため, 8~9世紀代の可能性が高いと考えられる。



第114図 第13号掘立柱建物跡実測図

第14号掘立柱建物跡 (第115・116図)

位置 調査区の北東部, G 5 j8区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第42号住居跡を掘り込み, P 5を第10号掘立柱建物のP 6に, 南東隅の妻柱穴を第12号井戸に, 東・西桁行の中央に位置していたと考えられる柱穴を第41号住居と第13・14号溝に掘り込まれている。第9号掘立柱建物跡とも重複しているが, 柱穴の切り合い関係はない。

規模と構造 桁行2間，梁行2間，柱穴数8か所の側柱式建物跡と推定される。桁行方向をN-14°-Eとする南北棟である。桁行は5.75m，梁行は5.55mで，面積は約31.91㎡である。梁行の柱間寸法は，2.55～3mである。

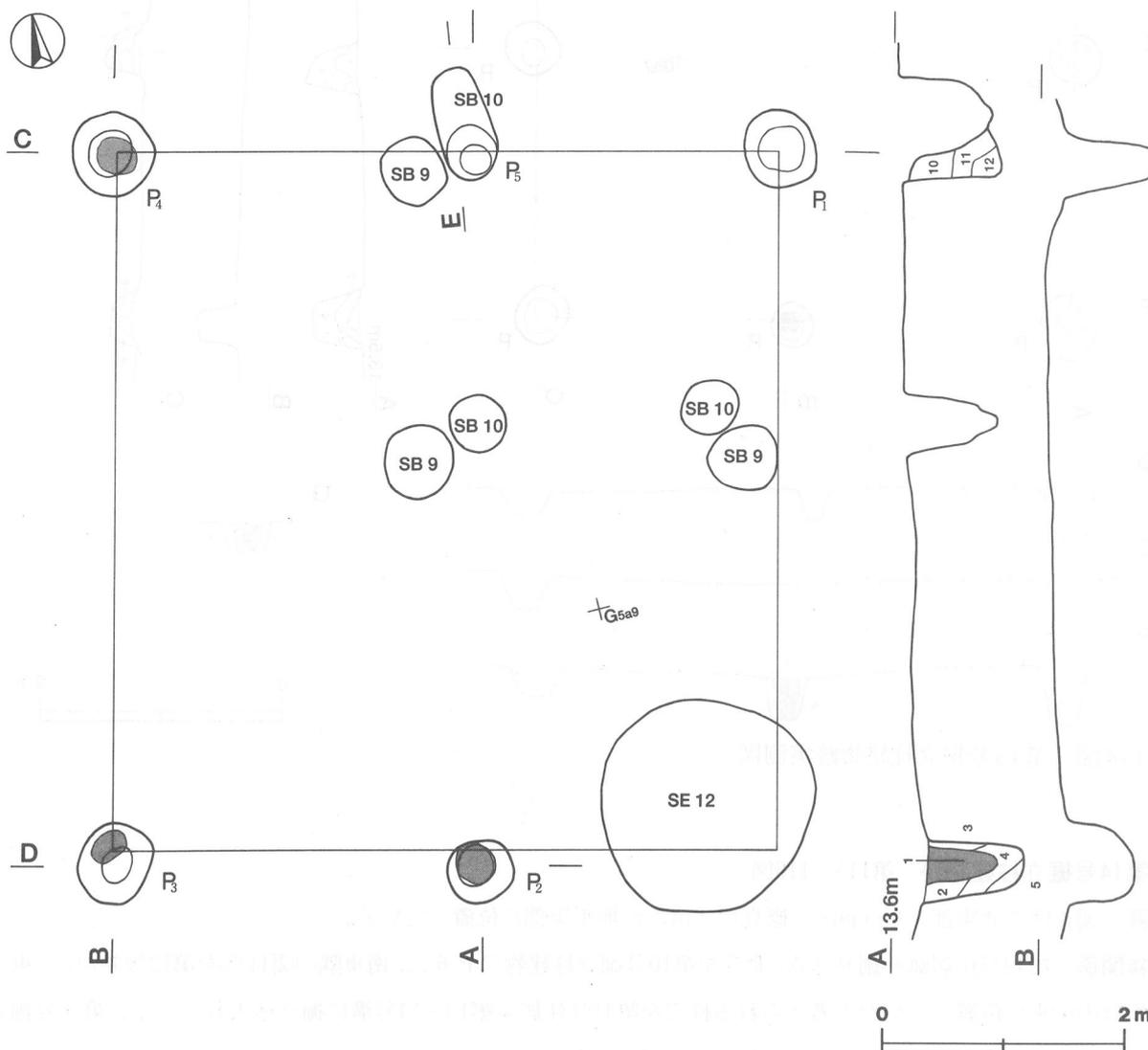
柱穴 5か所を確認した。東・西桁行の中央に位置していたと考えられる柱穴は，失われている。掘り込みの深さは本建物の柱穴の方が深いので，第41号住居の床面下や第13・14号溝の底面から発見される可能性は高かったが，十分な精査を行えず，確認には至らなかった。長軸55～69cm，短軸43～66cmの円形ないし楕円形を呈している。深さは53～92cmである。P1は柱が抜き取られ，P2～4では柱痕が確認されている。その土層は締まりのない黒褐色土である。埋土はロームブロックを含んだ黒褐色土や暗褐色土及び褐色土からなるが，強く叩き締められた様子は見られない。

土層解説

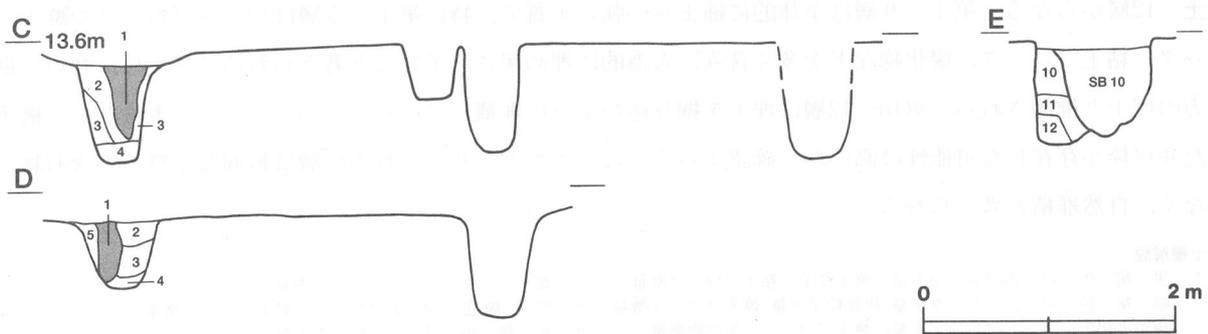
- | | | | | |
|----------|-------------------------|-------|---|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | 色 | ロームブロック中量，炭化粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 | 6 黒褐色 | 色 | ローム粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量 | 7 黒褐色 | 色 | ローム粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化物微量 | 8 暗褐色 | 色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片4点(甕)，須恵器片1点(坏)が，P2の埋土から出土している。

所見 時期は，9世紀中葉～後葉と考えられる第41号住居や，8世紀後葉～9世紀中葉と推測される第10号掘立柱建物に掘り込まれていることから，8世紀後葉以前と推測される。



第115図 第14号掘立柱建物跡実測図(1)



第116図 第14号掘立柱建物跡実測図(2)

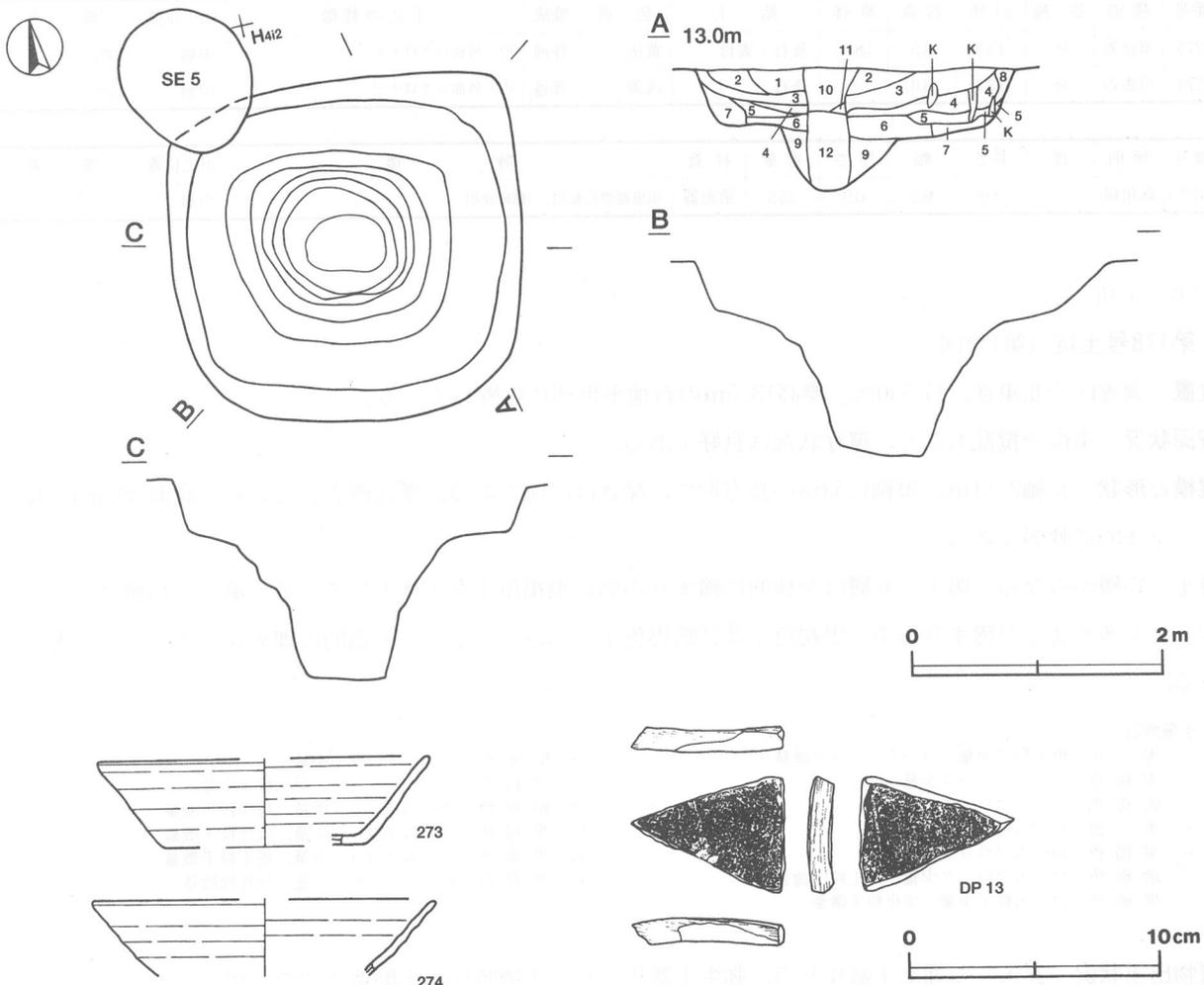
(3) 井戸跡

第6号井戸跡(第117図)

位置 調査区の中央部, H 4 i2区。標高12.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 H 4 h~i1~2区の井戸集中区で確認され, 北西部を第5号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 確認面での形状は長軸2.82m, 短軸2.73mの隅丸方形である。深さは1.58mで, 形状は漏斗状を呈している。底面はほぼ平坦で, 白色粘土層に達している。



第117図 第6号井戸跡・出土遺物実測図

覆土 12層からなる。第1～9層は全体的に締まりの強い土質で、特に第1～5層はロームブロックや焼土ブロック、粘土ブロック、炭化物などを多く含み、人為的に埋め戻されていると考えられることから、井戸の掘り方の埋土と推測される。第10～12層は埋土を掘り込むように堆積している。このことから、木材などで構築した井戸枠が存在した可能性は高いが、確認することはできなかった。これらの層は軟弱な土質で、含有物が少なく、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・粘土ブロック微量	7 褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土ブロック微量	8 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
3 極暗赤褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量	9 暗褐色	ロームブロック少量
4 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	10 黒褐色	焼土粒子微量
5 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	11 褐色	ローム粒子多量
6 灰褐色	ロームブロック少量	12 暗褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片155点(坏15, 甕140), 須恵器片168点(坏120, 高盤3, 蓋6, 甕39), 須恵器片転用砥1点, 焼成粘土塊17点が、第1～9層の埋土から出土している。また、混入した縄文土器片13点, 土師器片27点が出土している。

所見 確認された井戸跡の中で唯一掘り方を伴っている。井戸枠などは確認することができなかった。時期は、埋土から出土した土器の様相から、8世紀中葉～後葉と考えられる。

第6号井戸跡出土遺物観察表(第117図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
273	須恵器	坏	[13.3]	3.5	[8.0]	長石・雲母	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ	中層	20%
274	須恵器	坏	[13.7]	(3.0)	-	長石	浅黄	普通	内・外面ロクロナデ	中層	15%

番号	種別	径	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP13	転用砥	-	4.6	6.2	0.9	25.5	須恵器	須恵器甕片転用, 3側縁使用	中層	

(4) 土坑

第178号土坑(第118図)

位置 調査区の北東部, G 5 i0区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

確認状況 重複や攪乱もなく、遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸2.11m, 短軸1.53mの長方形で、深さは62cmである。壁は直立している。底面は凹凸が見られ、全体的に軟弱である。

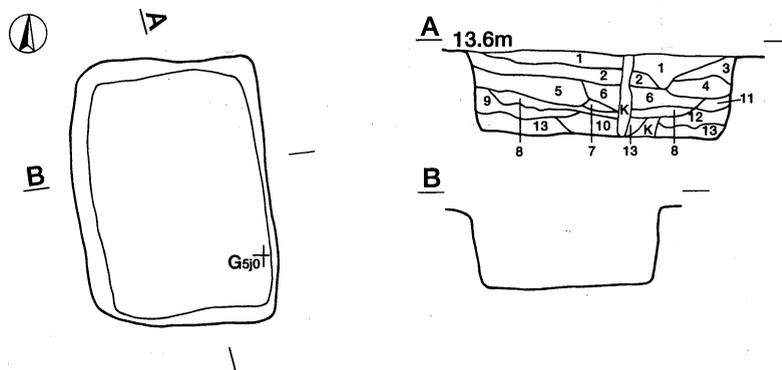
覆土 13層からなる。第1～6層は全体的に締まりの弱い黒褐色土を主体としている。第7～13層はロームブロックを多く含んだ締まりのある黒褐色土及び暗褐色土であることから、人為的に埋め戻されていると考えられる。

土層解説

1 黒色	焼土粒子少量, ロームブロック微量	8 暗褐色	ロームブロック中量
2 黒褐色	ロームブロック少量	9 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック少量	10 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
4 黒色	ローム粒子少量	11 黒褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量
5 黒褐色	ロームブロック微量	12 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化物微量
7 黒褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量		

遺物出土状況 混入した縄文土器片9点, 弥生土器片2点, 古墳時代の土師器片10点が出土している。

所見 形状や覆土が埋め戻されていることから、土坑墓の可能性が高いと推測される。時期は、同様な土坑墓と考えられる第179号土坑との関連から、平安時代と考えられる。



第118図 第178号土坑実測図

第179号土坑 (第119図)

位置 調査区の北東部, H 5 a5区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

確認状況 重複や攪乱もなく, 遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸2.78m, 短軸1.83mの長方形で, 深さは68cmである。壁は直立している。底面は凹凸が見られ, 全体的に軟弱である。

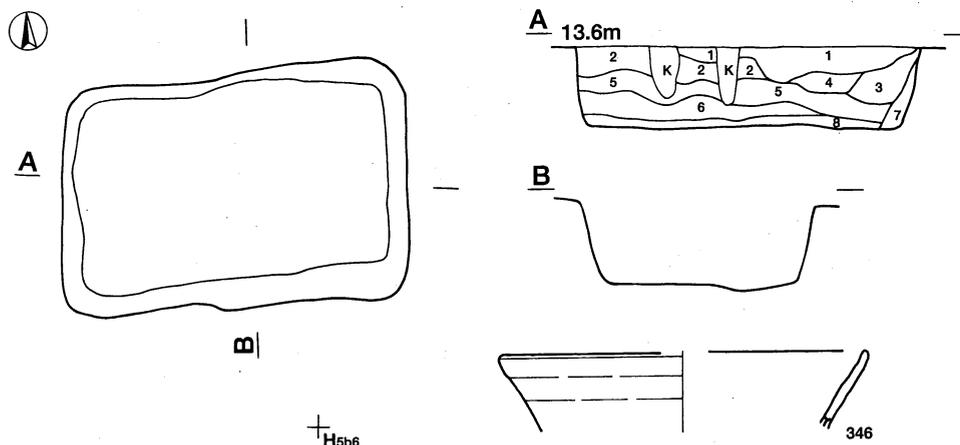
覆土 8層からなる。全体的にロームブロックを多く含んだ締まりの弱い黒褐色土を主体としている。第5層には長さ15~30cm程度の炭化材が含まれている。第5~7層が不自然な水平堆積をしていることから, 人為的に埋め戻されていると考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 炭化物中量, ロームブロック・焼土粒子少量 | 5 暗褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化材微量 |
| 2 黒色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | 6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子・炭化物少量 | 7 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土ブロック微量 | 8 暗褐色 ロームブロック微量 |

遺物出土状況 須恵器片1点(坏)が, 覆土下層から, 炭化材6点が第5層からまばらに出土している。また, 混入した縄文土器片15点, 弥生土器片2点, 古墳時代の土師器42点, 土製支脚片1点, 剥片1点が出土している。

所見 形状や覆土が埋め戻されていることから, 土坑墓の可能性が高いと推測される。時期は, 出土した須恵器の坏片から, 平安時代と考えられる。



第119図 第179号土坑・出土遺物実測図

第179号土坑出土遺物観察表 (第119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
346	須恵器	坏	[14.6]	(3.1)	-	長石	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ	表土	5%

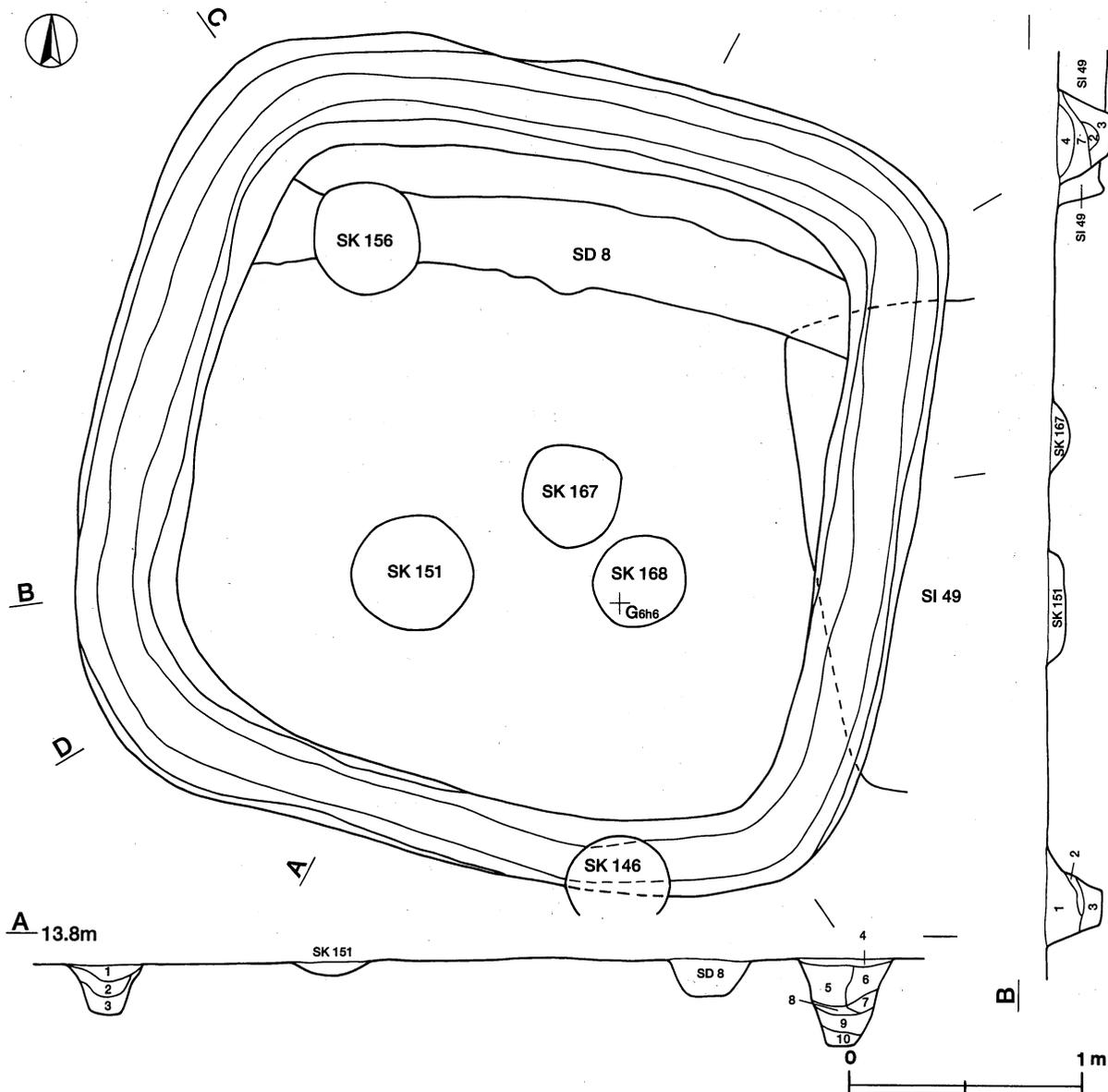
(5) 方形周溝

第1号方形周溝 (第120・121図)

位置 調査区の北東部、G 6 g5区。標高13.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 西部で第49号住居跡を、北部で第8号溝を掘り込んで、南東コーナー部付近を第149号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.14m、短軸6.99mの隅丸方形である。方台部は長軸5.53m、短軸5.51mの隅丸方形である。南西コーナー部は他よりも緩やかなカーブを描いている。周溝の上幅は64~104cm、下幅は21~41cm、深さは44~75cmで、南部の中央部付近が最も浅く、北部は南部の1.5~1.7倍程度深く掘り込まれている。断面形は逆台形を呈している。壁は外反しながら立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。



第120図 第1号方形周溝実測図

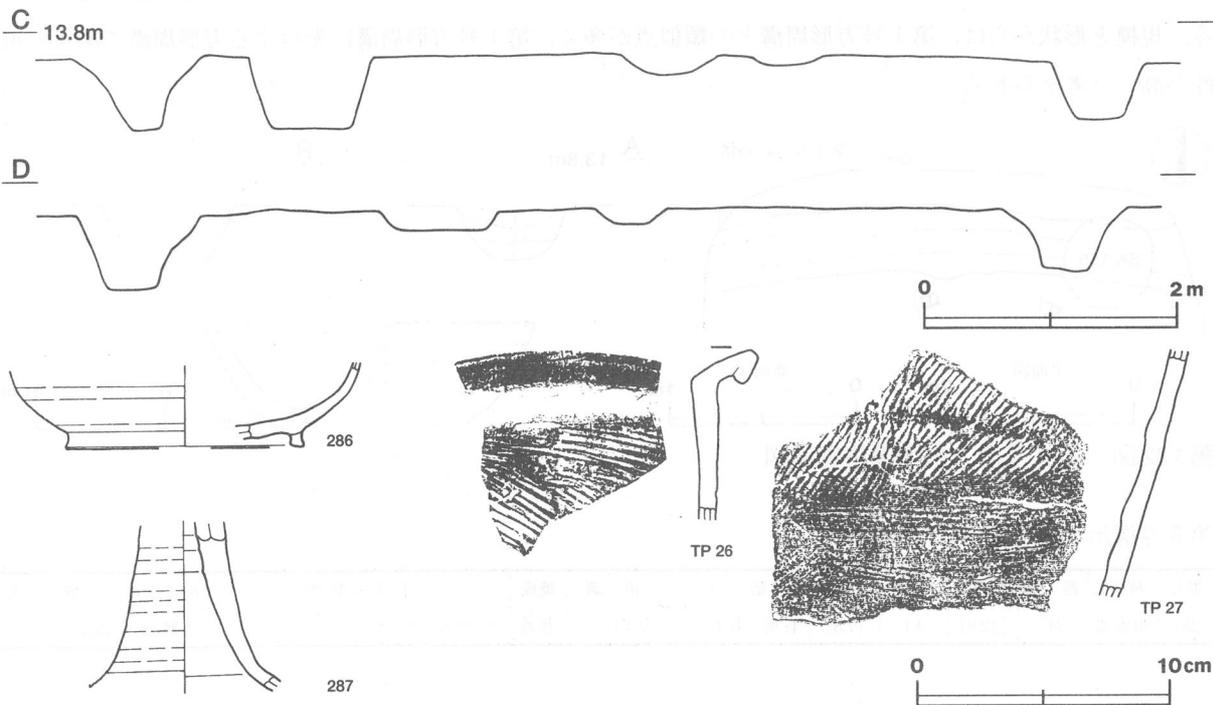
覆土 10層からなる。基本的に第1～3層の黒褐色土を主体としているが、北部は第4～10層の黒褐色と暗褐色土が互層に堆積している。第4～10層はロームブロックを比較的多く含んでいるが、全体的な様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック多量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | 9 黒褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック微量, 粘土ブロック微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 須恵器片41点(坏19, 高盤2, 蓋2, 甗2, 壺4, 甕12)が、北部と南部の覆土中層～下層からまばらに出土している。また、混入した縄文土器片6点, 古墳時代の土師器片108点が出土している。

所見 規模と形状から、方形周溝墓の可能性が高いと考えられる。主体部などは確認されず、積極的に墓であるとは断言できない。出土した遺物は、周溝に流れ込んだ遺物と判断されるため、時期を決定することは困難であるが、おおむね8世紀中葉～9世紀後葉と考えられる。重複関係からは、8世紀後葉～9世紀前葉と考えられる第49号住居跡を掘り込んでいることから、9世紀中葉以降と考えられる。



第121図 第1号方形周溝・出土遺物実測図

第1号方形周溝出土遺物観察表(第121図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
286	須恵器	高台付坏	-	(3.3)	[9.4]	長石	黄灰	普通	高台貼り付け後ロクロナデ	下層	15%
287	須恵器	高盤	-	(6.8)	-	石英・長石	灰	普通	内・外面ロクロナデ	下層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP26	須恵器	甕	-	(6.9)	-	石英・長石・雲母	褐灰	普通	外面平行叩き, 内面ナデ	下層	5%
TP27	須恵器	甗	-	(9.2)	-	石英・長石・雲母	褐灰	普通	外面平行叩き, 下端ヘラ削り, 内面円形当て具痕	下層	5%

(6) 溝

第8号溝 (第122図)

位置 調査区の北東部, G 6 g5~G 6 g6区。標高13.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 東部で第49号住居跡を掘り込んで, 東西両端を第1号方形周溝に, 西部を第156号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認した長さ5.25m, 上幅60~80cm, 下幅20~30cm, 深さ28~34cmである。走行方向はN-80°-Wで, やや弧を描いている。壁はなだらかに立ち上がり, 底面はほぼ平坦である。

覆土 2層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため, 自然堆積と考えられる。全体的に軟弱な土質からなる。

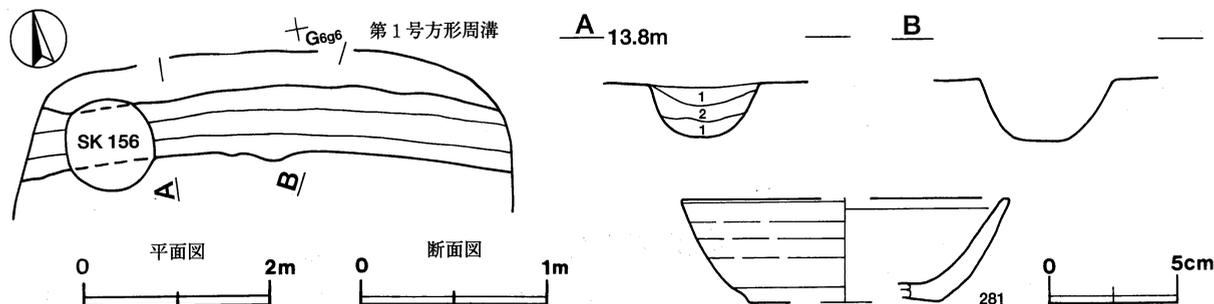
土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

2 黒色 ロームブロック微量

遺物出土状況 須恵器片1点(坏)が, 中央部の覆土下層から出土している。

所見 出土土器が1点と少ないため, 時期を決定することは困難である。重複関係からは, 8世紀後葉~9世紀前葉と考えられる第49号住居跡を掘り込み, 9世紀中葉以降と考えられる第1号方形周溝に掘り込まれている。規模と形状からは, 第1号方形周溝との類似点が多く, 第1号方形周溝に先行する方形周溝であった可能性が高いと考えられる。



第122図 第8号溝・出土遺物実測図

第8号溝出土遺物観察表 (第122図)

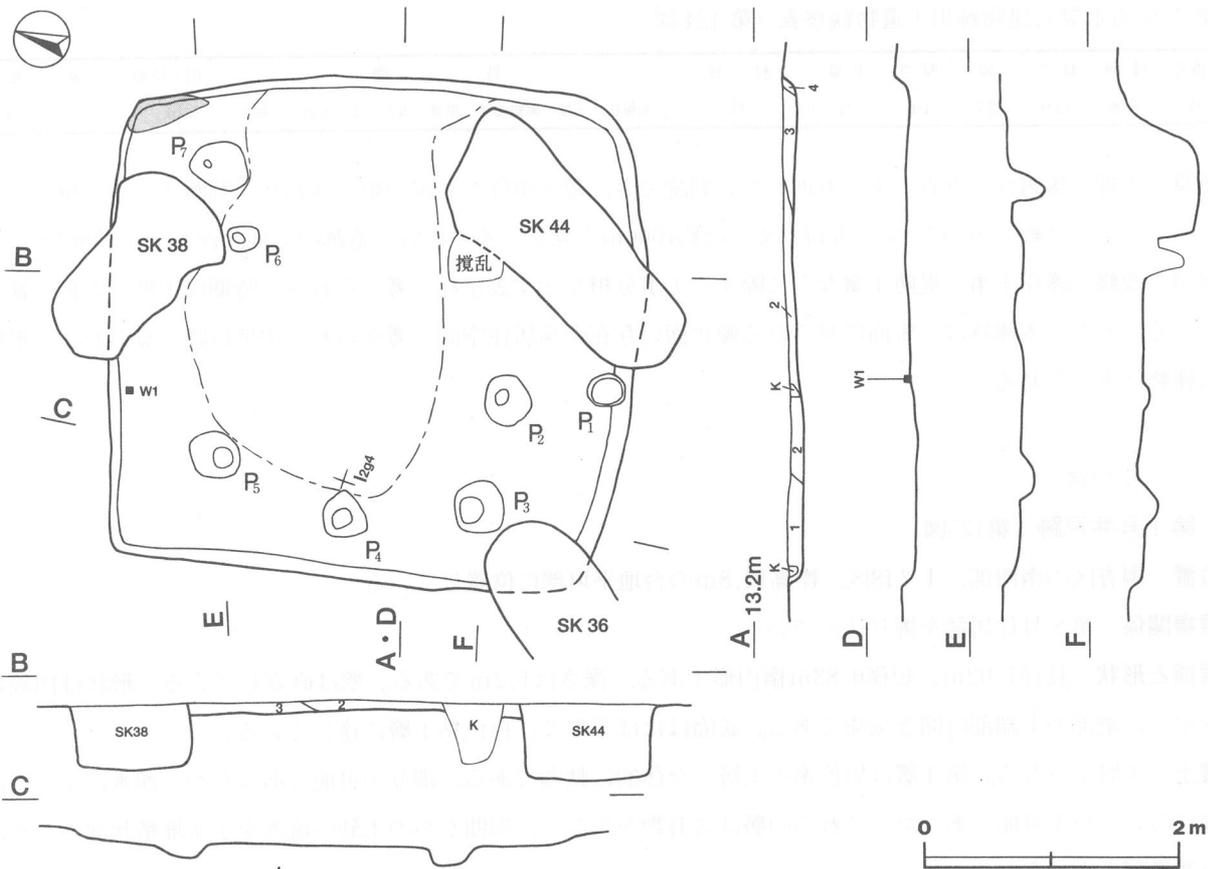
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
281	須恵器	坏	[12.8]	4.1	[7.8]	石英・長石	灰白	普通	内・外面ロクロナデ	下層	20%

4 中世以降の遺構と遺物

今回の調査で確認した中世~近世の遺構は, 方形竪穴建物跡1基, 井戸跡12基, 土坑175基, 溝14条である。これらの遺構の分布は, 方形竪穴建物跡が単独, 井戸跡は調査区全域に散在しているが, 特に中央部の台地縁辺部には, 6基が密集していることから, 井戸集中区と考えられる。土坑及び溝は調査区全域から確認されている。

ここでは遺構の形態や覆土, 重複関係などから, 中世以降に位置づけられる主な遺構について, その特徴と出土した遺物について記述する。また, 土坑及び溝については, 実測図と土層解説を掲載し, 詳細は一覧表に記載する。

(1) 方形竪穴建物跡



第123図 第1号竪穴建物跡実測図

第1号方形竪穴建物跡 (第123・124図)

位置 調査区の南西部, I 2 f4区。標高13mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第36・38・44号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.17m, 短軸3.95mの方形である。壁は高さ15cmで, なだらかに立ち上がっている。南壁はやや弧状を呈している。主軸方向はN-25°-Wである。北東コーナー部の壁及び床面の一部が赤変硬化している。

床 ほぼ平坦で全体的に軟弱で, 一部が踏み固められている。

ピット 7か所。P4は南西壁際の中央部に位置しているため, 出入り口施設に関係するピットと推定される。深さは27cmである。その他のピットは性格不明である。

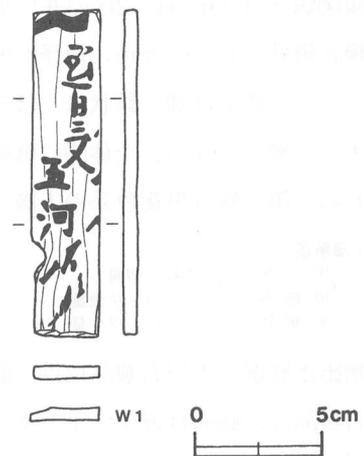
炉・竈 確認されなかった。

覆土 4層からなる。層厚が13cmと薄いため, 堆積状況は不明である。

土層解説

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 3 黒褐色 ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック微量 | 4 褐色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 北壁の中央部の壁際直下から木簡1点が出土している。木簡は墨書した面を上に向けた状態で, 床面の約10cm上位から出土している。また, 混入したと考えられる縄文土器片6点, 土師器片25点, 礫8点が出土している。



第124図 第1号方形竪穴建物跡出土遺物実測図

第1号 方形竪穴建物跡出土遺物観察表 (第124図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W1	木筒	12.9	2.7	0.6	24	杉	割板状, 下端・両側切断, 墨書「五百二丈 五河□ (郷カ)」	下層	PL49

所見 木筒の墨書は「五百二丈 五河□」と判読でき、数と単位と名詞の組み合わせと判断できる。単位としての「一丈」は約3mのため、「五百二丈」は約1506mとなる。その内容と遺跡の立地状況などから推測して、河川の改修や護岸工事、堤防工事などに際する工事分担を示す表示札と考えられる。時期は中世～近世と推定される。また、本建物は、床面に見られる硬化面の存在から居住空間と考えられ、中世以降に見られる方形竪穴建物と考えられる。

(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第125図)

位置 調査区の南西部, I 2 f8区。標高12.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.02m, 短径0.83m楕円形である。深さは1.2mである。壁は直立している。形状は円筒状を呈し、東部の上端部は開き気味である。底面はほぼ平坦で、白色粘土層に達している。

覆土 4層からなる。第4層は黒色系の土層で全体的に軟弱である。細分が可能であったが、湧水によって記録することが不可能であった。これらの層は含有物が少なく、周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黒色 ロームブロック微量 | 4 黒色 ローム粒子微量 |

遺物出土状況 混入した土師器片18点が出土している。

所見 時期は、古墳時代前期と考えられる第8号住居跡を掘り込んでいることや覆土の様相から、近世を遡ることはないと考えられる。

第2号井戸跡 (第125図)

位置 調査区の中央部, H 4 h1区。標高12.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 H 4 h～i1～2区の井戸集中区で確認され、南部を第5号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径0.98m, 短径0.93mの円形である。深さは1.17mで、壁は直立している。形状は円筒状を呈している。底面は掘り鉢状にくぼみ、白色粘土層に達している。

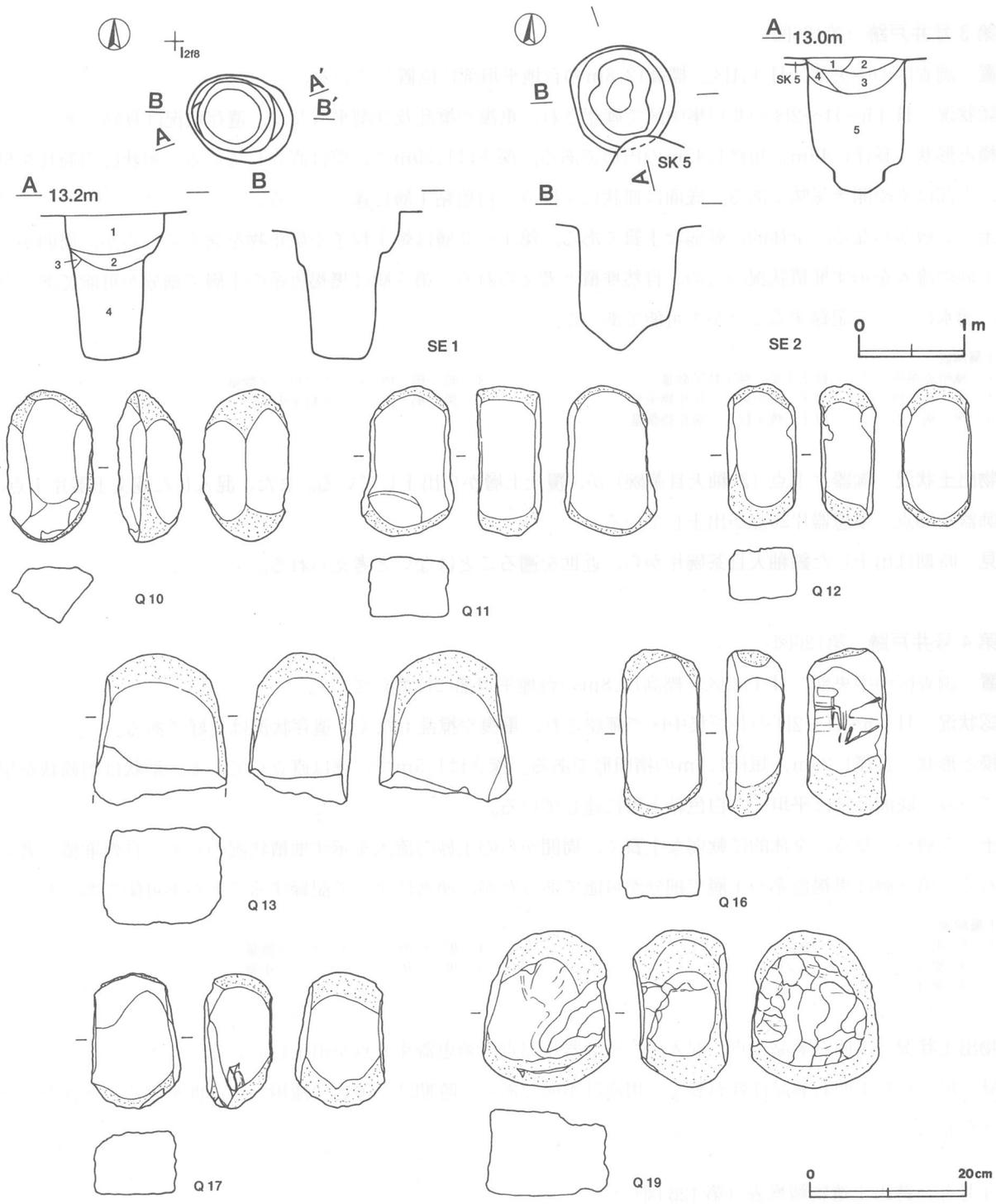
覆土 5層からなる。全体的に軟弱な土質で、周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。第5層は黒褐色系の土層で細分が可能であったが、湧水によって記録することが不可能であった。

土層解説

- | | |
|-----------------|-------------------------|
| 1 黒色 ローム粒子微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック微量 | 5 黒褐色 ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量 | |

遺物出土状況 不明石製品12点, 混入した縄文土器片1点, 土師器片16点, 須恵器片8点が出土している。不明石製品は、底面付近からまとまって出土している。

所見 出土した不明石製品はすべて軽石製で、用途は不明である。時期は、覆土の様相から近世を遡ることはないと考えられる。



第125図 第1, 2号井戸跡・出土遺物実測図

第2号井戸跡出土遺物観察表 (第125図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	不明石製品	19.6	11.2	8.4	1141.7	安山岩	5面体に削り加工, 礫面あり, 用途不明	下層	
Q11	不明石製品	20.2	12.0	8.3	1437.7	安山岩	4面体に削り加工, 礫面あり, 用途不明	下層	
Q12	不明石製品	18.0	8.9	7.1	1087.8	安山岩	4面体に削り加工, 礫面あり, 用途不明	下層	
Q13	不明石製品	(19.5)	(17.1)	(13.5)	(4322.4)	安山岩	4面体に削り加工, 礫面あり, 欠損, 用途不明	下層	
Q16	不明石製品	21.5	10.4	7.6	1334.4	安山岩	4面体に削り加工, 礫面あり, 用途不明	下層	
Q17	不明石製品	17.6	11.5	8.6	1693.8	安山岩	4面体に削り加工, 礫面あり, 用途不明	下層	
Q19	不明石製品	20.2	16.5	12.1	3343.3	安山岩	4面体に削り加工, 礫面あり, 用途不明	下層	

第3号井戸跡 (第126図)

位置 調査区の中央部, H4i1区。標高12.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況 H4h~i1~2区の井戸集中区で確認され、重複や攪乱及び削平もなく、遺存状況は良好である。

規模と形状 長径1.46m, 短径1.45mの円形である。深さは1.59mで、壁は直立している。形状は円筒状を呈し、上部はやや開き気味である。底面は皿状にくぼみ、白色粘土層に達している。

覆土 5層からなる。全体的に軟弱な土質である。第1~3層は焼土粒子や炭化物を含んでいるが、周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。第5層は黒褐色系の土層で細分が可能であったが、湧水によって記録することが不可能であった。

土層解説

- | | | | |
|---------|------------------|-------|-----------|
| 1 極暗赤褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量 | 5 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 陶器片1点(鉄釉天目茶碗)が、覆土上層から出土している。また、混入した縄文土器片1点、土師器片68点、須恵器片26点が出土している。

所見 時期は出土した鉄釉天目茶碗片から、近世を遡ることはないと考えられる。

第4号井戸跡 (第126図)

位置 調査区の中央部, H4h2区。標高12.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況 H4h~i1~2区の井戸集中区で確認され、重複や攪乱もなく、遺存状況は良好である。

規模と形状 長径1.25m, 短径1.1mの楕円形である。深さは1.5mで、壁は直立している。形状は円筒状を呈している。底面はほぼ平坦で、白色粘土層に達している。

覆土 5層からなる。全体的に軟弱な土質で、周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。第5層は黒褐色系の土層で細分が可能であったが、湧水によって記録することが不可能であった。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 4 黒色 | ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 5 黒色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 不明石製品1点、混入した土師器片23点、須恵器片9点が出土している。

所見 出土した不明石製品は軽石製で、用途は不明である。時期は、覆土の様相から近世を遡ることはないと考えられる。

第4号井戸跡出土遺物観察表 (第126図)

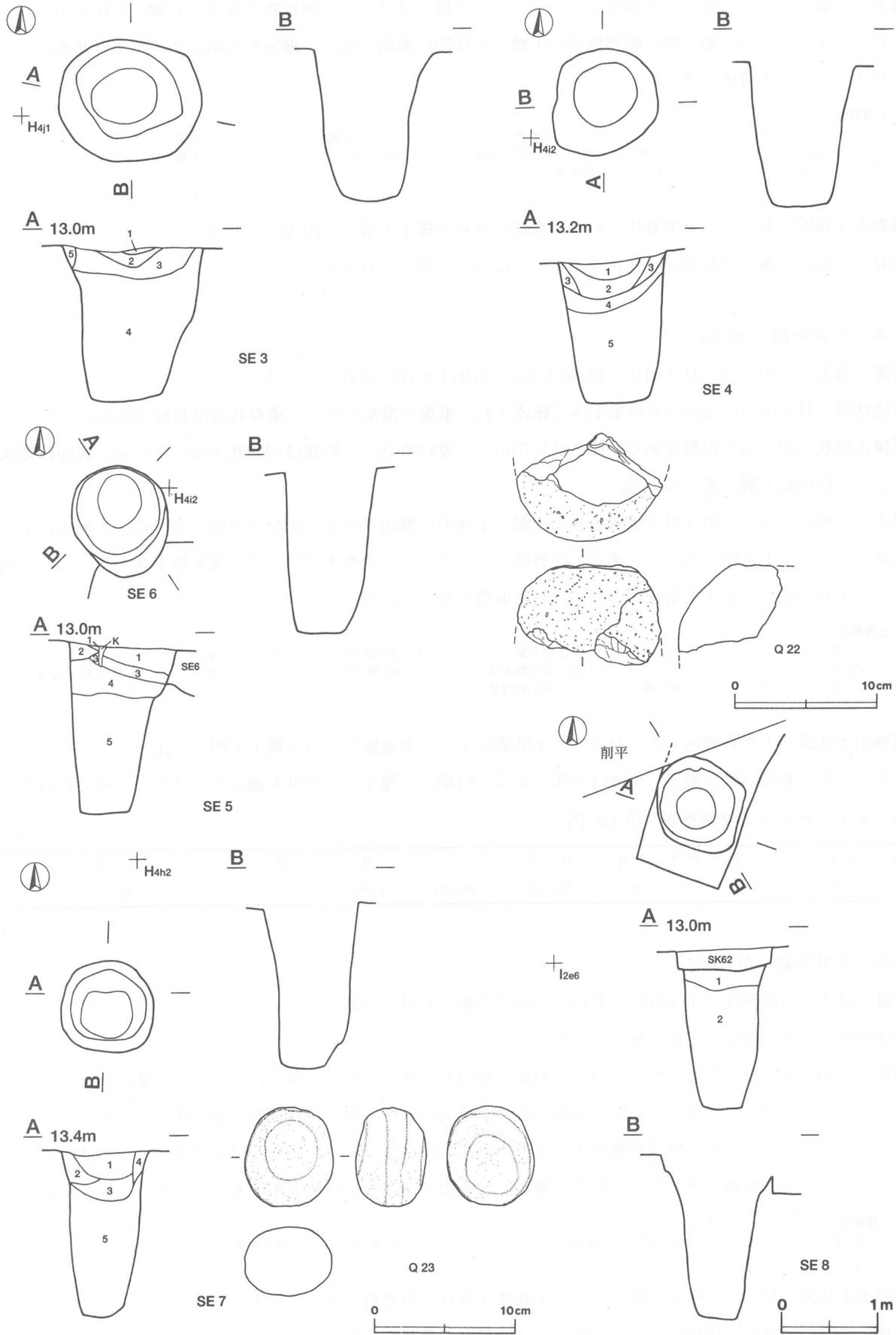
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q22	不明石製品	(10.4)	(7.7)	(7.2)	(270.1)	安山岩	上部平坦に削り加工, 欠損, 用途不明	下層	

第5号井戸跡 (第126図)

位置 調査区の中央部, H4i1区。標高12.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 H4h~i1~2区の井戸集中区で確認され、南部で第6号井戸跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.18m, 短径1.1mの楕円形である。深さは1.72mで、壁は直立している。形状は円筒を呈し、南部の上端部はやや開き気味である。底面はほぼ平坦で、白色粘土層に達している。



第126図 第3～5, 7, 8号井戸跡・出土遺物実測図

覆土 5層からなる。第1～4層はロームブロックや焼土ブロック、炭化物を含み、北側から埋め戻された様な状況を呈している。第5層は暗褐色系の土層で全体的に軟弱である。細分が可能であったが、湧水によって記録することが不可能であった。

土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 4 にごい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 にごい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | | |

遺物出土状況 混入した土師器片33点、須恵器片31点が覆土上層から出土している。

所見 時期は、覆土の様相から近世を遡ることはないと考えられる。

第7号井戸跡 (第126図)

位置 調査区の中央部、H 4 h1区。標高13.2mの台地平坦部に位置している。

確認状況 H 4 h～i1～2区の井戸集中区で確認され、重複や攪乱もなく、遺存状況は良好である。

規模と形状 径1mの円形である。深さは1.73mで、壁は直立し、形状は円筒状を呈している。底面は皿状にくぼみ、白色粘土層に達している。

覆土 5層からなる。第4層は暗褐色系の土層で全体的に軟弱である。細分が可能であったが、湧水によって記録することが不可能であった。第1～3層はロームブロックや焼土ブロック、炭化物を含んでいるが、周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 不明石製品1点、混入した土師器片7点、須恵器片3点が覆土上層から出土している。

所見 不明石製品は軽石製で、用途は不明である。時期は、覆土から近世を遡ることはないと考えられる。

第7号井戸跡出土遺物観察表 (第126図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q23	不明石製品	7.0	6.3	5.1	88.6	安山岩	全面研磨加工、用途不明	下層	

第8号井戸跡 (第126図)

位置 調査区の南西部、I 2 d6区。標高12.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 上部を第62号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認した長径1.09m、短径0.94mの楕円形と推定される。深さは1.67mで、壁は直立している。形状は円筒状を呈し、上部はやや開き気味である。底面はほぼ平坦で、白色粘土層に達している。

覆土 2層からなる。第2層は黒褐色系の土層で全体的に軟弱である。細分が可能であったが、湧水によって記録することが不可能であった。これらの層は、含有物が少なく、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 2 黒褐色 | ローム粒子微量 |
|-------|------------------|-------|---------|

遺物出土状況 混入した縄文土器片1点、土師器片24点、須恵器片3点が出土している。

所見 時期は、覆土の様相から近世を遡ることはないと考えられる。

第9号井戸跡 (第127図)

位置 調査区の北東部, G 6 j1区。標高13.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 東部で第134号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 径0.96mの円形である。深さ1.01mの地点で、湧水のため掘り込みが不可能となった。確認した壁は直立し、形状は円筒状を呈している。掘削は白色粘土層に達している。

覆土 7層からなる。第7層は暗褐色及び黒褐色系の土層で全体的に軟弱である。細分が可能であったが、湧水によって記録することが不可能であった。第1～7層は暗褐色土と黒褐色土の互層となっている。これらの層はロームブロックを含んでいるが、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 5 黒色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 極暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 混入した縄文土器片3点, 土師器片33点, 須恵器片15点, 鉄滓1点が出土している。

所見 時期は、覆土の様相から近世を遡ることはないと考えられる。

第10号井戸跡 (第127図)

位置 調査区の北東部, G 5 G5h0区。標高13.6mの台地平坦部に位置している。

確認状況 第9・10号掘立柱建物のP9に隣接している。重複や攪乱もなく、遺存状況は良好である。

規模と形状 長径1m, 短径0.94mの円形である。深さ1.04mの地点で、湧水のため掘り込みが不可能となった。確認した壁は直立し、形状は円筒状を呈している。掘削は白色粘土層に達している。

覆土 6層からなる。第6層は暗褐色系の土層で全体的に軟弱である。細分が可能であったが、湧水によって記録することが不可能であった。第1～5層は褐色土と黒褐色土の互層となっている。これらの層はロームブロックを多く含み、人為的に埋め戻されていると考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 明褐色 | ロームブロック多量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 褐色 | ロームブロック多量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 混入した縄文土器片14点, 弥生土器片1点, 土師器片11点, 須恵器片2点が出土している。

所見 時期は、覆土の様相から近世を遡ることはないと考えられる。

第11号井戸跡 (第127図)

位置 調査区の北東部, H 5 d2区。標高13.4mの台地平坦部に位置している。

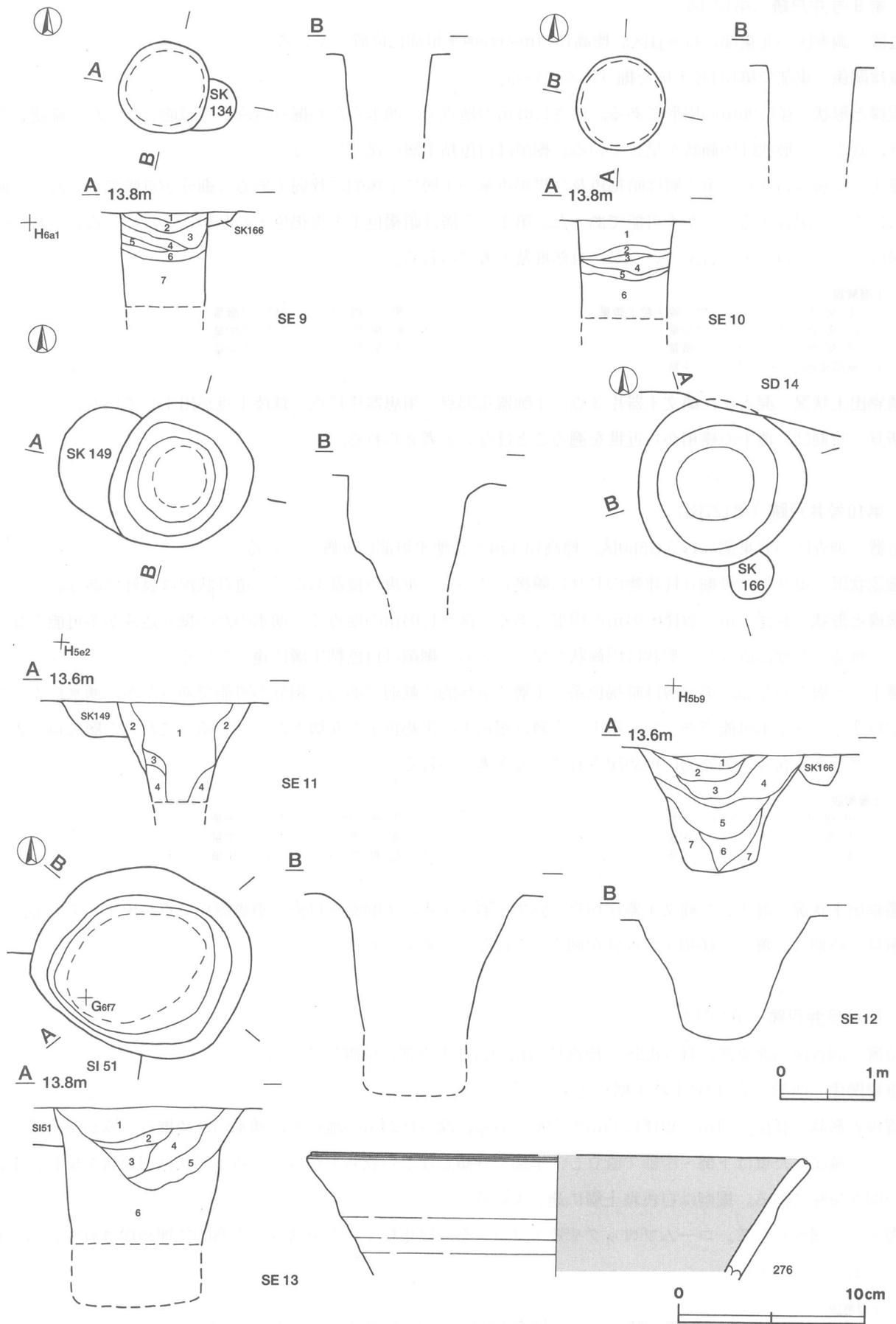
重複関係 西部で第149号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.54m, 短径1.45mの円形である。深さ1.23mの地点で、湧水のため掘り込みが不可能となった。確認した壁は下部～中部で直立し、上部で外傾しながら立ち上がっている。形状は円筒状を呈し、上部が開き気味である。掘削は白色粘土層に達している。

覆土 4層からなる。ロームブロックや焼土ブロック, 炭化粒子などを含み、人為的に埋め戻されていると考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 明褐色 | ロームブロック多量 | 4 褐色 | ロームブロック多量 |



第127図 第9～13号井戸跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 混入した土師器片59点, 須恵器片10点が出土している。

所見 時期は, 覆土の様相から近世を遡ることはないと考えられる。

第12号井戸跡 (第127図)

位置 調査区の北東部, H 5 a9区。標高13.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 南部で第166号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.77m, 短径1.73mの円形である。深さは1.25mで, 壁は外傾して立ち上がっている。形状は円筒状を呈し, 上部は開き気味である。底面は皿状にくぼみ, 白色粘土層に達している。

覆土 7層からなる。ロームブロックを比較的多く含んでいるが, 周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 混入した縄文土器片1点, 土師器片25点, 須恵器片10点が出土している。

所見 時期は, 覆土の様相から近世を遡ることはないと考えられる。

第13号井戸跡 (第127図)

位置 調査区の北東部, G 6 e7区。標高13.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 南西部で第51号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.2m, 短径1.94mの楕円形である。深さは2.15mで, 壁は直立している。形状は円筒状を呈し, 上部は開き気味である。底面はほぼ平坦で, 白色粘土層に達している。

覆土 6層からなる。第6層は黒褐色系の土層で全体的に軟弱である。細分が可能であったが, 湧水によって記録することが不可能であった。全体的にロームブロックを比較的多く含んでいるが, 周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 陶器片1点(灰釉捏鉢)が, 覆土上層から出土している。また, 混入した土師器片14点, 須恵器片4点が出土している。276は割れ口が研磨されており, 研具に転用されている。

所見 時期は, 出土した灰釉捏鉢片から近世を遡ることはないと考えられる。

第13号井戸跡出土遺物観察表 (第127図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
276	陶器	鉢	[26.6]	(6.5)	-	石英・長石	灰黄褐	良	口唇部~内面灰釉施釉, 口唇部沈線	下層	転用砥 5%

(3) 土坑

規模と形状から7つに分類することができる。A類は長径1m以上の円形を呈する土坑, B類は長軸1m以上の楕円形を呈する土坑, C類は長軸1m以上の長方形ないし隅丸長方形を呈する土坑, D類は長径(軸)50cm以上1m未満の円形ないし楕円形を呈する土坑, E類は長径(軸)50cm未満の円形ないし楕円形を呈する土坑

坑、F類は柱穴と考えられる土坑、G類は不定形の土坑である。A・B類は全域に分布しているが、南東部の台地平坦部や中央部及び北東部の台地平坦部に比較的集中している。C類は南東部の台地縁辺部から平坦部に群集している。A～C類は、規模と形状や群集傾向から、墓坑や貯蔵穴の可能性が高いと考えられるが、遺物はほとんど出土していない。D～G類は全域に分布している。特に集中するような場所は見られない。遺物がほとんど出土していないため、詳細な時期や性格は不明である。

第1号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子微量
- 2 黒 色 ローム粒子微量

第2号土坑土層解説

- 1 黒 色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐色 ロームブロック微量

第3号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック中量、粘土粒子少量
- 2 黒 色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量

第4号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック微量

第5号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量

第6号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 炭化物少量、焼土粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量
- 3 黒 褐色 炭化物中量、焼土粒子少量

第7号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子微量
- 2 色 ローム粒子多量

第8号土坑土層解説

- 1 黒 色 炭化物多量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第9号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 4 灰 褐色 ロームブロック中量、砂粒少量

第10号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量

第11号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック微量

第12号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック微量

第13号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐色 ローム粒子中量
- 3 暗 褐色 ロームブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック少量

第14号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒 色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐色 ロームブロック少量
- 4 黒 褐色 ロームブロック微量
- 5 黒 褐色 ロームブロック中量

第15号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック中量
- 2 黒 褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第16号土坑土層解説

- 1 黒 色 ロームブロック少量

第17号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

第18号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量
- 3 にぶい褐色 ロームブロック中量
- 4 にぶい橙色 ロームブロック少量
- 5 橙色 ロームブロック多量

第19号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック微量

第20号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐色 ローム粒子微量
- 4 黒 褐色 ローム粒子微量

第21号土坑土層解説

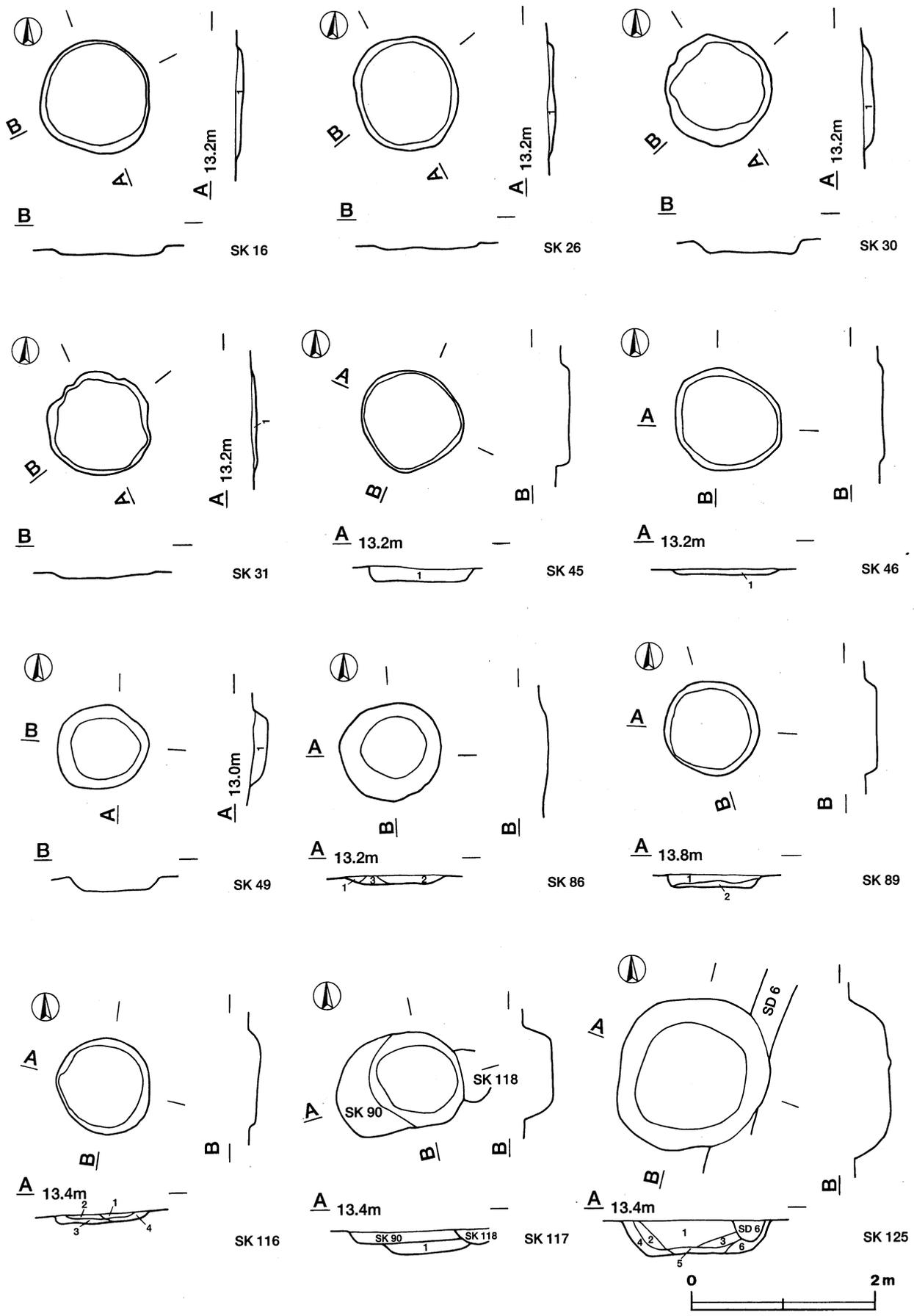
- 1 黒 褐色 ロームブロック微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量

第22号土坑土層解説

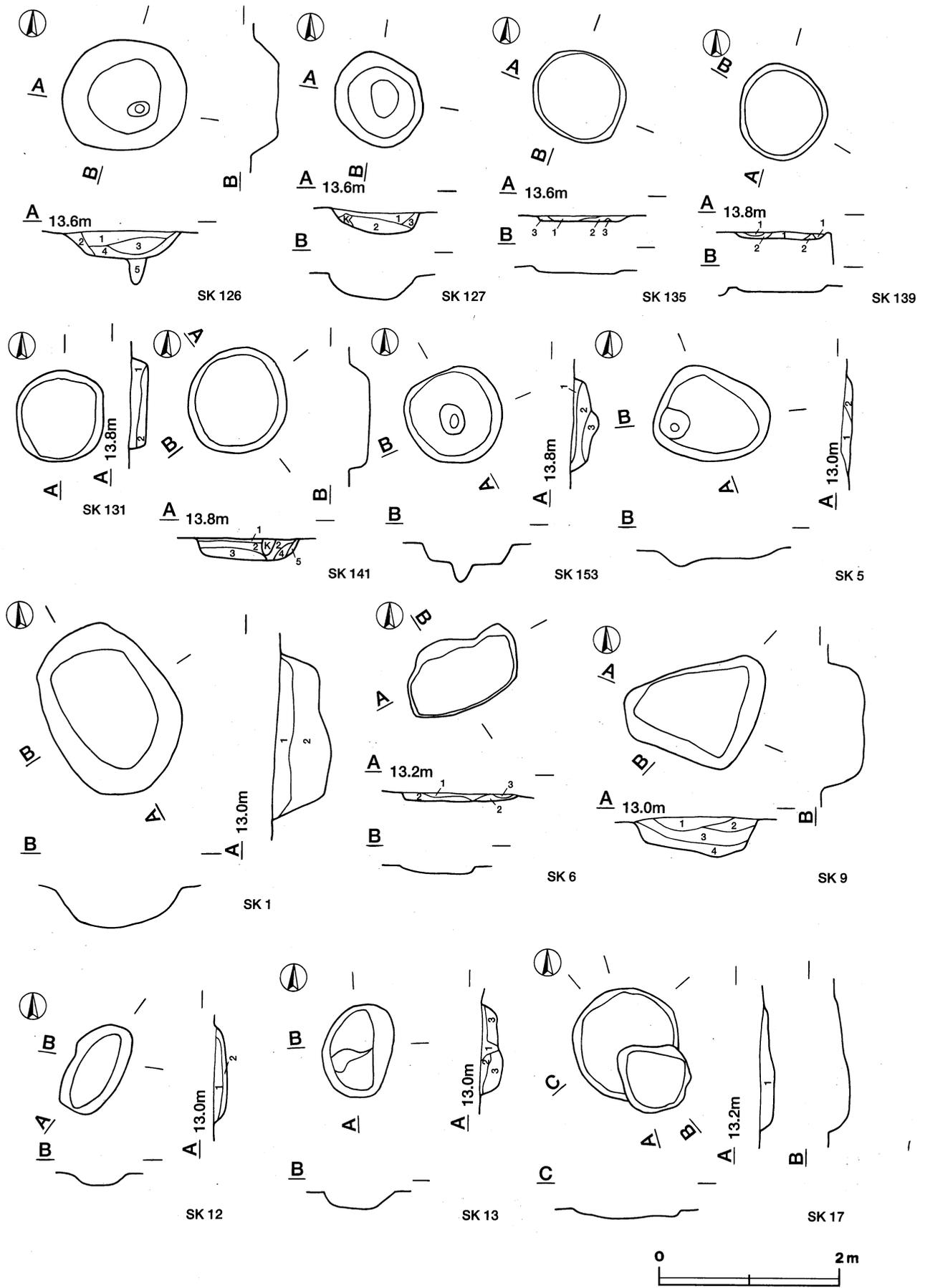
- 1 黒 褐色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量
- 3 黒 褐色 ロームブロック微量

第23号土坑土層解説

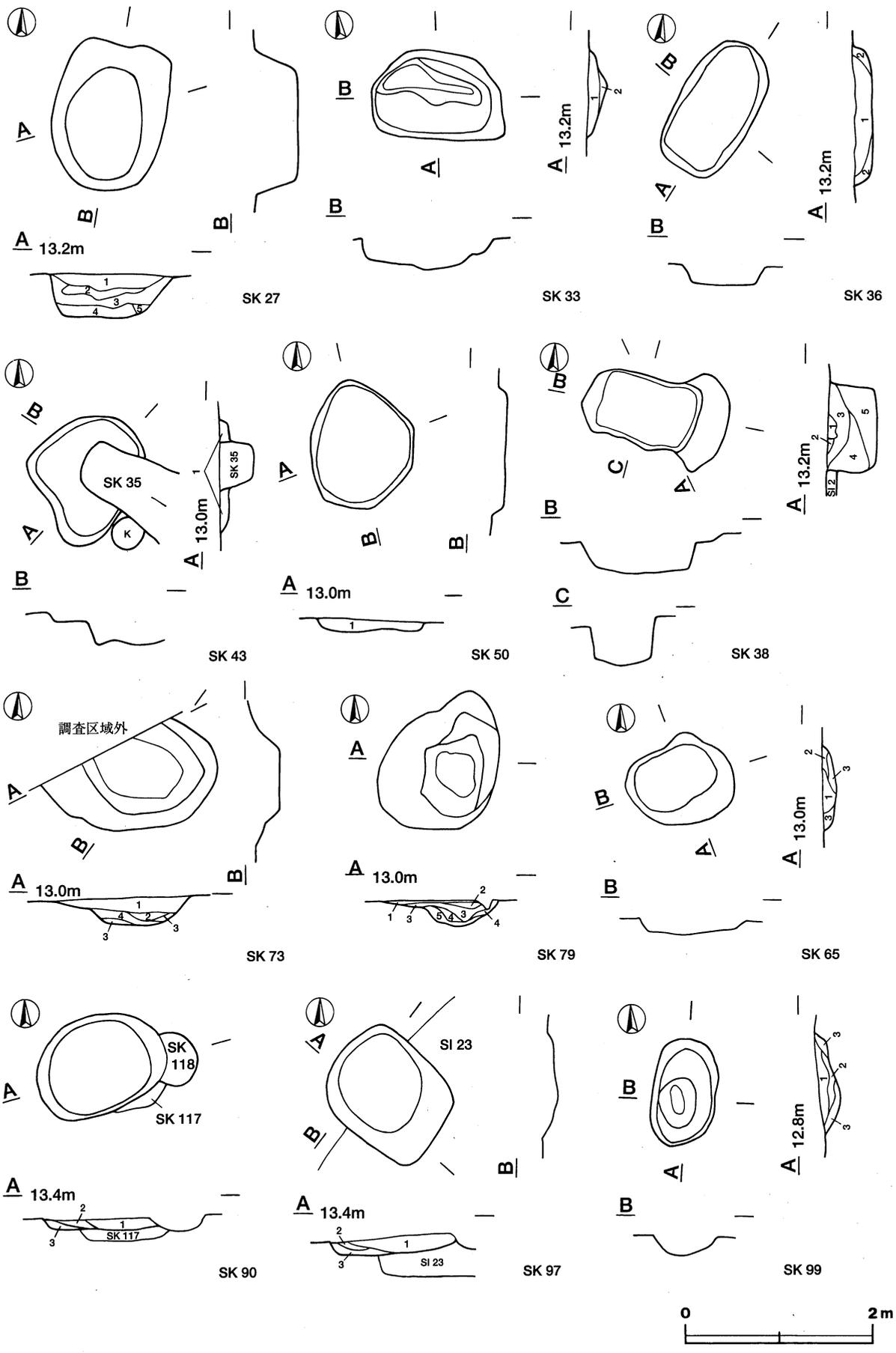
- 1 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐色 ローム粒子多量
- 4 暗 褐色 ロームブロック中量
- 5 黒 褐色 ロームブロック少量
- 6 褐色 ロームブロック中量



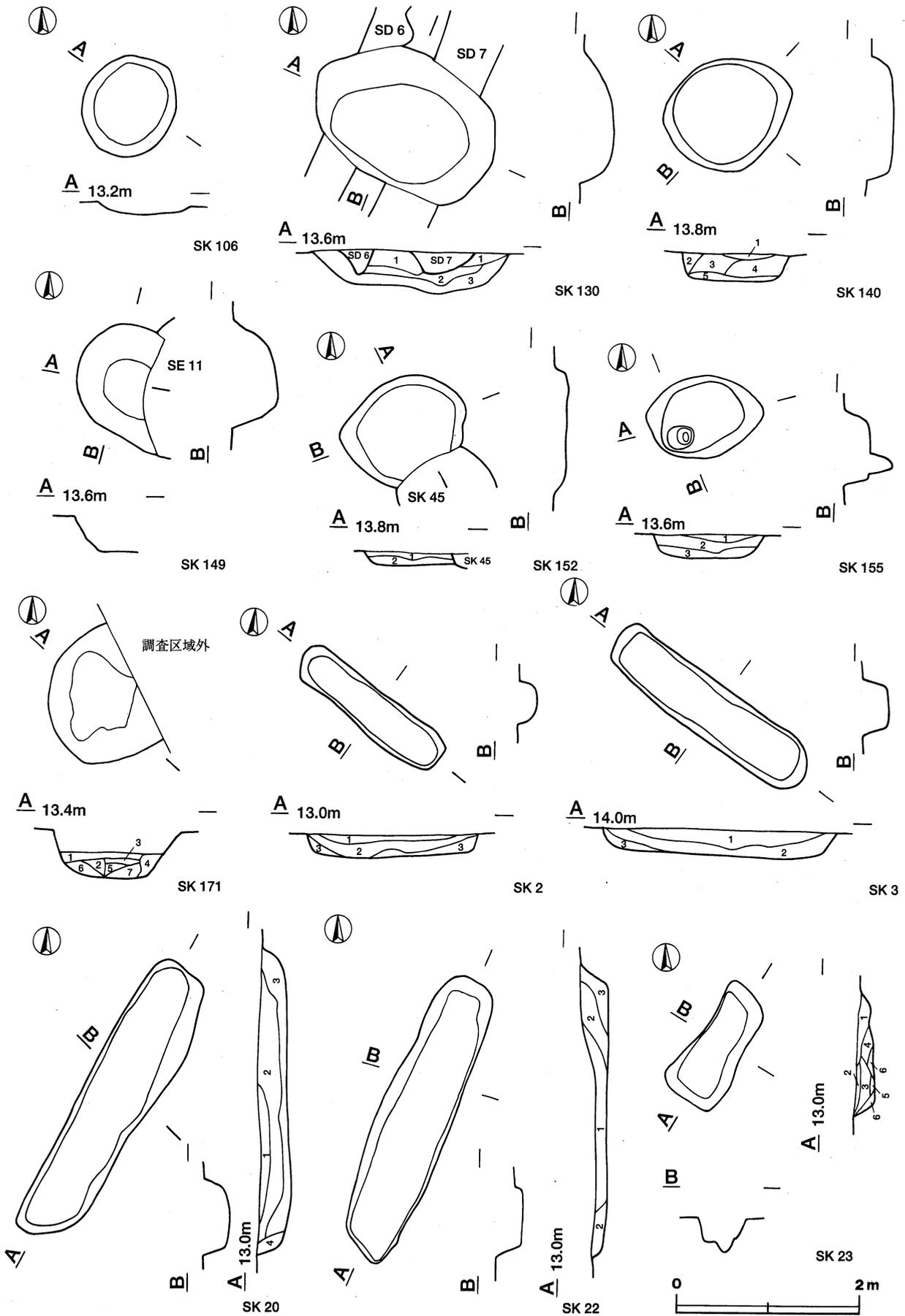
第128图 土坑实测图(1)



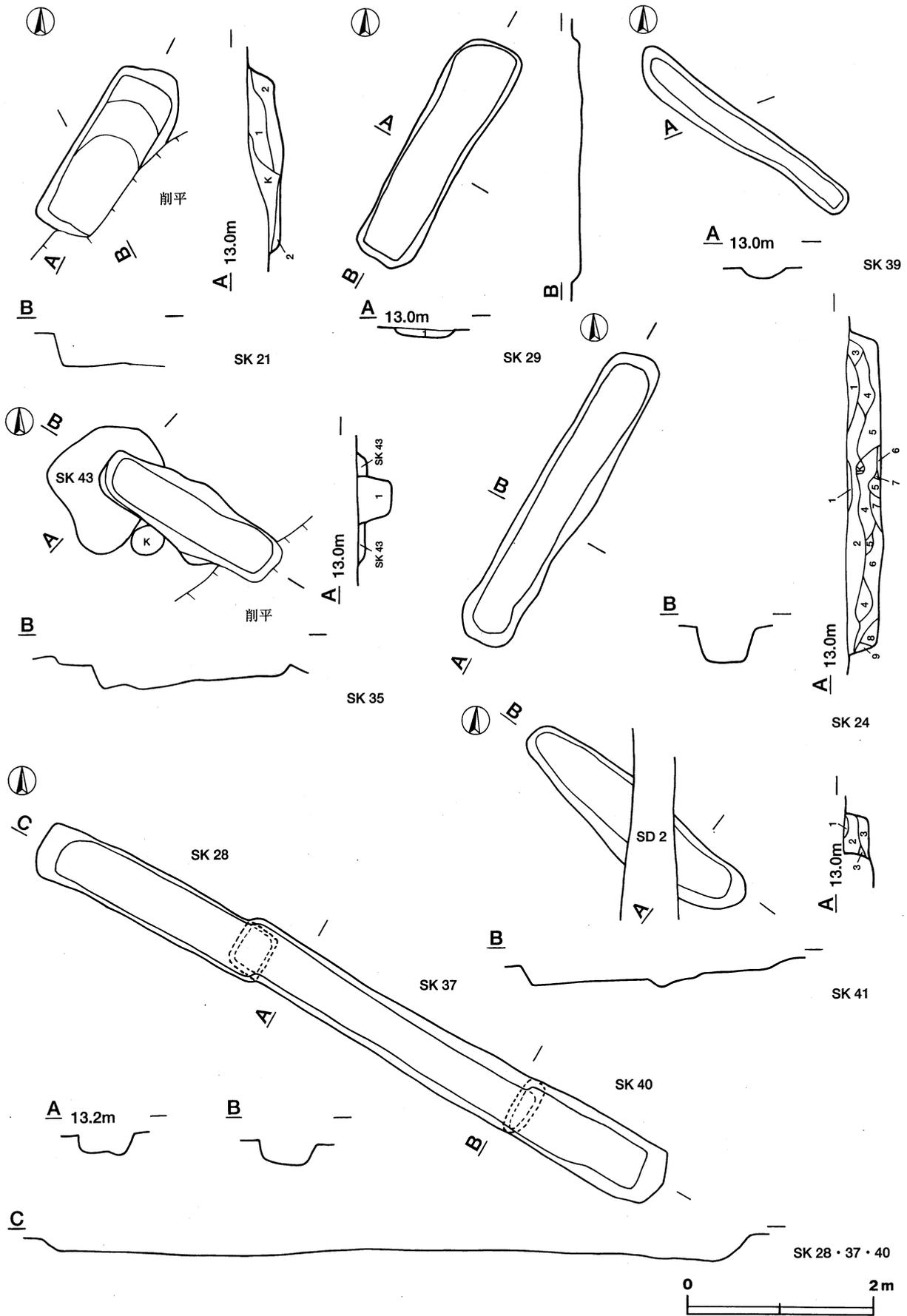
第129图 土坑实测图 (2)



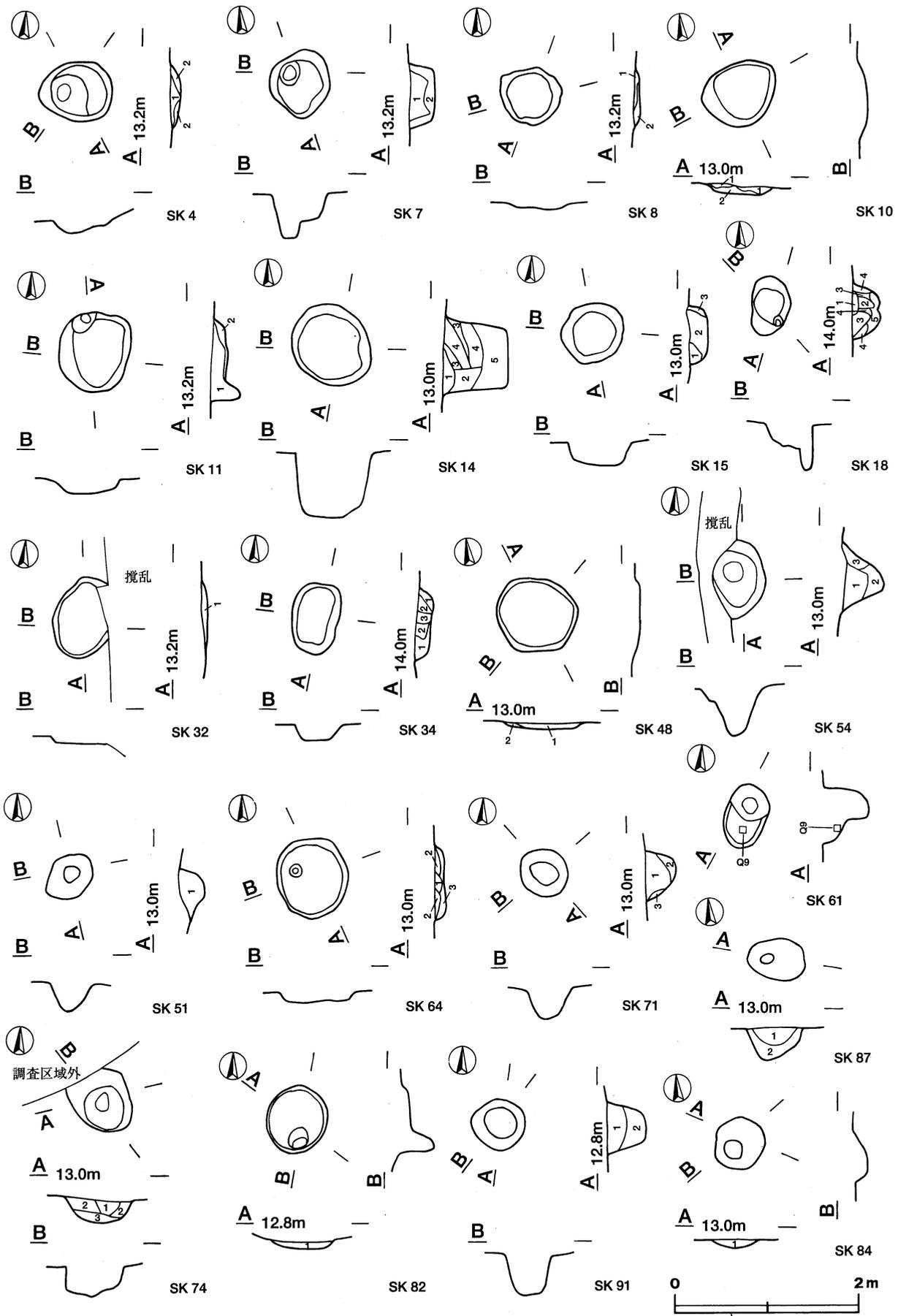
第130图 土坑实测图 (3)



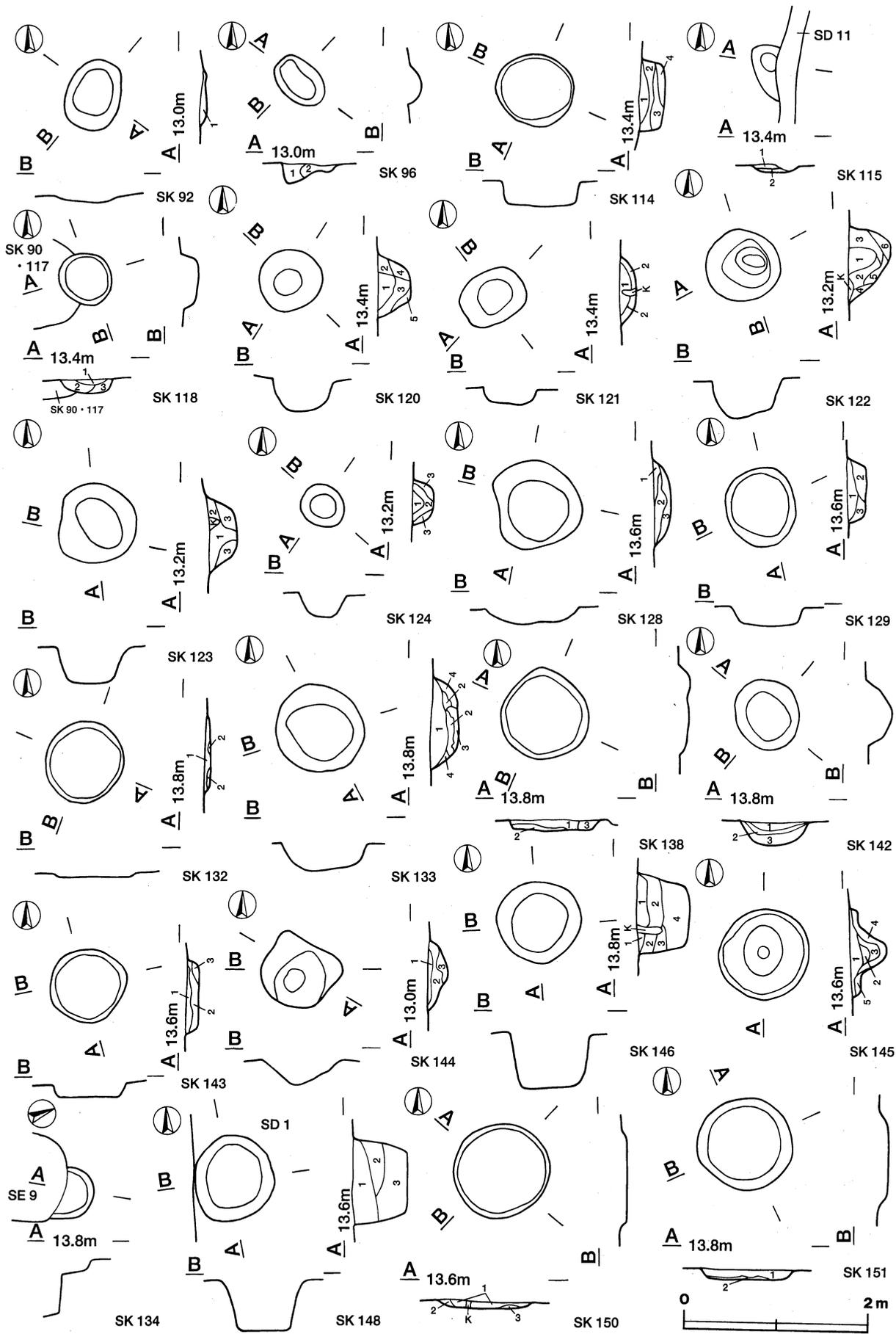
第131図 土坑実測図 (4)



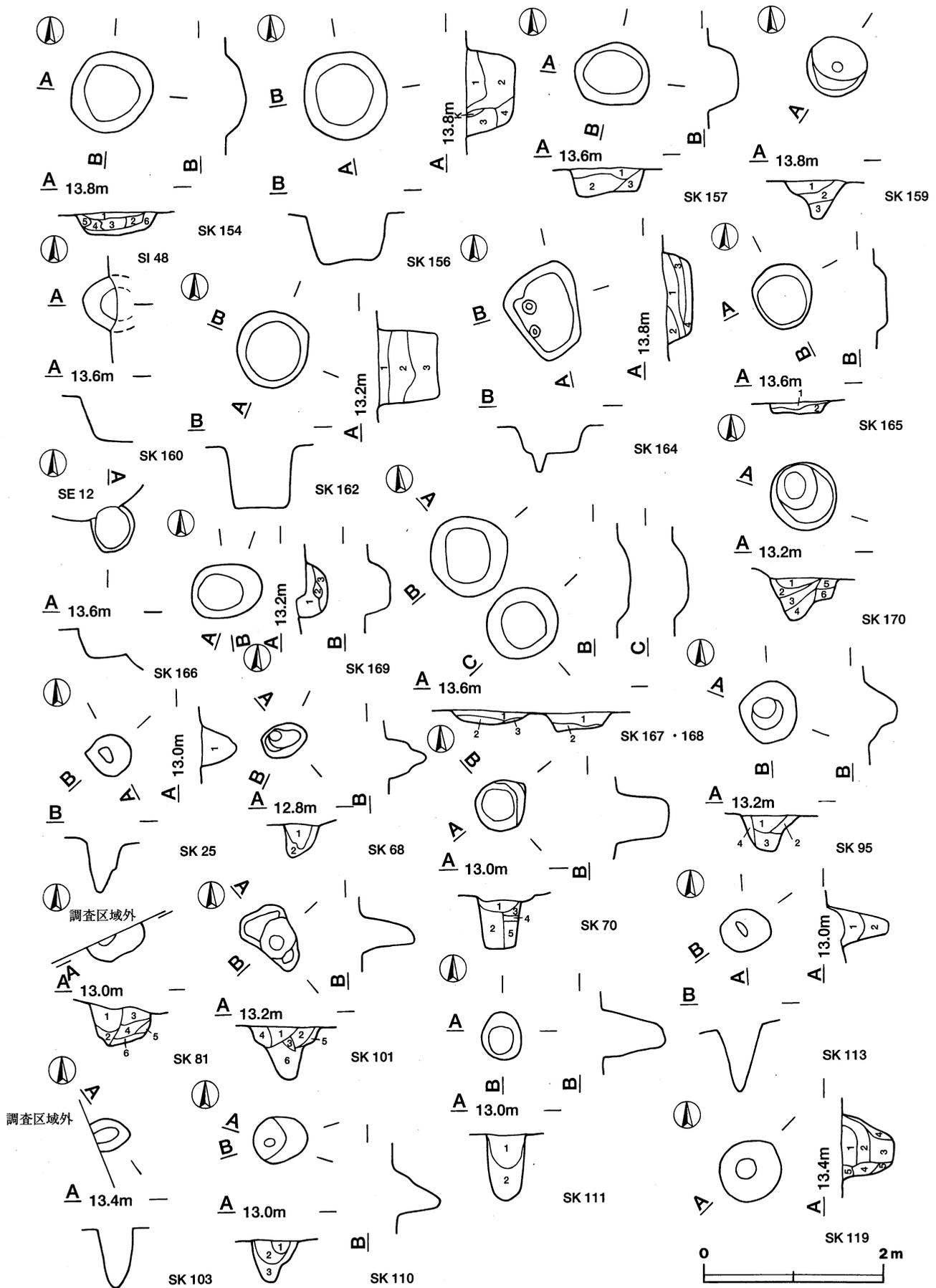
第132图 土坑实测图(5)



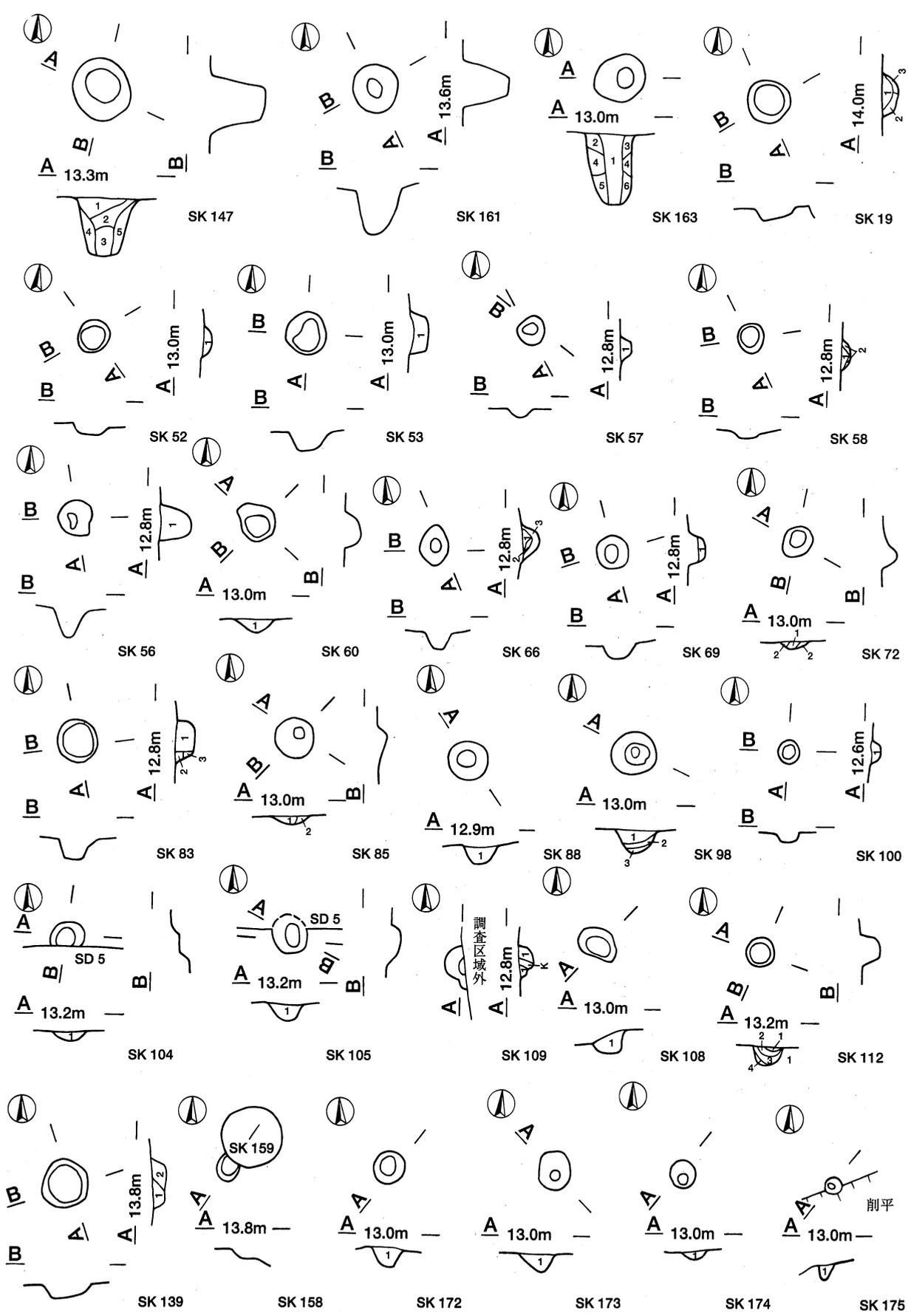
第134図 土坑実測図 (7)



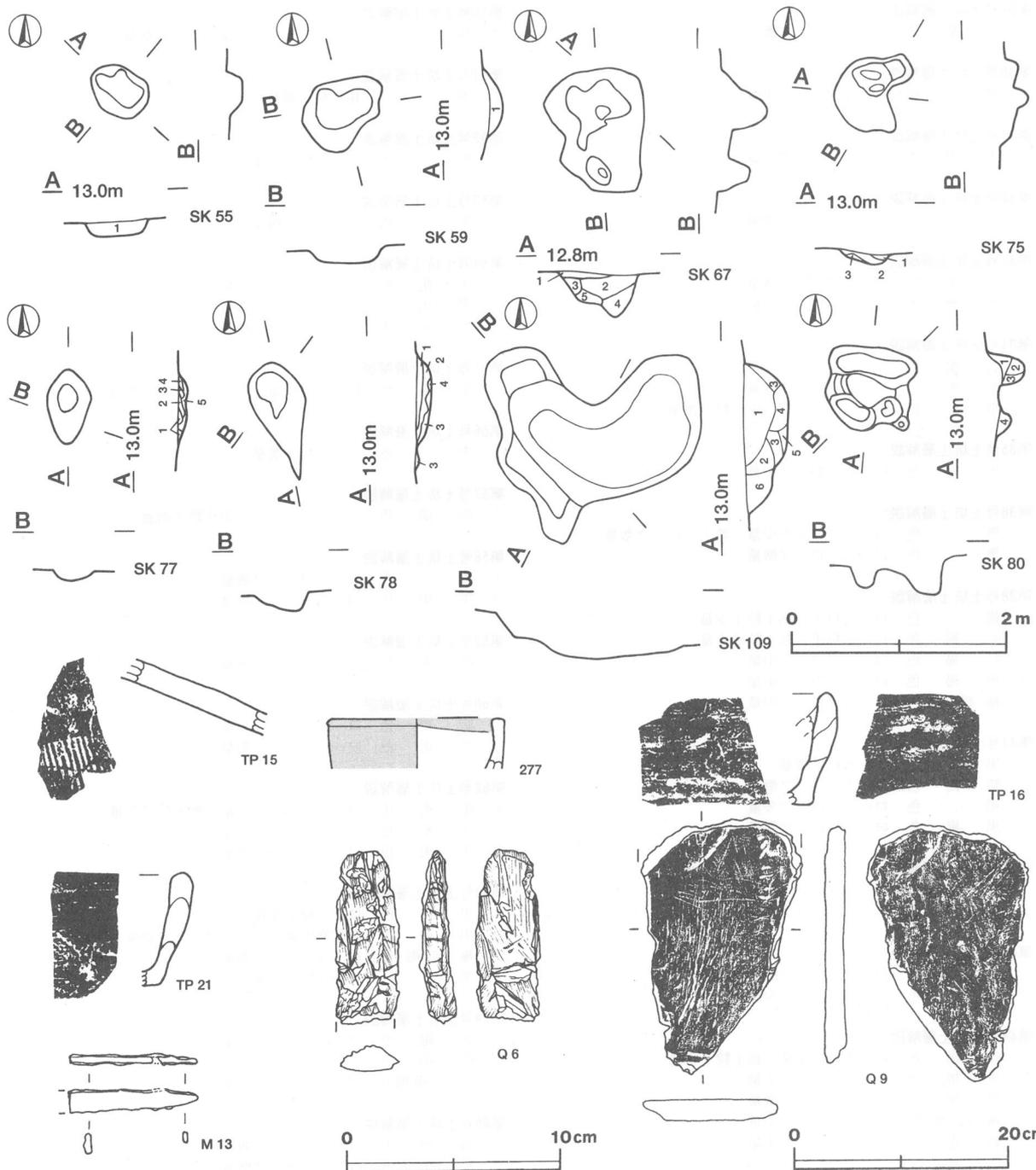
第135图 土坑实测图 (8)



第136図 土坑実測図(9)



第137图 土坑实测图 (10)



第138図 土坑・出土遺物実測図

第24号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック微量
- 6 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量, 粘土粒子少量
- 8 黒褐色 ローム粒子少量
- 9 暗褐色 ロームブロック微量

第25号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量

第26号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

第27号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 粘土粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 極暗褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック多量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量

第29号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量

第30号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量

第31号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

第32号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック微量

第33号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

第34号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第35号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

第36号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 2 黒色 ロームブロック微量

第38号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量
- 5 極暗褐色 ロームブロック中量

第41号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック多量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量

第42号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック中量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量

第43号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック微量
- 2 黒色 ロームブロック少量

第44号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 粘土粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 極暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量

第45号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量

第46号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量

第47号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック多量
- 2 黒褐色 ロームブロック多量

第48号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第49号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量

第50号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量

第51号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土粒子微量

第52号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量

第53号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量

第54号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

第55号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子少量, ロームブロック微量

第56号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量

第57号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第58号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量

第59号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量

第60号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第62号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量

第63号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量
- 2 黒褐色 炭化物少量, ロームブロック微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック微量
- 4 黒色 ローム粒子少量

第64号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

第65号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第66号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第67号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 灰褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ロームブロック多量

第68号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第69号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック微量

第70号土坑土層解説

- 1 黒褐色 灰少量, ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 黒色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量

第71号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第72号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第73号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第74号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

第75号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第76号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック多量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

第77号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量

第78号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 地山

第79号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量
- 5 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

第80号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 灰褐色 粘土ブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量

第81号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック中量

第82号土坑土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第83号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒色 ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量

第84号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量

第85号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量

第86号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

第87号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

第88号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第89号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量

第90号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第91号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

第92号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量

第93号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量

第94号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック多量

第95号土坑土層解説

- 1 暗赤褐色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土ブロック微量
- 2 暗赤灰色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・灰少量
- 3 極暗赤褐色 ローム粒子中量, 炭化物少量, 焼土ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第96号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量

第97号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック多量

第98号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

第99号土坑土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第100号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量

第101号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 灰褐色 ローム粒子多量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量

第103号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 黒色 ロームブロック微量

第104号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量

第105号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量

第107号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・焼土粒子少量

第108号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量

第109号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量, 粘土粒子微量

第110号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第111号土坑土層解説

- 1 暗色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第112号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量

第113号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第114号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・砂粒少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・砂粒少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・砂粒少量, 焼土粒子微量
- 4 暗褐色 砂粒少量, ロームブロック・炭化粒子微量

第115号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック中量
- 2 灰褐色 ロームブロック微量

第116号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化物微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量

第117号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量

第118号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第119号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 にぶい褐色 ロームブロック多量
- 6 にぶい褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量

第120号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量

第121号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第122号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量
- 6 黒褐色 ロームブロック微量

第123号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第124号土坑土層解説

- 1 灰黄褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

第125号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック中量

第126号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量

第127号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第128号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

第129号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量

第130号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック中量
- 2 灰 褐色 ロームブロック多量
- 3 にぶい褐色 ロームブロック多量

第131号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量

第132号土坑土層解説

- 1 にぶい褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量

第133号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック多量
- 4 褐色 ロームブロック中量

第135号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量
- 4 黒 褐色 ロームブロック微量

第136号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック中量
- 2 黒 褐色 ローム粒子微量

第137号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第138号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量
- 3 黒 褐色 ロームブロック少量

第139号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック微量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック微量

第140号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック中量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量
- 4 黒 褐色 ロームブロック中量
- 5 黒 褐色 ロームブロック少量

第141号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量
- 4 黒 褐色 ロームブロック微量
- 5 暗 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量

第142号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子微量

第143号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

第144号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐色 粘土粒子中量, ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第145号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック微量

第146号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック多量
- 3 暗 褐色 ロームブロック多量
- 4 暗 褐色 ロームブロック中量
- 5 黒 褐色 ローム粒子中量

第147号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック微量
- 5 褐色 ロームブロック少量

第148号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック中量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量
- 3 黒 褐色 ロームブロック中量

第150号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量

第151号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第152号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量

第153号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量
- 3 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第154号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 黒 褐色 ロームブロック微量
- 5 黒 褐色 ロームブロック少量
- 6 暗 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

第155号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量

第156号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック中量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第157号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 3 暗 褐色 ロームブロック中量

第159号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック中量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量
- 3 黒 褐色 ロームブロック微量

第162号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック多量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック中量

第163号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 4 褐 色 ロームブロック少量
- 5 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
- 6 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第164号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック微量

第165号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック微量

第167号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

第168号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

第169号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子・焼土ブロック微量
- 3 褐 色 ロームブロック少量

第170号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土ブロック微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 3 褐 色 ロームブロック中量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック多量
- 5 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 6 褐 色 ロームブロック中量

第171号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 2 褐 色 ロームブロック多量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 5 極暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 6 褐 色 ローム粒子中量
- 7 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量

第172号土坑土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子微量

第173号土坑土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子微量

第174号土坑土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子微量

第175号土坑土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック多量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 5 褐 色 ロームブロック少量

土坑出土遺物観察表 (第 138 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
277	陶器	香炉	[8.0]	(2.5)	-	長石	淡黄	良	外面~口唇部黄褐釉施釉	下層	瀬戸美濃系 5%

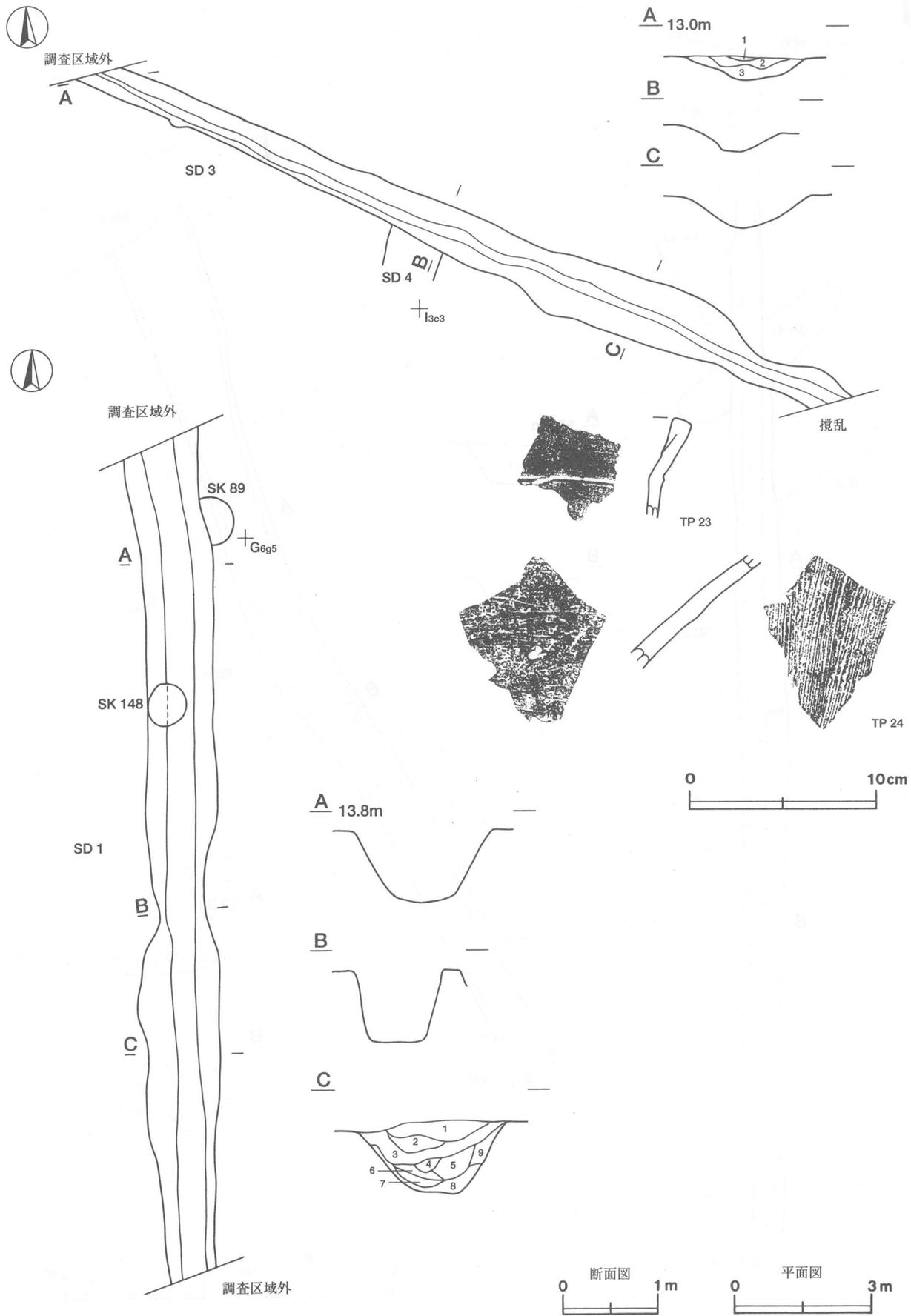
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP15	陶器	甕	-	(3.0)	-	石英・長石	にぶい赤褐	普通	無釉, 外面押印, 内面ナデ	下層	常滑系 5%
TP16	土師質土器	焙烙	-	(5.2)	-	石英・長石	橙	普通	体部外面上半横ナデ, 下半ヘラ削り, 内面内耳貼り付け, ナデ	下層	5% PL 44
TP21	土師質土器	焙烙	-	(5.2)	-	長石	にぶい褐	普通	体部外面上半横ナデ, 下半ヘラ削り, 内面ナデ	下層	5%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q6	砥石	(8.0)	2.9	1.6	(32.9)	凝灰岩	3面使用, 線条痕多数, 下部欠損	下層	PL 46
Q9	板碑	(24.1)	(14.9)	(2.1)	(1108.3)	緑泥片岩	武蔵型板碑片, 「□文二年」銘, 両面線条痕多数, 上部欠損	中層	PL 49

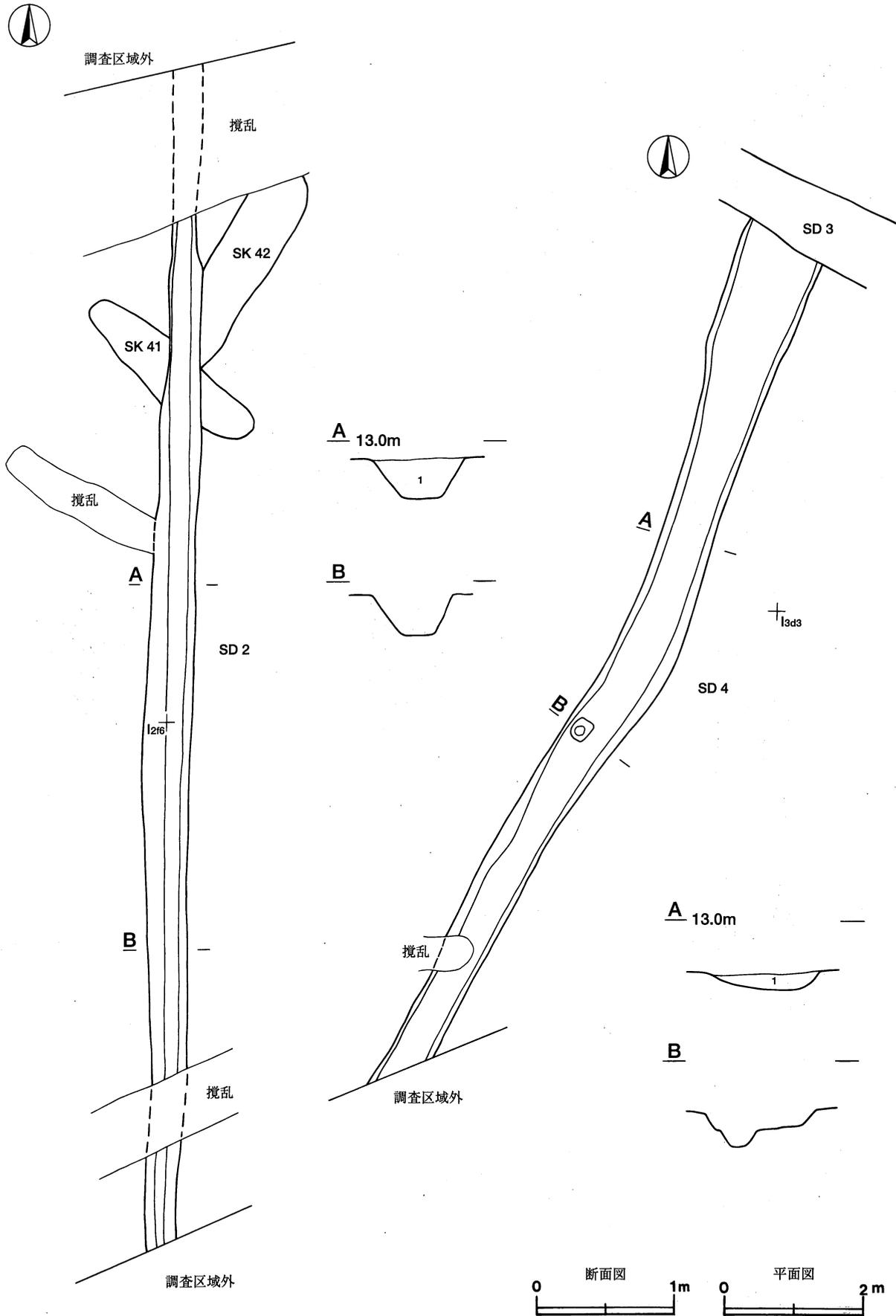
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M13	刀子	(6.0)	(1.1)	(0.5)	(4.8)	鉄	基部断面長方形, 刀身欠損	中層	PL 50

(4) 溝

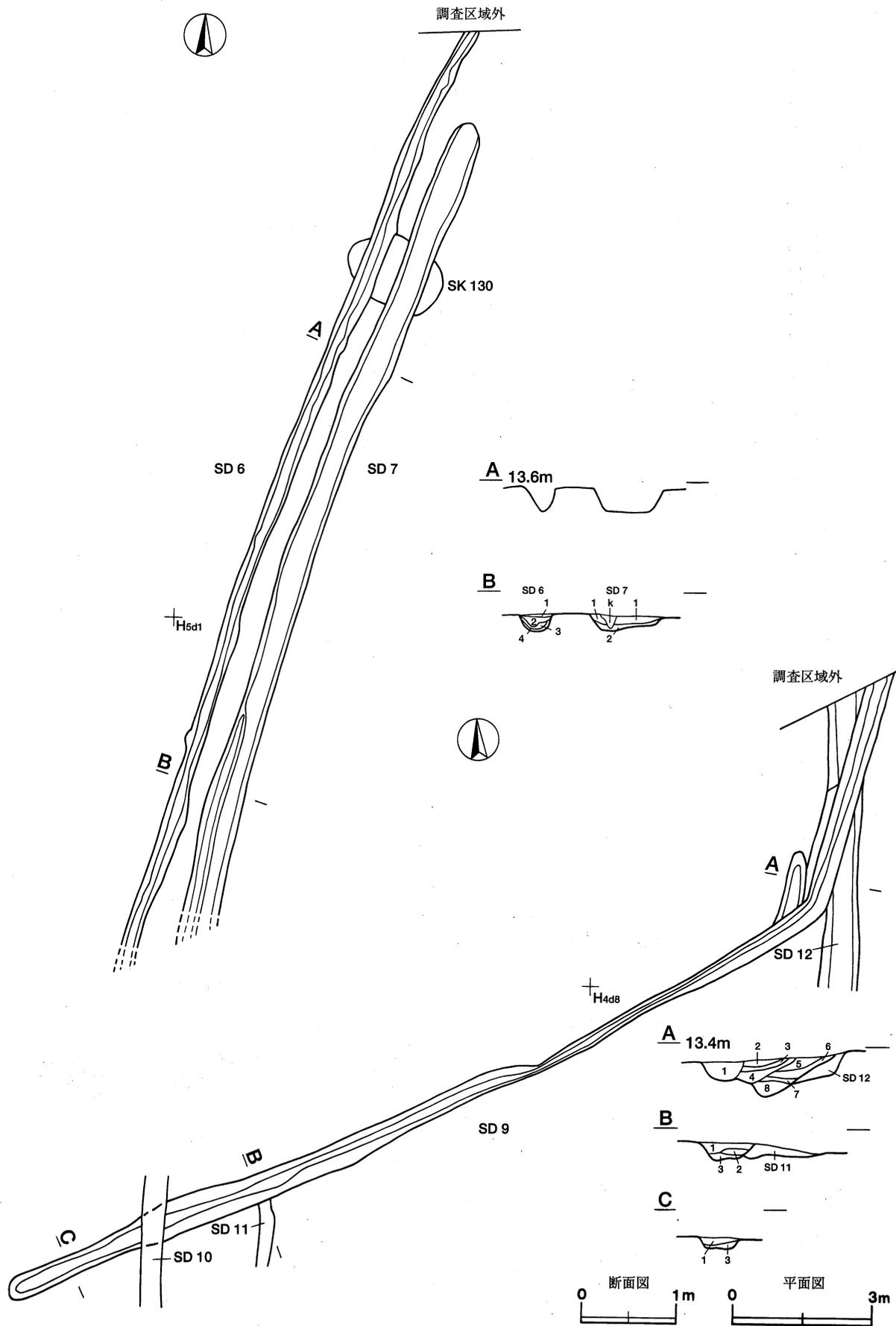
溝は暗渠, 排水溝, 区画溝と考えられるものが確認されている。いずれの時期も近世を遡ることはないと考えられる。



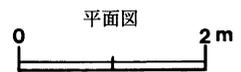
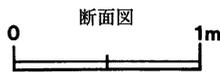
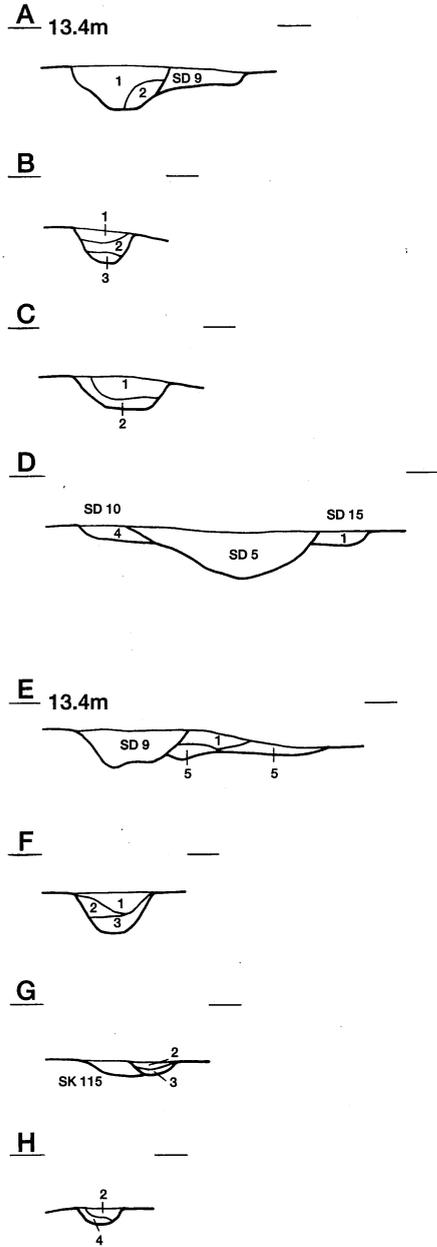
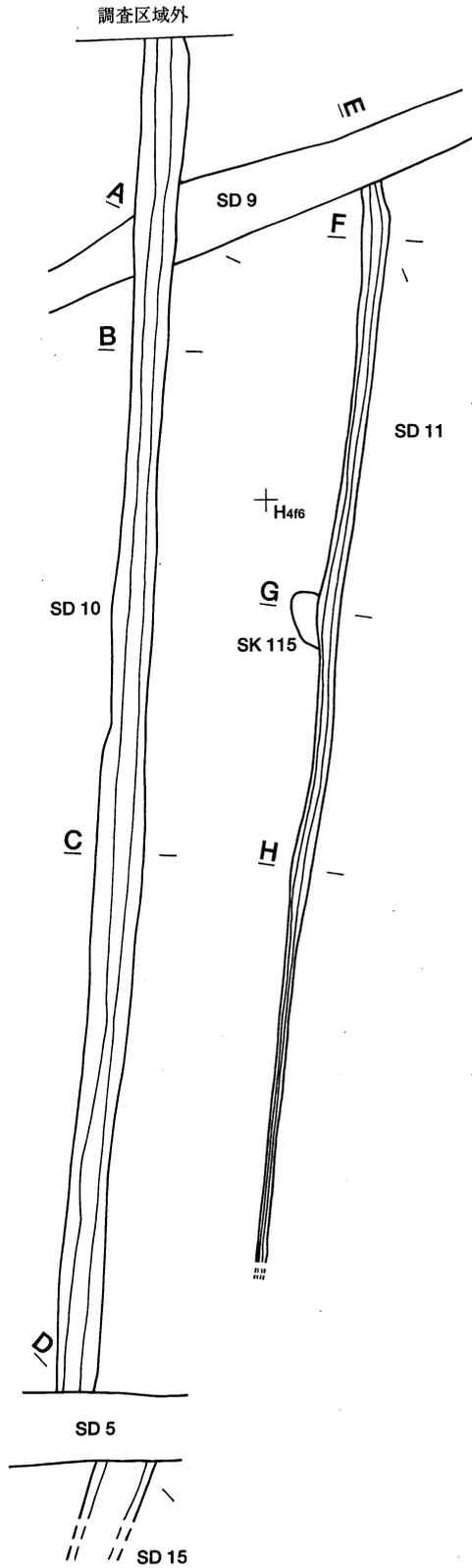
第139図 第1, 3号溝・出土遺物実測図



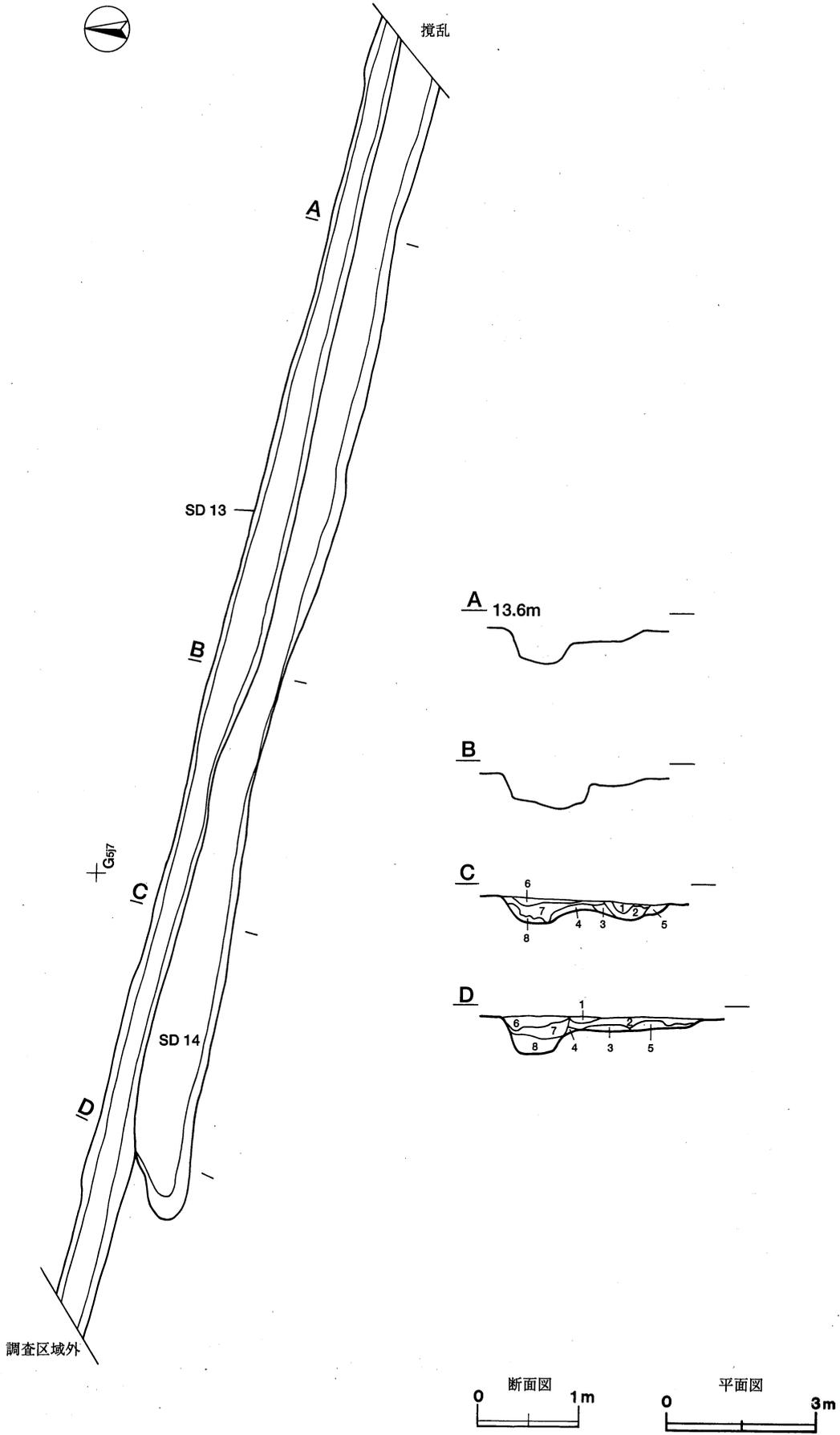
第140図 第2・4号溝実測図



第142图 第6·7·9号沟实测图



第143图 第10·11·15号溝实测图



第144图 第13·14号沟实测图

- 第1号溝土層解説
 1 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
 2 黒 褐 色 ロームブロック中量
 4 暗 褐 色 ロームブロック多量
 5 黒 褐 色 ローム粒子少量
 6 暗 褐 色 ローム粒子少量
 7 暗 褐 色 ロームブロック少量
 8 暗 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
 9 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

- 第2号溝土層解説
 1 黒 褐 色 ローム粒子微量

- 第3号溝土層解説
 1 黒 褐 色 ロームブロック微量
 2 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子微量
 3 黒 褐 色 ローム粒子微量

- 第4号溝土層解説
 1 暗 褐 色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量

- 第5号溝土層解説
 1 黒 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
 3 暗 褐 色 ロームブロック中量

- 第6号溝土層解説
 1 黒 褐 色 ロームブロック微量
 2 黒 褐 色 ロームブロック少量
 3 褐 色 ロームブロック中量
 4 褐 色 ロームブロック多量

- 第7号溝土層解説
 1 暗 褐 色 ロームブロック中量
 2 暗 褐 色 ロームブロック多量

- 第9号溝土層解説
 1 灰 褐 色 ロームブロック中量
 2 灰 褐 色 ロームブロック少量
 3 褐 色 ロームブロック中量
 4 灰 褐 色 ロームブロック微量, 焼土ブロック微量
 5 褐 灰 色 ロームブロック中量
 6 にぶい褐色 ロームブロック中量
 7 褐 灰 色 ロームブロック少量
 8 褐 灰 色 ロームブロック微量

- 第10号溝土層解説
 1 灰 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
 2 灰 褐 色 ロームブロック・炭化物微量
 3 灰 褐 色 ロームブロック中量
 4 黒 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

- 第11号溝土層解説
 1 灰 褐 色 ロームブロック少量
 2 灰 褐 色 ロームブロック微量
 3 黒 褐 色 ロームブロック少量
 4 灰 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
 5 灰 褐 色 ロームブロック中量

- 第12号溝土層解説
 1 褐 色 ロームブロック中量

- 第13・14号溝土層解説
 1 灰 褐 色 ロームブロック中量
 2 暗 褐 色 ロームブロック微量
 3 褐 色 ロームブロック中量
 4 明 褐 色 ロームブロック多量
 5 褐 色 ロームブロック多量
 6 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
 7 褐 色 ロームブロック多量, 炭化粒子少量
 8 灰 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

- 第15号溝土層解説
 1 黒 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

第3号溝出土遺物観察表 (第139図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法的特徴	出土位置	備考
TP23	土師質土器	鍋	-	(5.4)	-	長石	褐灰	普通	体部外面上半横ナデ, 下半ヘラ削り, 内面ナデ	下層	5% PL44
TP24	陶器	播り鉢	-	(6.1)	-	石英・長石	暗赤褐	普通	無軸, 外面ナデ, 内面播り目	下層	常滑系 5% PL44

第5号溝出土遺物観察表 (第141図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q24	砥石	(8.7)	(3.6)	(1.4)	(34.9)	凝灰岩	5面使用, 線条痕多数, 欠損	下層	

第12号溝出土遺物観察表 (第141図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
283	磁器	碗	-	(2.8)	[3.3]	石英	灰白	良	内・外面透明釉施軸	下層	10%

番号	種別	径	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP14	転用砥	-	3.7	4.9	0.9	13.2	陶器	瀬戸・美濃系播り鉢片転用, 1側縁使用	下層	P L 40

5 遺構外出土遺物

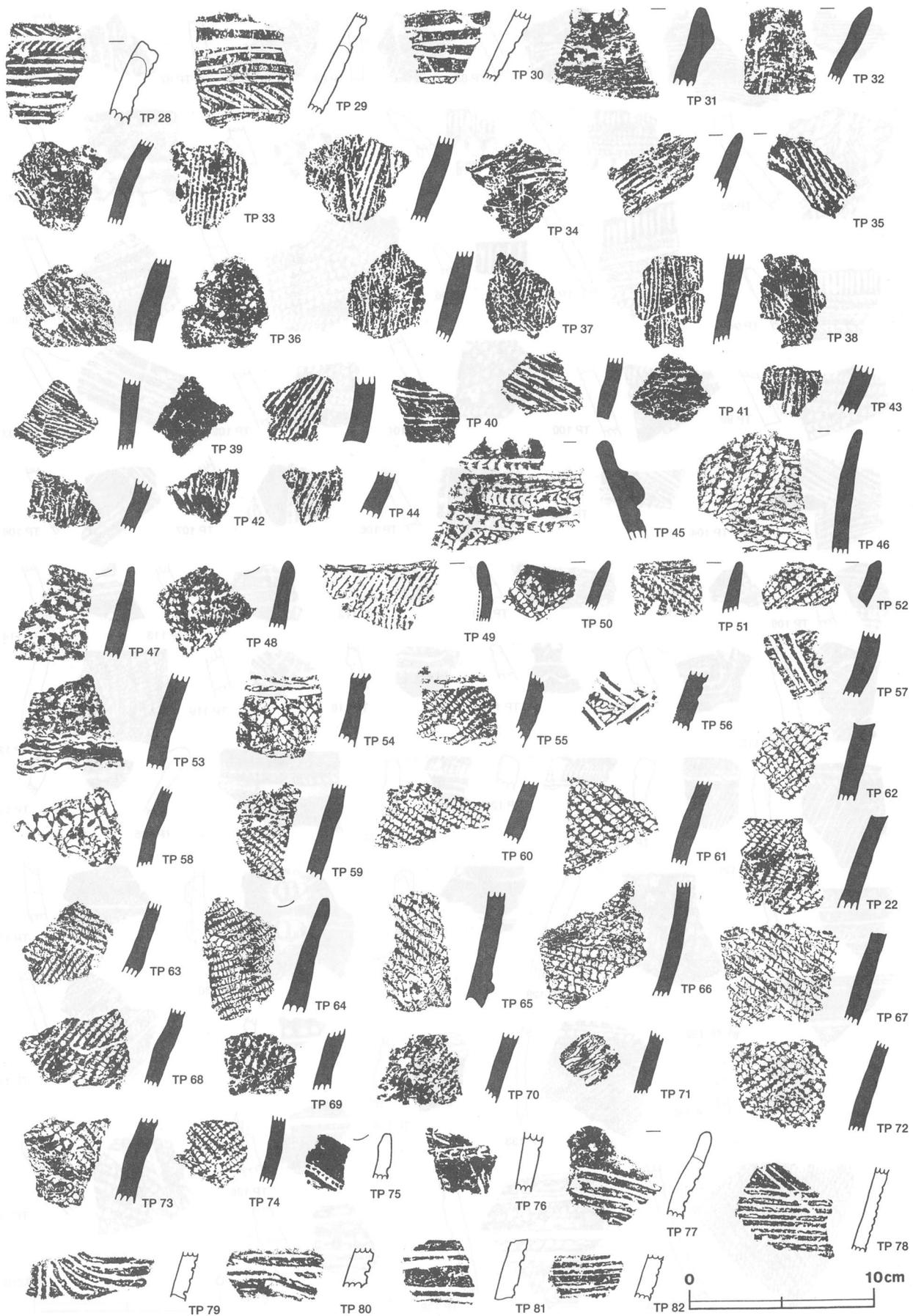
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物は、旧石器時代から近代に至るまでの遺物が確認されている。以下、各時代の特色ある遺物を抽出して概要を述べ、詳細は拓影図、実測図及び観察表に記載する。

旧石器時代の遺物は、黒曜石製細石刃核(Q33)の1点である。円錐形を呈し、丁寧に調整された平坦打面

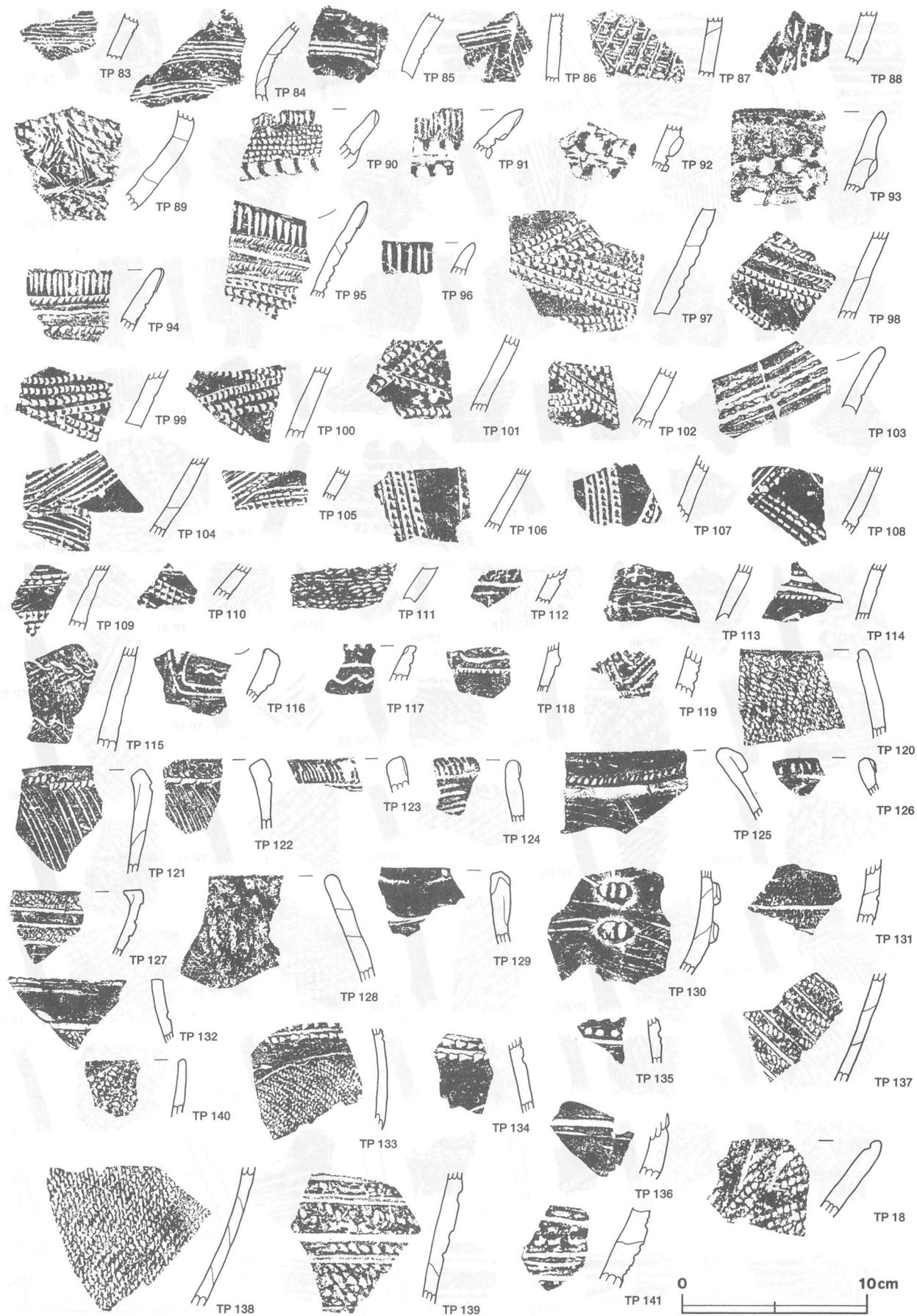
から連続して細石刃を剥離している。いわゆる野岳・休場型細石刃核である。縄文時代の遺物は、土器・石器・剥片が出土している。TP28～30は早期中葉の戸下層式土器、TP31～44は早期後葉の広義の茅山式土器である。333・TP22・TP45～74・TP87は前期中葉の黒浜式土器と考えられる。羽状構成の縄文施文、半截竹管による平行沈線や有節沈線で文様を描出している。TP45は隆帯に沿って半截竹管による有節沈線文を施し、口唇部に山形突起を貼り付けた類例の少ない土器である。TP75～86・TP89は前期後葉の諸磯式土器で、TP75・76が諸磯a式土器、TP77～86が諸磯b式土器の特徴を有している。TP88・TP90～113は浮島式土器で、半截竹管による有節沈線文や変形爪形文、波状貝殻文などを施文している。334・TP114～119は中期前葉～中葉の五領ヶ台式や阿玉台式土器と考えられ、隆帯や波状沈線文、有節沈線文で文様を描出している。TP18・TP120・TP137～139は後期中葉の加曾利B式土器、TP121～128・TP130・TP132～135は後期後葉の安行式土器、TP129・TP131・TP136・TP140・TP141は後期～晩期の土器である。文様は紐線文、帯縄文、列点文、沈線文などで構成されている。Q34～48は縄文時代の石器で、石鏃、打製石斧片、磨石、石皿、剥片などである。弥生時代の遺物は、土器と土製品が出土している。335～342・TP142～184は後期の土器と考えられる。DP18は細かい単節縄文を全面に施文した紡錘車である。335・TP143～153は壺の頸部～胴部片で、無文部を赤彩し、縄文帯をめぐらせている。TP152は網目状燃糸文を施文している。これらは南関東地方に分布する弥生時代後期の土器の特徴と考えられる。TP142は縄文原体による刻みを加えた2段の凸帯をめぐらせた口縁部片である。336・TP154～167は口唇部に縄文による刻みを施し、口縁部に縄文や付加条縄文を施文している。また、イボ状突起の貼り付けや縄文原体による刺突列などが加えられている。TP168～174は頸部に櫛描波状文や連弧文、簾状文が施されている。これらは北関東地方に分布する二軒屋式土器の特徴と考えられる。339～342・TP175～180は付加条縄文が施された胴部及び底部片で、TP176・TP177・TP180では羽状に構成されている。337・TP181～184は口縁部～胴部片、337は底部片で、1～3段の斜行縄文帯が施されている。これらは関東地方西部に分布する吉ヶ谷系土器の特徴と考えられる。古墳時代の遺物(4・306～314・322・330・331・TP7・TP8・DP17)は、前期～後期に至る土師器が出土し、壺(306～308)、甕(4・309～311・322・330)、器台(313・314)、小形壺(331)の各器種が見られ、土師器片を転用した砥具(DP17)も出土している。奈良・平安時代の遺物は土師器と須恵器で、土師器は甕(269)、壺(321)、坏(284・315～320)、須恵器は、蓋(275・279・282・285・288・290)、坏(267・271・272・278・280・281・291～299)、盤(270)、短頸壺(300)、鉢(301)、甕(302～304・TP20・TP25)、円面硯(305)の各器種が見られる。須恵器片を転用した砥具(DP15)も出土している。中世以降の遺物は常滑系の摺り鉢(TP185)、甕(TP186)、瀬戸・美濃系の天目茶碗(323)、縁釉皿(324)、香炉(326)、信楽系の灯明皿(327)、京焼系の土瓶蓋(328)、肥前系の仏飯器(325)、素焼土器(329)、凝灰岩製の砥石(Q50・51)、頁岩製の石盤(Q52)など、陶磁器や石製品が出土している。

遺構外出土遺物観察表(第145～152図)

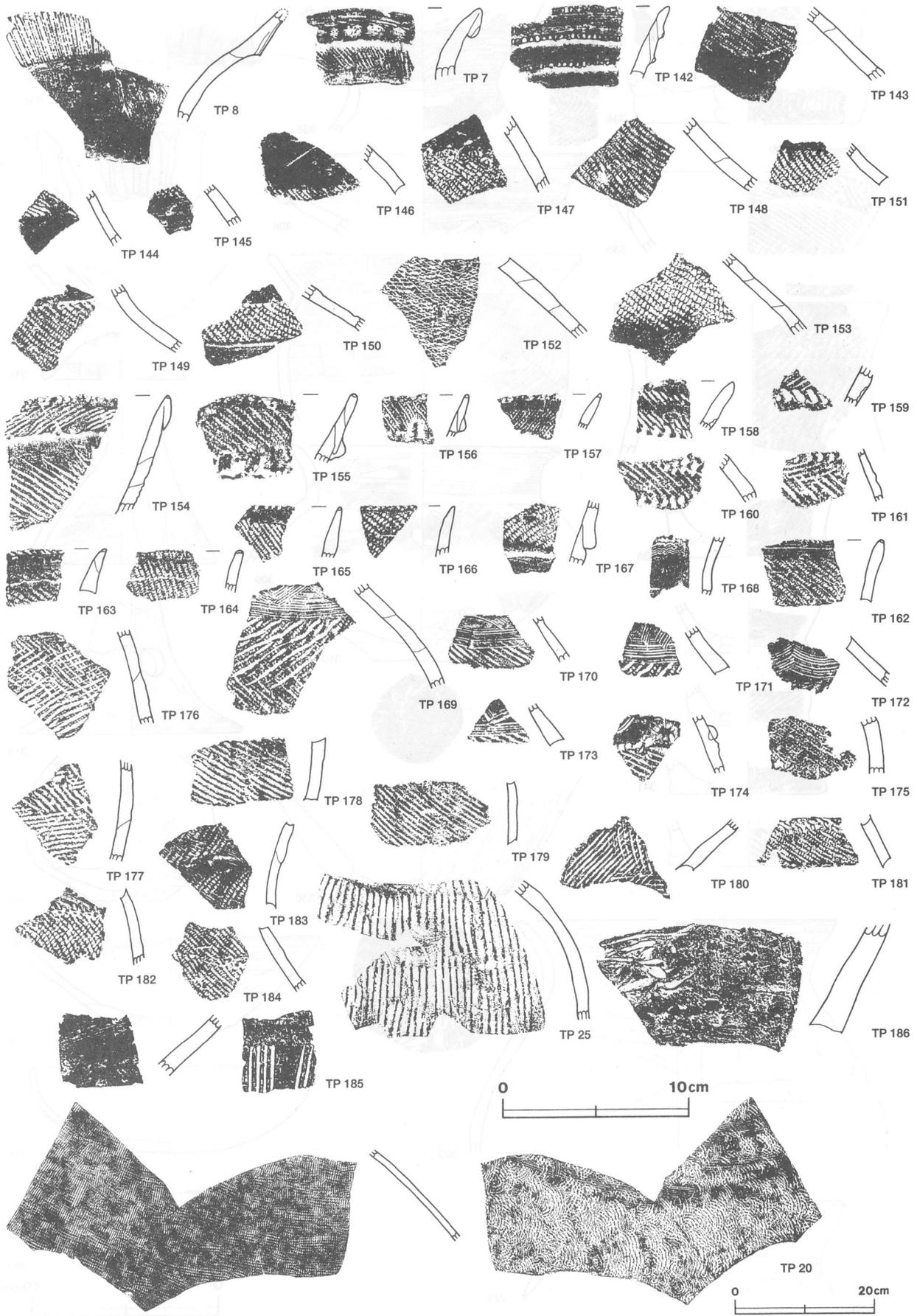
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP7	土師器	壺	-	(3.8)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	折り返し口縁部下端指頭圧痕、頸部外面ハケ目調整、内面ナデ	SI16	5% PL43
TP8	土師器	壺	-	(6.0)	-	石英・長石	暗赤	普通	折り返し口縁部縦位集合沈線、頸部外面ナデ、内・外面赤彩	SI16	5% PL43
TP18	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	石英・長石	にぶい赤褐	普通	外面縦位RL単節縄文、口縁部内面沈線、内面ナデ	SK40	後期中葉 5%
TP20	須恵器	甕	-	(17.5)	-	石英・長石	灰	普通	外面格子目叩き、同心円状当て具痕	SK90	5%
TP22	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	長石・繊維	褐	普通	外面横位LR単節縄文、内面ナデ	SK100	前期中葉 5%
TP25	須恵器	甕	-	(7.3)	-	石英・長石・雲母	褐灰	普通	外面縦位平行叩き、内面ナデ	SD1	5%



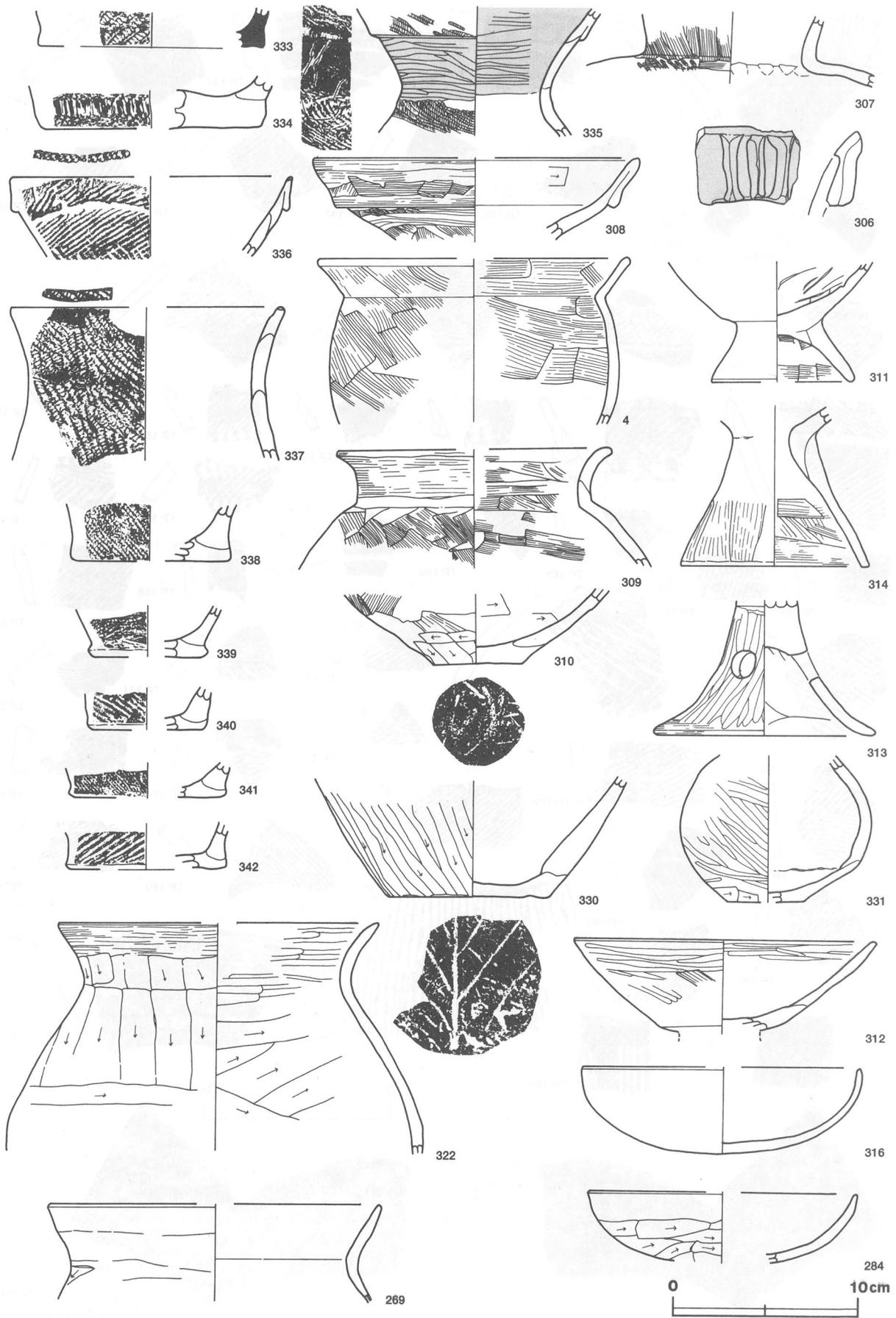
第145図 遺構外出土遺物実測図(1)



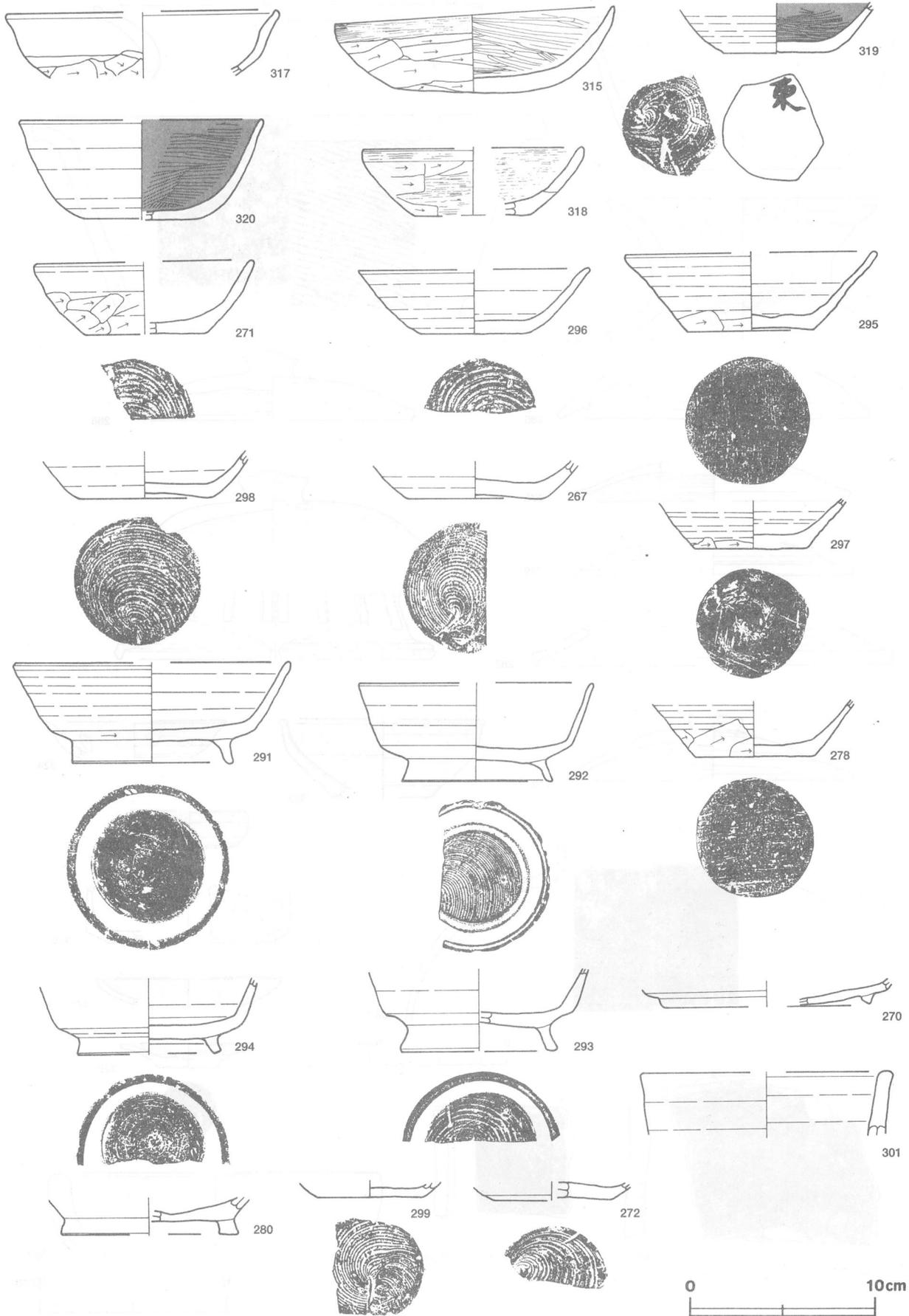
第146図 遺構外出土遺物実測図(2)



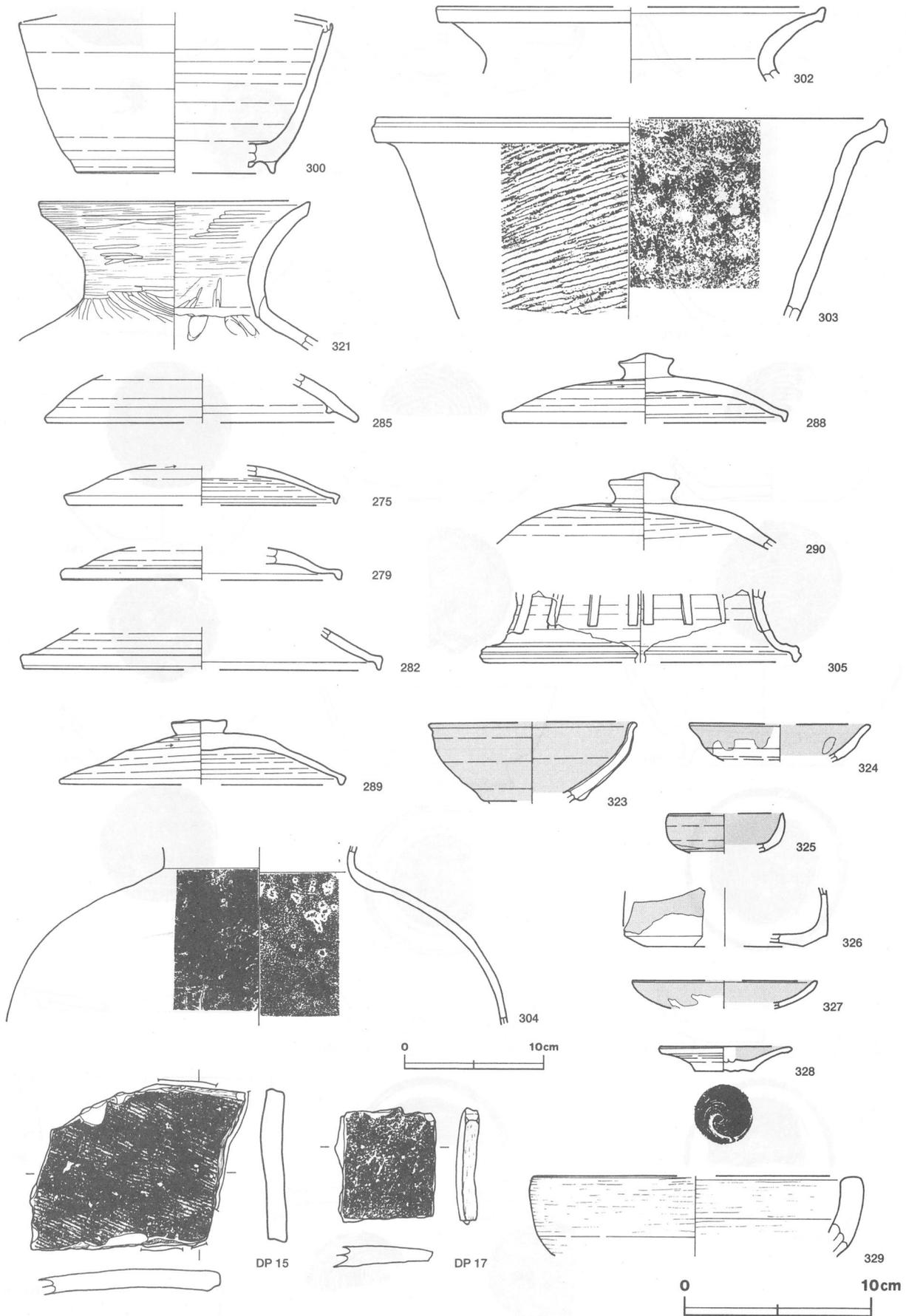
第147図 遺構外出土遺物実測図(3)



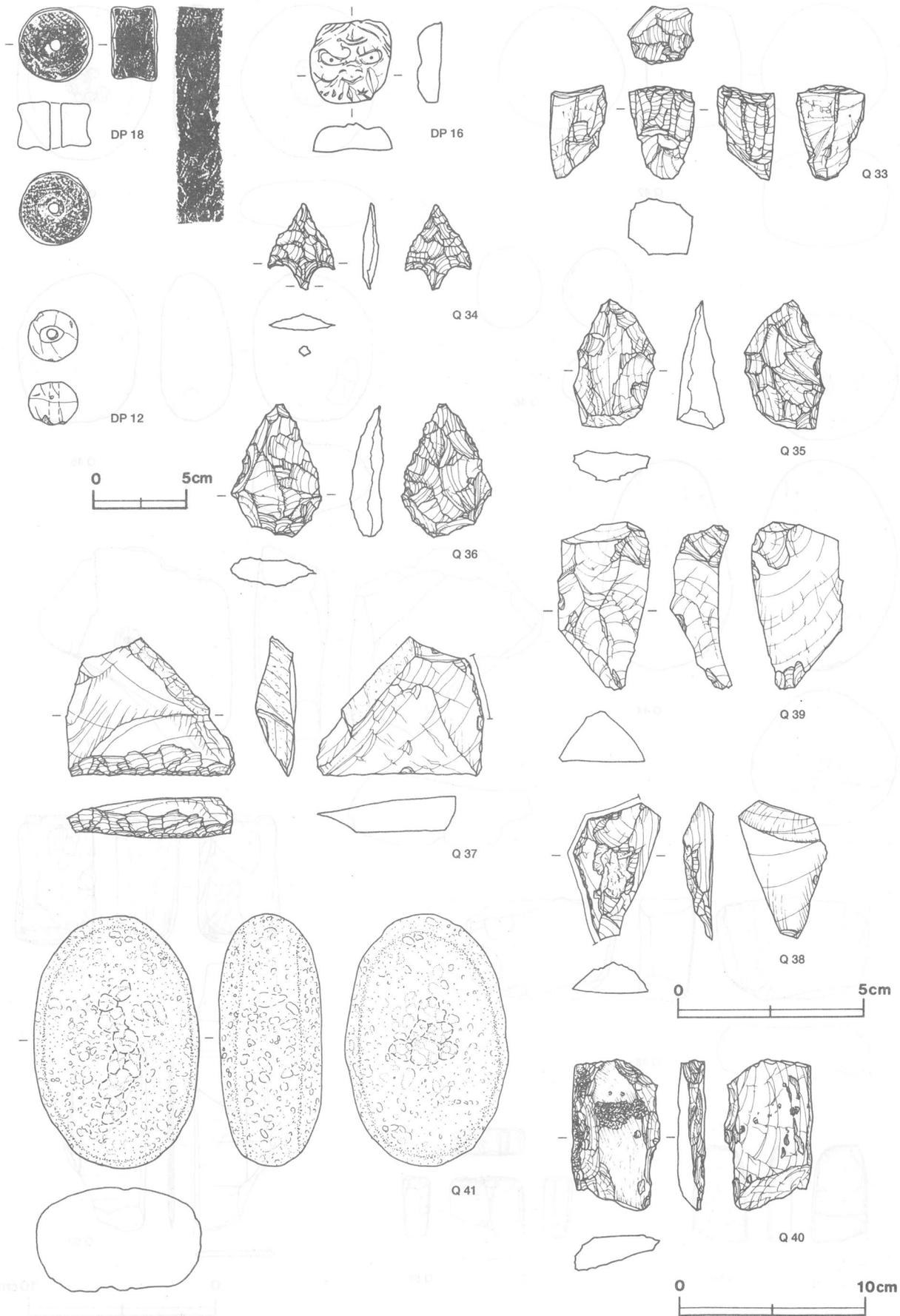
第148図 遺構外出土遺物実測図(4)



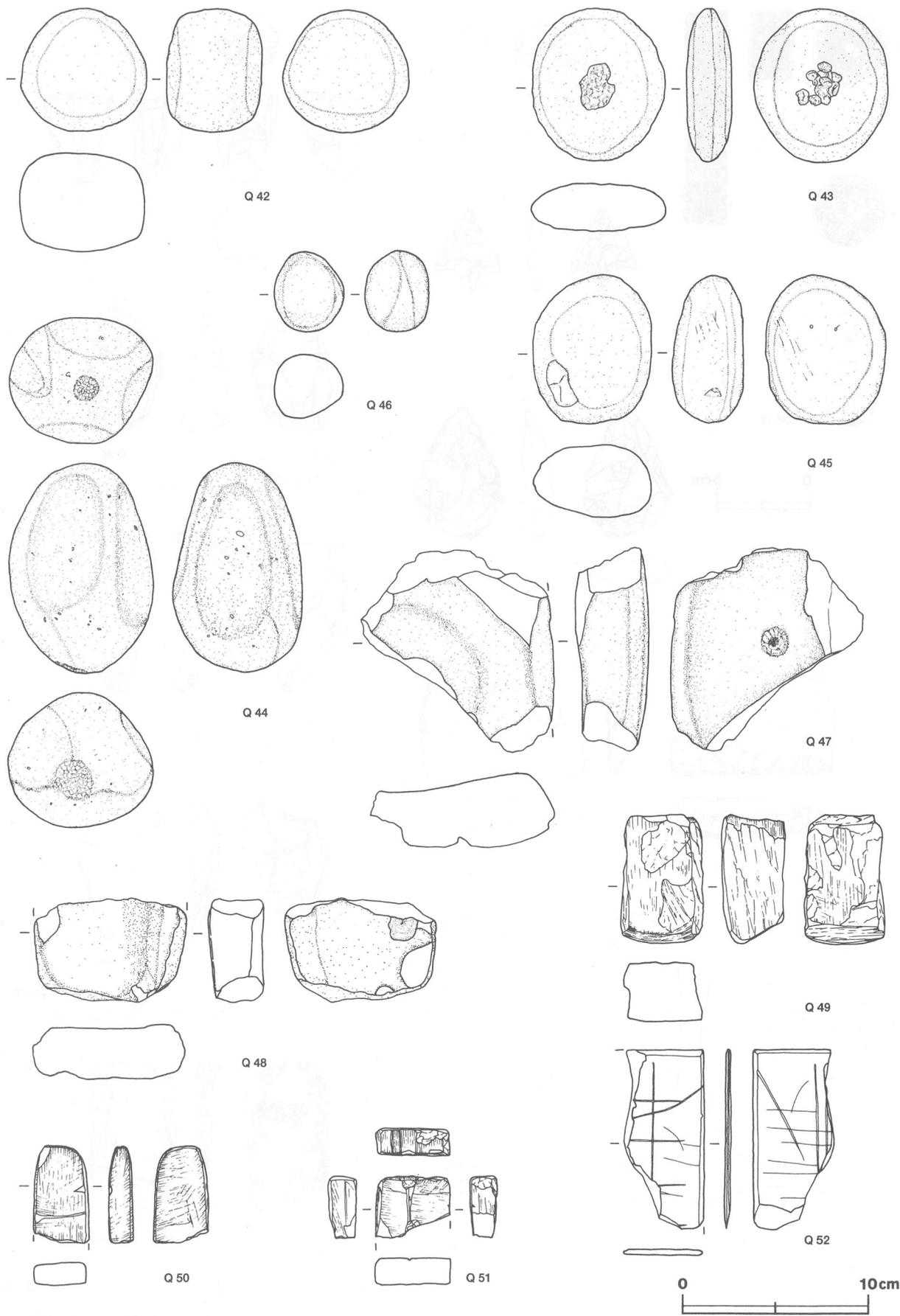
第149図 遺構外出土遺物実測図(5)



第150図 遺構外出土遺物実測図(6)



第151図 遺構外出土遺物実測図(7)



第152図 遺構外出土遺物実測図(8)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP28	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部矢羽状沈線, 外面横位の沈線文, 内面ナデ	表土	早期中葉 5% PL41
TP29	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	石英・長石・雲母	赤褐	普通	外面横位・斜位沈線文, 内面ナデ	表土	早期中葉 5% PL41
TP30	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	外面横位沈線文, 内面ナデ	表土	早期中葉 5% PL41
TP31	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	長石・雲母・繊維	明褐	普通	口縁部外面微隆帯上刻み, 口唇部刻み, 内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5% PL41
TP32	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	長石・雲母・繊維	にぶい橙	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5%
TP33	縄文土器	深鉢	-	(4.6)	-	長石・雲母・繊維	橙	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5%
TP34	縄文土器	深鉢	-	(4.6)	-	長石・雲母・繊維	明赤褐	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5% PL41
TP35	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	長石・雲母・繊維	にぶい褐	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5% PL41
TP36	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・雲母・繊維	にぶい橙	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5%
TP37	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	長石・雲母・繊維	橙	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5%
TP38	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	石英・雲母・繊維	黒褐	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5%
TP39	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	石英・雲母・繊維	黒褐	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5%
TP40	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	石英・雲母・繊維	明赤褐	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5%
TP41	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	石英・雲母・繊維	にぶい褐	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5%
TP42	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	石英・雲母・繊維	にぶい褐	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5%
TP43	縄文土器	深鉢	-	(2.0)	-	長石・雲母・繊維	橙	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5%
TP44	縄文土器	深鉢	-	(2.0)	-	石英・雲母・繊維	橙	普通	内・外面貝殻条痕文	表土	早期後葉 5%
TP45	縄文土器	深鉢	-	(5.3)	-	石英・雲母・繊維	にぶい黄橙	普通	口唇部三角状突起, 外面隆帯に沿って半截竹管による横位有節沈線文, 隆帯間貼り瘤, 内面ナデ	表土	前期中葉 5% PL41
TP46	縄文土器	深鉢	-	(6.5)	-	石英・長石・繊維	にぶい褐	普通	外面異条縄文による横位羽状縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5% PL41
TP47	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	石英・長石・繊維	にぶい黄橙	普通	外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP48	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	石英・長石・繊維	にぶい赤褐	普通	外面横位RL単節・R無節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP49	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	石英・長石・繊維	にぶい褐	普通	外面横位L無節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5% PL41
TP50	縄文土器	深鉢	-	(2.6)	-	石英・長石・繊維	赤褐	普通	外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP51	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	石英・長石・繊維	にぶい褐	普通	外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP52	縄文土器	深鉢	-	(2.4)	-	石英・長石・繊維	にぶい褐	普通	外面異条縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP53	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	石英・長石・繊維	橙	普通	外面半截竹管によるコンパス文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5% PL41
TP54	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	石英・長石・繊維	にぶい褐	普通	外面地文RL単節縄文, 半截竹管による沈線文	表土	前期中葉 5%
TP55	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	石英・長石・繊維	明赤褐	普通	外面地文RL単節縄文, 半截竹管による沈線文	表土	前期中葉 5%
TP56	縄文土器	深鉢	-	(3.1)	-	石英・長石・繊維	橙	普通	外面地文単節縄文, 半截竹管による山形沈線文	表土	前期中葉 5% PL41
TP57	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	石英・長石・繊維	明赤褐	普通	外面半截竹管による沈線文, 円形刺突文	表土	前期中葉 5% PL41
TP58	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	石英・長石・繊維	明赤褐	普通	外面半截竹管による刺突文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP59	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	石英・長石・繊維	にぶい黄橙	普通	外面RL単節縄文による横位羽状縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP60	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	石英・長石・繊維	にぶい黄橙	普通	外面RL単節縄文による横位羽状縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP61	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	石英・長石・繊維	にぶい赤褐	普通	外面RL単節縄文による横位羽状縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP62	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	石英・長石・繊維	にぶい橙	普通	外面RL単節縄文による横位羽状縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5% PL41
TP63	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	石英・長石・繊維	にぶい赤褐	普通	外面L無節縄文による横位羽状縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5% PL41
TP64	縄文土器	深鉢	-	(6.2)	-	石英・長石・繊維	褐	普通	外面LR単節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP65	縄文土器	浅鉢	-	(6.1)	-	石英・長石・繊維	橙	普通	外面R無節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP66	縄文土器	深鉢	-	(4.9)	-	石英・長石・繊維	灰褐	普通	外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP67	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	石英・長石・繊維	黒褐	普通	外面R無節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5% PL41
TP68	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	石英・長石・繊維	にぶい橙	普通	外面LR単節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP69	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	石英・長石・繊維	にぶい黄橙	普通	外面L無節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP70	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	石英・長石・繊維	橙	普通	外面L無節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP71	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	石英・長石・繊維	灰黄褐	普通	外面L無節縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP72	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	石英・長石・繊維	橙	普通	外面LR単節縄文による縦位羽状縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5% PL41
TP73	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	石英・長石・繊維	明赤褐	普通	外面LR単節縄文による縦位羽状縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%
TP74	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	石英・長石・繊維	褐	普通	外面RL単節縄文による羽状縄文, 内面ナデ	表土	前期中葉 5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP75	縄文土器	深鉢	-	(24)	-	石英・長石	橙	普通	外面有節沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP76	縄文土器	深鉢	-	(31)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	外面半載竹管による沈線文, 刺突文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP77	縄文土器	深鉢	-	(47.0)	-	石英・長石	明赤褐	普通	外面半載竹管による平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP78	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	外面半載竹管による平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP79	縄文土器	深鉢	-	(2.1)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	外面半載竹管による平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP80	縄文土器	深鉢	-	(2.1)	-	石英・長石	橙	普通	外面半載竹管による平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP81	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	石英・長石	橙	普通	外面半載竹管による平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP82	縄文土器	深鉢	-	(2.4)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	外面半載竹管による平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP83	縄文土器	深鉢	-	(2.5)	-	石英・長石	明褐	普通	外面地文RL単節縄文, 半載竹管による平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP84	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	外面地文RL単節縄文, 半載竹管による平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP85	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	外面半載竹管による平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP86	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	外面半載竹管による平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP87	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	石英・長石	明褐	普通	外面半載竹管による格子目状平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP88	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	外面半載竹管による斜行刺突文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP89	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	外面地文RL単節縄文, 刻みを加えた浮線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP90	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部条線文帯, 半載竹管による有節沈線文, 指頭による凹凸文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP91	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部条線文帯, 指頭による凹凸文, 半載竹管による平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP92	縄文土器	深鉢	-	(2.3)	-	石英・長石	明褐	普通	外面指頭による凹凸文, 半載竹管による斜行刺突文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP93	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	石英・長石	にぶい赤褐	普通	外面指頭による凹凸文, 輪積み文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP94	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部条線文帯, 変形爪形文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP95	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部条線文帯, 半載竹管による変形爪形文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP96	縄文土器	深鉢	-	(1.5)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部条線文帯, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP97	縄文土器	深鉢	-	(7.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	外面半載竹管による変形爪形文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP98	縄文土器	深鉢	-	(4.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	外面半載竹管による変形爪形文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP99	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	外面半載竹管による変形爪形文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP100	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	外面半載竹管による変形爪形文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP101	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	外面半載竹管による変形爪形文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP102	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	外面半載竹管による変形爪形文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP103	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	-	石英・長石・雲母	褐	普通	外面半載竹管による変形爪形文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP104	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	外面半載竹管による有節沈線文, 平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP105	縄文土器	深鉢	-	(1.6)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	外面半載竹管による有節沈線文, 平行沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP106	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	石英・長石	橙	普通	外面半載竹管による有節沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP107	縄文土器	深鉢	-	(2.5)	-	石英・長石	橙	普通	外面半載竹管による有節沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP108	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	石英・長石	橙	普通	外面半載竹管による有節沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP109	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	外面半載竹管による有節沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP110	縄文土器	深鉢	-	(1.8)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	外面半載竹管による有節沈線文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP111	縄文土器	深鉢	-	(1.8)	-	石英・長石	にぶい黄褐	普通	外面波状貝殻文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5% PL42
TP112	縄文土器	深鉢	-	(1.9)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	外面沈線区画の貝殻文, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP113	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	外面貝殻腹による擦痕, 内面ナデ	表土	前期後葉 5%
TP114	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	外面棒状工具による沈線文, 有節沈線文, 内面ナデ	表土	中期前葉 5%
TP115	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	外面地文LR単節縄文, 横位S字状結節文, 内面ナデ	表土	中期前葉 5%
TP116	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	石英・長石	橙	普通	口唇端部刻み, 外面隆帯に沿って沈線, 波状沈線文, 内面ナデ	表土	中期前葉 5% PL42
TP117	縄文土器	深鉢	-	(1.8)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口唇端部刻み, 外面波状沈線文, 内面ナデ	表土	中期前葉 5%
TP118	縄文土器	深鉢	-	(2.5)	-	石英・長石	赤褐	普通	外面刻みを加えた隆帯に沿って沈線, 有節沈線, 内面ナデ	表土	中期前葉 5% PL42
TP119	縄文土器	深鉢	-	(2.2)	-	石英・長石	暗赤褐	普通	外面有節沈線文, 内面ナデ	表土	中期前葉 5%
TP120	縄文土器	深鉢	-	(4.7)	-	石英・長石	明赤褐	普通	外面横位LL縄文, 口縁部内面沈線, ナデ	表土	後期中葉 5% PL42
TP121	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部外面刺突列, 沈線文, 内面ナデ	表土	後期後葉 5% PL42

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP122	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部外面刺突列, 沈線文, 内面ナデ	表土	後期後葉 5% PL42
TP123	縄文土器	深鉢	-	(1.6)	-	石英・長石	明赤褐	普通	口縁部外面刻み列, 沈線文, 内面ナデ	表土	後期後葉 5%
TP124	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面刻み列, 沈線文, 内面ナデ	表土	後期後葉 5%
TP125	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面紐線貼り付け, 沈線文, 内面ナデ	表土	後期後葉 5% PL43
TP126	縄文土器	深鉢	-	(2.0)	-	石英・長石	にぶい赤褐	普通	口縁部外面紐線貼り付け, 沈線文, 内面ナデ	表土	後期後葉 5%
TP127	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	石英・長石・雲母	黒褐	普通	口縁部外面2列の帯縄文, 沈線区画後RL単節縄文充填, 内面ナデ	表土	後期後葉 5%
TP128	縄文土器	深鉢	-	(6.0)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	無文, 内・外面ナデ	表土	後期後葉 5%
TP129	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	外面輪積み痕, 沈線, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP130	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	外面沈線区画後RL単節縄文充填, 縦方向に刻みのある横帯貼り付け, 沈線文, 内面ナデ	表土	後期後葉 5% PL43
TP131	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	外面沈線文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP132	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	石英・長石	にぶい赤褐	普通	外面帯縄文, 内面ナデ	表土	後期後葉 5%
TP133	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	石英・長石	暗赤褐	普通	外面沈線区画の縄文充填弧状文, くびれ部2列の刺突文, 内面ナデ	表土	後期後葉 5% PL43
TP134	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	石英・長石	にぶい赤褐	普通	外面沈線, 2列の刺突文, 内面ナデ	表土	後期後葉 5%
TP135	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	-	石英・長石	明赤褐	普通	外面沈線, 刺突文, 内面ナデ	表土	後期後葉 5%
TP136	縄文土器	浅鉢	-	(3.7)	-	石英・長石	明赤褐	普通	外面沈線文, 内面ナデ	表土	後~晩期 5%
TP137	縄文土器	深鉢	-	(5.8)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	外面地文縦列LR単節縄文, 斜行沈線文, 内面ナデ	表土	後期中葉 5% PL43
TP138	縄文土器	深鉢	-	(7.1)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	外面横列LL縄文, 内面ナデ	表土	後期中葉 5%
TP139	縄文土器	深鉢	-	(6.8)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	外面地文縦列LR単節縄文, 半截竹管による横列沈線文, 内面ナデ	表土	後期中葉 5%
TP140	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	石英・長石	橙	普通	外面隆帯に沿って沈線, 波状沈線文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP141	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	外面半截竹管による平行沈線文, 刺突文, 内面ナデ	表土	後期 5% PL43
TP142	弥生土器	壺	-	(3.8)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面縄文原体による刻みを加えた2段の凸帯, 内面赤彩, ナデ	表土	後期 5% PL43
TP143	弥生土器	壺	-	(4.5)	-	石英・長石・雲母	明赤	普通	外面RL単節縄文, 無文部赤彩, 内面ナデ	表土	後期 5% PL43
TP144	弥生土器	壺	-	(2.9)	-	石英・長石・雲母	赤褐	普通	外面RL単節縄文, 無文部赤彩, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP145	弥生土器	壺	-	(2.2)	-	石英・長石・雲母	赤	普通	外面RL単節縄文, 無文部赤彩, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP146	弥生土器	壺	-	(2.8)	-	石英・長石・雲母	明褐	普通	外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP147	弥生土器	壺	-	(4.5)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP148	弥生土器	壺	-	(3.9)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	後期 5% PL43
TP149	弥生土器	壺	-	(3.6)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP150	弥生土器	壺	-	(2.5)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	外面沈線区画RL単節縄文, 無文部赤彩, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP151	弥生土器	壺	-	(2.2)	-	石英・長石・雲母	極暗褐	普通	外面RL単節縄文, 無文部赤彩, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP152	弥生土器	壺	-	(4.3)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	外面網目状捺糸文, 内面ナデ	表土	後期 5% PL44
TP153	弥生土器	壺	-	(4.7)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP154	弥生土器	壺	-	(6.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部縄文による刻み, 口縁部外面羽状構成の付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5% PL44
TP155	弥生土器	壺	-	(3.6)	-	石英・長石・雲母	暗褐	普通	口唇部縄文による刻み, 口縁部外面付加条縄文, 瘤貼り付け, 内面ナデ	表土	後期 5% PL44
TP156	弥生土器	壺	-	(2.2)	-	長石	黒	普通	口唇部縄文による刻み, 口縁部外面付加条縄文, 瘤貼り付け, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP157	弥生土器	壺	-	(1.8)	-	長石・雲母	橙	普通	口唇部縄文による刻み, 口縁部外面付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP158	弥生土器	壺	-	(2.8)	-	長石・雲母	赤褐	普通	口縁部外面付加条縄文, 縄文原体による庄痕文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP159	弥生土器	壺	-	(1.6)	-	長石	明赤褐	普通	口縁部外面付加条縄文, 縄文原体による庄痕文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP160	弥生土器	壺	-	(2.4)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	外面付加条縄文, 縄文原体による庄痕文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP161	弥生土器	壺	-	(2.7)	-	石英・長石・雲母	明褐	普通	外面羽状構成の付加条縄文, 縄文原体による庄痕文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP162	弥生土器	壺	-	(3.3)	-	石英・長石・雲母	暗褐	普通	口唇部縄文による刻み, 口縁部外面付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5% PL44
TP163	弥生土器	壺	-	(2.4)	-	長石・雲母	黒褐	普通	口唇部縄文による刻み, 口縁部外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP164	弥生土器	鉢	-	(2.2)	-	長石	浅黄橙	普通	口唇部縄文による刻み, 口縁部外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP165	弥生土器	壺	-	(2.6)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	口唇部縄文による刻み, 口縁部外面付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP166	弥生土器	壺	-	(2.4)	-	石英・長石	橙	普通	口唇部縄文による刻み, 口縁部外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP167	弥生土器	壺	-	(3.3)	-	長石・雲母	黒褐	普通	複合口縁部外面RL単節縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP168	弥生土器	壺	-	(3.1)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	外面櫛描波状文, 内面ナデ	表土	後期 5% PL44

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP169	弥生土器	壺	-	(4.9)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	外面飾描山形文, 羽状構成の付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5% PL44
TP170	弥生土器	壺	-	(2.2)	-	石英・長石・雲母	黄橙	普通	外面飾描連弧文, 簾状文, 付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5% PL44
TP171	弥生土器	壺	-	(2.2)	-	長石・雲母	暗褐	普通	外面飾描連弧文, 簾状文, 付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5% PL44
TP172	弥生土器	壺	-	(2.6)	-	石英・長石・雲母	褐	普通	外面飾描連弧文, 縄文原体による圧痕文, 内面ナデ	表土	後期 5% PL44
TP173	弥生土器	壺	-	(2.2)	-	石英・長石・雲母	黒褐	普通	外面飾描連弧文, 簾状文, 付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP174	弥生土器	壺	-	(3.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	外面飾描文, 縄文原体による圧痕文, 付加条縄文, 縮貼り付け, 内面ナデ	表土	後期 5% PL44
TP175	弥生土器	壺	-	(3.2)	-	長石・雲母	にぶい黄褐	普通	外面付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5% PL44
TP176	弥生土器	壺	-	(4.9)	-	石英・長石・雲母	赤褐	普通	外面網目状付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5% PL44
TP177	弥生土器	壺	-	(5.1)	-	石英・長石・雲母	黒褐	普通	外面羽状構成の付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP178	弥生土器	壺	-	(3.3)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	外面付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP179	弥生土器	壺	-	(3.2)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	外面付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP180	弥生土器	壺	-	(2.7)	-	石英・長石・雲母	赤褐	普通	外面網目状付加条縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP181	弥生土器	壺	-	(2.6)	-	長石・雲母	黒褐	普通	外面RL単節縄文, 原体端部の結束痕, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP182	弥生土器	壺	-	(3.8)	-	長石・雲母	橙	普通	外面RL単節縄文, 原体端部の結束痕, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP183	弥生土器	壺	-	(4.6)	-	石英・長石・雲母	黒褐	普通	外面LR単節縄文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP184	弥生土器	壺	-	(3.5)	-	長石・雲母	黒褐	普通	外面RL単節縄文, 端部結束の付加条縄文, S字状結節文, 内面ナデ	表土	後期 5%
TP185	陶器	挿り鉢	-	(3.2)	-	長石	暗褐	普通	外面ナデ, 内面挿り目, 無釉	表土	常滑系 5%
TP186	陶器	甕	-	(6.0)	-	長石・雲母	にぶい黄褐	普通	内・外面ナデ, 外面「X」のヘラ書き, 無釉	表土	常滑系 5% PL44

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
4	土師器	甕	[16.6]	(8.8)	-	石英・雲母	にぶい褐	普通	内・外面ハケ目調整	SI-2	10%
267	須恵器	坏	-	(2.0)	[7.4]	長石	灰白	普通	内・外面ロクロナデ, 底部回転系切り	表土	40%
269	土師器	甕	[17.8]	(5.2)	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り	表土	10%
270	須恵器	盤	-	(1.3)	[11.2]	長石	灰白	普通	高台貼り付け後ロクロナデ	表土	5%
271	須恵器	坏	[11.7]	3.9	[6.6]	雲母・黒色粒	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部回転系切り	表土	20%
272	須恵器	坏	-	(1.0)	[6.2]	長石・雲母	灰白	普通	底部回転系切り	表土	5%
275	須恵器	蓋	[14.4]	(2.1)	-	長石・雲母	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	表土	10%
278	須恵器	坏	-	(3.0)	6.4	長石・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	表土	30%
279	須恵器	蓋	[15.0]	(1.8)	-	長石	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ	表土	5%
280	須恵器	壺	-	(1.9)	[9.5]	長石	灰黄褐	普通	高台貼り付け後ロクロナデ	表土	5%
282	須恵器	蓋	[19.1]	(2.3)	-	長石・雲母	黄灰褐	普通	内・外面ロクロナデ	表土	5%
284	土師器	坏	[14.4]	(3.7)	-	長石・雲母・赤色粒	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面摩滅	表土	15%
285	須恵器	蓋	[17.0]	(2.6)	-	石英・長石	灰	普通	内・外面ロクロナデ	表土	5%
288	須恵器	蓋	[15.1]	3.7	-	石英・長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	表土	40% PL33
289	須恵器	蓋	[15.1]	3.6	-	長石	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	表土	50% PL33
290	須恵器	蓋	-	(4.1)	-	石英・長石	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	表土	30%
291	須恵器	高台付坏	[14.7]	5.4	8.7	石英・長石	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	表土	55% PL33
292	須恵器	高台付坏	[12.6]	5.3	8.0	長石	灰	良	底部回転系切り	表土	30%
293	須恵器	高台付坏	-	(4.4)	[8.4]	長石	灰白	普通	底部回転系切り	表土	20%
294	須恵器	高台付坏	-	(4.0)	[7.8]	石英・長石	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	表土	20%
295	須恵器	坏	[13.4]	4.2	6.7	雲母・白色粒	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部一方向のヘラ削り	表土	45%
296	須恵器	坏	[12.6]	3.5	[5.9]	石英・長石	灰白	普通	内・外面ロクロナデ, 底部回転系切り	表土	20%
297	須恵器	坏	-	(2.5)	6.0	長石・雲母	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り, 底部多方向のヘラ削り	表土	40%
298	須恵器	坏	-	(2.5)	7.2	石英	灰白	普通	内・外面ロクロナデ, 底部回転系切り	表土	40%
299	須恵器	坏	-	(0.8)	[5.8]	石英・長石	にぶい赤褐	普通	底部回転系切り	表土	10%
300	須恵器	短頸壺	-	(8.0)	[10.8]	石英・長石・雲母	灰	普通	内・外面ロクロナデ	表土	10%
301	須恵器	鉢	[13.6]	(3.2)	-	長石・白色粒	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ	表土	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
302	須恵器	甕	[20.8]	(3.9)	-	石英・長石	褐灰	普通	内・外面ロクロナデ	表土	10%
303	須恵器	甕	[27.2]	(10.8)	-	石英・長石	灰	普通	体部外面平行叩き、内面凹形当て具痕	表土	10%
304	須恵器	甕	-	(12.9)	-	長石・黒色粒	黄灰	普通	外面自然釉付着、内面凹形当て具痕	表土	10%
305	須恵器	円面硯	-	(3.9)	[17.4]	石英・長石	灰	普通	内・外面ロクロナデ、透かし	表土	5%
306	土師器	壺	-	(4.1)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	複合口縁部、棒状浮文貼り付け後ナデ、内・外面赤彩	表土	5%
307	土師器	壺	-	(3.8)	-	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	頸部外面ハケ目調整、体部外面R無節縄文施文、内面指頭圧痕	表土	5%
308	土師器	壺	[17.6]	(4.4)	-	石英・長石・雲母	浅黄	普通	折り返し口縁部外面ハケ目調整後横ナデ、頸部外面ハケ目調整後ヘラ磨き、内面ヘラナデ	表土	5%
309	土師器	壺	[15.0]	(6.4)	4.2	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ、口縁部内面・体部ハケ目調整	表土	5%
310	土師器	甕	-	(4.0)	4.7	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目調整、下端ヘラ削り、内面ヘラナデ	表土	10%
311	土師器	台付甕	-	(6.5)	(7.6)	石英・長石・赤色粒	にぶい橙	普通	外面摩滅、体部内面ヘラナデ、台部内面ハケ目調整	表土	5%
312	土師器	高 杯	16.0	(5.0)	-	長石・赤色粒	にぶい橙	普通	外面ハケ目調整後ヘラ磨き、内面ヘラ磨き	表土	45%
313	土師器	器 台	-	(7.2)	12.0	石英・長石	橙	普通	外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ	表土	45%
314	土師器	器台	-	(8.6)	10.2	長石・雲母・白色粒	にぶい橙	普通	外面ハケ目調整、内面ハケ目調整後横ナデ	表土	50%
315	土師器	杯	15.0	4.5	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き	表土	55%
316	土師器	杯	[20.0]	4.7	-	石英・長石	橙	普通	内・外面摩滅	表土	25%
317	土師器	杯	[14.5]	(3.5)	-	長石	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面摩滅	表土	5%
318	土師器	杯	[11.8]	3.6	[6.2]	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁～体部外面横ナデ後ヘラ削り、内面ナデ	表土	10%
319	土師器	杯	-	(2.7)	[5.8]	長石・赤色粒	橙	普通	体部外面ロクロナデ、内面ヘラ磨き、底部回転糸切り、黒色処理	表土	墨書・東 15% PL33
320	土師器	杯	[13.0]	5.3	[6.1]	雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ロクロナデ、内面ヘラ磨き、黒色処理	表土	30%
321	土師器	壺	14.5	(7.9)	-	石英・長石	浅黄	普通	口縁～頸部横ナデ後ヘラ磨き、体部外面ヘラ磨き、内面指頭圧痕	表土	10%
322	土師器	甕	[17.2]	(12.3)	-	長石・雲母	浅黄橙	普通	口縁部外面横ナデ、内面ヘラ磨き、体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	表土	20%
323	陶器	天目茶碗	[11.2]	(4.2)	-	-	黄灰	良	内・外面鉄釉、体部下端露胎	表土	瀬戸・美濃系 5%
324	陶器	縁釉皿	[9.8]	(2.0)	-	-	黄橙	良	口縁部灰釉、体部下端露胎	表土	瀬戸・美濃系 20%
325	磁器	仏飯器	[6.2]	(2.1)	-	-	灰白	良	内・外面透明釉	表土	肥前系 5%
326	陶器	香炉	-	(3.2)	[8.5]	-	浅黄橙	普通	外面黄褐釉、体部外面下端露胎、底部口縁ヘラ削り	表土	瀬戸・美濃系 5%
327	陶器	灯明皿	[9.8]	(1.5)	-	-	にぶい褐	良	口縁部外面～体部内面鉄釉施釉、体部外面下端露胎	表土	信楽系 5%
328	陶器	蓋	7.2	1.4	-	-	黄橙	良	外面透明釉、回転糸切り	表土	85%
329	素焼土器	鉢	[17.0]	(4.3)	-	雲母・赤色粒	にぶい橙	普通	内・外面横ナデ	表土	5%
330	土師器	甕	-	(6.6)	[8.8]	石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面摩滅、底部木葉痕	表土	10%
331	土師器	壺	-	(7.8)	[4.1]	長石・雲母	浅黄橙	普通	体部外面ヘラ磨き、下端ヘラ削り	表土	60%
333	縄文土器	深鉢	-	(2.1)	[12.2]	長石・赤色粒・繊維	橙	普通	外面付加条縄文、内面ナデ	表土	5%
334	縄文土器	深鉢	-	(2.4)	[11.6]	長石・雲母	にぶい橙	普通	外面LR単節縄文、内面ナデ	表土	5%
335	弥生土器	壺	-	(6.7)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	折り返し口縁部外面R無節縄文、体部外面R無節縄文、頸部ヘラ磨き、内・外面赤彩	表土	5%
336	弥生土器	鉢	[15.0]	(4.2)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	折り返し口縁～体部外面付加条縄文、口唇部縄文原体圧痕、内面ナデ	表土	5%
337	弥生土器	深鉢	[14.6]	(8.0)	-	石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外面RL単節縄文、口唇部縄文原体圧痕、内面ヘラナデ	表土	45%
338	弥生土器	深鉢	-	(3.1)	[8.4]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	外面RL単節縄文、内面ナデ	表土	5%
339	弥生土器	深鉢	-	(2.8)	[5.8]	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	外面付加条縄文、内面ナデ	表土	5%
340	弥生土器	深鉢	-	(2.3)	[6.0]	長石・雲母	にぶい褐	普通	外面付加条縄文、内面ナデ	表土	5%
341	弥生土器	深鉢	-	(1.9)	[8.2]	石英・長石・雲母	灰黄褐	普通	外面付加条縄文、内面ナデ	表土	5%
342	弥生土器	深鉢	-	(2.5)	[8.3]	長石・雲母	にぶい褐	普通	外面付加条縄文、内面ナデ	表土	5%
343	須恵器	蓋	[15.0]	(2.0)	-	長石	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り、内・外面ロクロナデ	表土	5%

番号	種別	径	長さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP12	球状土錘	2.6	2.3	0.5	12.6	-	球体、外面ナデ	床面	PL PL39

番号	種別	径	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP15	転用砥	-	11.5	8.9	1.0	131.8	須恵器	須恵器甕片転用、3側縁使用	SD13	
DP16	泥面子	-	2.3	2.2	0.8	3.2	-	型押成形、人面形・達磨、裏面指頭ナデ	表土	PL39

番号	種別	径	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP17	転用砥	-	6.2	5.5	1.2	43.8	土師器	土師器壺片転用, 1側縁使用	表土	
DP18	紡錘車	3.9	-	-	2.5	47.8	-	両面・側面RL単節縄文, 側面中央部指頭ナデによるくぼみ	表土	PL39

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q33	細石刃核	2.5	1.8	1.6	6.9	黒曜石	野岳・休場型細石刃核, 素材は厚みのある剥片, 複剥離面打面, 半球状に作業面を設ける	表土	PL45
Q34	石鏃	2.3	1.8	0.4	1.1	チャート	凸基式, 両面調整, 側縁部に細密な調整加工	SB10	PL45
Q35	尖頭器	3.5	2.3	1.3	7.4	チャート	両面階段状剥離調整, 尖頭部作出, 基部節理面残置	表土	PL45
Q36	尖頭器	3.6	0.9	2.5	6.5	チャート	両面階段状剥離調整, 尖頭部作出, 側縁部に細密な調整加工	表土	PL45
Q37	搔器	3.7	4.5	1.1	16.1	チャート	素材は板状横長剥片, 1側縁に腹面側から密な階段状剥離調整, 左側縁に微細剥離痕	SI36	PL45
Q38	剥片	3.7	2.3	0.8	5.1	チャート	縦長剥片, 左側縁に微細剥離痕	表土	PL44
Q39	剥片	4.5	2.4	1.6	13.9	チャート	縦長剥片, 複剥離面打面, 右側縁上部に階段状剥離調整	SI16	PL44
Q40	打製石斧	(8.1)	(4.7)	(1.4)	(78.2)	頁岩	欠損後再生加工, 右側縁階段状剥離調整, 左側縁階段状剥離後敲打調整, 両面研磨	SI35	PL47
Q41	磨石	13.5	8.8	5.6	773.6	安山岩	全面研磨痕, 両面中央部くぼみ	SI52	PL47
Q42	磨石	6.6	6.7	5.1	294.6	安山岩	全面研磨痕	SD5	PL47
Q43	磨石	8.1	7.3	2.4	202.7	安山岩	全面研磨痕, 両面中央部くぼみ	SI24	PL47
Q44	磨石	11.3	7.8	7.3	797.3	安山岩	全面研磨痕, 両端部敲打痕	表土	PL47
Q45	磨石	6.0	6.4	3.8	279.6	安山岩	全面研磨痕	表土	PL47
Q46	磨石	4.5	3.5	3.8	25.5	安山岩	全面研磨痕	表土	PL47
Q47	石皿	(11.0)	(10.5)	(4.0)	(454.2)	安山岩	全面研磨加工, 中央部皿状のくぼみ, 裏面に円形のくぼみ	表土	PL47
Q48	石皿	(5.7)	(8.3)	(3.1)	(165.3)	安山岩	全面研磨加工, 中央部平坦, 外縁部凸状, 裏面に円形のくぼみ	表土	PL48
Q49	磨石	(5.2)	(3.0)	(1.4)	(32.9)	片麻岩	両面・両端部研磨	表土	PL48
Q50	砥石	(5.2)	(3.0)	(1.4)	(32.9)	凝灰岩	4面使用, 線条痕多数, 欠損	表土	
Q51	砥石	(3.3)	(4.0)	(1.5)	(30.6)	凝灰岩	4面使用, 線条痕多数, 上端部削り痕, 欠損	表土	
Q52	石盤	(9.6)	(4.3)	(0.3)	(24.6)	頁岩	全面研磨加工, 升目線刻, 断面隅切角, 欠損	表土	PL48

表2 住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向 長軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)	
								ピット							竈
								主柱穴	出入口	貯蔵穴	その他				
1	I 2g3	N-89°-E	長方形	3.63×3.08	16~33	平坦	-	-	1	-	5	竈1	自然	縄文土器片, 土師器片, 剥片	8世紀前 SB1, SK177→本跡
3	I 2e2	N-34°-E	[長方形]	(3.78)×(2.9)	13	平坦	-	-	-	1	5	-	自然	土師器片	古墳時代前期(4世紀後半)
4	I 2h5	N-21°-E	[長方形・方形]	(3.15)×(2.87)	7~17	平坦	-	-	-	1	3	-	-	土師器片	古墳時代後期(7世紀後葉)本跡→SK35
5	I 2g7	N-17°-W	[長方形・方形]	(4.45)×(2.63)	6~9	凹凸	-	-	-	-	-	竈1	-	-	9世紀代 SI8→本跡→SK63・76
6	I 2d5	N-20°-W	[長方形・方形]	[7.02]×[4.34]	15~19	平坦	-	1	2	1	1	-	自然	土師器片, 不明土製品	古墳時代前期(4世紀後半)本跡→SI7, SK27
7	I 2e6	N-13°-W	[長方形]	(3.82)×(2.9)	11	-	一部	-	-	-	1	竈1	-	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 焼成粘土塊	8世紀中葉~後葉 SI6・9→本跡→SE8, SK27・28・62
8	I 2f8	-	[長方形・方形]	(5.25)×(5.15)	6~8	平坦	-	-	-	-	9	-	自然	縄文土器片, 土師器片	古墳時代前期 SI45→本跡→SI5・47, SE1, SK63・175
9	I 2d6	N-48°-W	[長方形・方形]	6.43×(1.2)	10	平坦	全周	-	-	1	2	-	自然	縄文土器片, 土師器片	古墳時代前期(4世紀後半)本跡→SI6・7, SE8, SK41・62, SD2
10	I 2e0	N-3°-W	方形	4.8×4.65	24~32	平坦	全周	4	-	-	1	炉1	自然・人為	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 土師器片転用砥, 鉄滓, 剥片	古墳時代前期(4世紀後半) SI45, SK107→本跡→SK49・50
11	H 4i3	N-45°-W	[方形]	[4.8]×[4.77]	9	平坦	-	-	-	-	-	炉1	-	土師器片	古墳時代前期(4世紀後半)本跡→SB5, SE6, SD5
12	I 2c0	N-5°-E	長方形	3.91×3.52	2~6	平坦	一部	-	1	-	1	竈1	-	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 須恵器片, 磨石	9世紀前葉~中葉
13	I 2b0	-	[長方形・方形]	(6)×(4.44)	-	起伏	[全周]	-	-	-	2	-	自然	-	古墳時代前期~中期 本跡→SK54, SD3
14	I 3a3	N-8°-W	長方形	7.05×6.08	7~20	平坦	-	3	-	1	-	炉1	自然	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片	古墳時代前期(4世紀末)
15	I 3c3	N-74°-W	方形	3.78×(3.35)	4~7	凹凸	[全周]	2	1	-	1	-	-	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 須恵器片	9世紀中葉 本跡→SK75・77・78, SD3
16	I 3b5	N-1°-E	方形	4.65×4.45	24~28	平坦	全周	4	2	-	1	竈1	自然	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 須恵器片, 土師器片転用砥, 門金具, 剥片	8世紀中葉~後葉 本跡→SK90, SD3
17	H 3j5	N-5°-E	方形	3.4×3.24	4	平坦	[全周]	-	-	-	-	-	-	土師器片	古墳時代前期~中期
18	I 3c6	N-85°-W	長方形	3.85×2.72	14~23	平坦	-	4	-	-	2	-	自然	縄文土器片	縄文時代早期
19	H 3i7	N-77°-W	長方形	3.85×2.9	-	-	-	-	-	-	1	-	人為	-	古墳時代前期~中期 本跡→SI20, SB3・4

番号	位置	主軸方向 長軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)
								ピット				竈			
								主柱穴	出入口	貯蔵穴	その他				
20	H 3 i 8	N-23°-E	[長方形]	(4.76)×(3.79)	5	平坦	-	-	-	2	1	竈1	-	土師器片, 須恵器片	9世紀中～後葉 SI18・19→本跡→SB3
21	H 3 j 9	N-39°-W	方形	5.23×5.05	55～58	平坦	-	4	-	1	-	炉1	自然	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 土製支脚, 砥石	古墳時代前期(4世紀後半)本跡→SI20, SB3
22	H 3 h 7	N-13°-W	[方形]	[4.07]×[3.77]	2～8	平坦	-	-	-	-	-	炉1	自然	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片	古墳時代前期(4世紀後半)本跡→SB4, SK72-80, SD5
23	H 3 h 9	N-60°-W	方形	6.52×6.07	15～33	平坦	-	4	1	-	-	炉1	自然	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 剥片	古墳時代前期(4世紀後半)本跡→SK93・97・110・111, SD5
24	H 4 g 2	N-24°-E	方形	5.05×4.91	6～8	平坦	一部	4	1	-	3	竈1	-	土師器片, 須恵器片	9世紀中葉 本跡→SB5, SK94・SD5
25	H 4 e 3	N-22°-E	方形	5.81×5.74	9～12	平坦	-	4	1	-	-	竈1	-	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 須恵器片, 球状土錘, 砥石, 刀子, 不明鉄製品, 鉄滓	9世紀前葉 SI26→本跡→SK114・162
26	H 4 g 4	N-72°-W	[長方形]	5.51×(4.01)	5～12	平坦	-	4	1	-	-	炉1	自然	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片	古墳時代前期 本跡→SI25・27, SK169
27	H 4 h 4	N-5°-E	[方形]	(4.37)×(4.22)	-	-	-	4	1	-	-	竈1	-	弥生土器片, 土師器片	古墳時代後期(7世紀後葉)SI26→本跡→SD5・10
28	G 6 f 6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	竈1	-	-	8世紀代 本跡→SI51
29	H 4 f 7	N-15°-E N-99°-E	方形	5.22×[4.75]	10～12	平坦	-	4	1	1	-	竈2	-	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 鉄製紡錘車, 鉄滓, 剥片	9世紀中葉～後葉 本跡→SK170
32	H 4 d 9	N-41°-W	長方形	4.17×2.92	4～8	平坦	-	4	-	-	1	-	-	縄文土器片, 炭化材	縄文時代前期 本跡→SD12
33	H 4 b 0	N-15°-E	方形	4.56×4.33	20～30	平坦	一部	4	1	-	-	竈1	自然	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 須恵器片, 銅製器具, 鉄滓, 焼成粘土塊	8世紀前葉
34	H 5 c 1	N-5°-E	[長方形・方形]	(3.22)×(1.8)	16～20	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	縄文土器片, 土師器片	古墳時代前期 本跡→SI35, SD6・7
35	H 5 c 2	N-14°-E	方形	6.45×6.22	26～30	平坦	全周	4	2	-	-	竈1	自然	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 不明鉄製品, 砥石, 土製紡錘車	8世紀前葉～中葉 SI34→本跡→SI37, SD6
36	H 5 a 3	N-23°-W	方形	6.55×6.5	15～25	平坦	全周	4	1	2	2	炉1	自然	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 土師器片転用砥, 不明鉄製品, 石器	古墳時代中期(5世紀初頭)本跡→SD7
37	H 5 c 3	N-6°-E	方形	5.55×5.3	16～32	平坦	一部	4	1	-	1	竈1	自然	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 不明鉄製品, 不明銅製品, 土製勾玉, 輪羽口片	9世紀中葉 SI35→本跡
39	H 5 e 1	[N-14°-E]	[長方形]	(4.65)×(3.88)	15～30	平坦	一部	-	-	-	-	-	自然	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 刀子, 鉄製紡錘車	9世紀後葉 本跡→SD7
41	G 5 j 8	N-104°-E	長方形	3.3×2.75	24～30	平坦	-	-	-	-	-	竈1	自然	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 墨書土器	9世紀中葉～後葉 本跡→SK128, SD13・14
42	G 5 j 9	N-17°-W	方形	4.85×4.56	32～40	平坦	-	3	1	2	-	-	自然	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 球状土錘	古墳時代中期(5世紀前半)本跡→SB9・10・14, SK129
43	H 5 a 0	N-105°-E	長方形	4.42×3.73	35～45	平坦	一部	-	1	-	2	竈1	自然	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 須恵器片, 不明鉄製品, 鉄滓	9世紀後葉 SB9・10→本跡→SD13・14
44A	G 6 h 3	N-1°-E	[長方形]	[3.52]×[3.22]	-	-	-	-	-	-	2	竈1	-	-	9世紀後葉
44B	G 6 h 3	N-90°-E	長方形	4.4×3.54	26～32	平坦	一部	-	-	-	2	竈1	自然	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 不明鉄製品, 石製紡錘車	9世紀後葉
45	I 2 e 9	N-69°-E	[長方形・方形]	(5.1)×(5.04)	2～4	平坦	-	-	-	-	3	炉1	-	縄文土器片, 土師器片, 管状土錘, 石器	古墳時代前期 本跡→SI8・10, SK45～48・173・174
46	I 2 d 8	N-32°-E	[長方形]	[5]×[4]	-	-	-	4	-	-	-	炉1	-	-	古墳時代前期～中期 本跡→SK26
47	I 2 f 8	-	[長方形・方形]	[4]×(3.8)	18～28	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片	古墳時代前期 SI8と重複
48	G 6 i 3	N-1°-E	[長方形]	5×[4.77]	51～62	平坦	一部	4	-	-	-	竈1	人為	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 鉄滓	8世紀前葉 SK160→本跡
49	G 6 g 6	N-7°-W	方形	4.03×3.8	35～37	平坦	全周	-	1	-	-	竈1	自然	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 鉄滓, 磨石	8世紀後葉～9世紀前葉 本跡→SI50
50	G 6 h 7	N-43°-E	方形	3.55×3.5	16～20	平坦	全周	-	-	1	1	竈1	自然	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 鉄滓	10世紀前葉～中葉 SI49→本跡
51	G 6 f 6	N-6°-E	長方形	4.55×3.83	38～42	平坦	全周	-	1	-	2	竈1	自然	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 輪羽口片, 磨石	9世紀前葉 SI28, SE13→本跡
52	H 5 c 6	[N-3°-E]	[長方形・方形]	2.9×(1.33)	22～32	平坦	-	2	-	-	-	竈1	自然	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 磨石	10世紀前葉 SI53→本跡
53	H 5 c 7	-	[方形]	[4.66]×[4.52]	48～52	起伏	一部	3	-	-	-	-	自然	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	8世紀中葉～8世紀後葉 本跡→SI52
54	G 6 e 7	-	[長方形・方形]	(3.62)×(3.31)	10～26	平坦	全周	-	-	1	2	-	自然	土師器片, 須恵器片	10世紀前葉 本跡→SK164・171

表3 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数 (桁×梁)	規模 (m)	面積 (㎡)	構造	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴平面形	深さ (m)	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)
1	I 2 g 2	N-8°-W	2×1	5.03×4.05	20.37	側柱	2.4～2.63	3.95～4.4	隅丸方形, 楕円形	95～148	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片	古墳時代前期 SK177→本跡→SI1
2	I 3 a 6	N-51°-E	2×1	3.77×3.17	11.95	側柱	1.77～2	3.17	楕円形	22～53	縄文土器片, 土師器片	古墳時代前期
3	H 3 j 8	N-14°-E	3×2	6.42×4.4	28.25	側柱	2.1～2.25	2.1～2.3	楕円形	37～64	土師器片	9世紀後葉以降 SI20・21→本跡
4	H 3 i 7	N-12°-E	(2×2)	[3.65×3.65]	[13.32]	総柱	1.76	1.75～1.89	円形, 楕円形	27～43	-	8～9世紀代 SI19・20→本跡
5	H 4 h 3	N-19°-E	3×2	6.48×4.54	29.42	側柱	1.95～2.35	2.14～2.4	円形, 楕円形	53～85	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 剥片	9世紀後葉以降 SI11・24→本跡→SK106, SD5
8	H 5 a 6	N-11°-E	2×2	3.66×3.5	12.81	総柱	1.75～1.97	1.65～1.85	円形, 楕円形	25～74	縄文土器片, 土師器片	8世紀後葉～9世紀後葉
9	G 5 i 9	N-13°-E	3×2	7.15×5.39	38.54	側柱	2.27～2.47	2.57～2.82	円形, 楕円形	35～87	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	8世紀後葉～9世紀後葉 SI42→本跡→SI43, SK129
10	G 5 i 9	N-10°-E	3×2	7.48×5.6	41.89	側柱	2.38～2.65	1.92～2.82	円形, 楕円形	19～83	弥生土器片, 土師器片, 須恵器片, 石鏃, 剥片	8世紀後葉～9世紀中葉 SI42, SB14→本跡→SI43, SK135
11	G 5 j 6	N-100°-E	2×2	5.53×4.86	26.97	側柱	2.74～2.81	2.31～2.55	円形, 楕円形	47～74	土師器片, 須恵器片	8世紀後葉～9世紀中葉 本跡→SD13・14

番号	位置	桁行方向	柱間数 (桁×梁)	規模 (m)	面積 (㎡)	構造	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴平面形	深さ (m)	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)
12	G 6 g2	N-4°-E	2×2	5.3×4.58	24.27	側柱	2.64~2.66	2.28~2.3	円形, 楕円形, 不整楕円形	48~ 90	-	8~9世紀代
13	G 6 j1	N-97°-E	2×2	4.47×4.37	19.53	側柱	2.1~2.37	2.14~2.23	円形, 楕円形	20~ 47	縄文土器片, 土師器片, 須惠器片	8~9世紀代
14	G 5 j8	N-14°-E	(2×2)	5.75×5.55	31.91	側柱	-	2.55~3	楕円形	53~ 92	土師器片, 須惠器片	8世紀後葉以前 SI42→本跡 →SI41, SB10, SE12, SD13・14

表4 井戸跡一覧表

番号	旧遺構名 SK	位置	長軸 (径)方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)
					長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	52	I 2 f8	N-66°-W	楕円形	1.02×0.83	1.20	自然	平坦	直立	土師器片	近世以降 SI8→本跡
2	99	H 4 h1	-	円形	0.98×0.93	1.17	自然	平坦	直立	縄文土器片, 土師器片, 須惠器片, 不明石製品	近世以降 本跡→SK89
3	103	H 4 i1	-	円形	1.46×1.45	1.59	自然	皿状	直立	縄文土器片, 土師器片, 須惠器片, 陶器片	近世以降
4	106	H 4 i2	N-43°-E	楕円形	1.25×1.1	1.50	自然	平坦	直立	土師器片, 須惠器片, 不明石製品	近世以降
5	108	H 4 i1	N-23°-W	楕円形	1.18×1.1	1.72	人為	平坦	直立	土師器片, 須惠器片	近世以降 SE6→本跡
6	115	H 4 i2	N-81°-W	隅丸方形	2.82×2.73	1.58	自然	平坦	直立・緩斜	縄文土器片, 土師器片, 須惠器片, 転用砥, 焼成粘土塊	8世紀中葉~8世紀後葉 本跡→SE5
7	118	H 4 h1	-	円形	1×1	1.73	自然	皿状	直立	土師器片, 須惠器片, 不明石製品	近世以降
8	133	I 2 d6	N-31°-W	楕円形	1.09×0.94	1.67	自然	平坦	直立	縄文土器片, 土師器片, 須惠器片	近世以降 本跡→SK62
9	163	G 6 j1	-	円形	0.96×0.96	(1.01)	自然	-	直立	縄文土器片, 土師器片, 須惠器片, 鉄滓	近世以降 SK134→本跡
10	166	G 5 h0	-	円形	1×0.94	(1.04)	人為	-	直立	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 須惠器片	近世以降
11	181	H 5 d2	-	円形	1.54×1.45	(1.23)	人為	-	直立・外傾	土師器片, 須惠器片	近世以降 SK149→本跡
12	212	H 5 a9	-	円形	1.77×1.73	1.25	自然	皿状	外傾	縄文土器片, 土師器片, 須惠器片	近世以降 SK166→本跡
13	232	G 6 e7	N-60°-W	楕円形	2.2×1.94	2.15	自然	平坦	直立	土師器片, 須惠器片, 陶器片	近世以降 SI51→本跡

表5 土坑一覧表

番号	旧遺構名 SK	位置	長軸 (径)方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)	分類
					長径×短径(m)	深さ(cm)						
1	1	I 1 i9	N-37°-W	楕円形	1.85×1.4	44	自然	凹凸	外傾	-	中世以降	B
2	2	I 2 h1	N-53°-W	隅丸長方形	1.85×0.45	21	人為	平坦	外傾	土師器片	中世以降	C
3	3	I 2 g1	N-53°-W	隅丸長方形	2.55×0.6	28	人為	平坦	外傾	須惠器片	中世以降	C
4	4	I 2 g1	N-86°-E	楕円形	0.8×0.64	12	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	D
5	100	H 4 h1	N-74°-E	楕円形	1.25×1	16	人為	平坦	緩斜	土師器片, 須惠器片	中世以降 SE2→本跡	A
6	9	I 2 f2	N-52°-E	不整楕円形	1.38×0.64	8	自然	平坦	緩斜	-	中世以降	B
7	10	I 2 f3	N-40°-E	不整円形	0.67×0.63	30	人為	平坦	外傾	土師器片	中世以降	D
8	11	I 2 f3	N-50°-E	不整円形	0.7×0.62	6	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	D
9	12	I 2 e4	N-70°-W	不整楕円形	1.4×1.2	34	人為	凹凸	外傾	-	中世以降	B
10	13	I 2 g5	N-54°-E	楕円形	0.83×0.66	10	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	D
11	14	I 2 g5	N-37°-E	楕円形	0.9×0.8	14	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	D
12	15	I 2 g5	N-30°-E	楕円形	1.06×0.6	13	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	B
13	16	I 2 g6	N-16°-E	楕円形	1.08×0.61	22	人為	凹凸	外傾	縄文土器片	中世以降	B
14	17	I 2 g6	N-31°-W	楕円形	0.94×0.81	74	人為	直立	平坦	土師器片, 須惠器片	中世以降	D
15	18	I 2 f6	N-21°-E	円形	0.68×0.65	26	人為	平坦	外傾	-	中世以降	D
16	19	I 2 e8	N-25°-W	円形	1.29×1.24	9	人為	平坦	緩斜	土師器片	中世以降 SI46→本跡	A
17	20	I 2 d8	N-40°-W	不整楕円形	1.5×1.18	21	人為	凹凸	緩斜	土師器片	中世以降 SI46→本跡	B
18	21	I 1 h9	N-6°-E	楕円形	0.64×0.43	30	人為	凹凸	外傾	-	中世以降	D
19	22	I 2 h2	-	円形	0.45	19	自然	皿状	緩斜	-	中世以降 SB1→本跡	F
20	23	I 2 h4	N-27°-E	隅丸長方形	3.28×0.75	29	人為	平坦	外傾	土師器片, 須惠器片	中世以降	C
21	24	I 2 h4	N-30°-E	隅丸長方形	2×0.74	35	人為	凹凸	外傾	土師器片	中世以降	C
22	25	I 2 h4	N-22°-E	隅丸長方形	3.18×0.83	25	人為	平坦	緩斜	土師器片, 砥石	中世以降 SK109→本跡	C

番号	旧遺構名 SK	位置	長軸 (径)方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)	分類
					長径×短径(m)	深さ(cm)						
23	26	I 2 h4	N-36°-E	長方形	1.36×0.51	23	人為	平坦	緩斜	竹製品	中世以降	C
24	27	I 2 g4	N-29°-E	隅丸長方形	3.54×0.65	40	人為	平坦	外傾	弥生土器片, 土師器片	中世以降	C
25	28	I 2 h4	-	円形	0.45	56	人為	U字状	外傾	-	中世以降	E
26	29	I 2 d8	N-18°-W	楕円形	1.22×1.1	10	人為	平坦	緩斜	土師器片	中世以降 SI46→本跡	A
27	30	I 2 e5	N-14°-W	楕円形	1.64×1.26	19	人為	凹凸	外傾	土師器片, 須惠器片	中世以降 SI7→本跡	B
28	31	I 2 e6	N-62°-W	長方形	(2.78)×0.63	24	人為	平坦	直立	陶器片	中世以降 SK37・40と重複	C
29	32	I 2 f7	N-30°-E	長方形	2.65×0.64	10	人為	平坦	緩斜	-	中世以降	C
30	33	I 2 d9	N-41°-E	円形	1.28×1.12	7	人為	平坦	緩斜	土師器片	中世以降	A
31	34	I 2 c9	N-12°-W	不整形	1.12×1.06	10	人為	平坦	緩斜	-	中世以降	A
32	35	I 2 d0	N-24°-E	[楕円形]	0.89×[0.67]	7	自然	平坦	緩斜	-	中世以降	D
33	36	I 2 d8	N-87°-W	不整形楕円形	1.4×0.93	31	人為	凹凸	緩斜	縄文土器片, 土師器片	中世以降	B
34	37	I 2 g1	N-9°-E	楕円形	0.72×0.5	18	人為	平坦	緩斜	-	中世以降	D
35	39	I 2 h5	N-34°-W	長方形	2.12×0.72	32	人為	凹凸	緩斜	弥生土器片, 土師器片, 須惠器片	中世以降 SI4, SK43→本跡	C
36	41	I 2 g4	N-31°-E	楕円形	1.46×0.84	20	人為	平坦	外傾	弥生土器片, 土師器片	中世以降	B
37	43	I 2 f5	N-62°-W	長方形	3.74×0.64	29	人為	平坦	直立	-	中世以降 SK28・40と重複	C
38	45	I 2 f4	N-73°-W	不整形長方形	1.53×0.75	33	人為	平坦	直立	-	中世以降 SI2→本跡	B
39	46	I 2 g2	N-9°-W	長方形	2.73×0.37	6	人為	平坦	直立	-	中世以降 SB1→本跡	C
40	47	I 2 f5	N-62°-W	長方形	1.84×0.71	30	人為	平坦	直立	縄文土器片	中世以降 SK28・37と重複	C
41	48	I 2 d6	N-40°-W	長楕円形	2.89×0.68	22	人為	平坦	外傾	-	中世以降 SI9→本跡→SD2	C
42	49	I 2 d7	N-31°-E	長楕円形	(2.69)×0.82	17	人為	平坦	緩斜	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片	中世以降 本跡→SD2	C
43	50	I 2 g5	N-18°-E	不整形楕円形	[1.14]×1.4	8	自然	平坦	緩斜	-	中世以降 本跡→SK35	B
44	51	I 2 g4	N-19°-E	長方形	2.32×0.84	50	人為	平坦	直立	土師器片, 須惠器片, 磁器片, 焙 烙片	中世以降 SI2→本跡	C
45	53	I 2 e9	N-31°-W	円形	1.08×1.02	6	人為	平坦	外傾	土師器片, 須惠器片	中世以降 SI45→本跡	A
46	54	I 2 d9	N-54°-W	円形	1.23×1.07	4	人為	平坦	緩斜	須惠器片	中世以降 SI45→本跡	A
47	55	I 2 d9	N-76°-W	長方形	1.89×0.74	34	人為	凹凸	外傾	土師器片, 須惠器片	中世以降 SI45→本跡	C
48	56	I 2 e9	N-61°-W	円形	0.88×0.83	5	自然	平坦	外傾	縄文土器片, 土師器片	中世以降 SI45→本跡	D
49	57	I 2 e0	N-45°-E	円形	1×0.92	15	人為	平坦	緩斜	土師器片, 須惠器片, 瓦片	中世以降 SI10→本跡	A
50	58	I 3 e1	N-12°-W	楕円形	1.38×1.13	22	自然	凹凸	外傾	-	中世以降 SI10→本跡	B
51	59	I 3 e1	N-44°-E	楕円形	0.58×0.47	31	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	D
52	60	I 3 b1	N-46°-E	円形	0.36×0.24	11	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	F
53	61	I 3 b1	-	円形	0.45	20	自然	皿状	外傾	-	中世以降	F
54	62	I 2 b0	N-2°-W	[楕円形]	0.8×(0.55)	53	人為	U字状	外傾	-	中世以降 SI13→本跡	D
55	63	I 3 c2	N-45°-W	不整形楕円形	0.56×0.42	15	自然	平坦	外傾	-	中世以降	G
56	64	I 3 c2	N-35°-W	不整形	0.4×0.38	25	自然	皿状	外傾	-	中世以降	F
57	65	I 3 c3	-	円形	0.3	27	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	F
58	66	I 3 d3	N-11°-W	楕円形	0.34×0.29	5	自然	平坦	緩斜	-	中世以降	F
59	67	I 3 d2	N-55°-E	不整形楕円形	0.8×0.55	12	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	G
60	68	I 3 a4	N-37°-W	楕円形	0.44×0.39	20	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	F
61	69	H 3 h8	N-15°-E	楕円形	0.7×0.45	50	自然	皿状	直立	板碑片	中世以降	D
62	71	I 2 d6	N-20°-E	長方形	(4.23)×1.05	19	人為	平坦	外傾	土師器片, 須惠器片	中世以降 SI7・9, SE8→本跡	C
63	72	I 2 f7	N-74°-W	長方形	3.11×0.89	26	人為	平坦	外傾	-	中世以降 SI5→本跡→SD2	C
64	73	I 3 b3	N-30°-W	楕円形	0.85×0.77	14	自然	凹凸	緩斜	-	中世以降	D
65	74	I 3 a4	N-66°-E	不整形楕円形	1.12×0.86	17	人為	皿状	緩斜	-	中世以降	B
66	75	H 3 j4	N-3°-E	楕円形	0.45×0.3	17	自然	平坦	外傾	-	中世以降	F
67	76	I 3 a5	N-9°-W	不定形	1.13×0.71	42	人為	凹凸	外傾	土師器片, 須惠器片	中世以降	G
68	77	I 3 a6	N-58°-E	楕円形	0.5×0.37	43	人為	U字状	直立	-	中世以降	E

番号	旧遺構名 SK	位置	長軸 (径)方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)	分類
					長径×短径(m)	深さ(cm)						
69	78	I 3 b7	-	円形	0.36	17	自然	皿状	外傾	-	中世以降	F
70	79	I 3 a7	N-50°-E	楕円形	0.65×0.57	62	人為	平坦	直立	土師器片	中世以降	E
71	80	I 3 a9	N-60°-W	円形	0.55×0.52	33	自然	皿状	外傾	-	中世以降	D
72	81	H 3 i7	N-33°-E	楕円形	0.38×0.31	16	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	F
73	82	H 3 i5	N-56°-W	[楕円形]	1.5×(1.16)	30	人為	平坦	緩斜	-	中世以降	B
74	83	H 3 i6	N-42°-W	[楕円形]	(0.74)×0.62	32	人為	皿状	緩斜	-	中世以降	D
75	84	I 3 c3	N-59°-E	不定形	0.79×0.74	8	自然	凹凸	緩斜	-	中世以降	G
76	85	I 2 g7	N-53°-W	[長方形]	(1.27)×0.54	29	自然	平坦	緩斜	土師器片, 須惠器片	中世以降 SI5→本跡	C
77	86	I 3 c3	N-2°-W	不整楕円形	0.7×0.42	9	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	G
78	87	I 3 c3	N-15°-W	不定形	1.13×0.55	16	自然	平坦	緩斜	土師器片, 須惠器片	中世以降	G
79	88	H 3 j5	N-13°-E	不整楕円形	1.5×1.18	27	人為	皿状	緩斜	土師器片, 須惠器片	中世以降 SI17→本跡	B
80	89	H 3 j6	N-43°-W	不定形	1.05×0.83	35	自然	凹凸	外傾	土師器片	中世以降	G
81	90	H 3 i5	N-66°-E	[楕円形]	0.65×(0.24)	40	人為	平坦	外傾	土師器片	中世以降	E
82	92	I 2 b0	-	円形	0.73	15	自然	凹凸	緩斜	土師器片	中世以降	D
83	93	I 3 e2	N-21°-W	円形	0.46×0.43	22	自然	平坦	外傾	土師器片	中世以降	F
84	94	H 3 h9	N-49°-E	円形	0.56×0.54	15	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	D
85	95	H 3 h9	N-45°-W	円形	0.42×0.41	10	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	F
86	96	H 3 h0	N-30°-E	円形	1.07×1	4	人為	平坦	緩斜	-	中世以降	A
87	97	H 3 j9	N-82°-W	楕円形	0.62×0.44	35	自然	皿状	外傾	-	中世以降	D
88	98	H 3 j8	-	円形	0.42	25	自然	平坦	外傾	土師器片	中世以降	F
89	182	G 6 e4	-	円形	1.04	13	自然	平坦	外傾	縄文土器片, 土師器片, 須惠器片	中世以降	A
90	101	H 4 e9	N-74°-W	楕円形	(1.4)×1.03	13	自然	平坦	緩斜	須惠器片, 焙烙片	中世以降 SK117→本跡→SK118	B
91	102	I 3 a0	-	円形	0.55	34	自然	皿状	外傾	-	中世以降	D
92	104	H 4 i1	N-20°-E	楕円形	0.77×0.6	6	自然	平坦	緩斜	縄文土器片, 土師器片, 須惠器片	中世以降	D
93	105	H 3 h9	N-31°-E	長方形	3.2×0.5	17	人為	平坦	外傾	土師器片, 須惠器片	中世以降 SI23→本跡	C
94	107	H 4 g2	N-26°-E	長方形	3.06×0.93	15	人為	平坦	緩斜	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 須惠器片	中世以降 SI24→本跡	C
95	109	H 4 h1	-	円形	0.68	36	人為	皿状	緩斜	縄文土器片, 土師器片	中世以降	E
96	111	H 3 h8	N-47°-W	楕円形	0.62×0.42	13	人為	皿状	緩斜	須惠器片	中世以降	D
97	113	H 3 g9	N-38°-E	楕円形	1.36×1.1	20	人為	皿状	緩斜	土師器片, 須惠器片	中世以降 SI23→本跡	B
98	114	H 3 j0	N-48°-E	円形	0.5×0.47	26	自然	U字状	外傾	-	中世以降	F
99	116	I 3 d3	N-9°-E	楕円形	1.14×0.68	20	人為	皿状	緩斜	-	中世以降	B
100	117	I 3 d3	-	円形	0.25	10	自然	皿状	緩斜	-	中世以降	F
101	119	H 4 g1	N-39°-W	不整楕円形	0.76×0.43	60	人為	平坦	外傾	-	中世以降	E
102	121	H 3 g8	N-65°-E	[楕円形]	(0.5)×0.36	65	人為	U字状	外傾	須惠器片	中世以降	E
103	122	H 3 g8	N-20°-E	[長方形]	(1.2)×0.65	18	人為	平坦	緩斜	土師器片	中世以降	C
104	123	H 4 h2	N-90°-E	[円形]	0.37×(0.34)	11	自然	平坦	緩斜	土師器片	中世以降 本跡→SD5	F
105	124	H 4 h1	N-3°-W	[楕円形]	[0.43]×0.38	6	自然	平坦	緩斜	-	中世以降 本跡→SD5	F
106	132	H 4 g3	N-30°-E	楕円形	1.13×0.98	10	自然	平坦	緩斜	弥生土器片, 土師器片, 須惠器片	中世以降 SB5→本跡	B
107	134	I 2 e0	N-7°-W	[円形]	0.35×(0.21)	15	自然	皿状	外傾	土師器片	中世以降	F
108	135	H 3 j8	N-60°-W	[楕円形]	0.45×[0.32]	26	自然	平坦	外傾	-	中世以降 SI21→本跡	F
109	136	I 2 h4	N-34°-W	不定形	2.12×2.1	40	自然	皿状	外傾	-	中世以降 本跡→SK25	G
110	137	H 3 h9	N-75°-E	楕円形	0.58×0.5	50	人為	U字状	外傾	縄文土器片	中世以降	E
111	138	H 3 h9	N-14°-W	楕円形	0.5×0.44	70	人為	皿状	直立	土師器片, 須惠器片, 剥片	中世以降	E
112	139	H 3 j0	-	円形	0.3	20	自然	皿状	外傾	-	中世以降	F
113	140	H 3 h8	N-87°-W	楕円形	0.58×0.45	73	人為	U字状	外傾	-	中世以降	E
114	141	H 4 e4	N-45°-W	円形	0.84×0.78	28	人為	平坦	直立	土師器片, 須惠器片	中世以降 SI25→本跡	D
115	142	H 4 f6	N-30°-W	[楕円形]	[0.68×0.42]	9	自然	皿状	緩斜	-	中世以降 本跡→SD11	D

番号	旧遺構名 SK	位置	長軸 (径)方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)	分類
					長径×短径(m)	深さ(cm)						
116	143	H 4 e9	N-2°-W	円形	1.05×1.02	11	人為	凹凸	緩斜	-	中世以降	A
117	144	H 4 e0	N-55°-E	楕円形	4.1×0.95	24	人為	平坦	緩斜	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	中世以降 本跡→SK90・118	A
118	145	H 4 e0	N-16°-W	[楕円形]	0.57×(0.37)	18	自然	平坦	緩斜	-	中世以降 SK117→SK90→本跡	D
119	146	H 4 f9	N-45°-E	楕円形	0.73×0.68	58	人為	平坦	外傾	-	中世以降	E
120	147	H 4 f6	-	円形	0.69	37	人為	平坦	外傾	土師器片	中世以降	D
121	148	H 4 f6	N-24°-W	楕円形	0.71×0.58	18	自然	皿状	緩斜	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	中世以降	D
122	149	H 4 f6	N-24°-W	楕円形	0.83×0.77	42	人為	皿状	外傾	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	中世以降	D
123	150	H 4 g6	-	円形	0.9	37	人為	皿状	外傾	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	中世以降	D
124	151	H 4 g6	N-18°-E	楕円形	0.48×0.43	24	自然	皿状	外傾	土師器片	中世以降	D
125	152	H 4 e0	N-14°-E	円形	1.7×1.61	40	人為	平坦	外傾	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	中世以降 本跡→SD6	A
126	153	H 5 a1	N-89°-W	円形	1.36×1.21	28	人為	凹凸	緩斜	土師器片, 須恵器片	中世以降	A
127	154	H 4 d0	N-18°-W	円形	1.08×0.98	27	人為	皿状	緩斜	土師器片, 須恵器片	中世以降	A
128	155	G 5 j7	N-40°-W	不整形	0.98×0.95	15	自然	皿状	緩斜	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	中世以降 SI41→本跡	D
129	156	G 5 i8	N-26°-W	楕円形	0.86×0.76	19	人為	凹凸	外傾	土師器片, 須恵器片	中世以降 SI42→SB9→本跡	D
130	157	H 5 b2	N-57°-W	楕円形	2.13×1.43	41	人為	皿状	緩斜	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	中世以降 本跡→SD6・7	B
131	158	G 5 i9	N-46°-E	円形	1.07×1.02	18	人為	平坦	外傾	土師器片, 須恵器片	中世以降	A
132	160	G 6 i1	-	円形	0.87	5	人為	平坦	緩斜	縄文土器片, 土師器片	中世以降	D
133	161	G 5 i9	N-39°-W	円形	0.98×0.93	27	人為	皿状	緩斜	土師器片, 刀子片	中世以降	D
134	164	G 6 j1	N-2°-E	[楕円形]	0.55×(0.3)	15	人為	平坦	緩斜	-	中世以降 本跡→SE9	D
135	165	G 5 h0	N-31°-W	楕円形	1.1×0.98	6	人為	平坦	緩斜	土師器片	中世以降 SB10→本跡	A
136	169	H 4 e1	N-16°-E	[長方形]	(0.83×0.76)	10	人為	平坦	緩斜	-	中世以降	C
137	170	H 3 h7	N-13°-W	円形	0.51	15	自然	平坦	緩斜	土師器片, 須恵器片	中世以降 SI22→本跡	F
138	171	G 6 f3	-	円形	0.99	12	人為	凹凸	緩斜	縄文土器片	中世以降	D
139	172	G 6 f3	N-9°-E	円形	1.08×0.99	11	人為	平坦	緩斜	土師器片	中世以降	A
140	174	G 6 f3	N-60°-E	楕円形	1.43×1.21	18	人為	平坦	外傾	-	中世以降	B
141	175	G 6 f4	-	円形	1.17	23	人為	平坦	外傾	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	中世以降	A
142	177	G 6 g3	-	円形	0.78	27	自然	皿状	緩斜	土師器片, 球状土錘	中世以降	D
143	179	G 6 h1	-	円形	0.81	19	自然	平坦	外傾	土師器片, 須恵器片	中世以降	D
144	5	I 2 g1	N-71°-E	不整形	0.91×0.88	27	自然	皿状	緩斜	土師器片, 須恵器片, 焙烙片, 竹製品	中世以降	D
145	183	G 6 h4	-	円形	1	40	自然	皿状	緩斜	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	中世以降	D
146	184	G 6 h5	N-43°-W	円形	0.9×0.88	57	人為	平坦	外傾	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 須恵器片, 軽石	中世以降 第1号方形周溝→本跡	D
147	185	G 6 g4	N-37°-W	楕円形	0.69×0.62	61	人為	平坦	外傾	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	中世以降	E
148	186	G 6 f4	N-16°-W	円形	0.93×0.86	62	自然	平坦	直立	-	中世以降 SD1→本跡	D
149	187	H 5 d2	N-78°-W	[楕円形]	1.17×(1.08)	50	人為	平坦	緩斜	-	中世以降 本跡→SE11	B
150	188	G 6 f5	N-62°-E	円形	0.53×0.5	6	人為	平坦	緩斜	-	中世以降	D
151	189	G 6 g5	-	円形	0.51	12	人為	平坦	緩斜	-	中世以降	D
152	190	G 6 e5	N-17°-E	楕円形	1.34×[1.15]	17	人為	平坦	緩斜	土師器片, 鉄滓	中世以降 本跡→SK153	B
153	191	G 6 e5	N-67°-E	円形	1.1×1.09	22	人為	凹凸	外傾	縄文土器片, 土師器片, 軽石	中世以降 SK152→本跡	A
154	192	G 6 f5	N-45°-E	円形	0.95×0.85	23	自然	平坦	緩斜	-	中世以降	D
155	193	G 6 e5	N-73°-E	楕円形	1.2×0.9	26	自然	平坦	外傾	土師器片, 須恵器片	中世以降	B
156	194	G 6 g5	-	円形	0.97	55	人為	平坦	外傾	-	中世以降	D
157	195	G 6 g4	N-85°-W	楕円形	0.85×0.7	30	人為	凹凸	外傾	-	中世以降	D
158	196	G 6 d6	-	[楕円形]	(0.33)×0.25	10	自然	平坦	緩斜	-	中世以降 本跡→SK159	F
159	197	G 6 d6	N-35°-E	円形	0.65	43	自然	U字状	緩斜	土師器片	中世以降 SK158→本跡	D
160	199	G 6 j3	不明	[円形]	0.6×(0.37)	50	自然	平坦	外傾	土師器片	中世以降 SI48→本跡	D
161	202	H 5 a5	N-27°-W	円形	0.53×0.5	48	人為	皿状	外傾	-	中世以降	E

番号	旧遺構名 SK	位置	長軸 (径)方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)	分類
					長径×短径(m)	深さ(cm)						
162	203	H 4 f4	N-14°-W	円形	0.85×0.82	66	人為	平坦	直立	-	中世以降 SI25→本跡	D
163	210	G 5 j0	N-55°-E	楕円形	0.6×0.48	77	人為	皿状	直立	土師器片	中世以降	E
164	219	G 6 e7	N-30°-W	不整形楕円形	0.78×0.76	25	人為	平坦	外傾	土師器片	中世以降 SI54→本跡	D
165	220	G 6 j2	N-10°-W	円形	0.7×0.65	12	自然	平坦	外傾	土師器片, 須恵器片	中世以降	D
166	227	H 5 a9	N-12°-W	[楕円形]	(0.56)×0.31	32	自然	平坦	外傾	縄文土器片, 土師器片	中世以降 本跡→SE12	D
167	228	G 6 g5	N-7°-W	円形	0.97×0.87	15	自然	皿状	緩斜	縄文土器片, 土師器片, 軽石	中世以降	D
168	229	G 6 g6	-	円形	0.8	17	自然	皿状	緩斜	土師器片	中世以降	D
169	230	H 4 g4	N-76°-W	楕円形	0.78×0.58	22	人為	皿状	外傾	弥生土器片, 土師器片	中世以降 SI27→本跡	D
170	231	H 4 f7	N-43°-W	円形	0.77×0.74	45	人為	皿状	緩斜	土師器片, 須恵器片	中世以降 SI29→本跡	D
171	234	G 6 e7	N-32°-W	[楕円形]	1.4×(1)	52	人為	平坦	緩斜	縄文土器片, 土師器片	中世以降 SI54→本跡	B
172	235	I 2 d0	-	円形	0.35	21	自然	平坦	外傾	-	中世以降	F
173	236	I 2 e9	N-1°-W	楕円形	0.42×0.35	21	自然	皿状	緩斜	-	中世以降 SI45→本跡	F
174	237	I 2 e9	-	円形	0.29	10	自然	皿状	外傾	-	中世以降 SI45→本跡	F
175	238	I 2 f9	-	円形	0.19	17	自然	U字状	外傾	-	中世以降 SI8→本跡	F
176	38	I 2 f2	N-60°-E	円形	0.82×0.76	6~10	自然	皿状	緩斜	石皿	縄文時代後期	-
177	40	I 2 g3	N-68°-E	[楕円形]	(1.72)×1.4	22~25	自然	平坦	緩斜	縄文土器片	縄文時代後期後葉 本跡→SI1	-
178	162	G 5 i0	N-5°-W	長方形	2.11×1.53	60~62	人為	凹凸	直立	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片	平安時代	-
179	167	H 5 a5	N-82°-E	長方形	2.78×1.83	65~68	人為	凹凸	直立	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 須恵器片, 土製支脚片, 剥片	平安時代	-

表6 溝一覧表

番号	位置	長軸 (径)方向	規模				断面	覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)
			長さ(m)	上幅(m)	下幅(cm)	深さ(cm)						
1	G 6 e4~G 6 i4	N-0°	(17.88)	102~174	50~70	70~76	逆台形	自然	平坦	緩斜	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	近世以降 SK89→本跡→SK148
2	I 2 d7~I 2 g6	N-1°-W	(16.88)	42~68	14~30	40~56	逆台形	自然	平坦	緩斜	-	近世以降 SI9, SK41・42→本跡
3	I 3 a1~I 3 c5	N-65°-W	(17.4)	60~137	8~24	26~34	皿状	自然	平坦	緩斜	土師質土器片, 播り鉢	近世以降 SI15・16, SD4→本跡
4	I 3 b2~I 3 e1	N-22°-E	(13.13)	60~124	39~110	12~24	皿状	自然	平坦	緩斜	-	近世以降 本跡→SD3
5	H 3 h7~H 4 h6	N-89°-W	(34.24)	47~103	18~43	18~29	皿状	自然	平坦	緩斜	砥石	近世以降 SI22~25・27, SD10・15, SE7, SK105→本跡
6	G 5 j3~H 4 e0	N-20°-E	(15.8)	18~50	12~20	35~50	U字状	自然	平坦	緩斜	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	近世以降 SI34, SK130→本跡
7	H 5 a2~H 5 e1	N-20°-E	(9.14)	58~80	34~55	35~50	逆台形	自然	平坦	緩斜	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 須恵器片	近世以降 SI34~36, SK130→本跡
8	G 6 g5~G 6 g6	N-80°-W	(5.25)	60~80	20~30	30~34	皿状	自然	平坦	緩斜	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片	9世紀前葉~中葉 本跡→第1号方形周溝, SK156
9	H 4 e5~H 4 d8	N-67°-E	(14.4)	16~74	10~30	18~20	皿状	自然	平坦	緩斜	土師器片, 須恵器片	近世以降 SD11・12→本跡→SD10
10	H 4 d5~H 4 h5	N-4°-E	(14.1)	34~50	10~20	20~22	皿状	自然	平坦	緩斜	-	近世以降 SI27, SD9→本跡→SD5
11	H 4 e6~H 4 h5	N-3°-E	(11.7)	10~30	8~10	15~25	U字状	自然	平坦	緩斜	-	近世以降 本跡→SD11
12	H 4 b9~H 4 f9	N-1°-E	(17.95)	60~80	30~45	15~18	逆台形	自然	平坦	緩斜	縄文土器片, 土師器片, 須恵器片, 土師質土器片, 磁器碗, 転用磁具, 剥片	近世以降 SI32→本跡→SD9
13	G 5 i4~H 6 a1	N-75°-W	(25.64)	56~92	36~60	24~30	逆台形	自然	平坦	緩斜	-	近世以降 SI41・43, SB11・14→本跡
14	G 5 i5~H 6 a1	N-75°-W	(23.52)	52~120	60~112	14~16	皿状	自然	平坦	緩斜	-	近世以降 SI41・43, SB11・14→本跡
15	H 4 h5	N-15°-E	(1.14)	56~66	38~42	8~10	皿状	自然	平坦	緩斜	-	近世以降 本跡→SD5

第4節 まとめ

今回の調査では、旧石器時代～江戸時代までの遺構と遺物を確認している。旧石器時代については細石刃核1点を表面採集している。縄文時代の遺構は竪穴住居跡2軒、炉穴1基、土坑2基、石器集中区1か所、古墳時代の遺構は竪穴住居跡22軒、掘立柱建物跡2棟、奈良・平安時代の遺構は竪穴住居跡25軒、掘立柱建物跡10棟、井戸跡1基、土坑2基、方形周溝1基、溝1条である。中世以降の遺構は方形竪穴建物跡1基、井戸跡12基、土坑175基、溝14条が確認されている。ここでは各時代の遺構と遺物についての概要を述べ、まとめとする。

1 旧石器時代

今回の調査で出土した旧石器時代の遺物は、黒曜石製の細石刃核1点である。調査区中央部の表土中から出土している。共伴する石器群を確認するため、出土地点周辺の精査を行ったが、何ら発見することはできなかった。また、遺跡から出土した遺物の中にも、旧石器時代と考えられる石器や剥片などは一切存在していないため、この細石刃核は単独で遺存していた可能性よりも、別地点から混入した可能性が高い。基本土層の観察の結果、調査区内のローム層は始良TN火山灰(AT)を含む層まで削平されていることが判明していることから、出土した細石刃核に伴う石器群の存在は、極めて希薄と考えられる。

総和町内の細石刃石器群を出土している遺跡としては、行屋西遺跡、権現久保遺跡が知られている。行屋西遺跡からは、細石刃核2点、細石刃32点が表面採集されている¹⁾。2点の細石刃核は頁岩とチャート製で、細石刃はチャート、ホルンフェルス、珪質頁岩、凝灰岩製である。権現久保遺跡からは、細石刃核2点、細石刃1点が表面採集されている。いずれも黒曜石製である²⁾。また、県西地域に視野を広げた場合、確認されている細石刃石器群は、古河市の風張遺跡で表面採集された黒曜石製細石刃³⁾、鴻ノ巣C遺跡で表面採集された黒曜石製細石刃核⁴⁾などがある。これらの細石刃核はすべて野岳・休場型細石刃核であり、当遺跡も例外ではない。この時期の石器群の多くが表面採集の資料を中心としているため、県西地域におけるローム層の層序区分を検討し、示標となる火山灰層の特定と対比などを進めていく一方で、良好な石器群が層位的に安定した状態で発見されることが、何よりも待たれるところである。

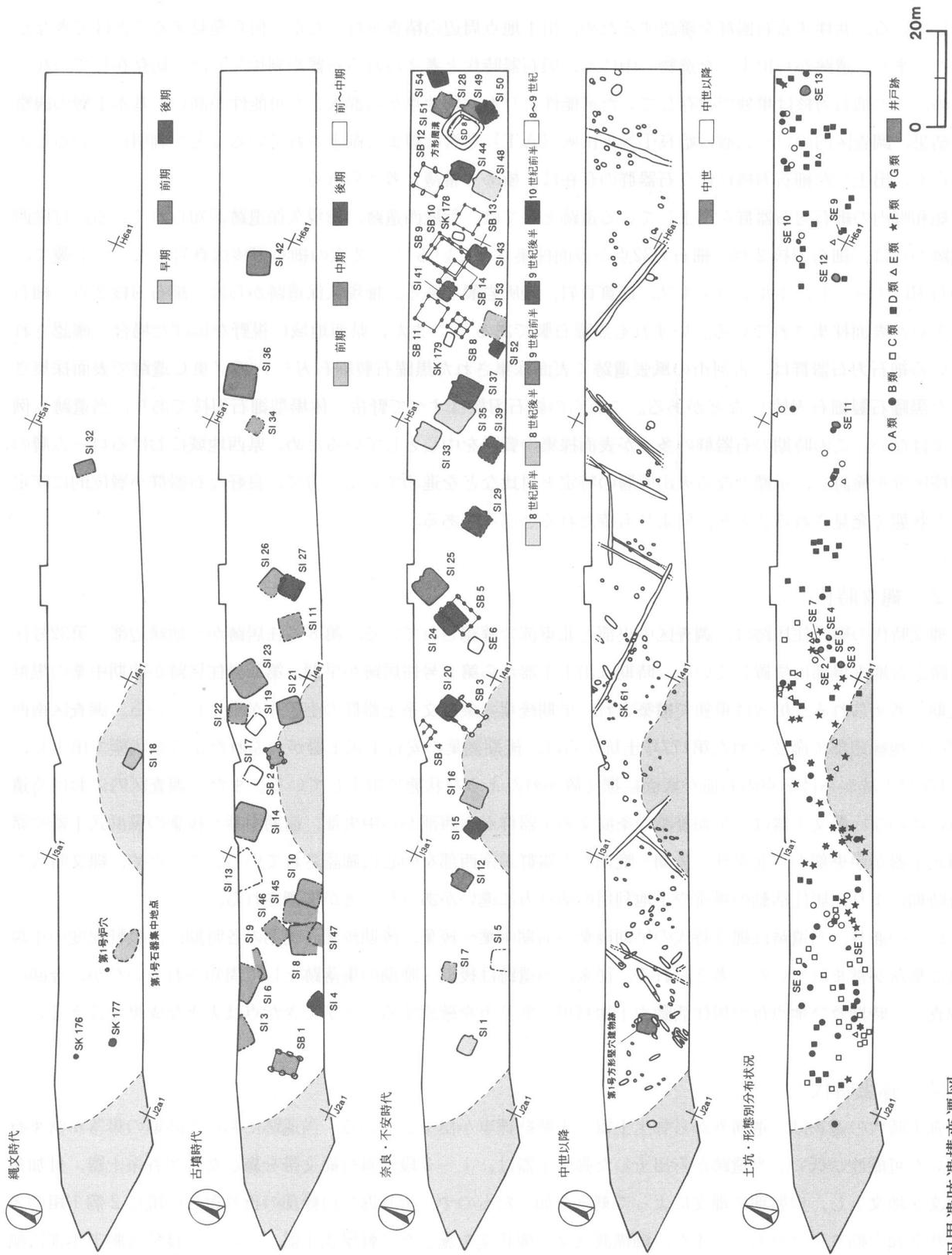
2 縄文時代

縄文時代の竪穴住居跡は、調査区中央部と北東部で確認されている。第8号住居跡が台地縁辺部、第32号住居跡が台地平坦部に位置している。時期は出土土器から第8号住居跡が早期、第32号住居跡が前期中葉の黒浜式期と考えられる。炉穴は単独で構築され、早期後葉の条痕文系土器群の小破片が出土している。調査区南西部の台地縁辺部で確認された第177号土坑からは、後期後葉の安行I式土器がつぶれたような状態で出土し、第176号土坑からは2点の石皿が底面に据え置かれたような状態で出土している。また、調査区内における遺構に伴わない縄文土器は、早期後葉の条痕文系土器群が南西部から中央部、前期中葉～後葉の黒浜式土器や諸磯式土器が中央部から北東部、後期～晩期の土器群が南西部を中心に確認されている。このため、縄文時代の各時期により、居住活動の場所や土地利用のあり方に違いがあったことが推測される。

以上の通り、当遺跡は縄文時代の早期後葉、前期中葉～後葉、後期後葉～晩期の各時期に、数軒程度の小規模な集落が営まれていたと考えられる。従来、当遺跡は後期～晩期の集落跡として周知されていたが、今回の調査で、時期及び地点毎の居住活動や土地利用のあり方を確認することができた点は大きな成果と言える。

3 弥生時代

弥生時代の遺物は、遺構外から弥生土器と土製紡錘車が出土している。当遺跡において該期の集落が営まれていた可能性は低い。当遺跡から出土した弥生土器は、1～3段の斜行縄文帯を施した吉ヶ谷系土器、付加条縄文を地文とし、口唇部に縄文によって刻みを加えたものや、折り返し口縁部の折り返しの境に2個1組のイボ状突起を貼り付けたもの、また、櫛描波状文や簾状文を施した二軒屋式土器、さらに口縁部と胴上半部に無節縄文による縄文帯を施した南関東地域に分布する土器などである。北関東地域に分布する土器群を中心に、周辺地域の土器群が客体的に含まれる様相が確認できた。なお、県西地域における該期の遺跡は極めて少なく、その集落や土器の様相について不明な点が多く、資料の蓄積を待ちたい。



第153図 羽黒遺跡遺構変遷図

4 古墳時代

当遺跡は古墳時代前期（4世紀後半）になって、規模の大きな集落が営まれたと考えられる。該期の遺跡は総和町全体で見た場合、爆発的に増加している。竪穴住居跡を時期別に見ると、前期が14軒、中期が2軒、後期が2軒、不明が4軒（前期～中期）である。前期を通じて集落は継続的に営まれているが、中期前半（5世紀前半）には終焉を迎えるようである。その後は断続的に小規模な集落が営まれている。以下では時期毎の竪穴住居跡の形態的な検討と、その主な出土遺物について若干の検討を加えたい。

(1) 竪穴住居跡について

前期及び前期の可能性が高い竪穴住居跡は18軒で、調査区中央部から南西部の台地縁辺部から平坦部にかけて分布している。平面形は、長方形よりも方形のものがやや多いが、調査区域外にかかっていたり、削平されて遺存状況が不良なものが多いため、平面形の時期的な傾向を指摘することは困難である。長軸が7mを超えるような大形の住居跡は、第14号住居跡だけである。その他は長軸が4～7mの中形ないし、長軸が4m未満の小形の住居跡である。今回の調査区は幅の狭い限られた範囲であるため、規模から見た竪穴住居跡の分布傾向や、集落構造などについての検討は不可能に近い。支柱穴や内部施設からは、支柱穴、炉、貯蔵穴を有するもの（第6・14・21号住居跡）、支柱穴、炉を有するもの（第10・23・26・46号住居跡）、支柱穴を有せず、炉、貯蔵穴などを有するもの（第3・9・11・22号住居跡）、支柱穴を有せず、ピットだけを有するもの（第8・13・19・34・45・47号住居跡）、その他（第17号住居跡）に区別することができる。炉はすべて床面を掘りくぼめた地床炉で、基本的に1か所である。炉の位置は、中央部よりやや北・北東・北西寄りに偏っている。貯蔵穴の位置は、大半は南・南東コーナー部に設けられている。平面形は楕円形ないし隅丸長方形を基本としている。深さや覆土の様相はまちまちである。確認した壁溝はすべて全周している。

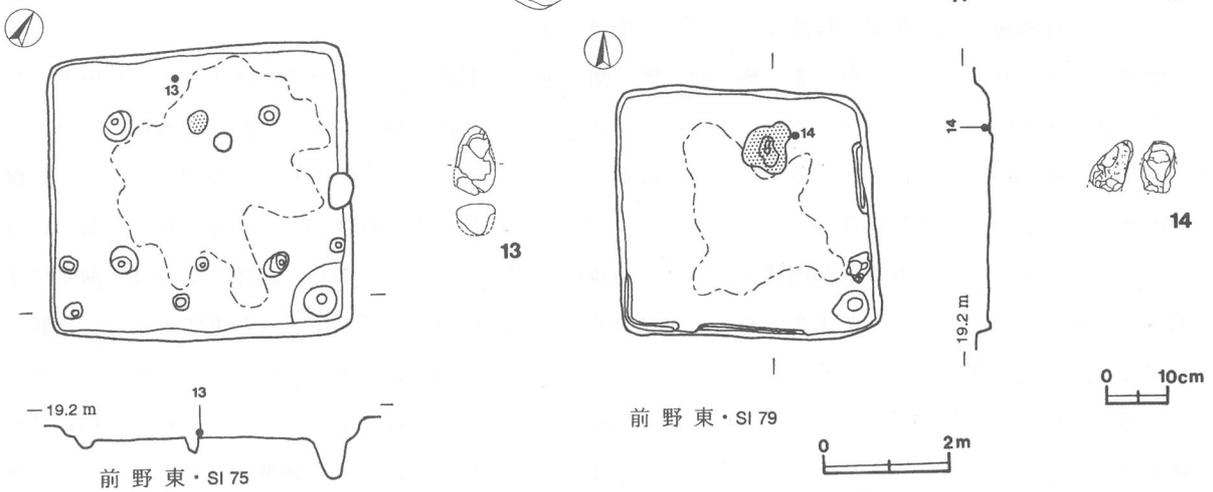
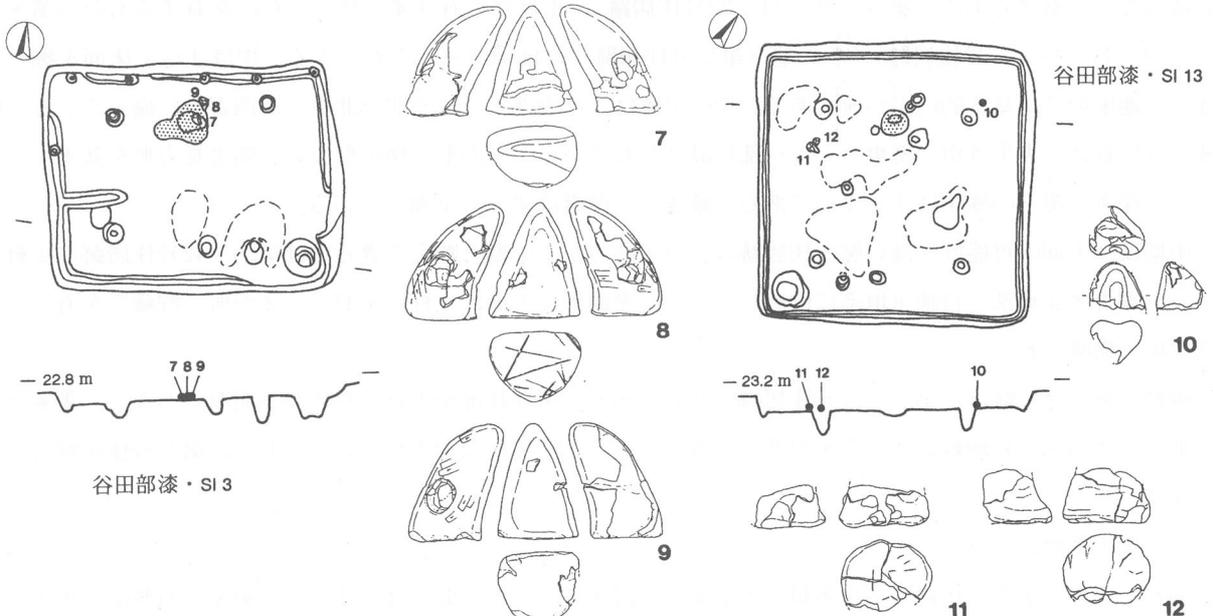
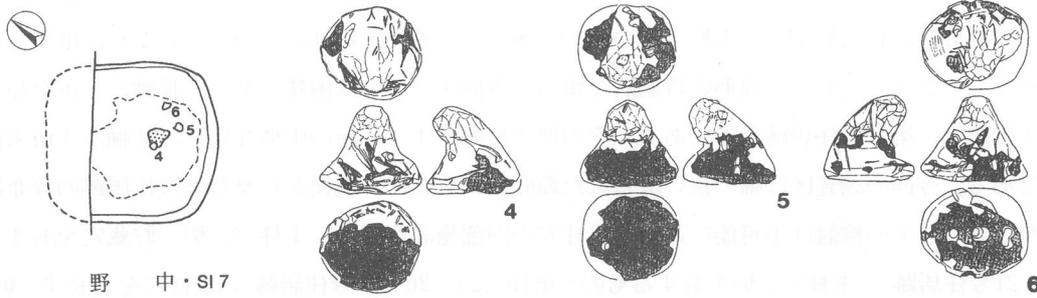
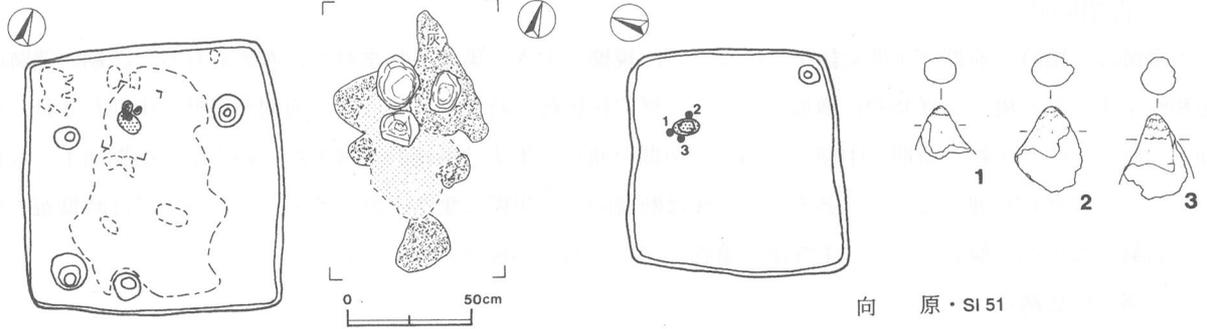
中期及び中期の可能性が高い竪穴住居跡は6軒であるが、中期と断定できるのは第36・42号住居跡の2軒である。調査区北東部の台地平坦部に位置している。平面形は方形、支柱穴を有し、2か所の貯蔵穴を有している。炉は構築されていない。

後期の竪穴住居跡は、第4・27号住居跡の2軒である。遺存状況が不良のため、不明な点が多い。調査区中央部から南西部の台地縁辺部から平坦部に位置している。平面形は長方形ないし方形で、第27号住居跡では竈が確認されている。

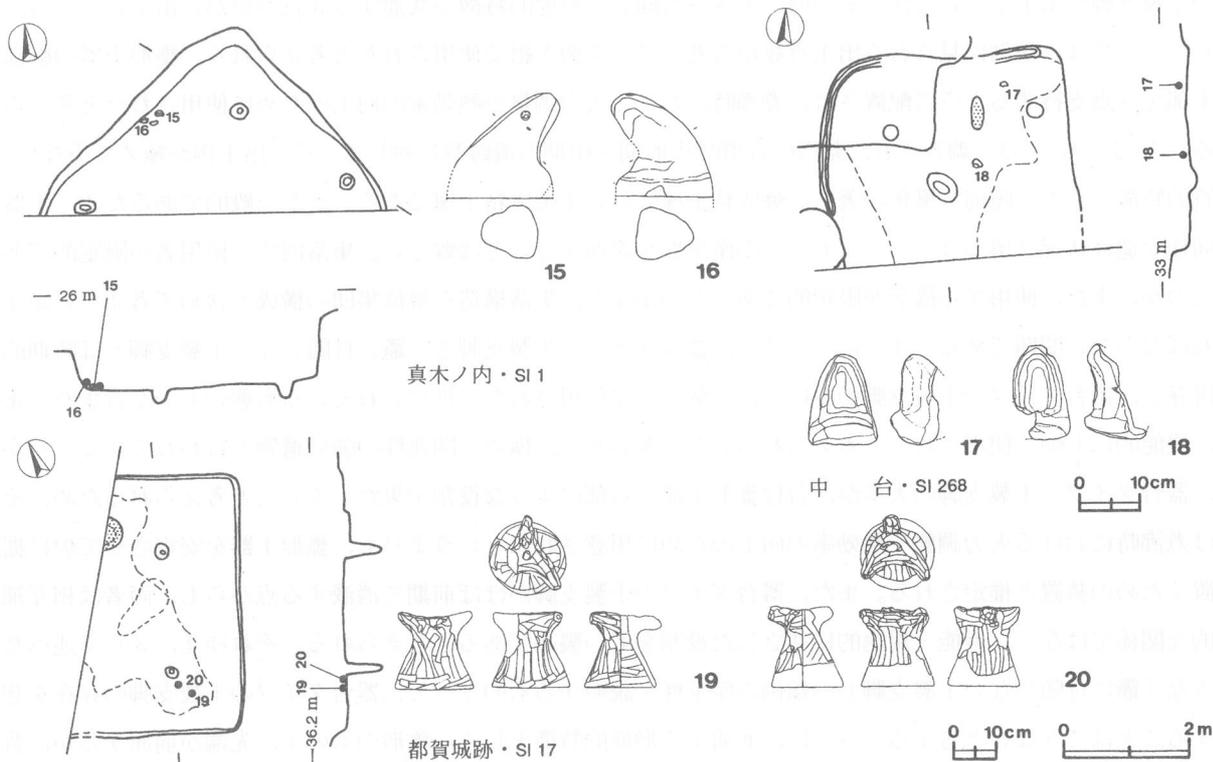
(2) 出土遺物について

前期～中期の竪穴住居跡からは多量の土師器片が出土している。他にはわずかな土製品と石製品が出土している。以下、種別毎に出土状況や特徴などについて簡単にまとめてみたい。

土師器は、鉢・高坏・器台・埴・壺・甕・台付甕・甑と多くの器種が認められる。破片を含めた出土点数では、壺・甕が圧倒的に多く、高坏・器台・埴がそれに次いでいる。鉢・甑はわずかである。器種により出土位置に目立った傾向は見られないが、壺・甕・埴は貯蔵穴と考えられるピットの中やその周辺から出土する例が比較的多く見られる。高坏は脚部がハの字状に開くもの、中実柱状や中空柱状のものが見られる。器台には脚部の高いもの、低いもの、器受部が内彎するもの、直線的に開くものなどがある。高坏と器台は、薄手で丁寧な磨き及び赤彩されているものが大半である。埴は丸底のもの、中央がわずかにくぼむ丸底のもの、平底のものがある。磨き及び赤彩されているものと、ナデやハケ目、削り調整のみで赤彩されていないものが出土している。壺は口縁部の形態が単口縁のもの、折り返し口縁のもの、有段口縁のものなどが見られる。口縁部外面に棒状浮文を貼り付けているものもわずかにあるが、大半がナデやハケ目、削り調整のみである。また、地文などを有するものはなく、赤彩されているものは少ない。甕は圧倒的にハケ目調整で、口縁部の形態が単口縁



第154図 茨城県内の土製支脚出土例(1)



第155図 茨城県内の土製支脚出土例（2）

のもの、折り返し口縁のもの、輪積み痕を明瞭に残すものなどが見られる。わずかではあるが、口唇部に刻みなどを加えているものもある。S字状口縁を呈する甕は第23号住居跡から出土しているだけである。調整や胎土などから、当遺跡に搬入されたものと考えられる。

土製品は球状土錘と土製支脚である。特に第21号住居跡からは4点の土製支脚が出土し、その内の3点は炉に置かれたような状態で出土している。これらの土製支脚は、美浦村の野中遺跡の報告の中で中村哲也氏が述べられているように、古墳時代前期～中期に見られる「竈に付随しない土製支脚」と認識することができる⁵⁾。その形態的特徴は、錐形のもので、先端が前屈し、背部にくぼみやつまみを付けるものが多く、機能的特徴は移動可能で、単独で使用せずに3～4個を組み合わせて炉で使用するものである。形質的特徴は、脆弱で風化の著しい焼成粘土塊ないし未焼成粘土塊（中実）であることが一般的である。このような諸特徴を有する土製支脚は、少ないながらも県内の古墳時代前期～中期の遺跡から出土している。列挙すると、つくば市谷田部漆遺跡の第3・13号住居跡⁶⁾、同市前野東遺跡の第75・79号住居跡⁷⁾、同市中台遺跡の第268号住居跡⁸⁾、取手市大山遺跡第37号住居跡⁹⁾、美浦村野中遺跡の第7号住居跡¹⁰⁾、茨城町南小割遺跡の第62号住居跡¹¹⁾、土浦市向原遺跡の第51号住居跡¹²⁾、同市真木ノ内遺跡の第1号住居跡¹³⁾、鹿嶋市都賀城跡の第17号住居跡¹⁴⁾、常北町二の沢A遺跡の第19号住居跡¹⁵⁾など、出土状況や細部の形状は異なるものの、「竈に付随しない土製支脚」が出土している。これらの土製支脚は、支脚形土製品、炉器台、粗製器台、異形器台、器台状脚形土器などと呼称される器台タイプの土製支脚（中空）と混同されることが多い¹⁶⁾。これらの「竈に付随しない土製支脚」をめぐる問題点としては、以下のような点が指摘できる。

- 1) 使用場所について
- 2) 使用方法について
- 3) 類例の僅少性について
- 4) 器台タイプの土製支脚との関係について

まず、1)については、その出土状況から考えて、炉で使用されたことはほぼ間違いない。当遺跡からは4

点の土製支脚が出土しているが、その内、大きさも同じで形態的特徴が共通する3点が炉から出土している。2)については、類例に見られる出土点数から考えて、3個1組で使用されたと考えられる。甕形土器の胴部下半部を3点支持するように配置され、煮沸時における火力調整や熱効率の向上のために使用されたと考えられる。3)については、調査された県内の古墳時代前期～中期の遺跡数に対して、その出土例が極めて少ない。形質的特徴として、脆弱で風化の著しい焼成粘土塊ないし未焼成粘土塊であることが一般的であるため、土器と同様な遺存状況は望めないとしても、この僅少性を説明することは難しい。集落内での使用者が限定的であったのか、また、使用する機会が限定的であったのかなど、集落構造や単位集団の構成も含めて考えていかなければならない問題である。4)については、器台タイプの土製支脚と「竈に付随しない土製支脚」は時期的に併存し、器台タイプの土製支脚の中にも、3個1組で使用されたと推定されている形態のものが含まれ、また、機能的にも炉で使用されたと考えられることが多いため、極めて関連性の強い遺物と言われている。しかし、器台タイプの土製支脚の大半が、台付甕形土器の台部のような役割を果たしていたと考えられるため、それは煮沸時における火力調整や熱効率の向上のために用意されたというよりも、甕形土器を安定させて炉に据え置くための装置と推定される。また、器台タイプの土製支脚がほぼ前期で消滅する点からも、両者は相互補完的な関係ではなく、機能・用途的に独立した役割をもつ製品であると考えられる。それゆえ、3)で述べたような「竈に付随しない土製支脚」の類例の僅少性を説明するものとして、器台タイプの土製支脚の存在を想定することはできないと考える。さらに、共通する形態的特徴として、錐形のもので、先端が前屈するが、背部のくぼみやつまみの付け方など、細部では異なっている。今後、類例の増加によっては、いくつかの形態に分類できると思われる。

石製品は砥石である。砥石は大半が凝灰岩製で、よく使い込まれている。砥面には細かい線条痕や断面V字状の切り込みが観察され、金属製品の研磨を裏付けている。

5 奈良・平安時代

古墳時代中期以降、断続的かつ小規模な集落が営まれた後、奈良時代になると本格的に集落が営まれ始める。該期の遺跡は総和町全体で見た場合、古墳時代の遺跡数に次いで多い傾向にある。該期の遺構は竪穴住居跡25軒、掘立柱建物跡10棟、井戸跡1基、土坑2基、方形周溝1基、溝1条が確認されている。竪穴住居跡を時期別に見ると、8世紀代が8軒（8世紀前葉3軒、8世紀前葉～中葉1軒、8世紀中葉～後葉3軒、その他1軒）、9世紀代が14軒（9世紀前葉3軒、9世紀前葉～中葉1軒、9世紀中葉4軒、9世紀中葉～後葉2軒、9世紀後葉3軒、その他1軒）、10世紀代が3軒（10世紀前葉2軒、10世紀前葉～中葉1軒）となる。集落は9世紀中葉～後葉に拡大していると推定されるが、限られた調査範囲の中における数量的な変動であるため、一傾向としてとらえておきたい。また、掘立柱建物も造築されているが、詳細な時期を決定できず、竪穴住居との同時性を検討することができなかった。しかし、竪穴住居と同様に、8世紀後葉～9世紀代を中心として造築され、10世紀前葉頃までは集落の一部を構成していたと推定される。以下では時期毎の竪穴住居跡の形態的な特徴と、その主な出土遺物について概要を述べたい。

(1) 竪穴住居跡について

8世紀代の竪穴住居跡は、主に調査区南西部と北東部に分布している。平面形は、長方形と方形のものがほぼ同じ割合で確認されている。規模は長軸が約3.6～6.5m、短軸が約3～6.2mで、小形ないし中形の住居と考えられる。最大規模の第35号住居跡は、掘立柱建物群の南西部に位置し、竈、4か所の支柱穴、出入り口施設に関係するピット、壁溝といった主要な内部施設を備えている。竈は第1・28号住居で東壁中央部に、その

他はすべて北壁中央部に構築されている。貯蔵穴と考えられるピットを有する住居跡は確認されていない。壁溝は全周するものと部分的に設けたものがある。

9世紀代の竪穴住居跡は、調査区全域に広がって分布している。平面形は、方形のものより長方形のものが比較的多く確認されている。規模は長軸が約3.3～5.8m、短軸が約2.8～5.7mで、6mを越えるものは確認されず、前代よりも規模が縮小する傾向を指摘できる。最大規模の第25号住居跡は、9世紀後葉以降と考えられる第5号掘立柱建物跡の北部に位置し、ほぼ主軸を合わせている。また、9世紀中葉と考えられる第15・20・24・37号住居跡は、調査区中央部に集中する傾向がうかがわれる。竈はすべて北壁中央部に構築されている。より新しい9世紀中葉～後葉の第29・39・41・43・44号住居跡は、調査区北東部に集中する傾向がうかがわれ、竈は北壁中央部ないし東壁中央部に構築されている。第29号住居跡では北竈から東竈への造り替えが、第44号住居跡では住居を拡張した痕跡と、それに伴う西竈から北竈への造り替えが確認されている。前代と同様に貯蔵穴と考えられるピットを有する住居跡は確認されず、壁溝は全周するものと部分的に設けたものがある。

10世紀代の竪穴住居跡は、調査区北東部に集中して分布している。平面形は、方形よりも長方形のものがや多く確認されている。規模は長軸が約2.9～3.6m、短軸が約2.9～3.5mで、5mを越えるものは確認されず、前代よりも規模がさらに縮小する傾向を指摘できる。竈は第52号住居跡で北壁中央部に、第50号住居跡では北東壁のコーナー部に偏った位置に構築されている。また、前代とは異なり、第50・54号住居跡ではコーナー部に貯蔵穴と考えられるピットを有している。壁溝は全周するものと部分的に設けたものがある。

(2) 出土遺物について

竪穴住居跡からは多量の土師器片と須恵器片が出土している。他には少量の土製品、石製品、金属製品が出土している。以下、種別毎に出土状況や特徴などについてまとめてみたい。

土師器は、坏・高台付坏・甕などの器種が認められる。坏類は8世紀中葉頃までは量的にも少なく、9世紀中葉以降になると、内面黒色処理を施した坏類が目立つようになる。わずかであるが、底部や体部に「上」・「東」などの字や記号と思われるものが記された墨書土器も出土している。甕類は、いわゆる「武蔵型甕」と「常総型甕」が混在している状況が確認される。出土した須恵器は、坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・壺・短頸壺・長頸壺・甕・甑・鉢・円面硯などの器種が認められる。これらの須恵器は胎土や製作技法などから、複数の生産窯から供給されたものと考えられる。8世紀前葉～後葉にかけて、新治窯群産と考えられる製品が主体となり、平安時代になると三和窯群産の製品が増加する傾向がうかがわれる。その他、南比企窯群や堀ノ内窯群、さらに益子窯群や三嶋山山麓窯群産と考えられる製品も存在していると考えられるが、時期的変遷や生産窯別の推移状況などについて、詳細に検討することができなかった。なお、9世紀後葉以降の坏類には、酸化焰焼成と推定される製品が含まれている。特に10世紀前葉と考えられる第39号住居跡では、床面に逆位で重ねられた状態で出土している。胎土や製作技法から須恵器と認定したが、生産窯や類例については不明である。

土製品は球状土錘と土製勾玉、石製品は砥石と紡錘車である。出土した金属製品は刀子、門金具、鉸具、紡錘車、不明鉄製品、不明銅製品である。いずれも出土量はわずかで、奈良・平安時代を通じてみられる。また、鉄滓や鞆の羽口片が8世紀後葉～10世紀前葉と考えられる住居跡の覆土から出土している。特に、8世紀末葉～9世紀末葉の時期により多く認められる。

6 中世以降

中世と考えられる遺構は、方形竪穴建物跡1基、土坑1基である。その他、中世以降と考えられる遺構は、井戸跡12基、土坑174基、溝14条が確認されている。特筆される遺物は、第1号方形竪穴建物跡から出土した

木簡と、第61号土坑から出土した武蔵型板碑の破片である。以下、これらの遺物と当遺跡における中世以降の土地利用のあり方について若干の検討を加えたい。

まず、第1号方形堅穴建物跡から出土した木簡には「五百二丈 五河□」と墨書されている。類例としては、鎌倉市の「北条泰時・時頼邸跡」や「北条時房・顕時邸跡」、「北条小町邸跡」から、同じように「丈」と墨書された中世鎌倉期の木簡が出土している¹⁷⁾。それらは、幕府が御家人に工事を割普請したことを示す表示札と考えられ、割り当てた人物とその長さが墨書されている。当遺跡の木簡も、遺跡の立地状況などから、河川の改修や護岸工事、堤防工事などの工事分担を示す表示札である可能性が高い。県内では、鹿嶋市の鹿島湖岸北部条里遺跡（宮中条里－爪木地区）から、表に「二百七十」、裏に「多米三□」、「いやしふ」、「噫々如律令」と墨書された木簡が、また、同市の鉢形地区条里遺跡からは、「噫々如律令」、「□□木□為也」、表に「急々如律令」、裏に「蘇民将来子孫」と墨書された木簡が出土している¹⁸⁾。これらの木簡の時期は中世以降と推定され、農作物の付札や呪符と考えられている。県内から出土している木簡はわずかで、時期や性格を明確にできないものが多い。残念ながら、第1号方形堅穴建物の時期を明確にすることはできなかった。後に述べるように、当遺跡は少なくとも15世紀初頭頃までは盛んに土地利用がなされていたが、15世紀半ば以降は寒冷・多雨な気候によって、当遺跡の周辺には沼沢地が形成され、また、洪水などが多発したと考えられている¹⁹⁾。推定の域を出ないが、当遺跡の木簡は、そうした社会的・環境的变化を背景として、役割を終了した後、第1号方形堅穴建物跡の覆土中に廃棄されたものと推測される。

次に第61号土坑から出土した武蔵型板碑の破片は、その大半が欠損しているため、紀年銘など不明な点が多い。年代については、紀年銘の一部の「□文二年」から、南北朝時代の「延文二年（1357年）」と戦国時代の「天文二年（1533年）」が推定される。総和町内の板碑については、1992年に『そうわの板碑』として集成・報告されている。それによると、町内に分布する板碑は破片を含めて479点が確認されている。その年代分布は鎌倉時代後期に急激にその数を増やし、1300年代前半に一時減少するが、1330～1340年代には最盛期を迎え、以降は多少の増減を繰り返しながら、1400年代後半に再び絶頂を築き、1550年代以降は衰退を見せることが判明している²⁰⁾。所在地点は、寺院や共同墓地などがほとんどで、当遺跡に隣接する前林東光寺には53点に及ぶ板碑が集中している。その中には「延文二年（1357年）」の紀年銘をもつものが2点存在している。さらに、町内の遺跡から出土した板碑は、香取東遺跡から小片も含めて34点²¹⁾が、本田山遺跡の調査では4点の板碑が報告されている。内1点が「延文二年（1357年）」の紀年銘をもつものである²²⁾。このように当遺跡に隣接する前林東光寺に所在している板碑の年代分布や、町内における板碑造立の最盛期の検討などから、当遺跡の板碑は「延文二年（1357年）」である可能性が高い。

調査区全域から土坑や井戸跡が確認されている。出土遺物がほとんどなく、覆土の様相などから中世以降と推定されるものがほとんどで、中世における土地利用のあり方について具体的には検討できない状況である。溝はわずかに出土した陶磁器などから近世を遡ることはないと考えられる。中世以降と考えられる土坑については、形態の特徴から7つに分類でき、その分布状況を第153図に示した。形態によって分布状況に差異が認められることから、それぞれ一定の機能・性格を有していたと推定される。特にA類やB類、C類についてはある一定の空間に集中する傾向がうかがわれることから、墓坑や耕作に関する貯蔵穴などの性格が想定される。特にC類は狭い範囲に群集し、形状は長方形ないし隅丸長方形、長軸方向は南北と東西の二つに大別される。覆土は人為堆積が多く、出土遺物はほとんどない。こうした特徴は、関東地方の各県から発見されている中世土坑墓と認識されている遺構との共通点が多く、年代としては13～17世紀と考えられる²³⁾。その他の類型については、D・F類が簡易な建物の柱穴など、E・G類が耕作に伴うピットや掘削痕など、多様かつ累積

的な土地利用の痕跡と考えられる。

以上の通り、当遺跡の中世以降における人々の生活の痕跡は、それほど濃厚に残されているとは言えない。なお、1997年、県営圃場整備事業に伴い当遺跡の北東部が、総和町教育委員会によって発掘調査されている。その結果、古墳時代後期の土坑1基、平安時代の竪穴建物跡1軒、中世の堀1条、時期不明の土坑9基と柵列1列が確認されている²⁴⁾。中でも、出土した陶器から、14世紀末～15世紀初頭に位置づけられる堀の発見は、当遺跡が少なくとも15世紀初頭頃までは盛んに土地利用されていたことをうかがわせ、該期の遺構が数多く残されている可能性が高いと言える。一方で、花粉化石・植物珪酸体・珪藻化石の土壌ボーリング調査も実施され、釈迦沼・水海沼の形成年代について、15世紀半ばから後半と推定されている²⁵⁾。つまり、15世紀半ば以降の寒冷・多雨な気候によって、当遺跡の周辺には沼沢地が形成され、洪水などの多発、それに伴う水田経営の後退と二次林の拡大が指摘されているのである²⁶⁾。こうしたことから、当遺跡では15世紀半ば以降、次第に居住空間としての条件は悪化し、墓域や耕地への転換が図られ、あるいは荒地地となり、しばらくは人々の生活の舞台ではなくなり、土地利用自体も希薄となったと推定される。その後、近世後期以降の土地改良や排水・干拓事業によって、それらの沼沢地は再び水田に姿を変えていったと考えられる。当遺跡から確認された溝の多くは、そうした近世以降の排水・干拓事業に伴う人々の土地との戦いの記録と言える。

7 小結

今回の調査の結果、当遺跡は古墳時代前期と奈良・平安時代を中心とした近世に至るまでの複合遺跡であることが判明した。

後期旧石器時代の終末期に位置づけられる細石刃石器群や、縄文時代早期～晩期の断続的かつ小規模な集落跡の存在、弥生時代後期の他地域との交流を物語る土器群の発見などは、総和町の原始・古代を理解していく上で貴重な資料となる。また、古墳時代前期を中心とした集落跡と奈良・平安時代の集落跡の発見は、総和町における各時代の遺跡の動態を如実に反映していると評価できる。また、集落変遷や土器の様相などを知ることができ、未だに十分な資料があるとは言えない県西地域において、その資料的な価値は高いと言える。さらに、人知の及ばぬ環境の変化によって、15世紀半ば以降、当遺跡から人々の姿は消えていったが、近世以降になって沼沢地の改良と水田経営に立ち上がった人々の痕跡を確認することができたことは、総和町の近世史並びに近代化の過程を考える上で、一つの考古学的な成果であったと考える。

註

- 1) 総和町史編さん委員会 『総和町史 資料編 原始・古代・中世』 総和町 2002年
総和町教育委員会 『茨城県総和町埋蔵文化財分布調査概報』 3 1999年
諸星良一 「茨城県総和町採集の石器」 『法政考古学』 第25集 1999年
- 2) 田川良・道沢明 「茨城県古河市周辺採集の先土器時代資料」 『史館』 第4号 1979年
- 3) 古河市史編さん委員会 『古河市史資料編 原始・古代編』 古河市 1986年
- 4) 3)に同じ
- 5) 中村哲也 「茨城県稲敷郡美浦村野中遺跡－第2次発掘調査報告－」 『美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告』 8 美浦村教育委員会 2000年
- 6) 梅澤貴司 「谷田部漆遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』 第191集 茨城県教育財団 2002年
- 7) 田原康司 「島名前野東遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』 第191集 茨城県教育財団 2002年
- 8) 吉川明宏ほか 「(仮称)北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中台遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』 第102集 茨城県教育財団 1995年
- 9) 駒澤悦郎 「大山Ⅰ遺跡2」 『茨城県教育財団文化財調査報告』 第185集 茨城県教育財団 2002年

- 10) 5)に同じ
- 11) 中村敬治ほか「茨城工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書 南小割遺跡 権現堂遺跡 親塚古墳 後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第129集 茨城県教育財団 1998年
- 12) 土浦市教育委員会ほか『土浦市向原遺跡発掘調査報告書』1987年
- 13) 柴 正ほか「霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 五斗落遺跡 大盛遺跡 弁ノ内遺跡 原ノ内遺跡 ゴリン山遺跡 真木ノ内遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第43集 茨城県教育財団 1987年
- 14) 飯島一生「国補緊急地方道路整備事業一般県道荒井麻生線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書2 都賀城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第173集 茨城県教育財団 2001年
- 15) 調査担当者から、4世紀前半の第19号住居跡から、3点の土製支脚が出土していることをご教授いただいた。土製支脚は中空の円錐体を縦に半載したような形状のため、使用時は内部に粘土などを詰めて自立・安定させたと推定される。第19号住居跡では炉が確認されていないことから、それらは別住居で使用され、当住居跡に廃棄されたと考えられる。
黒澤秀雄ほか「二の沢A遺跡 二の沢B遺跡(古墳群) ニガサワ古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第208集 茨城県教育財団 2003年刊行予定
- 16) 鶴見貞雄「粗製器台の用途を考えるー高崎貝塚出土の器台形土器を例にしてー」『研究ノート』第3号 1993年
- 17) 鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14 1998年
馬淵和雄『北条泰時・時頼邸跡雪ノ下一丁目371番地点発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会 1985年
田代郁夫「北条時房・顕時邸跡雪ノ下一丁目265番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6 鎌倉市教育委員会 1990年
馬淵和雄「北条小町邸跡雪ノ下一丁目377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12 鎌倉市教育委員会 1996年
- 18) 茨城県鹿島町教育委員会「鹿島湖岸北部条里遺跡Ⅳ」『鹿島町の文化財』第38集 1984年
茨城県鹿島町教育委員会「鹿島湖岸北部条里遺跡Ⅴ」『鹿島町の文化財』第39集 1984年
茨城県鹿島町教育委員会「鉢形地区条里遺跡発掘調査報告書」『鹿島町の文化財』第66集 1990年
- 19) 村上慈朗ほか「第2章 総和町の環境とその変遷」『総和町史 資料編 原始・古代・中世』総和町 2002年
- 20) 総和町教育委員会『そうわの板碑』1992年
- 21) 武蔵文化財研究所『茨城県猿島郡総和町都市計画道路東牛谷・釈迦線道路(町道9号線)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 香取東遺跡 釈迦才仏遺跡』総和町 2001年
- 22) 総和町教育委員会『茨城県猿島郡総和町県営担い手育成畑地帯総合整備事業(上大野地区)埋蔵文化財発掘調査(第1号)報告書 本田山遺跡』2002年
- 23) 齋藤 弘「中世墓地に伴う井戸について」『唐沢考古』第14号 1995年
- 24) 総和町教育委員会『羽黒・日下部遺跡発掘調査報告書』1999年
- 25) 株式会社古環境研究所「6 羽黒・日下部遺跡の自然科学分析」『羽黒・日下部遺跡発掘調査報告書』総和町教育委員会 1999年
- 26) 19)に同じ